夜行列車殺人事件

ミッドナイト・トレイン　MIDNIGHT TRAIN

長編推理小説

西村京太郎



KOBUNSHA BUNK

光文社文庫

光文社文庫

長編推理小説

夜行列車殺人事件（ミッドナイト・トレイン）

西村京太郎

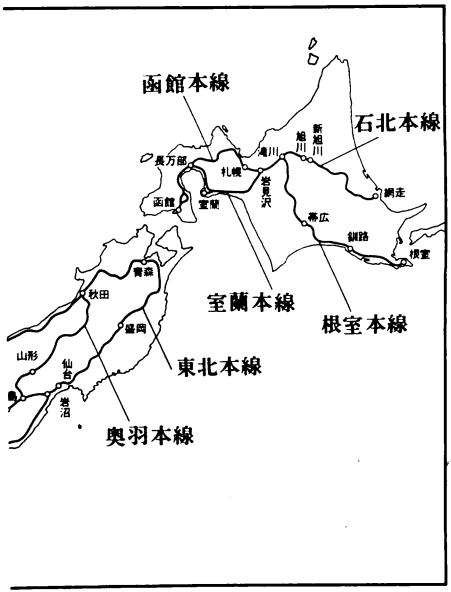


光　文　社

『夜行列車殺人事件』目次

（ミッドナイト・トレイン）

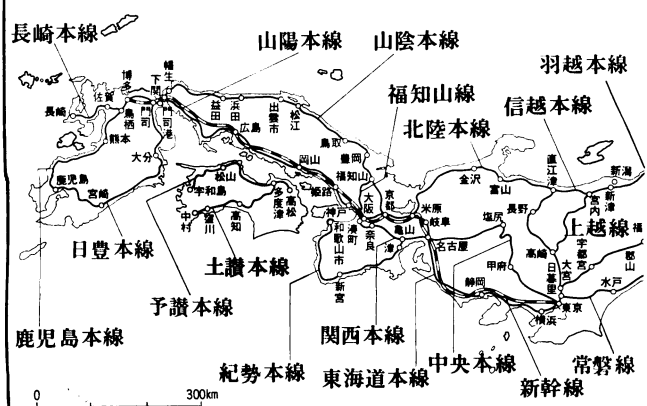
夜行列車（ミッドナイト・トレイン） 7
東京駅 24
合同会議 38
青森 60
警告（アラーム） 76
砂丘の影 99
架線事故 123
午前三時の男 142
退職者 168



（図は一九八一年現在）

大安吉日（たいあんきちじつ） 205
謎（なぞ）を追って 217
郡山（こおりやま）駅 229
女性会員 258
四月十三日 294
午前三時へ 325
脱出へ 374
解説／武蔵野（むさしの）次郎 403

国鉄線　おもな夜行列車図



第一章　夜行列車（ミッドナイト・トレイン）

1

北野浩（きたのひろし）は、小柄で、あまり見栄（みばえ）のしない男である。

年齢は四十歳になったところで、髪の毛も多少、うすくなっている。もちろん、結婚しているが、子供はなかった。

最近は、中年男が若い娘にもてるといわれているが、北野は、例外のほうに入るらしく、いっこうにもてない。もともと、女にもてないことは、若いときから自認していたから、別に、がっかりしていなかった。妻の君子（きみこ）とも、見合い結婚である。

このところ、その君子の機嫌が悪い。理由は、夫婦の間のセックスライフにあることは、北野にもわかっているのだが、仕事に追われて、彼女を満足させられずにいる。

北野は、国鉄総裁の秘書になって、五年になる。今の木本（きもと）総裁に代わってからは、一年足らずである。

国鉄の評判はよくない。

赤字の国鉄。
ストばかりやる国鉄。
公害を撒き散らす国鉄。
サービスの悪い国鉄。
住民からの訴訟も、このところ、相次いでいる。新幹線工事に対する訴訟、騒音公害に対する訴訟。
それに対応して、木本総裁が、東奔西走すれば、当然、秘書の北野も、席の暖まる暇がなくなってくる。
国鉄総裁ともなれば、総裁室に、でんと座っていればいいと思うのだが、現代のような情報社会では、そうもいかないのだ。訴訟を起こされれば、相手方と総裁自ら会わなければ、新聞に叩かれるし、事業もスムーズに運ばない。
そんな場合の根回しをするのも、秘書である北野の仕事だった。
他にも秘書の仕事は、数多くある。
開かれた国鉄、皆さまの国鉄を標榜している関係で、総裁宛の投書も多い。国鉄に対する投書なり電話は、広報室が受け付けるのだが、総裁宛のものは、秘書の北野が眼を通すことになっていた。その手紙だけでも、一日に五、六通はある。
大きな事故があったり、ストが続いたりすると、とたんに、投書は倍増する。文面も厳しくなる。

総裁によって、投書を読むのを好む人もいるし、嫌いな人もいる。前の総裁は、新聞記者の経験があるだけに、自分宛に送られてくる投書を読むのを好んだ。だから、北野は、朝出勤すると、前日の投書の中から、これはと思うものを選んで、総裁の机の上に置いておく。それも、秘書の仕事の一つだった。

去年の四月に、新しく総裁になった木本は、前任者と違って、投書を読むことで、総裁としての信念が少しでもゆらぐのを恐れるといい、秘書の段階で処理するように、北野にいった。

したがって、北野は、すべての投書に眼を通し、返事の必要なものには、返事を出し、一週間まとめて、統計をとり、それを総裁に見せることにしていた。

いずれにしろ、総裁宛に来た投書に眼を通すのは、北野の仕事の一つなのである。別に苦痛ではなかった。むしろ、楽しみだった。国鉄に対する批判が主だし、ときには、「総裁くたばれ！」みたいな激越なものもあるが、なかには、ユニークな国鉄再建案を書いてくる人もいたりするからである。

三月十六日、月曜日も、北野は、出勤すると、まず、昨日の間に届いた投書に眼を通した。

全部で四通である。

東北新幹線に対する意見が二通。値上げ反対の意見が一通。

四通目の封書には、差出人の名前がなかった。

しかし、匿名の手紙も多いので、北野は、別に気に止めずに、封を切った。

便箋が一枚入っていた。そこには、奇妙なことに、

〈夜行列車〉

と、ただ四文字だけが、真ん中に、太いペンで書いてあった。

2

（何だい？　こりゃあ）

北野は、あっけにとられた感じで、しばらく、その四文字を眺めていた。

国鉄利用者の中には、夜行列車、特にブルートレインのファンが多い。夜行列車を、これ以上減らすなとか、寝台をもっと良くしろといった意見が寄せられてくる。新幹線に夜行寝台を作れという投書もあった。

これも、その一つだろうか？

どうも、他には考えようがないと思った。

細かく意見を書いたのでは、目立たないと思って、わざと、「夜行列車」とだけ書いて来たのかもしれない。

北野は、自分で作った表の中の「夜行列車に関する意見」の欄に、棒を一本引いて、その投書を、机の引出しに放り込んだ。

翌三月十七日は、一通だけだった。

その一通の封書を見たとき、やや右上がりの角張った字に見覚えがあった。昨日、「夜行列車」とだけ書いて送って来たのと同じ筆跡なのだ。

（今度は、何と書いて来たのだろう？）

という興味を持って、北野は、封を切った。中身は、昨日と同じく、便箋が一枚。

〈午前三時〉

と、それだけ書いてあった。

北野には、意味がわからなかった。

昨日の「夜行列車」というのは、投書の主が、夜行列車のファンで、恐らく、廃止反対の意思表示だろうと思うのだが、「午前三時」というのは、何の意思表示なのか、全くわからなかった。

夜行列車というのは、だいたい夕方から夜にかけて出発し、翌朝、目的地に着くようになっている。当然、午前三時といえば、途中を走っている時刻である。乗客は、ほとんど眠っている時刻だから、問題になることはないはずだった。

午前三時には走らせるなということになると、夜行列車ではなくなってしまう。午前三時までに、目的地に着くようにしろという要求でもなさそうである。そんな時刻に到着したら、乗客は、かえって迷惑だろう。

結局、投書の主が、何をいおうとしているのかわからないのだ。

北野は、統計表の中に入れることをせずに、引出しにしまってしまった。

この日は、東北新幹線のネックになっている埼玉県の大宮と上野間の住民との第何回目かの話し合いのある日で、総裁と出向いたため、この投書のことは、忘れてしまった。

しかし、日本国有鉄道本社に戻ってくると、机の引出しにしまった投書のことが気になり、取り出して、前日のものと二通並べてみた。

夜行列車
午前三時

妙に思わせぶりだが、意味不明でもある。
(まるで、流行歌の文句の断片みたいだな)
とも思った。
気になりだすと、やたらに気になるもので、あれこれ想像し、考え込んでしまうものである。
北野が気になったのは、投書者の意図だった。
以前、五〇パーセントを越す運賃値上げが行なわれたとき、毎日一枚ずつハガキを送りつけてくる人がいた。一枚のハガキに、大きく一字ずつ書いてあり、それをつなげると、「運賃値上げ絶対反対」になったのだが、この場合は、途中で、投書の主が、何を書こうとしているの

かわかった。

だが、今度は、全くわからなかった。

恐らく、この二通に続く手紙が来るのだろうと、北野は思った。そうでなければ、何のことかわからないからだ。

まさか、投書の主は、謎なぞをやっているわけではあるまい。国鉄総裁宛に手紙を送って来たからには、何かを訴えたいに違いないからである。

(いったい、どんな言葉が続くのだろうか?)

北野は、パズルでも解くような気持ちで、それを考えてみた。

どうも、適当な言葉が、なかなか浮かんで来ない。

「午前三時」という言葉が、何を意味しているかわからないからである。

「夜行列車」だけなら、いくらでも考えつく。夜行列車のファンなら、次のように続くに違いない。

夜行列車削減反対

夜行列車廃止反対

逆に、夜行列車を嫌いな人からの投書なら、

夜行列車即時廃止

夜行列車運行停止

といったところだろうか。

だが、間に、「午前三時」という四文字が入ってしまうと、うまい言葉が見つからなくなってしまうのだ。

北野は、家に帰ってからも、あれこれ、考えてみた。それだけでも、投書の主は、奇妙な手紙を書いた効果があったというべきだろう。もし、総裁秘書である北野の注意を引くのが目的だったとしたらである。

妻の君子は、とうとう、実家に帰ってしまった。ここ一カ月くらい、一度もセックスがないのだから、妻が怒るのも無理はないと思いながら、実家に帰ってしまった彼女を、迎えに行く気が、全くなくなっている自分に、北野は、驚いてもいた。

このままでいけば、別れることになるだろう。が、それでいいという気がする。二人の間は、それだけ、冷え切ってしまっていたのだ。

翌朝になっても、北野は、妻の実家に電話せずに出勤した。

君子のことの心配よりも、例の手紙の続きが来るかどうかのほうが気になった。

手紙は、五通来ていた。

しかし、問題の手紙の続きと思われる三通目は、その中に入っていなかった。

北野は、失望した。はぐらかされたような気持ちでもあった。

まさか、昨日、一昨日の二通で完結したわけではないだろう。解決篇のない推理小説を読まされたような中途半端な気持ちでもある。

一日の投書は、翌朝、眼を通すことにしていたが、今日だけは、その日のうちに、待ってい

て、読んでみたが、問題の手紙は、とうとう、来なかった。
「何か心配事でもあるのかね？」
と、総裁の木本が、度の強い眼鏡越しに、北野を見た。
北野は、投書のことをいうと、怜悧な木本に笑われそうな気がして、
「いえ。ちょっと、家の中がごたごたしているものですから」
と、いった。
「君のところは、何年だったかな？」
木本は、パイプに火をつけてから、北野にきいた。
これといった趣味がなく、仕事が私の趣味だと、いっている木本にとって、パイプの収集が、唯一の趣味といえるかもしれない。今愛用しているのは、友人が、パリで買って来てくれたブライヤーのパイプだった。やっとカーボンがつき、使いやすくなったところである。
「丁度（ちょうど）、十年です」
と、北野はいい、改めて、君子とは、もう十年になったのかと思った。
「私は、二十年になる。正確にいえば、十九年と六カ月だが」
木本は、その長さに自ら照れたような顔になっていた。
「家庭を大事にすることだ」
と、木本は、さとすようにいった。
北野は、黙って肯（うなず）いた。が、帰宅すると、義母からの電話があった。娘をどうするつもりか

という難詰する調子に、北野は、自分から実家に帰っておいてと、腹が立った。

多分、これで、離婚は決定的になるだろうと思いながら、北野は、電話を切った。

翌日は、トーストと牛乳だけのわびしい朝食をとって出勤すると、新聞と一緒に、一通の封書を、女の子が持って来た。

昨日、退庁後に届いた手紙だという。

〈日本国有鉄道　木本総裁殿　親展〉

と、その封書の表に書いてあった。

北野は、奇妙な気持ちで、その封書を手に取った。あの二通の手紙と同じ筆跡だったからである。やや右上がりの角張った字だった。

投書の主は、やはり、続けて出していたのだという妙な安心感と、何が書いてあるのかという不安感が、重なり合っていた。

北野は、ペーパーナイフで封を切り、中身を取り出した。

前の二通と同じように、便箋が一枚。

(これで、パズルが解けるかな)

と、思いながら、便箋を広げた。

〈爆破決行〉

便箋には、そう書いてあった。

3

北野は、前の二通と、今日の一通を、机の上に並べてみた。

夜行列車
午前三時
爆破決行

〈夜行列車を、午前三時に爆破する〉

という意味だろう。

もし、一枚の便箋に、このとおりに書いてあったら、北野は、頭から、いたずらと考えたに違いない。

もちろん今でも、半ば、いたずらではないかという気もある。新幹線に爆弾を仕掛けたといういたずら電話が、一週間前にあったばかりだからである。そんな悪質ないたずらは、残念ながら、後を絶たない。

しかし、わざわざ、三通に書きわけられているのが、北野の気になって仕方のないところだった。

何か、投書の主の底意のようなものを感じるのだ。

北野は、自分の胸だけに納めておけなくて、総裁の木本に、三通の手紙を見せた。

木本は、自分の前に並べられた三枚の便箋を眺めていたが、

「いたずらにしては、念が入り過ぎているようだねえ」

「そうです。どうも気になるものですから、お見せしたわけですが」

「午前三時と、具体的な時刻を書いてきたところも気になるね。たいていのいたずらは、時間までは、指定して来なかったろう?」

「そのとおりです。一週間前のいたずら電話も、ひかり何号に、時限爆弾を仕掛けたとはいいましたが、爆破する時刻までは、いいませんでした」

「そうだったな」

「どうしたらいいでしょうか?」

「もし、これが本気だったら無視はできんね」

と、木本は、しばらく考えていたが、

「警察の協力を仰ごう。投書の主を見つけ出してもらうんだ。相手が見つかれば、いたずらかどうかもわかる」

「そうですね」

「警視庁の捜査一課に、十津川という警部がいる。優秀な刑事だよ。ちょっとした知り合いなんだが、私が電話で頼んでおくから、明日、会って、相談してみたまえ」

と、木本はいった。

翌日の午後、北野は桜田門にある警視庁に、十津川という警部を訪ねた。

北野と同じ四十歳くらいの中肉中背の男だった。

捜査一課の刑事というので、何となく、眼光鋭く、筋骨たくましい男を想像していたのだが、十津川は、どちらかといえば、物静かな、平凡な男に見えた。

十津川は、庁内の喫茶室からコーヒーを運ばせて、北野にすすめてから、

「大体のお話は、木本さんから伺いました。妙な手紙が、三通届いたそうですね」

「実は、今日、四通目がきたんです」

と、北野はいった。

「ほう」

と、十津川は、微笑した。

「こまめな犯人ですね」

「とにかく、見てください」

北野は、今日届いたものを含めて、四通の手紙を、机の上に並べた。

午前三時
爆破決行

そして、四通目の便箋に書かれていたのは、次の四文字だった。

〈四月吉日〉

十津川は、黙って、じっと四枚の便箋の文字を眺めていた。
「つまり、手紙の主は、四月の何日かの午前三時に、夜行列車を爆破するといっているんです」
と、北野は、黙っている十津川に向かっていった。
十津川も、眼をあげた。
「これと似たような手紙が来たことがありますか？」
「今、国鉄は、さまざまな問題を抱えています」
と、北野は、総裁秘書の口調になって、
「公害訴訟では、住民と対立していますし、合理化問題では、組合と対立していますから、脅迫まがいの手紙は、しばしば、送られて来ます。総裁自殺用と書いて、カミソリが同封されていたこともあります」

「列車を爆破するといったような手紙はどうです？」
「前に一度、送って来たことがあります。騒音公害で住民との間にトラブルがあったときで、列車を止めなければ、爆破するという脅迫状でしたね。もちろん、匿名の手紙です。結局、何も起きませんでしたが」
「この手紙と比較してどうです？」
「そうですねえ。カミソリが同封されてきた手紙のときは、一瞬どきっとはしましたが、脅迫状としては、型にはまった感じでしたから、総裁の身に何か起きるという気はしませんでしたね。ただカミソリで、びっくりさせてやろうというのだと思いました。所轄の警察には連絡しましたが、警察の意見も、私と同じでした」
「結局、何も起きなかったんですね？」
「ええ。何も起きませんでした。それに比べると、今度の場合は、何か得体が知れなくて、薄気味が悪いんですよ。妙に冷静な感じがしてです」
「冷静な感じがですか」
「そう思いませんか。たとえば、この手紙の主が、国鉄に怒りを感じて、夜行列車を爆破してやろうと思っているとします。普通なら、それを、もろにぶつけて来ますよ。総裁に手紙を書くんだって、怒りに満ちた手紙になるはずです。また、そんな手紙を書くことで、怒りが発散してしまって、実際の行動に移らずにすんでしまうんじゃありませんか？　ところが、この投書の主は、まるで判じものみたいに、四回に分けて、送りつけて来たんです」

「なるほど。そこが、冷静ということですね」
「そうですよ。警部さんだって、そう思うでしょう?」
北野は、十津川が、落ち着き払っているので、軽いいらだちを覚えながら、相手の顔をのぞき込んだ。
「確かに、冷静に、効果を狙って、四通に分けて、送りつけて来たものと思います。単なるいたずらとは思えませんね」
「そうでしょう。この手紙の主が、本気だとすると、どうしたらいいでしょうか?」
「幸い、相手は、四月吉日と書いてきています。まだ、時間に余裕があります。その間に、対策を考えようじゃありませんか」
と、十津川は、いった。
北野は、難しい顔になった。
国鉄側と、警察とで、対策を考えることに異議はない。
しかし、四通の手紙が示すものは、具体的なようで、ばくぜんともしているのだ。
四月吉日というのも、四月の何日なのかわからない。
それ以上に、ばくぜんとしているのが、夜行列車である。
現在、国鉄では、旅客、貨物両方で、何百本という夜行列車を走らせている。犯人が、本気だとして、この中のどの列車を狙うつもりなのか。
この二つがわからずに、果たして、有効な対策が立てられるだろうか?

「この四通の手紙を、二、三日、お預かりしてかまいませんか？」
と、十津川がきいた。
「かまいませんが」
「一応、念のために、指紋を検出してみます。相手が本気なら、自分の指紋がつくようなことはしないでしょうが――」

第二章　東京駅

1

氷室悠子は、自動販売機で入場券を買い、藤代友彦に続いて、改札口を通った。
午後五時過ぎの東京駅は、夕方のラッシュが始まろうとしていた。
「わざわざ、ホームまで送ってくれなくてもいいのに」
藤代は、いくらか照れながらいった。
悠子は、「藤代さんが、出雲1号に乗るところを見たいの」と、いってから、腕時計に眼をやって、
「何時発だったかしら？」
「一八時一五分。確か十番線ホームだと思ったんだが」
藤代は、中央通路に立ち止まって、周囲を見回した。
十番線ホームへの階段のところに、「出雲1号　18・15」の掲示板が出ていた。
二人は、並んで階段をのぼって、十番線ホームへあがった。

寝台特急「出雲1号」は、まだ、ホームに入っていなかった。

十番線には、オレンジ色の車体を光らせた静岡行の電車がとまっていた。サラリーマンや、OL風の乗客で一杯である。それだけ、人々の通勤圏が広がったということだろう。

五、六分して、その電車が発車したあとに、出雲1号がゆっくりと、青い車体を滑り込ませて来た。

出雲は、東京と山陰を結ぶ唯一の寝台特急（ブルートレイン）である。出雲1号、3号は下り、2号、4号は上りで、出雲1号は、十一両の客車と荷物車で構成され出雲市経由浜田行である。約二時間おくれて出発する出雲3号のほうは、紀伊勝浦（きいかつうら）行の六両が併結されていて、名古屋で切り離される。

こうした知識は、藤代から教えられたものだった。

二十五歳の悠子も、旅行は嫌いではないし、独身OLの気楽さで、グアムやハワイに行ったことがある。

同じ会社で働く藤代と親しくなったのも、旅行好きという共通の話題からだった。

ただ、藤代の旅行好きは、少しばかり変わっていた。いや、藤代にいわせれば、彼のほうが正当なのかもしれないが、時刻表と汽車の旅が好きで、国鉄全線二万何千キロかを、全線完乗するのが目標だという。

藤代の話によると、すでに、全線区完乗した人が、全国で六十人くらいいるらしく、藤代自身も、三年前から始めて、三千キロくらい乗ったということだった。

最初のうち、悠子は、藤代のそんな計画を、馬鹿馬鹿しいと思ったし、国鉄がやっている

「いい旅チャレンジ二〇〇〇キロ」という客寄せキャンペーンにのせられているのだとも思った。北海道へ行くのに、わざわざ、列車や、青函連絡船を乗り継いで行かなくとも、飛行機で行けばいいのにと思ったし、地方のローカル線まで乗ろうという気持ちもわからなかったからである。

それが、藤代とつき合っているうちに、少しずつ変わって来た。

時刻表にも興味を持って来たし、まだ女性で、二万キロの全線完乗した人はいないと聞いて、いつか、全線を乗ってみたいと考えるようにもなった。いいかえれば、それだけ、藤代との仲が深くなったということであった。

2

藤代は、肩にかけていたカメラを悠子に渡して、

「一枚、撮ってくれないか」

「出雲1号をバックにして？」

「いや。東京駅だという証明用なんだ。だから、東京駅の名前の書いてある場所で撮ってくればいい」

と、藤代は、いった。

藤代の話によると、今、国鉄がやっている「二万キロにチャレンジ」では、列車の始発駅と、終着駅での自分の写真を撮って送ると、記念品と、認定証をくれるのだという。

写真は、そのためのものだと、藤代はいった。

ホームの柱に、平仮名で、「とうきょう」の文字板がついている。藤代が、その横に立って、悠子が、シャッターを押した。

藤代は、「ありがとう」と、いってから、出雲1号を振り返って、

「あの列車は、今ごろの季節や、秋には、新婚さんが多いんだ。出雲大社で、結婚式を挙げるんでね」

藤代のいうとおり、それらしい若いアベックが、何組かホームに姿を見せていた。

今日は、三月二十六日である。春の吉日、或いは、十月の良き日には、出雲大社に行く新婚さんが多いことは、悠子にも肯けるところだった。出雲大社は、縁結びの神様だし、悠子の好きな落語にも、よく、出雲に神様が集まって、若い男女を結びつけるという話が出てくる。

「ど、どうだい？　二人でいつか」

藤代が、珍しく、どもりながらいった。

「何が？」

「二人で、出雲大社へ行かないか？」

「え？」

と、悠子は、一瞬、きき返してから、

「それ、結婚のプロポーズなの？」

「うん。まあね」

藤代が、照れながら肯いたとき、発車のベルが鳴った。
藤代は、悠子からカメラを受け取ると、大きくふくらんだショルダーバッグを軽くゆするようにして、列車に乗り込んだ。
3号車の通路に顔を出して、窓ガラス越しに、藤代が何かいった。窓が開かないので、何をいっているのかわからない。悠子は、それを勝手に解釈して、
「OKよ」
と、いった。
藤代が、ニッコリ笑った。
列車が動き出し、やがて、出雲1号は、スピードを増して、夕闇の中に青い車体を消して行った。

3

悠子と藤代が勤めているのは、新宿に本社のある大手の製薬会社、太陽製薬である。
二年前から、週休二日制になった。
したがって、今日木曜日の夕方の夜行列車に乗ると、金曜日一日だけの休暇をとれば、三泊四日の旅に出られるのだ。
藤代は、三月二十九日の日曜日には、東京に帰ってくるといっていた。
東京駅に、彼を見送って、世田谷区代田橋のアパートに帰ると、悠子は、時刻表を開いてみ

た。

今、午後七時三六分。時刻表によれば、出雲1号は、熱海(あたみ)の少し手前を走っているところである。

藤代は、そろそろ、食堂車へ行って、夕食をとっているだろうか？

なぜか、彼が、最後にニッコリした笑顔が思い返されてくる。悠子が、勝手に、彼が結婚してくれるかどうかきいたと考えて、イエスといったのが、わかったのだろうか。

藤代は、今度の旅行では、「大社線(たいしゃ)」に乗って来たいといっていた。

悠子は、そんな線があることなど、ぜんぜん知らなかったが、藤代の説明では、出雲市駅から、出雲大社のある大社駅まで走っているのだということだった。国鉄全線を完乗するには、そうした支線にも乗らなければならないらしい。

時刻表を見ると、藤代のいったとおり、出雲市―大社（大社線）と出ていた。その間の距離は、わずか七・五キロしかない。

「昭和三十三年の十月に、東京―大阪間を走った『あさかぜ』が、今のブルートレインの走りなんだが、そのときに使われた寝台車が、20系車両と呼ばれて、なかなか優雅な形をしているんだ。今では、数少なくなってしまっているが、この大社線で、見られるかもしれないんだ。というのは、大阪から出雲市を経て大社まで行く『急行だいせん』に、この20系寝台車が使われているからさ。急行だいせんは、出雲市までは急行だが、出雲市から大社までは、各駅停車の普通列車になってしまった。つまり、普通列車のブルートレインというわけなんだ。それも、

面白いと思っているんだ」

と藤代は、いかにも楽しそうにいっていた。

悠子は、藤代のようなマニアではないから、20系車両にも、普通列車ブルートレインという言葉にも、さほど、興味を示さなかった。

山陰という言葉で、悠子が、まず頭に思い浮かべるのは、鳥取の砂丘だった。

富士の樹海、鳥取の砂丘、それに、北海道の釧路湿原、そのどれにも、悠子は、まだ行ったことはなかったが、彼女が、日本の景色の中で心惹かれるのは、この三つだった。

どこか神秘的で、どこか恐ろしい。そこに、惹かれるのかもしれない。悠子が、それをいうと、藤代は、

「帰りには、鳥取にも下車するつもりだから、砂丘の写真を、撮って来てあげるよ」

と、約束してくれた。

悠子は、そんな藤代の言葉を思い出したり、最近の週刊誌に、「春の山陰路」特集があったのを覚えていて、その週刊誌を引っ張り出したりして、午前一時近くまで起きていた。

今ごろ、出雲1号は、京都付近である。

(彼は、もう寝たろうか?)

そんなことを考えているうちに、悠子も、いつの間にか、眠ってしまった。

4

翌日、いつものとおり、悠子は、出社したが、何となく、落着きがなかった。

藤代とは、課も違うし、知り合ってからも、彼一人で旅行に出かけたことは、何度もある。しかし、「彼が、今、東京にいないのだ」と、切実に感じたのは、今度がはじめてだった。

(東京駅のホームで、突然、プロポーズまがいの言葉をいわれたせいだろうか?)

机に向かって、ぼんやりと、そんなことを考えていて、係長に注意されたりした。

二十五歳の悠子は、もちろん、藤代が初恋というわけではなかった。過去に、彼よりハンサムな男もいたし、金持ちの男もいた。

彼らに比べると、藤代は、ハンサムでもないし、気の利いたセリフも喋らない。喋らないというより、喋れないのだろう。そうかといって、さほど誠実な男というのでもない。悠子とは、まあ、恋人同士だが、それでも、友人と、トルコに行ったりもする。普通の男ということでもある。

今年十月の人事異動では、多分、係長になるだろうが、三十歳で係長というのは、悠子の会社では、まあまあの昇進で、とうていエリートコースにのったとはいえなかった。藤代自身、自分が出世できるとは考えていないようだし、その気もないらしかった。

「まあ、よくいって、課長どまりだろうね」

と、藤代が、いったことがあった。別に、卑下している調子でもなかった。

だから、藤代と結婚したら、せいぜい、課長夫人ということである。

家庭も、平凡なものになるだろう。藤代は、次男坊で、両親の面倒をみる必要は、今のとこ

ろないが、資産家の息子でもない。悠子の家庭も同様だからだ。結婚したら、グアムやハワイにも行けなくなるかもしれない。

それでも、藤代と一緒になれたら幸福になれそうだという気がしていた。

なぜだかわからない。一つ一つ考えていくと、結婚相手としては、さほど優良株ではないのに、彼となら、うまくやっていけそうな気がするのだ。

悠子が、もっと若ければ、フィーリングが合うとでもいうところだが、二十五歳の悠子は、彼となら、何となくうまくやっていけそうだからとしかいえない。いや、もともと、愛情というものは、理屈とは無関係だろう。

藤代のことが、気になり出してきた。前には、彼が旅行に出ても、別に、心配はしなかったのに、今は、ふと心配になってくる。一緒に映画を見て、食事をして別れたあと、ふと、彼の乗った電車や、バスが、事故を起こしやしないかと心配になる。これが、愛というものなのだろうか。

二十七日の夜、会社から帰宅した悠子は、藤代からの電話を待った。

藤代は、旅行先から電話するよとはいわなかった。しかし、彼は、今までも、必ず、電話をくれた。東京駅のホームで、プロポーズをしたのだから、今度の旅行では、必ず、電話連絡してくるはずだという気持ちが、悠子にはある。

時刻表によれば、藤代の乗った出雲1号は、今朝の八時一六分に、出雲市に着いているはずだった。そして、今日一日、出雲大社に参拝したり、待望の大社線に乗ったりしたあと、松江

に戻って、そこのホテルに泊まるつもりだと、藤代はいっていた。

藤代は、予約せずに、行き当たりばったりで、ホテルなり旅館に泊まるのが好きだったから、松江のホテルも、予約してはいなかった。

したがって、悠子は、彼からの電話を待つより仕方がない。

週刊誌に出ていた松江の町の写真を見ながら、藤代からの連絡を待った。松江は宍道湖に面して広がる都市で、水の都ともいわれ、ラフカディオ・ハーンが住んだところとしても知られている。そんな週刊誌の案内記事を読んでいるうちに、時間は八時、九時と過ぎていったが、電話は、一向に鳴らなかった。

心配になって、テレビをつけ、九時のニュースを見た。ひょっとして、山陰線で事故があったのではないかと思ったからだった。

しかし、事故のニュースはなかった。松江のホテルで、火災が起きたというニュースもない。

(電話するのを忘れちゃったのかしら?)

呑気なところもある藤代である。出雲大社や、松江の景色に見とれて、あるいは、大社線に乗ったことに興奮して、恋人に電話するのを忘れてしまったのかもしれない。

(夜中になって、落ち着いたら、例の調子で、悪い悪い、忘れちゃってね、といって電話してくるんじゃないだろうか)

悠子は、そんなことを考えてみたが、夜半になっても、藤代からは、連絡が来なかった。

ようやく、不安と一緒に、腹立たしさも生まれてきた。

（東京駅で、プロポーズしておきながら、肝心のときに、連絡して来ないなんて――）

不安と、腹立たしさが交錯して、悠子は、なかなか、眠れなかった。

土曜日の朝になり、ようやく、悠子は、うとうとした。いつもなら、会社が休みなので、昼近くまで寝ているのだが、今日は、うとうとしては、時間が気になって、眠れなかった。

藤代は、今日中に、鳥取へ行くだろうと思う。砂丘を見たら、いやでも、悠子のことを思い出し、電話してくるのではないか。

そう思い、一日中、アパートにいたのだが、昼を過ぎ、夕方が来ても、いぜんとして、藤代から電話はかかって来なかった。

夜になって、小雨が降り出してきた。山陰にも、雨が降っているのだろうかと考えているうちに、悠子は、ふと、藤代が、どこかに消えてしまったような不安に襲われ、あわてて、首を振った。

5

三月二十九日の日曜日が来たが、藤代から連絡がないのは同じだった。

悠子は、朝刊の隅から隅まで眼を通した。

伊豆の温泉旅館で、昨日の午後火災が起きて、数人の負傷者が出たという記事がのっていたが、山陰地方の事件は、のっていなかった。

藤代は、今日中に帰ってくるはずだった。何事もなかったのに、悠子に電話をかけて来なか

ったのだとしたら、少し悲しいなと、彼女は、思った。

旅行のたびに、電話をかけてほしいわけではなかった。去年、彼が九州へ出かけたとき、一度も電話してくれなかったが、悠子は、そのことで怒ったりはしなかった。

ただ、今度は、東京駅でのことがある。

「二人でいつか、出雲大社へ行かないか」

と、藤代がいい、悠子が、それを、プロポーズなのかときいたら、彼は、イエスと肯いた。

そのあとの山陰旅行なのだ。何をおいても、向こうに着いたら、悠子に電話してくるのが本当ではないだろうか。

事故にあったんでもないのに、なぜ、連絡して来ないのだろうかと考えていると、自然に、嫌な想像まで浮かんで来て、彼女を悩ませた。

出雲市へ行き、大社線に乗ってみたいなどといっていたのは、全部でたらめで、どこかに女がいて、会いに行ったのではないだろうか？

それとも、女が、途中で出雲1号に乗って来ることになっていたのではあるまいか？　その女と、山陰を旅しているので、悠子に電話をかけられなかったのではないのか？

藤代は、出雲1号に乗ったことは確かだが、悠子は、別に、切符を見せてもらったわけではない。

出雲1号は、横浜、熱海、沼津、浜松と停車する。熱海着は、一九時四八分である。ひょっとして、熱海で降りて、他の女と楽しんでいるのではあるまいか？

悠子は、そんなことまで考えてしまったが、昼過ぎになって、やっと、電話が鳴った。日曜日には、藤代以外には、めったに電話をかけて来る者はいなかったから、受話器を取るなり、

「藤代さんね」

と、悠子は、いった。

「もし、もし」

と、男の声がいった。それは、藤代の声ではなかった。その声が、

「氷室悠子さんですか？」

「はい」

「藤代友彦さんをご存知ですか？」

「はい。藤代さんが、どうかしたんでしょうか？」

「こちらは、青森の警察ですが」

「青森？」

「そうです。青森県警の三浦といいます。実は、今日の午前一時三〇分ごろですが、青森駅の構内で、三十歳ぐらいの男性が死んでいるのが発見されたのです。所持品から、藤代友彦という名前の方とわかったんですが、ポケットの中の手帳に、あなたの名前と電話番号が書いてあったので、ご連絡したわけです」

「……」

「すぐ、こちらへ来て、遺体を確認して頂けますか？」
「アオモリ――ですの？」
「そうです。青森県警捜査一課の三浦です。なるべく早くおいでください。お願い致します」
それだけいうと、相手は、電話を切った。
悠子は、呆然として、しばらくの間、切れた電話の受話器を握りしめていたが、気がついて、置いたとたん、急に、小刻みに、身体がふるえだした。

第三章　合同会議

1

四通の手紙の調査に、十津川は、三日間かけた。
封筒と便箋は、ごくありふれたもので、いくらでも市販されていたから、この二つから、犯人を割り出すことは不可能だった。
文字は、ブルーブラックのインクで書かれており、科学捜査研究所で分析してもらったところ、国内の大手メーカーのインクで、こちらからの割り出しもできないことがわかった。
残るのは、指紋である。
封筒と便箋からは、五種類の指紋が検出された。
十津川は、その一つ一つを消去していった。
一番はっきりしていた指紋は、北野秘書のものだった。
木本国鉄総裁のものもあった。これは、北野が、総裁に手紙を見せたときについたものだろう。

三番目は、北野の下で働いている女性のもので、残りの二つは、郵便局の人間のものと判明した。

やはり、投書の主は、指紋を残さなかったのだ。むろん、手袋をはめて書き、投函したのだろう。

収穫のないままに、日時だけがたった。

それだけ、四月が近づいたことになる。

四通の手紙を送りつけた人間は、その後、沈黙している。これで、通告は終わったということなのか。

問題は、これを、単なるいたずらと考えて無視するか、本物と考えて、対策を講じるかということだった。

その決定は、国鉄総裁である木本に委されていた。

木本が重視したのは、これが、予告だということだった。

悪質ないたずらは多い。列車に爆弾を仕掛けたと通告して、その対応に追われる職員を笑おうとする。

だが、それなら、今日、爆弾を仕掛けたといってくるだろう。四月吉日などと、悠長な予告はしないものだ。

十津川も、同じ意見だった。

木本は、四通の手紙を、本物の爆弾予告と考えることにした。

しかし、総裁である木本は、公けの会議に出席しなければならない。そこで、国鉄側の責任者は、副総裁の小野田として、三月二十五日の午後二時から、警察側との合同会議を開いた。

国鉄側
小野田副総裁
山本運転局長
後藤公安本部長
北野総裁秘書

警察側
三上刑事部長
十津川警部

もちろん、秘密会で、議事録には、㊙の判が押された。
まず、北野が、問題の手紙が、来はじめたときのことから説明した。
中央に置かれた黒板に、四通の手紙から書き抜かれた文句が、北野によって、書かれた。

夜行列車

午前三時
爆破決行
四月吉日

副総裁の小野田は、テーブルの上に置いてあった眼鏡をかけ直して、黒板に書かれた文字を読んだ。

「文章としては、前後がおかしいね」

と、小野田が、ひとりごとのようにいった。別に、呑気な気持ちからではなく、この場の重苦しい空気を、いくらかでも、ほぐそうとしたのだろう。

「そうですね。当然、文章としては、四月吉日午前三時、夜行列車爆破決行となると思います。それを、順不同に、送りつけて来たのには、いろいろと、理由が考えられます。四月吉日から送りつけて来たのでは、われわれが、注意を払わなかったでしょう。夜行列車という四文字を第一番目に送って来たからこそ、私も、注目したのです。相手も、それは計算したに違いありません。それで、文章としては、順不同のようになったのだと思います」

北野が、黒板に眼をやりながら、説明した。

「なるほどね」

と、小野田は、肯いてから、テーブルをはさんで向かい合って腰を下ろしている三上刑事部長に、

「警察側のご意見を伺いたいですね。この手紙の主は、本気で、夜行列車を爆破する気だとして、狙いはいったい何だと思われますか？　ただ、やみくもに、列車を爆破しようというのでしょうか？　それとも、脅迫して、国鉄から金を取ろうというのでしょうか？」

「わかりませんな」

と、小柄な三上刑事部長は、正直にいい、続けて、

「犯人が何者なのか、全く見当がつかないからです。国鉄に対して、個人的な恨みを持っている人間ならば、金が目当てではないでしょうし、もし、金が目当てなら、間もなく、金額をいってくると思いますね」

「では、犯人が本気だとして、対応策を考えなければならないわけだが」

小野田は、言葉を切り、煙草に火をつけた。大きく、紫煙を吐き出してから、

「対策といっても、この手紙だけでは、四月何日かも、どの夜行列車かもわからんな。四月吉日というのは、どう解決したらいいんですかね？」

と、三上と、十津川を見た。

三上が、眼で、十津川に、自分の考えをいってみろといった。

「ストレートに考えれば、いわゆる吉日ということになりますね」と、十津川は、いった。

「大安吉日の吉日でしょう。しかし、相手は、列車を爆破しようという犯人です。自分に都合のいい日を、勝手に吉日と呼んでいることも考えられます。その日は、国鉄にとっては、厄日でも、犯人にとっては、喝采を叫ぶ日に違いありませんから」

「すると、対策を考えるうえでは、四月一日からと考えるのがいいということですか？」
「そうですね。四月の二十日かもしれませんが、四月一日ということもあり得ますから」
「すべて、エイプリル・フールであってくれれば助かるんだがね」
小野田は、苦虫を噛みつぶしたような表情を作った。確かに、これが、エイプリル・フールに終わってくれれば助かるが。
「こちらから質問してかまいませんか？」
と、三上が、いった。
「どんなことですか？」
「午前三時に、走っている夜行列車というのは、何本ぐらいあるんですか？」

2

「山本君、説明したまえ」
と、小野田は、自分の隣りに座っている男に、声をかけた。
五十五、六歳の目立たない男だった。頭髪も、相当うすくなっている。小柄で、道で会っただけならすぐ忘れてしまいそうな特徴のない男である。
山本は、もぞもぞと立ち上がると、大きめな丸めた紙を抱えて、黒板のところへ歩いて行った。
「山本君は、列車編成の専門家で、国鉄の全列車に精通しています」

と、小野田が、紹介している間、山本は、それが聞こえているのかいないのか、黙々と、広げた紙を、黒板に、ピンで止めている。

大きな日本地図だった。手書きで、少しばかり、日本全体がゆがんでいた。

十津川は、山本という男に、好感を持った。融通がきかない、頑固な男だが、それだけに、信用の置ける人間だと思ったからである。

「夜行列車には、旅客列車の他に、貨物、荷物の列車もあります」

山本は、ぼそぼそした声で、説明を始めた。

「午前三時という時点に限っていえば、この時刻に、線路上を走っている列車は、約五百本です」

「五〇〇本！」

三上刑事部長が、嘆声をあげた。

十津川も、唸った。それは、守るべき列車の本数の多さに驚いたと同時に、午前三時という夜半にも、そんなに多くの列車が動いているのかという感動だった。

国鉄は、人々が寝静まってからも、日本全国で、動き続けているのだ。

「そのうち、旅客列車は、何本ですか？」

と、三上が、質問した。

犯人が、貨物列車を狙うということは、まず考えられなかった。

さらに、貨物列車なら、たとえ爆破されたとしても、人命の被害は、少なくてすむ。

「一九〇本で、うち、特急七二本、急行百一本、普通一七本です。この地図に、それを書き込んでおきました。赤丸が列車を示しています」

山本が、説明する。

「一九〇本ですか」

と、三上が、また、嘆声をあげた。

赤丸は、日本全国に散らばっていた。さすがに、日本の主要動脈といわれる東海道本線、山陽本線のいわゆる、太平洋ベルト地帯に赤丸が集中しているが、北海道、東北、四国、九州にも、赤丸がついていた。

「その一九〇本に、何人くらいの乗客が乗っていると考えたらいいですか？」

十津川がきいた。

「定員数を合計すると、約一一万人になりますが、現在、乗車効率を五〇パーセントと考えていますので、五五〇〇〇人ということになります」

山本の答え方は、相変わらず、必要なことしか喋らないという感じだった。こういう重大な会議のときには、饒舌でないことはプラスである。

「五五〇〇〇人ですか」

また、三上が、溜息をついた。

もちろん、犯人が狙っているのは、全夜行列車ではないだろう。日本のどこかを、午前三時に走っている一つの夜行列車に違いない。だから、正確にいえば、狙われている人間が、五万

五〇〇〇人いるわけではないのだが、その夜行列車がわからない以上、五五〇〇〇人という重みを感じざるを得ないのだ。

「この五万五千人に、当然、その夜行列車を走らせている国鉄職員の数も加える必要がありますね。一列車に、最低七、八人は乗務していると考えると、一九〇列車で、千五百人くらいになりますか？」

る夜行列車

運転時間	定員（寝台）	定員（座席）	午前三時の地点
19時19分	592	——	備後赤坂駅あたり
22時04分	380	——	笠岡・大門間
18時25分	592	——	高梁川鉄橋通過
21時50分	380	——	相生駅通過
16時36分	380	——	姫路駅あたり
15時37分	434	——	舞子駅あたり
10時31分	434	——	尼崎駅通過
15時39分	314	——	福知山駅通過
14時40分	310	——	関ケ原・米原間
10時22分	282	——	四日市・亀山間
9時15分	556	——	浜松駅通過
7時34分	——	920	島田駅あたり

十津川がきくと、山本は、眉を寄せて、

「今は、乗客の安全だけを考えたいと思います。あなた方だって、都民の安全というとき、その中に、ご自分たちを加えたりはなさらんでしょう？」

と、生真面目にきき返した。

「これは、一本取られたね」

三上が、十津川に笑いかけたが、十津川は、別に不快ではなかった。むしろ、山本のいい方が、心地よかったくらいである。一種の国鉄マンの心意気みたいなものを感じたからだった。

山本は、席に戻ると、

「夜行旅客列車の一覧表をつくって来ましたので、向こうに貼った地図と共に、参考にして頂きたいと思います」

と、いい、コピーされた書類を、全員に配って回った。

十津川は、その分厚さに、改めて、事態の重さを感じた。

第一ページは、東京駅から、西に向かう夜行列車が、並んでいる。

これらの列車は、上りもあるから、本数は当然二倍になる。

犯人が、一つの夜行列車を狙ったとしても（乗車率五〇パーセントとして）最低百数十人の乗客が危険にさらされることになるのだ。

二ページから三ページにかけては、上野発の夜行列車が並んでいる。こちらは、はるかに、本数が多い。下りだけで、三一本の夜行列車が、上野から、東北、奥羽、常磐、上信越、羽越、北陸に向かって発車している。

東京から　西下す

列車名	種別	発車時刻	行き先
さくら	特急	16:30	長崎・佐世保
はやぶさ	〃	16:45	西鹿児島
みずほ	〃	17:00	熊本・長崎
富士	〃	18:00	宮崎
あさかぜ1	〃	18:25	博多
あさかぜ3	〃	18:55	下関
瀬戸	〃	19:05	宇野
出雲1	〃	18:15	浜田
出雲3	〃	21:00	出雲市
紀伊	〃	21:00	紀伊勝浦
◆銀河	急行	22:45	大阪
——	普通	23:25	大垣

最後のページは、北海道だったが、ここでも、上り、下り合計十二本の夜行列車が、問題の午前三時に、線路上を走っていた。

同じように、ページをめくっていた小野田副総裁が、

「この中のどの列車と限定できんのじゃあ、防ぎようがないな。そうだろう？　後藤君」

と、保安責任者の後藤を見た。

後藤は、体重が八十キロは楽にありそうな大男で、

「とうてい無理ですね。何月何日とわかっても、一九〇本の列車全部を守ることは、とうてい不可能です」

と、身体に似合った大きな声でいった。

「これは、ちょっと思いついたことなんですが」と、三上刑事部長が、口をはさんだ。

「犯人は、爆破するといっています。恐らく、鉄橋にでも爆薬を仕掛ける気だと思いますね。そうだとすれば、午前三時に、どこかの鉄橋を通過している列車ということになりませんか？」

「それは、私も考えました」

と、後藤は、肯いた。

「どうですか？　この一ページにある『みずほ』を見ると、午前三時に、高梁川鉄橋を通過中とありますね。この列車など、マークしたらいいんじゃないかと思うんだが――」

「そのとおりです。しかし、犯人は、列車自体に、時限爆弾を仕掛けるかもしれません。これ

は、夜行列車ではなく、新幹線でしたが、爆弾騒ぎを起こしたことがあるんです。今度も、犯人が同じ行動に出たら、われわれは、対応を誤ることになります」

後藤は、しっかりとした口調でいった。

確かに、後藤のいうとおり、事は人命にかかわるのだ。可能性だけで、行動することは危険だった。

また、沈黙がきた。

小野田は、いらいらと、何本目かの煙草をくわえてから、その沈黙を破って、

「もう一度、確認したいのだが、犯人については、全くわからないんですか？」

と、三上にきいた。

「残念ながら、まだ、何もわかっておりません。筆跡からみて、恐らく、男だと思いますが、これも推測の域を出ません」

三上は、申しわけなさそうにいった。

そのとき、山本が、遠慮勝ちに、

「私の考えを申しあげていいですか」

と、口をはさんだ。

「どうぞ、今は、どんなことでもいってください」

三上が、微笑して、山本に促した。

「私は、この犯人は、かなりの鉄道マニアだと思います」

と、山本は、断言した。

3

「ほう」

三上は、声に出して、山本の見栄えのしない顔を見つめた。

十津川も、山本を見た。彼のような男が、はっきりといったからには、かなり自信のあることに違いない。その理由を知りたかった。

「なぜ、そう思われるのですか？」

と、三上が、きいた。

山本は、吸いかけの煙草を、丁寧にもみ消してから、

「総裁宛の四通の手紙を見ているうちに、そう思ったんです」

「国鉄を爆破すると書いているからですか？」

「いや。そうじゃありません。別に、鉄道マニアでなくても、鉄道を爆破するぞと、投書する者はいます。私が、注目したのは、午前三時という時刻です」

「それなら、私も、気になっていたんです」

と、十津川が、いった。

「犯人は、なぜ、午前三時という時刻を指定して来たのだろう？　なぜ、午前零時や、午前二時ではなく、午前三時なのか、犯人にとって、特別な意味があるのだろうかと、ずいぶん考え

ましたが、結局、わかりませんでした。国鉄にとって、何か意味のある時刻なんですか？」

「そ、その前に、夜行列車について考えて頂きたいのです」

山本は、ちょっと、つっかえ気味にいった。

多少、どもり気味の喋り方が、かえって、説得力があった。

「どういうことですか？」

と、三上がきいた。

十津川も、興味を持って、山本の口元を見つめた。

確かに、夜行列車とは何かというのは、意外に難しいことかもしれない。国鉄の部外者の十津川には、夜間に走る列車だから、夜行列車ということしか思いつかないのだ。

そんな十津川の気持ちを見すかしたように、山本は、

「一般の方は、夜間に走る列車だから、夜行列車と、簡単に考えます」

「違うのですか？」

と、三上がきいた。

「違うとはいいませんが、正確ではありません。例えば、東京の山手線、京浜東北線などは、午前一時過ぎまで走っています。しかし、これを夜行列車とはいいませんから」

「すると、国鉄の定義というものがあるわけですか？」

十津川が、山本を見た。

「あります。夜行といっても、旅客列車についてですが、『深夜の非有効時間帯の前後にまた

がって走る列車』と定義しています」
「ヒユウコウジカンタイ？」
「簡単にいえば、人が眠っている時間ということです」
と、山本は、微笑した。この初老の男が、初めて見せた笑顔だった。
「なるほど」
と、十津川も、微笑した。
お役所の用語というものは、やたらに生硬で固苦しいものだと思ったからである。警察用語も、その点同じである。民間なら、まず第一に、わかりやすさを考えるだろうが、お役所の場合は、わかりやすさよりも、正確さを優先させるからだろう。悪くいえば、どこからも、突っつかれないようにと、それだけを考えているのだ。
「つまり、夜をはさんで、二日間にわたって走る列車ということですね」
と、十津川は、いってから、
「しかし、そのことと、犯人が鉄道マニアらしいということが、どう結びつくわけですか？犯人は、別に、夜行列車の定義を書いて来たわけじゃないし――」
「午前三時という時刻のことです。さっき、十津川さんは、犯人が、なぜ、午前三時と指定したのか、なぜ、午前零時や、午前一時でなく、午前三時なのかといわれましたが、その点に、私は、犯人が鉄道マニアではないかという疑いを感じたのです。十津川さんがいわれたように、夜行列車は、夜をはさんで二日間にわたって走る列車ということになります。犯人は、その夜

行列車を爆破しようと考え、この時刻を予告して来たわけです。犯人は、もっとも、夜行列車にふさわしい時刻を予告しようとしたんじゃないでしょうか？　あまり鉄道の知識のない人なら、深夜の午前零時こそ、夜行列車にふさわしいと考え、その時刻に爆破しようと考えるでしょう。しかし、さっきの山手線や京浜東北線のように、午前一時過ぎまで走っているものもありますから、午前零時や、午前一時は、もっとも、夜行列車にふさわしい時刻とはいえなくなるのです。また、山手線や京浜東北線は、午前四時半を過ぎると、始発が動き出します。となると、夜行列車に、もっともふさわしい時刻は、午前一時過ぎから、午前四時半過ぎの間の中間、つまり午前三時ということになります。午前三時に走っている列車なら、間違いなく、夜行列車です。したがって、私たちは、夜行列車の現状を考えるとき、よく、午前三時という一点をとって、資料にすることがあります。そのことがあるので、この手紙を見たとき、犯人は、かなりの鉄道マニアと考えたわけです」

「なるほど。よくわかりました」

と、十津川は、肯いてから、彼らしい素直さで、

「犯人は、山本さんのいわれるように、かなりの鉄道マニアかもしれませんが、同じ理由によって、他の場合も考えられるんじゃありませんか？」

と、小野田副総裁を見た。

小野田は、すぐ、十津川が何をいおうとしているのかわかったらしく、口をへの字に曲げて、

「あなたが、国鉄職員のことをいっておられるのなら、それは、見当違いもはなはだしい。国

鉄マンが、別に聖人君子だといわない。つい二、三日前にも、万引きで逮捕された国鉄職員がいたと新聞に出ていましたからね。しかし、国鉄マンは、この鉄道が好きなんですよ。誰が、自分の愛する鉄道を爆破するものですか」

「では、元国鉄職員でもかまいませんよ。何か不都合なことがあって、懲戒免職にでもなった職員がいたとすると、彼は、夜行列車についての知識もあるはずだから、十分に、犯人としての条件を備えているんじゃありませんか？」

「それはどうだか――」

「最近、国鉄を退職した職員のリストを、至急に作って頂きたいですね」

と、十津川は、いった。妥協のない口調だった。

小野田は、北野に向かって、

「君がやりたまえ」

「わかりました」

と、北野は、肯いてから、

「私も、質問をしていいですか？　みなさんで考えて頂きたいことがあるんです」

「何だね？」

「なぜ、犯人は、他の列車でなく、夜行列車を選んだんでしょうか？」

4

「他の列車というと？」
十津川が、きいた。
北野は、唆でものどにからんだのか、小さく咳払いしてから、
「現在、国鉄を代表するものは、やはり、新幹線だと思うのです。国鉄の技術の粋を結集して作られたものですし、夜行列車の場合は、一列車に、せいぜい二百人から三百人の乗客しか乗っていませんが、新幹線の場合は、千人です。しかも、時速二百キロ近くで走っているわけですから、爆破による被害は、夜行列車の比ではありません。国鉄の痛手も、それだけ大きくなります。マスコミの取り上げ方だって、新幹線が一番大きくなるでしょう。もし、犯人が、国鉄に対して恨みを抱いているのなら、当然、新幹線を狙うと思うのですよ。それなのに、夜行列車を狙っている。なぜでしょうか？」
「二つ考えられますね」
と、十津川が答えた。
「といいますと？」
「犯人は、国鉄全体に恨みを持っているのではなく、夜行列車に対して、恨みを持っているのかもしれない。それが、答えの一つです。もう一つの答えは、午前三時という時刻です。犯人は、国鉄に対して恨みを持ち、北野さんのいわれるように、新幹線を爆破したいのだが、犯行日には、午前三時しか、自由に行動できない環境に置かれているのかもしれない。しかし、後者の場合は、かなり特殊な職業なり、環境におかれた人間ということになります。もちろん、

この場合も、無視はしませんが、重点は、やはり、前者でしょう。北野さんは、国鉄の退職者のリストを作ってくださると約束してくれましたが、もう一つお願いがあります」

「どんなことでしょうか？」

北野が、きいた。

「国鉄の夜行列車が、過去に問題を起こしたことがあるか、現在、問題を起こしているか、それを教えて頂きたいのですよ」

「それなら、後藤さんが、一番よく知っておられると思いますね」

と、北野がいった。

後藤は、いかつい顔を、十津川に向けて、

「沿線住民とのトラブルということでしたら、今のところ、夜行列車には、ありません。今、沿線住民とのトラブルが起きているのは、新幹線です。十津川さんもご承知のように、既存の新幹線では、騒音公害の問題が起きていますし、東北新幹線では、用地買収がこじれています。夜行列車では、そうした問題は、起きていません」

「なぜですか？　人の寝静まっている時間帯に走るわけだから、いろいろと、苦情があるんじゃないかと思うんですが」

十津川がきくと、後藤は、首を横に振って、

「幸い、そうした苦情はありません」

「なぜですか？」

「そうですねえ。例えば騒音ですが、今、新幹線では、市街地で時速七十キロまで落とせという要求が出されています。つまり、スピードをそこまで落とせば、そのときの騒音は我慢できるということですね。夜行列車のスピードは、だいたい六十キロから八十キロで、市街地に入れば、もっとダウンしますから、苦情は出ないわけです。それに、新幹線は、ひかり、こだまを合わせると、一五分ごとに発車していますが、夜行列車の場合は、そんなにひんぱんではありません。苦情が出ないのは、そのためだと考えています」

「沿線住民との間のトラブルがないのはわかりましたが、事故などによるトラブルというものはあるんじゃありませんか？　最近、夜行列車が、事故を起こしたことは、ありませんか？」

「ここ一年に限って申し上げると、三件の事故が起きています」

後藤は、用意して来たメモに眼を通しながらいった。

「どんな事故ですか？」

「三件とも、踏切事故で、国鉄側にミスはありません。いずれも、車が、遮断機がおりていたか、おりかかっているのに、強引に踏切に進入して来たために起きた事故だからです」

「死者が出ているんですか？」

「三件とも、死者、負傷者が出ていますね」

「その中に、午前三時に起きたものはありませんか？」

十津川がきくと、後藤は、「なるほど」と、肯いてから、

「三時に近い事故はありますが、三時ジャストに起きた事故というのは、ありませんね」

日時	列車	場所	被害状況
5月12日 AM2:18	富士(下り)（東京→宮崎）	大久保・加古川 間の踏切	乗用車大破 死亡1、重傷1
8月7日 AM5:10	あけぼの3号(下り)（上野→秋田）	真室川・釜淵 間の踏切	トラック大破 死亡1
12月26日 AM5:38	さくら(上り)（長崎→東京）	米原・関ケ原 間の踏切	乗用車大破 重傷2

「とにかく、その三件の事故を話して頂けませんか」

と、十津川は、頼んだ。今は、どんな小さな手がかりでも欲しかった。

後藤は、チョークをとり、黒板に、三件の事故の概略を書き並べた。

十津川は、手帳に、この三件の事故を書き写してから、後藤に向かって、

「確かに、踏切事故は、相手側に非があると思います。しかし、この事故で死亡した人の家族は、夜行列車さえ走っていなかったらと、考えるかもしれません。この事故で死亡した人の名前や、その家族のことをくわしく教えてくれませんか」

「すぐ、書類を取り寄せて、お知らせします」

と、後藤は、約束した。

会議を終えるに当たっては、三上刑事部長が、国鉄側の協力を謝したあと、

「われわれ警察は、差し当たって、次の三つについて、捜査を進めたいと考えます。元国鉄職員、鉄道マニア、それに、夜行列車の事故によって死亡した人物の家族です」

「その中に、犯人がいるとお考えですか？」
小野田副総裁が、きいた。
「いて欲しいと思います。なにしろ、三月は、あと、六日しかありませんから」
と、三上は、いった。
犯人が、四月三十日を考えているのなら、あと三十六日の余裕がある。しかし、四月一日なら、六日しかないのだ。無駄な捜査をしている余裕はない。
「事態に、少しでも新たな展開があった場合は、随時、こうした連絡会議を持つことにしたいと思います」
小野田副総裁がいい、それが、今日の散会のあいさつになった。

第四章　青　森

1

三月三十日の朝早く、悠子を乗せた「ゆうづる5号」は、青森に着いた。定刻の七時〇五分より、五分おくれていた。

東京は、春たけなわだったが、この青森には、まだ、冬が居すわっている感じで、列車からホームに降りると、曇り空の下で、粉雪が舞っていた。悠子は、思わずコートの襟を立て、白い息を吐きながら、改札口を出た。

悠子は、まだ、藤代が死んだことが信じられなかった。第一、山陰に行った藤代が、なぜ、こんな北の国で死んでいたのか、その理由がわからない。

駅の構内にも、食堂があり、列車から降りた人たちは、朝食をとりに入って行ったが、悠子は、食欲がなかった。

構内の黄色い電話で、県警本部にかけてみた。

時間が早過ぎるかなと思ったが、悠子が、三浦刑事の名前をいうと、すぐ、昨日の男の声に

代わった。
「今、青森駅ですか。それなら、すぐ、お迎えにあがります」
三浦は、てきぱきといって、電話を切った。
悠子が、駅前広場に舞う粉雪を見ていると、五、六分して、三浦が、車でやって来た。
三十二、三歳で、五分刈りの頭をし、首の太い、いかにも頑丈そうな身体つきの男だった。
「氷室悠子さんですね？」
と、三浦のほうから声をかけて来た。あまり、融通は利きそうにない感じだが、それだけに信頼もおけそうだった。
「朝食がまだなら、いい店をご案内しますが」
「本当に、藤代さんは、死んだんでしょうか？」
「それを、あなたに確認してもらいたくて、来て頂いたのです」
三浦は、重い口調でいった。悠子が、東京の人間だということで、標準語で喋ってくれているが、言葉の端々に、東北の訛りがあって、それが、誠実な感じを、悠子に与えた。
「じゃあ、藤代さんじゃないかもしれないんですわね？」
「それは、遺体を見て頂かないと」
「どこに行けばいいんですの？」
「遺体は、大学病院に運んであります。ご家族の了解を得て、解剖したいと思うので」
「解剖？」

「ちょっと、死因に不審な点があるものですからね。本当に、食事はなさいませんか？」
「食事をする気になれないんです」
「じゃあ、ご案内しましょう」
三浦は、悠子をパトカーのところへ連れて行った。
東京と同じ、白と黒のツートンカラーだが、車体のサイドには、白鳥のマークが入っているのが、いかにも、北国の警察らしかった。
車の中は、ヒーターがきいていて、暖かい。三浦は、運転手の制服の警官に、「大学病院へやってくれ」といってから、悠子に、
「青森駅の洗面所の近くで死んでいたんです。最初、駅員は酔い潰れているのかと思ったそうですが、死んでいるとわかって、あわてて、一一〇番したといっていました。年齢は、三十歳ぐらいで、ポケットに身分証明書が入っていました。これです」
と、いい、定期入れに入ったものを、見せた。
太陽製薬の身分証明書だった。
藤代の名前が、はっきりと書き込んである。定期のほうも、藤代の住む池袋から、会社のある新宿までのものだった。
悠子の顔が、蒼ざめる。死んだというのは、やはり、藤代なのだろうか。
悠子が、言葉を失って、じっと、定期入れを見つめていると、三浦が、
「この他の所持品は、警察に保管してありますので、あとで見てください。その身分証明書は、

藤代さんのものに、間違いありませんか？」
「はい。でも――」
「でも、何です？」
「私は、三月二十六日に、東京駅へ、藤代さんを見送りに行ったんです。出雲1号に乗って、出雲大社へ行く彼をですわ。昨日の日曜日に、松江、鳥取と回って、帰京することになっていたんです。それなのに、なぜ、青森で死んでいたりしたんでしょう？」
「それは、本当ですか？」
三浦の細い眼が、急に大きくなったような気がした。
「ええ。私が、東京駅に見送りに行ったんですもの」
「確かに、おかしいですな。ひょっとすると、人違いかもしれませんね。青森駅で死んでいたんですからね」
「でも、人違いだとすると、この身分証明書は？」
「東京のどこかで、すり盗ったのかもしれません。あるいは、落としたのを拾って持っていたのか」
そうであってほしいと、悠子は、思った。
大学病院へ着くと、まっすぐ、地下の片隅にある死体安置所に案内された。
コンクリートの床が冷たかった。薄暗い電灯の下に、ささやかな供物が置かれ、その向こうに、白布に蔽われた死体があった。

三浦が、無造作に、白布を持ちあげた。
悠子が、眼をこらす。
次の瞬間、悠子は、眼の前が暗くなるのを覚えて、その場にしゃがみ込んでしまった。

2

気分が静まってから、悠子は、県警本部に案内された。
三浦は、何度も、「お気の毒です」と、繰り返した。不器用な慰めの仕方だったが、今は、その不器用さが、悠子には、ありがたかった。妙に気のきいた言葉を投げかけられたら、彼女の悲しさは、一層、深くなってしまったに違いないからである。
県警本部では、藤代の所持品を見せられた。

今年のカレンダーつきの手帳
財布（三千五百円入り）
デジタル時計
ボールペン
カメラ二台
ショルダーバッグ

「どうですか？　藤代さんのものに、間違いありませんか？」
と、三浦がきいた。
「ええ、全部、藤代さんの持っていたものですわ」
「カメラを二台お持ちでしたか？」
「ええ。キヤノンを二台持っていて、旅行のときには、いつも両方持っていっていましたわ」
「腕時計はどうです？　藤代さんのものですか？」
「ええ。間違いありません」
そのデジタル腕時計は、去年のクリスマスに、悠子が贈ったものだった。藤代からも、腕時計を貰い、それを、今、彼女は、腕にはめている。
「実は、片方のカメラにフィルムが入っていて、十一枚だけ、撮ってありました。それを現像したんですが」
と、三浦は、言葉を切って、ちらりと、悠子を見て、
「あなたは、東京駅で、藤代さんの写真を撮ったといいましたね？」
「ええ。彼に頼まれて撮りました。彼は、国鉄の二万キロチャレンジの旅というのに挑戦していたんです」
「その企画なら知っていますよ。確か、始発駅と終着駅で、自分の写真を撮って国鉄に送れば、その区間を乗車したと認められるんでしたね。私の親戚の中学一年の男の子が、一生懸命、挑戦していますよ」

「それで、東京駅で写真を撮ってくれと、彼がいったんです。出雲1号で、出雲市に着いたら、そこで、また写真を撮るといっていましたわ。駅名を入れて」
「なるほど。ところで、現像した写真ですが、東京駅のものは、一枚もないんですよ」
「そんなはずはありませんわ。確かに、写したんですもの。バッグの中に、撮影済みのフィルムは入っていませんでしたの？」
「入っていません。フィルムは、三十六枚撮りのものが二本入っていましたが、いずれも、未使用でした。撮影されていたのは、今いったように、片方のカメラに入っていたフィルムだけなのです。それを、お見せしましょう」
三浦は、現像されたネガと、それから手札型に伸ばした写真を、机の上に並べていった。

一枚目　上野駅構内
二枚目　上野駅ホームと藤代
三枚目　特急「はつかり」
四枚目　郡山駅ホームと藤代
五枚目　右に同じ。腕時計をカメラに示している
六枚目　食堂車内の藤代
七枚目　右に同じ。ビールを手に持っている
八枚目　車窓の夜景。粉雪が舞っている

九枚目　同じ
十枚目　青森駅のホームと、特急「はつかり」
十一枚目　右に同じ。粉雪が、ホームにも吹き込んで来ている。改札口のほうに歩いて行く乗客

「どうですか？」
と、三浦がきいた。
悠子は、当惑した顔になって、
「わかりませんわ。どういうことなのか」
「この写真に見る限り、藤代さんは、三月二十八日の土曜日に、『はつかり11号』で上野を発ち、青森に着いたとしか考えられないんですがね」
「なぜ、そうなるんでしょうか？　彼は、二十六日の夕方、『出雲1号』で、山陰に向かったんです。二十七日に、出雲市に着いたはずですわ」
「証拠はありますか？」
「いいえ。でも、間違いなく、出雲1号に乗ったんです」
「しかし、藤代さんは、青森駅で死んでいたんですよ。それに、この写真です。よく見てください。一枚目の上野駅構内の写真に、大時計が写っているでしょう。針は、三時五分をさしています。明るいから、昼間の三時五分でしょう。『はつかり11号』は、午後三時三〇分に、上

野を出発するんです」
「でも、おかしいですわ」
「まあ、聞いてください。次に郡山駅の写真があり、食堂車になります。注意して頂きたいのは、藤代さんが、腕時計をカメラに向けている点です」
と、三浦は、いった。
藤代は、「こおりやま」と書かれた柱の横に立って、デジタル時計をカメラに向けている。
「よく見ると、デジタル時計の数字は、1809と読めます。午後六時九分です。はつかり11号は、六時八分に郡山に着き、二分間停車します。恐らく、藤代さんは、郡山でホームにおり、誰かに頼んで、写真を撮ってもらったのだと思います」
「でも、一昨日かどうかは、わからないと思いますけど」
「前に、藤代さんは、はつかり11号に乗って、青森へ行かれたことがありましたか？」
「わかりませんけど、東北には、まだ行ったことがないといっていたことはありましたわ。まず、西日本を、全部回ってから、東日本を回るんだと」
「そうですか。それなら、前に乗ったときのフィルムということは、まず考えられませんね。第一、そんな古いフィルムを入れたままのカメラを、旅行に持っていくはずもない。それに、車窓に映る粉雪の写真や、最後の青森駅の写真を見てください。青森地方には、一昨日の夜から粉雪が舞い始めたんです。最後の青森駅のホームの写真にも、粉雪が見えます。つまり、昨日の深夜、青森駅に着いたということです。はつかり11号でね」

「私には、どうしてもわかりません。なぜ、彼が、青森なんかへ行ったのか。出雲から鳥取へ回って、帰って来るといっていたんです」
「途中で、気が変わったのかもしれませんね」
「途中で？」
「時刻表によると、あなたのいう出雲1号は、横浜、熱海と停まって行きますね。藤代さんは、途中下車して一泊し、あなたに内緒で、上野駅から、はつかり11号に乗って、青森に向かったのかもしれませんよ」
「でも、なぜ、彼がそんなことを？」
「それは、私にもわかりません。とにかく、藤代さんは、昨日早朝、青森駅の洗面所近くで発見されたのです」
「死因に不審な点があると、おっしゃいましたけど？」
「最初は心臓麻痺ではないかと思ったのです。一昨日から急に冷え込みが強くなって、寒さがぶり返しましたからね。列車を降りて、ホームで写真を撮っているうちに、心臓が苦しくなりあわてて、改札口を出た。吐き気でもして、洗面所へ行き、そこで、倒れてしまった。そんなふうに考えたんですが、窒息死の可能性も出て来たんです。それで、大学病院へ頼んで、解剖してみることになったんです」
「それは、藤代さんが、殺されたかもしれないということなんでしょうか？」
悠子は、じっと、三浦のいかつい顔を見つめた。

「今のところ、半々ですね。解剖がすめば、はっきりしたことがわかると思いますがね」
「彼が殺されたなんて信じられませんわ。他人に恨まれるようなことのない人でしたから」
と、悠子はいった。
藤代は、決して、人当たりがいいとはいえなかった。社交的な性格ともいえない。だが、敵を作るような、毒のある性格でもなかったはずである。
「そうですか」と、三浦は、肯いた。
「ただ、旅先で、ちょっとしたことから、喧嘩になったということも考えられます。他殺としてのことですが」

3

悠子は、三浦刑事が紹介してくれたホテルに泊まることにした。
会社からは、上司の課長が、遅くなって到着した。
藤代の家族には、青森県警から通知したということだった。
悠子は、ホテルの部屋に入ると、三浦から返された藤代の所持品を、テーブルの上に並べて、しばらくの間、眺めていた。
あらためて、藤代が死んでしまったという事実、そのことが、自分の心にあけた空洞の大きさをかみしめる思いだった。
深い悲しみと同時に、彼が、なぜ、上野から、「はつかり11号」で青森へ行ったりしたのか

という疑問が、否応なしにわきあがってくる。

自分に内緒で、そんな行動をしたことへの腹立たしさではなかった。藤代の今度の旅は、三月二十六日の夕方に、東京を発ち、二十九日の日曜日の夜に帰宅することになっていた。

その短い時間に、出雲大社に参拝し、大社線に乗り、松江から鳥取へ回って、砂丘の写真を撮ってくると約束したのだ。

どうして青森なんかへ行く余裕があったのだろうか？　三浦刑事の話では、三月二十八日の午後三時三〇分上野発の「はつかり11号」に乗ったはずだという。

もし、そうなら、二つのことしか考えられない。

藤代は、二十六日の夕方に、「出雲1号」には乗ったが、出雲市までは行かず、途中の熱海あたりで一泊したあと、東京に戻り、二十八日に上野から青森に向かったか、あるいは、一応、出雲市まで行ったものの、すぐ、東京に逆戻りし、上野から「はつかり11号」に乗ったかのいずれかだろう。

いずれにしろ、鳥取へ行って、砂丘を見る余裕はなかったに違いない。

なぜ、藤代は、そんなことをしたのだろうか？

それに、最初からそのつもりだったのか、それとも、何かの理由で、急に青森へ行く気になったのだろうか？

考えれば考えるほど、わからなくなってくる。

第一、東京駅のホームで撮ったあの写真は、どこへ行ってしまったのだろうか？

十一時近くなったとき、突然、部屋の電話が鳴って、悠子を驚かせた。
受話器を取ると、遠慮がちな三浦の声が飛び込んできた。
「夜分おそく、申しわけないんですが、解剖の結果が出たものですから」
「それで、どうでしたの？」
「心臓麻痺ではなく、窒息死でした」
「じゃあ、藤代さんは――」
「そうです。くびを絞められて殺されたとみていいと思います。殺人事件です。それで、もう一度、あなたに、お話を伺いたいと思うのです」
「どうぞ、こちらの部屋までいらっしゃってください。まだ、寝ておりませんから」
「そうもいきません。若い女性の部屋にお邪魔するのはどうも。警察官の行動が批判の的になっているときですから。今、ロビーに来ておりますので、ここまでおりて来て頂けませんか？」
「すぐ行きますわ」
悠子は、電話を切ると、キーを持って、ロビーへおりて行った。
人気のないがらんとしたロビーに、三浦が、煙草を吸いながら、ぽつんと腰を下ろしていたが、悠子の姿を見ると、煙草を消して、
「どうも、申しわけありません」
と、頭を下げた。

フロント係一人が、二人のほうを眺めている。
悠子は、向かい合って腰を下ろすなり、
「藤代さんは、誰にどうして殺されたんでしょうか？」
「それを、これから調べたいと思っているのですよ。考えられることが、一つあります」
「どんなことでしょうか？」
「藤代さんの所持品ですが、財布の中身が、三千五百円というのは、いかにも少な過ぎるような気がするんです」
「私も、そう思っていましたわ。今度の旅行に行く前、彼は、銀行から十万円おろしたといっていたんです」
「すると、金目当ての強盗殺人かもしれませんね。藤代さんが乗って来た『はつかり11号』は、青森へ着く最終の列車です。午前零時を過ぎていましたし、藤代さんは、ホームへおりてから、写真を撮っています。恐らく、改札口を出たのは、乗客の中で、一番最後だったんじゃないでしょうか。改札口を出てから、駅構内の端にあるトイレに行った。そこに、たまたま、犯人がいたんじゃないかと思うのです。周囲に人の気配はない。そこで、犯人は、藤代さんを襲い、殺して、金を奪った。財布に三千五百円残しておいたのは、金を盗るために殺したのをかくすために違いありません」
「そんな――」
「何ですか？」

「そんなことで、彼が殺されたなんて――」
「口惜しいお気持ちはわかります。実は、去年の十二月にも、駅構内のトイレで、強盗事件が起きましてね。このときは、被害者が、頭を殴られて、五万円を奪われたのです。時刻も、今度と同じように、午前零時を過ぎていました」
「その犯人は、捕まりましたの？」
「残念ながら、まだです。ですから、ひょっとすると、同一犯人ということも、あるんですが」
三浦は、犯人逮捕に全力をつくすことを約束して、帰って行った。
悠子は、部屋に戻ったものの、藤代を殺した犯人に対する怒りよりも、何万円かの金のために、彼が殺されてしまったことに、情けなさと、腹立たしさを強く覚えて仕方がなかった。
（青森になんか、行こうとしなければ――）
とも、思った。悠子に約束したとおり、鳥取の砂丘へ行っていたら、藤代は、死なずにすんだのだ。
ベッドに入ったものの、感情が高ぶって、眠れるものではなかった。
（藤代さんのバカ）
と、天井に向かって、叫んだ。
（なぜ、青森へなんか来てしまったの？）
答えてくれるはずの藤代は、死んでしまっている。

眠れないままに、カーテンを開けて、窓の外に眼をやった。
粉雪は、いつの間にか止んでいて、青白い月が雲間に浮かんでいる。道路の雪は消えているが、家々の屋根は、月明かりを受けて、白く光って見えた。
この青森の街に、藤代を殺した犯人が、かくれているのだろうか？
どのくらいの時間、夜の街を見ていただろうか？
突然、低い、金属的な音が聞こえて、悠子を驚かせた。
反射的に、電話に眼を向けた。が、電話が鳴ったのではなかった。
テーブルの上に乗っているデジタル時計のアラームの音なのだ。
悠子は、あわてて、腕時計を手にとった。
午前三時を示している。
（なぜ、こんな時刻に、アラームが？）
と、思いながら、アラームのボタンを押してみた。
AM3：00
の数字が現われた。
明らかに、藤代は、午前三時に、アラームが鳴るように、セットしておいたのだ。そのセットを解除してなかったので、彼が死んでしまった今も、午前三時になると、鳴ったのだ。
（彼は、なぜ、午前三時なんかに、アラームが鳴るように、セットしておいたのだろうか？）

第五章　警告（アラーム）

1

「カメさん。ちょっと来てくれ」
と、十津川が、呼んだ。
部下の亀井刑事が席に立って行くと、
「まだ新聞には出ていないんだが、青森県警で扱っている強盗殺人事件で、妙なことがある。被害者が身につけていた腕時計のアラームが、午前三時に鳴るようにセットされていたというんだよ」
と、十津川は、メモを見ながらいった。
「午前三時にですか」
「そうなんだ」
「被害者というのは、どんな人間なんですか？」
「青森県警からの連絡によると、殺されたのは、藤代友彦、三十歳。東京に本社のある太陽製

薬の社員だ。二十八日の『はつかり11号』で、上野から青森へやって来たが、青森駅のトイレで、犯人にくびを絞められて殺され、金を奪われたらしい。その男のデジタル時計のアラームが、午前三時にセットされていたというんだ」

「はつかり11号ですか」

「残念ながら、夜行列車じゃないんだ。時刻表によると、はつかり11号は、一五時三〇分に上野を出て、〇時一三分に青森に着く」

「午前三時には、関係ありませんね」

「はつかり11号に関する限り、関係ないよ。午前三時には、車庫に入ってしまっている。だが、腕時計のアラームが、午前三時にセットされていたというのが、どうしても、気になるんだがねえ」

「その藤代という男の乗った列車が、『はくつる』や、『ゆうづる』という青森行の夜行列車だったなら、今度の事件との関係が注目されるところですが」

「ああ。わかってるよ。だが、私は、やはり、気になるね。普通のサラリーマンが、午前三時という時刻に、アラームをセットするとは思えないからね」

「そうですね。夜勤のときぐらいでしょう。それに、朝早く、旅行に出かけるときに、アラームを仕掛けますが、それにしても、午前三時というのは、早過ぎますね」

「何でもないのかもしれないが、この藤代という男のことを調べてみたいと思うんだ。カメさんは、新宿の太陽製薬へ行って、調べてみてくれないか」

「行って来ます」

亀井は、警視庁を出ると、地下鉄で、新宿に向かった。

地下鉄の中で、座席に腰を下ろすと、亀井は、手帳を広げた。カード型のカレンダーがはさんである。

今日は、三月三十一日である。当然、明日から四月に入る。

〈四月吉日〉

という言葉を、亀井は、かみしめた。

暦の上では、四月一日（仏滅）二日（大安）三日（赤口）四日（先勝）と続く。

挑戦状の主が、何を基にして、四月吉日と書いたかわからないが、単純に、暦の上の「大安」などをいうとすれば、四月二日が、四月吉日になる。

もし、手紙の主が、四月二日に、夜行列車を爆破しようと考えているのだとしたら、亀井たちに与えられた時間は、今日を含めて、二日間しかないのである。

今、三月三十一日の午前一一時を少し回ったところだ。四月二日午前三時に、爆破が起きるのだとしたら、残された時間は、あと四〇時間だけしかない。

挑戦状の主、犯人が、どこの誰なのか？

どの線区の夜行列車を爆破しようというのか？　列車全体なのか一部なのか？

何のために、いつやる気なのか？

今日になっても、そのどれも解答が見つかっていないのである。

青森で死んだという男のことにしても、こちらの事件と関係があるという証拠はどこにもない。ただ単に、腕時計のアラームが、午前三時にセットされているということだけである。

太陽製薬の本社は、新宿西口のSビル内にあった。その三十五階から三十七階までを使っていた。

問題の藤代友彦は、業務部第一課で、係長心得の地位にいた。

業務部第一課というのは、全国の病院に対する医薬品の売り込みが仕事だった。

係長の宮下は、すでに、青森県警からの報告で、藤代の死を知っていた。

「とにかく、あの藤代君がと驚いているところです」

と、小柄な宮下は、亀井に向かっていった。

「藤代さんというのは、どんな人だったんですか？」

「誰にでも好かれる青年でしたよ。好青年というんでしょうね。話していると楽しくなるような男です。旅行が趣味だといっていましたね。今度も、その趣味の旅行に行って、奇禍にあったんでしょう。さっき、向こうの警察に問い合わせたところ、物盗りに襲われたんだということでした。どうも、物騒な世の中になりましたね」

「旅行が趣味ですか」

「前に話を聞いたことがあるんです。なんでも、国鉄全線を全部乗るのが夢だといっていましたね」

「国鉄全線二万キロですか？」

「そうです。二万キロチャレンジといっていましたよ。東北本線で青森へ行ったのも、その二万キロの一部だったんじゃありませんか。楽しい趣味だねと、私は、藤代君にいったんですが、それが、命とりになるなんて、わからんもんですね」

係長の宮下は、小さな溜息をついた。

「最近この会社で、徹夜勤務というのがありましたか？　忙しくて、藤代さんが、徹夜の仕事をしたというようなことが」

「新薬が開発されたときは、当然、忙しくなります。しかし、徹夜の仕事というのは、最近はありませんね。うちは、週休二日制で土曜日が休みですが、土曜日に出れば、徹夜はしなくてもすみますから」

と、笑ってから、宮下は、藤代と大学の同期生で、一緒に太陽製薬に入った、佐々木という青年を紹介してくれた。

「この佐々木君に聞かれたら、藤代君のことは、よくわかると思います」

と、宮下はいった。

2

丁度、昼になったので、亀井は、佐々木とビルの二階にあるレストランに行き、食事をしながら、話を聞くことにした。

「この店のカツカレーは、安くてうまいですよ」

と、佐々木は、明るい声でいい、さっさと、亀井の分まで注文した。

友だちが亡くなったのに、少し、明る過ぎるといえばいえるかもしれないし、あるいは、これが、自然なのかもしれなかった。

大皿に盛られたカツカレーが運ばれてくると、佐々木は、旺盛な食欲を見せて、平らげながら、

「藤代君は、いい奴でしたよ。僕みたいに、いいかげんな男と違って」

「国鉄の全線に乗るのが趣味だったと聞きましたが」

「彼の趣味は、旅行でしたからね。この間、聞いたところでは、国鉄全線二万キロのうち、もう三千キロは、乗ったといっていましたよ。僕には、ああいう趣味がないんで、それが、どんなに大変なことか、全くわかりませんがね」

佐々木は、微笑した。

この男は、多分、両親が死んだときでも、会社は休まず、食欲も旺盛で、他人には笑顔で接するだろう。

亀井は、別に、嫌な感じではなかった。悲しげなポーズをとられるよりは、ずっといい。

「藤代さんは結婚はしていなかったんですか？」

「僕と一緒で、チョンガーでしたよ。でも、会計課の氷室悠子という女の子と結婚する気だったんじゃないかな。さっき、係長が、青森の警察に電話したら、彼女が行っているということでしたから」

「最近、藤代さんと一緒に、徹夜の仕事をしたことはありませんか？」
「徹夜の仕事というのはありませんね。ただ、今年の正月に、徹夜マージャンをやりましたよ。五人打ちで」
「そのとき、藤代さんの腕時計のアラームが、午前三時に鳴りませんでしたか？」
「午前三時にですか？」
と、佐々木は、きき返してから、なぜか、ニヤッと笑って、
「あの腕時計は、去年のクリスマスに、彼女からプレゼントされたんだと、彼は、喜んでいたんです。アラーム機構つきのデジタルでね。午前三時には鳴りませんでしたが、徹夜マージャンが、朝になったとき、突然、鳴り出して、びっくりしましたよ」
「朝ですか？」
「午前七時です。七時に起きると、会社に楽に間に合うんで、毎日、午前七時に鳴るようにセットしてあるんだと、彼はいっていましたよ。午前三時というのは、いったい何ですか？」
「死んだ藤代さんの腕時計が、午前三時にアラームがセットされていたというのですよ」
「そいつはおかしいなあ」
と、佐々木は、眉をひそめて、
「午前三時になんかセットしたって、何の役にも立たないでしょう？　夜の仕事をしているわけじゃないんだから」
「今年の正月に、徹夜マージャンをやったときには、午前三時じゃなく、午前七時に、セット

してあったんですね？」
「そうですよ。この間、例のアラームはどうなってるんだときいたら、ずっと、午前七時にセットしてあると、彼はいっていましたよ」
「それは、いつのことですか？」
「いつだったかな。三月の十日ごろだったことは確かですが」
「藤代さんの性格は、どんなでしたか？」
「あまり出世しなくてもいいから、楽しくやって行こうという主義でしたよ。僕は、出世できるならしたほうがいいという考えですがね」
「好奇心は、旺盛なほうですか？」
「国鉄全線二万キロの完乗を目ざすくらいですから、好奇心は旺盛なほうでしょうね。愛読書は、時刻表というんだから、かないませんよ」
「生真面目でしたか？」
「どっちかといえば、真面目なほうでしょうが、エリートコースにまっしぐらとは違いましたよ。結構、いたずらっ気もあって、人をかついだりしましたからね。彼と一緒にいると楽しかったですね」
「どうもありがとう」
「どう致しまして。食事は、僕のツケにしておきましょうか？　ここは、ツケがきくんです」
「いや、私の分は払いますよ」

「それなら、七百円です。どうです？　おいしかったでしょう？」
佐々木は、最後に、また微笑した。

3

「三月十日ごろまで、アラームが午前七時にセットしてあったというのは、面白いね」
十津川は、亀井の報告を聞いてから、自分の感想をいった。
「国鉄側の動きはどうですか？」
「北野さんが、リストを作って来てくれたよ。最近一年間に、国鉄を解雇された職員のリストと、同じく、ここ一年間に、夜行列車がらみで起きた事故のリストだ」
「これはというのがありましたか？」
「事故のほうは、黒板に書いておいたよ。前に聞いたとおり、踏切事故が三件だけだ。いずれも、自動車のほうに非があるが、死んだ人の家族や、負傷した人間は、国鉄を恨んでいるかもしれんのでね。その後どうなっているか、各県警に調査を依頼しておいたよ」
「解雇者は、何人でした？」
「五人だ。うち四人が、東京の人間だということで、小川君たちに、調べに行ってもらったよ」
「もう一人は、東京以外ですか」
「名古屋の人間だ。これは愛知県警に調査を依頼した」

と、十津川は、いってから、
「私は、青森へ行ってくる」
「青森へですか？」
「君の報告を聞いて、ますます、藤代という男のことが気になって来たんでね」
「しかし、どう考えても、犯罪に関係するような人間じゃないみたいですが」
亀井は、彼の上司や、同僚に聞いた話を口にした。
「だが、腕時計のアラームが、午前三時にセットしてあったというのは、気になるよ」
といってから、十津川は、自分の腕時計に眼をやった。
「今から行けば、藤代友彦が乗った『はつかり11号』に間に合うな」
「私は、どうしますか？」
「君は、ここにいて、情報の収集に当たってくれ。三件の事故については、特に、兵庫県警からの報告に注意してくれないか」
「兵庫県警というと、去年五月十二日のブルートレイン『富士』が関係した踏切事故ですね」
「そうだ」
「しかし、なぜ、この事故だけ重視するんですか？　八月七日の事故も、死亡者が出ていますが」
「今日の北野さんの話によると、この事故で死んだ人間は、病院に運ばれてから死んだんだそうだ」

「それが、重要なんですか？」
「死んだ時刻がね」
「午前三時――ですか？」
「そうなんだよ。午前二時一八分に事故が起きて、死んだのが、午前三時だ。ただ、それだけのことかもしれないが、死んだ人間の家族が、ひょっとすると、その時刻を重く考えているかもしれないのでね」
「わかりました」
「じゃあ、私は、行ってくる」

4

「はつかり11号」は、平均時速八十四キロで、十津川を、青森まで運んでくれた。
上野から八時間四十三分。腰が痛くなったころ、列車は、深夜の青森駅に着いた。
四月一日の午前零時一三分。青森駅のホームは、まだ、底冷えがしていた。ウイークデイのせいか、乗客は少なく、終着青森駅まで乗って来たのは、さらに少なかった。
そのまばらな乗客に混じって、改札口を出ると、青森県警の三浦刑事が、コートの襟を立てて、彼を待っていた。
前の事件で、共同捜査をした仲である。
「やあ」

と、十津川のほうから声をかけると、三十二歳の三浦刑事は、ニッコリして、
「江島警部も、お待ちかねです」
「江島さんは、少しはやせたかね？」
十津川は、でっぷりと太った江島警部の身体つきを思い出しながら、三浦にきいた。
三浦は、十津川を車に案内しながら、
「自分では、ジョギングで身体がしまったといっていますが、どう見ても、前と同じです。ああ、氷室悠子さんには、あと一日、ここにいてもらうことにしました」
「ありがとう」
「こちらの事件が、十津川さんの興味を引いた理由は、何なんですか？」
「それは、県警本部へ行ってから話すよ」
と、十津川は、いった。
見覚えのある県警本部の建物に入ると、「青森駅構内殺人事件捜査本部」の貼り紙が、十津川を迎えた。
「やあ、いらっしゃい」
と、江島警部が、声をかけてきた。
相変わらず、悠然としている。太った、大きな身体の上に、意外に可愛らしい童顔がのっかっている。
十津川は、国鉄の事件を、江島に話した。

「まだ、極秘に捜査をしている事件なので、その点、含んでおいてください」
「わかりました。それで、午前三時ということで、藤代友彦に結びつくわけですね？」
「そうです。問題のデジタル時計は、ここに、ありますか？」
「氷室悠子から、返してもらってあります」
江島が、合図をすると、三浦が、キャビネットから、藤代の所持品を取り出してくれた。
S社製のデジタル腕時計を、十津川は、手に取ってみた。
時刻は、正確に表示されている。アラームのボタンを押すと、「AM3：00」の表示が出た。アラームの時刻は、一つしかセットできない時計だった。
しかし、「はつかり11号」は、夜行列車ではない。
「はつかり11号に乗って来たというのは、間違いないんですか？　夜行列車のゆうづるか、はくつるで、青森へ来たんじゃないんですか？」
十津川がきくと、江島は、首を横に振って、
「違いますね。被害者のカメラに入っていた撮影済みのフィルムが、はつかり11号で来たことを証明しています」
といい、その写真を、机の上に並べた。
「よく見てください。藤代は途中で、郡山駅のホームにおりて、写真を撮っています。ここが肝心です。夜行列車のゆうづるは、常磐線回りなので、郡山は通りません。はくつるは、郡山を通りますが、運転停車で、乗客の乗り降りはできないんです。はつかりなら、ここに、二分

停車しますから、ホームにおりて、写真が撮れます。さらに、藤代が示している腕時計から、これが、はつかり11号と推定できるわけです」

「なるほど。藤代は、上野でも、郡山でも、柱の傍で自分を写していますね」

「その件で、氷室悠子に聞いたところ、藤代は、国鉄の二万キロチャレンジを考えて、列車に乗るときは、乗ったという証拠に、駅名を表示した場所で、写真を撮ることにしていたというのです。ですから、郡山でも、『こおりやま』という駅名の書かれた柱のところで写真を撮ったんだと思いますね」

「昨日の電話で、ちょっと気になることを伺ったような気がするんですが」

と、十津川がいうと、江島は、一瞬、「え?」という表情を作ったが、すぐ、「ああ」と、肯いて、

「氷室悠子が、藤代友彦は山陰に行ったと思っていたといっていることでしょう?」

「そうです。その点を、くわしく話してくれませんか」

「しかし、藤代友彦が、三月二十八日のはつかり11号に乗って、青森へ来たことは間違いないんですよ」

江島は、頑固にいった。

「藤代の死体は、山陰ではなくて、青森駅のトイレの近くで見つかったんだからね。この事実は、どうしようもありませんよ」

とも、江島はいった。

殺人事件が起き、捜査本部を設けて、その捜査に当たっている捜査官にしてみたら、信頼の置けない話に耳を貸す気はしないのも、無理はなかった。それは、捜査の邪魔になるばかりだからだ。

「よくわかります」と十津川は、相手に逆らわずにいった。

「ただ、私は、夜行列車の爆破予告の捜査をしているので、出雲1号という夜行列車のことが、気になっただけなのです」

「そうでしたね」

と江島も、表情を和げた。

「氷室悠子は、ホテル・アオモリにいますから、直接お聞きになってください」

「ホテル・アオモリですか」

「三浦君に呼んで来させますよ」

と、江島は、いった。

5

氷室悠子は、赤く充血した眼で、十津川の前に現われた。

三浦がいれたコーヒーには、口をつけようとはせず、いらいらした調子で、

「私に、何をおききになりたいんです？」

と、十津川を見つめた。

「藤代さんは、本当は、山陰へ旅行するはずだったそうですね？」
「そのことですの」
「違うんですか？」
「警察は、私の話を信じてくれませんもの。東京駅で、出雲1号に乗ったのが事実としても、途中でおりて、上野に戻り、青森に向かったに違いないというんです」
「東京駅で、出雲1号に藤代さんが乗ったのは、いつですか？」
「私の話を信じてくださるの？」
「それは、聞いてからです。だから、くわしく話してください」
「三月二十六日の午後六時一五分発の出雲1号に乗ったんです。私が、東京駅まで送って行って、ホームで、写真を撮ったんだから、間違いありませんわ」
「そのフィルムは？」
「なかったんです。なくなってたんです」
「カメラが二台ありましたが、藤代さんは、旅行するとき、いつもカメラを二台持っていくんですか？」
「ええ」
「でも、同じ一眼レフですね」
「片方には、望遠レンズをつけて持っていくんです。二百ミリの」
「しかし、警察にあったのは、二台とも、五十ミリの標準レンズがついていましたがね」

「私も、それで、おかしいなと思っているんですけど」
「藤代さんは、出雲1号で、どこまで行くことになってたんですか？」
「出雲市ですわ。二十七日の朝八時一六分に着くはずなんです」
「藤代さんは、あなたのいうとおり、出雲1号で、出雲市まで行ったのかもしれない。ただ、そこから、東京に引きかえし、二十八日午後三時三〇分上野発の青森行はつかり11号に乗ったんじゃないかな」
「そうは思えないんです」
「なぜです？」
「彼は、出雲市に着いたら、出雲市から出雲大社のある大社駅まで七キロちょっとの距離を走っている大社線に乗るのを楽しみにしていたんです。国鉄の二万キロにチャレンジするのに、そうしたローカル線も、すべて乗らなければなりませんものね。そのあと、松江、鳥取と回って、鳥取では、砂丘の写真を撮ってくるといっていたんです」
「しかし、藤代さんは、それをやめて、東京に戻り、上野から、青森へ向かった――」
「私には、どうしても、それが納得できないんです」
悠子は、じっと、唇をかみしめた。
「なぜですか？　あなたに約束したからですか？」
「ただの約束とは違うからですわ」
「というと？」

「彼は、東京駅のホームで私にプロポーズしたんです」
「ほう」
「そして、ハネムーンには、山陰に行こうと。山陰のどこが好きかときくので、鳥取の砂丘が見たいといったんです。そうしたら、彼が、それなら、砂丘の写真を沢山撮って来てあげるといってくれたんですわ。ただの約束とは違うんです。それなのに、私に黙って、東京に舞い戻って、上野から青森へ行ったなんて、どうしても、信じられないんです」
悠子の口調は、真剣だった。
十津川の胸にも、彼女の真剣さが、はっきりと伝わってくる。
だが藤代が、青森駅で死んでいたという事実は、どうなるのだろうか？
「あなたは、藤代さんが、鳥取の砂丘に行って、写真を撮ったと思うんですか？」
十津川が、まっすぐに見つめてきくと、悠子は、一瞬、迷いの表情を見せたが、すぐ、その迷いを拭き払うように、首を強く左右に振って、
「私のために、砂丘の写真を撮ってくると約束してくれたんです。きっと、鳥取の砂丘に行ったに違いありませんわ」
「それなら、なぜ、砂丘を写したフィルムがなかったんでしょうかね。もし、写したのなら、カメラの中に入っているか、バッグの中に、入っているはずでしょう？」
「それは、わかりません。でも、私は、彼が私との約束を守ってくれたと信じているんです」
「そう信じたいだけじゃないんですか？」

「そうかもしれませんけど――」
と、いってから、悠子は、腕時計に眼をやって、
「もうご質問がなければ、私は、夜が明け次第、青森を発ちたいんです」
「しかし、藤代さんの遺体が荼毘にふされるのは、今日の午後だと聞きましたが」
「ええ。彼のご両親が来ていますから。遺骨を東京に運ぶのは、ご両親に頼むつもりです」
「それで、あなたは、どこへ行かれるんですか？」
「鳥取へ行ってみます。出雲市にも、松江にもですわ。藤代さんが、私との約束を守って、鳥取の砂丘へ行ったかどうか確かめたいんです」
「彼の遺骨を、東京へ持ち帰るよりも大事なことですか？」
「ええ。彼が私を本当に愛してくれていたことを確認してから、遺骨を抱きたいんです」
「あなたは、意外に気性が激しいんだな」
「ええ。私は、妥協のできない性格なんですわ」
と、悠子は、いった。
それまで、二人の話を横で聞いていた江島が、
「藤代さんは、駅弁をお好きでしたか？」
と、悠子にきいた。
「ええ、好きでしたけど」
「駅弁の包装紙の収集はどうですか？」

「記念に、アルバムに貼っていましたけど、それが、どうかしまして？」
「お見せするのを忘れていたんですが、藤代さんのポケットの中に、きれいに折ったこんな駅弁の包装紙が二枚入っていました。これです」
江島は、広げた駅弁の包み紙を二枚、悠子の前に置いた。
〈盛岡駅＝南部牛めし〉
〈仙台駅＝押しずしさんさ時雨（しぐれ）〉
「恐らく、盛岡と仙台に停車したとき買われたんでしょう。ちゃんと、三月二十八日の日付が入っています。藤代さんが殺されたこととは関係がないと思うので、お渡ししますよ」
「ありがとうございます」
と、悠子はいった。
十津川は、時計を見た。
すでに、午前三時に近い。
「どうやって、鳥取へ行くんですか？」と十津川は、悠子にきいた。
「ここからは、遠いですよ」
「飛行機を乗り継いで行くつもりですわ。そうすれば、今日中に、鳥取の砂丘に着けると思うんです」
「私も一緒に行こう」
と、十津川がいった。

6

悠子を、ホテルに送り返したあと、十津川は、東京の警視庁に電話を入れた。
電話口に出た亀井に、「こんな時間に悪いんだが」というと、
「今日は四月一日です。それを考えると、眠れやしません」
という声が、はね返ってきた。
「そうだったな。何かわかったかい？」
「結論を先に申しあげますと、今のところ、全く進展はありません。国鉄を解雇された五人ですが、うちで調べた四人は、まずシロですね。二人は、家業をついでうまくやっていますし、一人は、叔父を頼って、ブラジルへ行きました。四人目は先月、病死しています」
「名古屋の一人は？」
「愛知県警から、まだ報告が来ていません」
「踏切事故のほうはどうだね？　特に、『富士』の事故だが」
「兵庫県警から報告がありました。踏切事故で死亡したのは、車を運転していた橋本一郎という三十五歳のサラリーマンです。同乗していた妻の美代子は、重傷を負って入院しました。快方に向かっていますが、まだ入院中だということで、彼女が犯人とは考えられません。橋本一郎には、両親と兄が一人いますが、県警で調べたところでは、不審な動きは、全くないということです。引き続いて、調べてもらうことにしましたが」

「他の二件はどうだね？」
「それぞれ、県警から報告が入りましたが、今のところ、踏切事故で死亡したり、負傷したりした者、関係者に、不審な動きは見られないということです」
「そうか。何も出て来ないか」
「国鉄では、今日の夜行列車から、出発前の車両の点検を強化するそうです。座席の下や、トイレなどに、時限爆弾が仕掛けられていないかを点検するというわけですが」
「乗客が持ち込んで、バッグの中にでも入れていたら、発見は難しいな。飛行機と違って、乗客の荷物を点検するわけにはいかないからね」
「国鉄側も、そこが泣きどころだといっていました。といって、いつ、どの列車が狙われるかもわからないのに、すべての夜行列車を、止めるわけにはいかないでしょうし」
「そうだな」
「青森はいかがですか？　こちらの事件に関係がありそうですか？」
「殺された男の腕時計が、なぜ、午前三時にアラームがセットされているのか、まだわからないんだ」
「東京へお帰りになりますか？」
「今日中に、鳥取へ行くつもりだよ」
「鳥取ですか？」
「藤代友彦という男の死が、国鉄の事件と関係があるかどうか確認したいんだ」

「鳥取へ行けばわかるわけですか？」
「多分ね」
と、十津川は、いった。
関係ありとなっても、どう関係しているかまでわかるとは思えなかったが。
（果たして、間に合うのだろうか？）

第六章　砂丘の影

1

青森から東京羽田。羽田から鳥取へと、小さなＹＳ11を乗り継いで、十津川は氷室悠子と、山陰へ向かった。

羽田から鳥取へは、午前と午後の二便がある。

二人は、午後の便に乗ることになった。

ＹＳ11の六十四の座席は、ほとんど満席だった。

一四時〇〇分に羽田を発って、鳥取へ着くのは、二時間後の一六時〇〇分である。

「少し眠りなさい」

と、十津川は、悠子にいった。今朝まで、一睡もしていない顔をしていたからだった。

「私も、少し眠りたい」

十津川も、眼を閉じた。

だが、眠れなかった。四月一日という意識が、頭を離れないからだろう。

西鹿児島発、東京行のブルートレイン「はやぶさ」は、すでに、二時間前の一二時二二分に、西鹿児島を発車しているのだ。

悠子も、眠れないらしく、じっと、窓の外を見つめている。

「眠れませんか？」

「ええ」

「じゃあ、一つ二つ、質問させてください。午前三時に、彼の腕時計のアラームがセットされていた理由は、見当がつきませんか？」

「いろいろと考えたんですが、わからないんです」

「いつもは、午前七時にセットしてあったそうですね？」

「ええ。七時に起きると、丁度、会社に間に合うからといっていました」

「それを、いつ、午前三時に変えたんだろうか？」

「わかりません」

「三月二十六日に、出雲1号に乗ってからじゃありませんか？」

「それも考えてみましたけど」

「違いますか？」

「食堂車で食事をしたら、朝まで、ゆっくり眠るつもりだと、彼はいっていたんです。朝になって、日本海を見るのが楽しみだともですわ。午前三時に眼をさましても、何も見えませんもの。それに、時刻表を見ても、午前三時に停まる駅なんかないんです」

「そうですか。しかし、旅行に行く前に、午前三時にしたとしたら、毎日の通勤に、役に立たないわけだから、すぐ、元の午前七時に、訂正していたんじゃありませんか？」
「ええ。でも、旅行中に午前三時にしたのだとしたら、なぜでしょうか？　その理由が、わからないんです」
「じゃあ、もう一つ質問させてください。藤代さんは、何かのグループに入っていませんでしたか？」
「会社のですか？」
「会社では、どんなグループに入っていたんですか？」
「別に、どんなサークルにも入っていなかったと思いますわ」
「じゃあ、会社以外ではどうですか？」
「鉄道が好きでしたから、そうした愛好家のグループに入っていましたわ」
「そのグループの名前は、わかりませんか？」
「確か東京鉄道同好会というんだったと思います。毎月一回、会合があって、パンフレットを出していたみたいですけど」
「あなたは、その会合に出たことがありますか？」
「一度、一緒に出てみないかと、彼に誘われたことがあったんですが、私は、別に、鉄道ファンじゃないんで、出ませんでしたわ」
「東京鉄道同好会ですか」

「いろいろな人が、入っているみたいですわ。お医者さんもいるし、サラリーマンもいるし、タレントもいると、彼がいっていましたから。それが、彼が殺されたことと、何か関係があると、お考えですの？」

「私にも、わかりませんが――」

十津川が知りたいのは、藤代友彦が殺されたこととの関係ではない。

夜行列車爆破予告との関係を知りたいのだ。もし、無関係ならば、殺人事件は、青森県警に委せておけばいい。

2

鳥取空港には、海風が吹いていた。

日本海に面した可愛らしい空港である。短い滑走路が一本だけの空港に、定刻より五分ほどおくれて、二人を乗せたＹＳ11は、着陸した。

エンジン音から解放された十津川の眼に、青い海の色が、すがすがしかった。

滑走路は、海に向かっているが、他の三方は、低い松林になっている。近くに砂丘が広がっているから、この背の低い松は、防砂林なのだろう。

ちょっとしたコンクリートの二階家ほどしかない空港の建物を抜けると、前の広場が駐車場になっていて、そこに、五、六台のタクシーが待っていた。

鳥取市のはずれにある空港からは、タクシーの便しかないようだった。

十津川たちは、タクシーを拾い、「砂丘にやってくれ」と、運転手にいった。
三十五、六の話好きの運転手で、国道九号線を走らせながら、何かと話しかけてきた。
「今ごろは、新婚さんが、多いですよ。砂丘見物するのは」
「ここから近いのかね」
と、十津川がきいた。
「車で一五分ぐらいですよ」
「国鉄の鳥取駅からは？」
と、悠子が、口をはさんだ。
「丁度、鳥取駅と、空港と、砂丘が、三角形になっていましてね。どこも、一五分ぐらいで行かれますよ」
「砂丘の写真を撮るとしたら、何時ごろが、いいのかしら？」
「そうですね。一番いいのは、風が吹いた翌朝ですよ。風紋が出来てますからね。今ごろは一番よくないね。見物客で、足跡だらけになってますからね」
運転手が笑った。
国道九号線には、「京都まで何キロ」といった表示が、やたらに目につく。それは、この辺りが、京都の文化圏に入っているという証拠だろうか。
国道九号線から分かれて、「砂丘トンネル」と書かれた短いトンネルを抜けると、眼の前に、横に広がる鳥取の砂丘が見えてきた。

何という名前かわからないが、空港の周囲にも見えた背の低い松が、一面に植えられている。砂丘が広がるのを防ぐためなのだろうが、見方によっては、松林が、砂丘を侵食している感じでもある。それほど、鳥取の砂丘は、可愛らしかった。

砂丘見物の起点は、俗っぽいコンクリートの建物に囲まれていた。まるで、どこかの温泉街のように、駐車場のまわりには、レストランや、土産物店が、ひしめき、ゴンドラまで動いている。

タクシーをおりて、砂丘入口と書かれた通路をあがって行った。松林の間の傾斜面で、この上に、果たして砂丘があるのだろうかと不安になってくるような細い道だった。

しかし、松林を抜けると、日本海に向かって広がる砂丘があった。

海に向かって、砂の丘陵が続いているのは、確かに、素晴らしい眺めだった。荒涼とした砂漠とは、全く違う景色である。砂漠の持つ荒々しさや、力強さは、ここにはない。あるのは、全く逆の、センチメンタルな、清純なといってもいい景色だった。新婚さんに人気があるというのも肯ける気がした。

海に向かって、ゆるく砂の斜面が落ち込み、再び、なだらかな上り斜面になっている。西陽の中に、砂丘の稜線が見え、その先が、海だった。

砂だけの景色だと、そこまで、どのくらいの距離があるのか見当がつかなかった。近いような気もするし、遠いようにも見える。五、六人の人影が、その稜線の上で、小さなシルエットを作っていた。

今、十津川たちが立っている辺りには、見物客目当ての箱馬車が、五台ほど、たむろしている。らくだも一頭いて、「このらくだを写真に撮る場合は、撮影料を頂きます」と書いてある。箱馬車のほうは、なぜか、「ひかり号」とか、「こだま号」という名前がついている。

悠子が、箱馬車の駁者(ばしゃ)たちに、藤代の写真を見せて回った。

その中の一人が、写真を何回も見直していたが、

「この人なら、見たよ」

と、いった。

3

「本当？」

悠子が、声をはずませた。

「間違いないよ。この人だ」

「それはいつ？」

「確か、三月二十八日の土曜日だね。朝から天気がよくて、今日は、稼げると張り切っていたんだから間違いないよ」

「二十八日の何時ごろでした？」

「朝早くだったねえ。六時ごろじゃなかったかな。最初、カメラマンだと思った。カメラをぶら下げていたし、朝早く、砂丘を撮りに来るカメラマンがいるからね」

「その人と、何か話しました？」
「うん。向こうに、五、六人、人のいるところが見えるだろう。あそこまで歩いて行くと、何分ぐらいかかるかって、おれにきいたんだ。なんでも、何時かの列車に間に合うように、鳥取駅まで行かなきゃならないんだといってたね」
「それで、向こうまで歩いて行ったんですか？」
「おれが、五、六分だよって、いったら、歩いて行ったよ」
「やっぱり、彼は、砂丘の写真を撮りに来たんだわ」
悠子が、大きな眼を、砂丘に向けて呟いた。
十津川は、冷静に、
「そのとき、彼は、ひとりだったかね？」
と、駅者にきいた。
「そうねえ。傍に、もう一人いたよ」
「え？」
と、悠子が、驚いた表情になった。
「どんな人間だったね？」
十津川は、落ち着いてきいた。
「さてね。サングラスをかけた男だったのは覚えてるけどねえ。おれも、馬車に磨きをかけてたから」

「その男も、一緒に、向こうまで歩いて行ったのかね？」
「いや。行ったのは、その写真の人だけだよ」
「二人は、親しそうだったかね？」
「さあ、わからないねえ。別に二人を気にしてたわけじゃないしね」
「二人が、無関係で、偶然、一緒にいたということは、考えられません？」
と、悠子がきいた。
「さあね。そうかもしれないが、他に、見物客はいなかったしねえ」
駅者の言葉は、あいまいだった。
悠子は、礼をいい、海に向かって、砂の斜面をおり始めた。
十津川も、後に続いた。
砂は、意外にかたく、靴がめり込むことも少なかった。といっても、歩きにくいことに変わりはない。それに、海から吹いてくる風が強かった。
「やっぱり、彼は、私との約束を守って、砂丘の写真を撮りに来てたんだわ」
悠子は、感動したように、声をつまらせた。
「そうですね」
と、十津川は、肯いた。
藤代が、この砂丘に来たということは、悠子のいったように、三月二十六日の夕方、東京駅から、夜行列車「出雲1号」に乗ったということである。

出雲1号は、二十七日の午前八時一六分に、出雲市に着いたはずである。
出雲大社に参拝し、大社線に乗ったあと、出雲市内に一泊したのでは、二十八日の早朝、六時という時刻に、鳥取砂丘には来られない。出雲市と鳥取との間は、一五〇キロとあり、急行列車で三時間近くかかるからである。第一、鳥取に午前六時に着くような列車はない。
恐らく、藤代は、二十七日の午前八時一六分に出雲市に着いたあと、その日のうちに、見物をすませ、山陰線で鳥取に行き、鳥取市内で一泊したに違いない。
(問題は、藤代が、夜行列車『出雲1号』に乗ったことと、その藤代が、自分の腕時計のアラームを、午前三時にセットしたことだ)
十津川は、砂の斜面をゆっくりおりながら、確認するように、自分にいい聞かせた。
なぜ、藤代は、そんなことをしたのだろうか?
アラームがセットされた午前三時と、国鉄に対する爆破予告にあった午前三時とは、関係あるのだろうか?
関係があるとすれば、狙われる夜行列車は、「出雲1号」なのか?
斜面をおり終わったところに、火口のような円型の窪みがあり、そこに、雨水が溜まって、西陽をキラキラ反射させていた。
今度は、急な登りの斜面である。一歩ごとに、砂がくずれて、靴に入ってくる。歩きにくいので、自然に、十津川は、「よいしょ」と、声をあげていた。
やっと、頂上に登ると、真っ青な波が、眼下に広がった。

強い風が吹きあげて来て、足元から、砂が煙のように舞いあがって行く。
海に向かっては、ゆるい砂の斜面が広がっていると思っていたのだが、意外に、切り立った断崖のように、十二、三メートルの高さで、海に落ち込んでいる。
狭い砂浜があるのだが、落ちたら、這いあがれないだろうと、十津川は思った。
立って、じっと見下ろしていると、海に落ち込んでいくような錯覚に落ちていく。
「素敵な景色！」
と、悠子は、嘆声をあげた。
「彼は、ここまで歩いて来て、写真を撮ったに違いないわ」
「しかし、そのフィルムは、どこにもなかったと、青森県警ではいっていましたよ」
「誰かが盗んだんですわ。他に考えられません」
「誰が、何のために、そんなことをしたんです？」
「それは、わかりませんけど――」
「藤代さんを殺した犯人が、フィルムを盗んだのかな」
「え？」
「犯人が、もし、出雲1号のことを隠そうとして、フィルムを盗んだのだとしたら――」
十津川は、小さく呟いた。
悠子は、不審げに、十津川を見ている。
「帰りましょうか」

と、十津川は、しばらくして、悠子にいった。

4

駐車場には、二人を運んでくれたタクシーが、待っていた。
「砂丘はどうでした？」
と、運転手は、ニコニコ笑いながら、声をかけた。
「砂丘より、海が素晴らしかったわ」
と、悠子がいった。
「これから、どこへ行きますか？」
「鳥取駅へやってくれないか」
と、十津川は、いってから、
「タクシーは、何台ぐらいあるのかね？」
「四百台ぐらいと違いますか」
「三月二十八日の土曜日なんだがね。朝六時ごろ、男二人を、砂丘から鳥取駅まで運んだタクシーの運転手を見つけてもらいたいんだよ」
「旦那さんは、警察の方ですか？」
「ああ、ちょっと、事件を調べているんでね」
十津川は、相手を信用させるように、警察手帳を見せた。

「うちの会社に問い合わせてみましょう」
と、運転手はいった。
鳥取駅に着くと、運転手は、駅の中の喫茶店で待っていてくださいといった。
国鉄の駅には、その地方地方の特徴を出した珍しい建物と、いわゆるステーションビルと呼ばれる味もそっけもない四角い建物とがある。
山陰でいえば、大社駅は、出雲大社に似せて造られた特徴のある駅である。
鳥取駅のほうは、真新しい、典型的なステーションビルだった。まるで、細長い角材を横にしたような駅である。
構内に入ると、食堂街や、名店街が並んでいる。
十津川たちは、「砂丘」という名の喫茶店に入って、さっきの運転手の返事を待つことにした。
砂丘を売り物にしている街らしく、この喫茶店以外にも、砂丘まんじゅうを売っていたり、割烹「砂丘」の看板が出ていたりする。
四〇分ほどして、さっきの運転手が、小柄な中年の男を連れて入って来た。
「彼が二十八日の朝、男のお客を、砂丘からここまで運んだそうです」
と、運転手がいった。
十津川は、礼をいい、連れの男に、椅子をすすめ、コーヒーを注文した。
「二十八日の朝というのは、確かですか？」

「ええ。実は、あの日、朝早く、白砂荘という旅館から電話で呼ばれましてね。お客さんを、砂丘まで案内してほしいというんです。まだ、六時でした」

と、相手はいった。

「お客は、男二人でしたか？」

「ええ」

「二人は、親しそうでしたか？」

「そうですねえ。何か小声で話をしていましたが――」

「白砂荘という旅館から、砂丘へ向かったんですね？」

「そうです。駐車場へ着いたら、すぐ、鳥取駅へ行ってもらうから、待っていてくれといわれましてね。一二、三分待っていましたかね。それからそのお客さんを乗せて駅へ行ったんです」

「どの列車に乗るんだというようなことは、いっていませんでしたか？」

「さあ、とにかく、早く駅へ行ってくれとおっしゃってましたが。駅に着いたのは、六時二〇分ごろじゃなかったかな」

「一人は、この人でしたか？」

と、悠子が、藤代の写真を見せた。

「ええ。この人です。間違いありません」

「もう一人は、サングラスをかけていた？」

と、十津川は、きいた。

「そうです。色のうすいサングラスをかけていらっしゃいましたよ。年齢は、三十歳前後でしたかね」
「背の高さは？」
「二人とも同じくらいでしたよ」
「というと――」
「藤代さんは、一七三センチでした」
と、悠子がいった。
「その白砂荘という旅館に案内してくれませんか」
十津川がいうと、小柄な運転手は、笑って、
「車より、歩いたほうが早いですよ。駅前の通りを、百メートルばかり行くと、右側にありますから」

5

鳥取駅前から北に伸びる商店街を歩いて行くと、すぐ白砂荘という日本旅館が見つかった。
人口十二万といわれるこの街が、県庁の所在地なのに、何となく活気がないのは、隣りの米子のような商業都市ではないからだろう。
丁度、その旅館に灯がともった時間になっていた。
十津川が、いきなり、帳場にいた男に、警察手帳を見せたのは、心が急いたからだった。

午後六時を過ぎ、夜行列車が、続々と、ターミナルを出発する時刻になっていたからである。

警察手帳の威力か、相手は、こちらの質問に、すらすら答え、宿帳も見せてくれた。

三月二十七日のところに、

〈藤代友彦　東京都豊島区東池袋××番地〉

の署名があった。

「彼の字だわ」

と、悠子が、小さく呟いた。

「この人と一緒に泊まった男がいるはずなんだがね。薄いサングラスをかけた三十歳ぐらいの男だ」

十津川がきくと、帳場の男は、

「その方なら、藤代さまの下にお名前が書いてあります」

と、いった。

〈小野寺哲也　東京都世田谷区世田谷二丁目××番地〉

ちょっと右上がりの字で、そう書いてあった。

十津川は、頭の中で、国鉄に送りつけてきた爆破予告の文字と比べていた。似ているようでもあり、違うようでもある。

「二人は、一緒の部屋に泊まったのかね？」

「金曜日で混んでいたので、菊の間に一緒に泊まって頂きました。最初は、別の部屋をとのご

希望だったんですが」
「二人の様子は、どうだったかね？　親しそうに見えたかね？」
「普通のお友だちのように見えましたが」
「二十七日は、何時ごろに、ここに着いたのかな？」
「ええと、ずい分おそくお着きでした。夜の九時半近かったと覚えていますよ」
「翌日の朝早く、出発したんだったね？」
「はい。六時前に、タクシーをお呼びしました」
「それは、前の日、寝る前に、明日早く、タクシーを呼んでくれと、いっていたのかね？」
「そうじゃありません。二十八日の朝の五時半ごろ、帳場に電話がありましてね。今すぐ、砂丘を見に行きたいので、車を呼んでくれないかといわれたんです」
「じゃあ、朝食は？」
「召しあがらずに発たれましたよ。うちでは、七時から九時までの間に、朝食ということになっていますから」
「この二人のことで、何か覚えていることはないかね？　どんなことでもいいんだが」
「そうですねえ。ああ、係の女性が、こんなことをいっていましたよ。夜中に、菊の間の横を通ったら、突然、じいーっと、ベルの鳴る音が聞こえたんだそうです。それで、あわてて、菊の間の襖を開けて、どうなさったんですかと、きいたんだそうです」
「そうしたら？」

「片方の方が、枕元の明かりをつけてから、目覚ましが鳴ったんだよと、笑ったといっていました」
「それは、何時ごろ？」
「午前三時ごろだったといっていましたね。こんな時間に、目覚ましが鳴るなんておかしいと、係の女性は、首をかしげていましたね」
二十八日の午前三時に、アラームが鳴ったということは、二十七日に、すでに、セットしてあったということである。
「ちょっと、電話を使いたいんだが」
と、十津川はいい、帳場の電話で、東京の亀井刑事に連絡をとった。
「まだ、何も起きないかね？」
十津川が、きくと、亀井は、
「今のところ、静かです。だが、あと、八時間で、四月二日の午前三時になります。四月二日は、暦によると、大安です」
「四月吉日か」
「そうです」
「至急、調べてもらいたい人間がいるんだ。東京都世田谷区世田谷二丁目××番地の小野寺哲也だ。この住所も名前も、あるいは、でたらめかもしれんがね」
「ホシですか？」

「まだ、何ともいえん。それに、狙われる夜行列車は、『出雲1号』の可能性がある。それも、頭に入れておいてくれ」
「出雲1号なら、今から四五分前に、東京駅を発車しています」
「頼むよ」
と、電話を切ってから、
「その宿帳の小野寺哲也の名前の書いてあるページだが、そこだけ、貸してもらえないかね？」
と、帳場の男にきいた。
「それなら、隣りの文房具店で、コピーをとって来ましょう」
と、相手はいった。

6

十津川は、鳥取駅へ、悠子を送って行った。
一番早く、東京へ行く列車は、一九時五〇分に鳥取を出る「出雲4号」だった。この夜行列車に乗れば、翌朝の七時に、東京に着く。
しかし、爆破予告は、夜行列車とあるだけで、上り、下りの区別は、示されていない。だから、東京行の出雲4号も、狙われる可能性があった。
十津川は、鳥取で一泊してから帰京してはと、悠子にすすめたが、彼女は、出雲4号で帰る

といって、きかなかった。それを止める権利は、十津川にはない。それに、爆破予告の話を、悠子にするわけにもいかないのである。

悠子が、東京までの寝台券を買うのを、十津川は、見守っているより仕方がなかった。

「まだ、四五分あるんです」

悠子が、戻って来て、十津川にいった。

「じゃあ、さっきの喫茶店で、お茶でも飲みませんか。あなたと検討したいことがあるんですよ」

「何ですの？」

「これです」

と、十津川は、売店で買った時刻表を、悠子に見せた。

駅構内にある喫茶店「砂丘」に入ると、コーヒーを注文してから、

「藤代さんが、三月二十八日の朝、午前六時ごろ、鳥取の砂丘にいたことは、まず、間違いなくなりましたね」

と、時刻表を広げながら、悠子にいった。

「ええ、私の思ったとおりでしたわ」

「問題は、その後の足どりです。それに、一緒にいた男のことも気になってくる。薄いサングラスをかけた、その男が、藤代さんを殺した可能性がありますからね」

「でも、青森の刑事さんは、金目当ての犯人が、駅のトイレ近くで、藤代さんを襲ったんだと、

おっしゃっていましたけど」
「それは、藤代さんが、鳥取に来なかったという前提に立っているんです。しかし、彼が、あなたとの約束を守って、砂丘に来たことは、はっきりした。砂丘で写真を撮ったことも、確かでしょう。それなのに、青森で死んだ藤代さんの所持品の中には、砂丘の写真も、東京駅の写真もなかった。行きずりの強盗殺人の犯人が、そんな写真を奪うと思いますか？」
「ええ。そのとおりですわ」
「ともかく、藤代さんは、ここから、青森へ行ったんです。上野午後三時三〇分発の特急『はつかり11号』で、青森へ向かったと考えられている」
「はい」
「午前六時に砂丘にいて、見物し、写真を撮って、タクシーで、鳥取駅へ来たとすると、ここに着いたのは、午前六時三〇分ごろでしょうね」
「私も、そう思います」
「さて、ここに、午前六時半に着いて、その日の午後三時三〇分に上野発の『はつかり11号』に、果たして乗れるかどうかを、考えてみましょう」
「丁度、九時間ありますわ」
「国道九号線を京都まで、すっ飛ばし、京都で、名神高速に入り、東京まで走る。東京に入ったら首都高速で上野へ出る。不可能じゃありません。しかし、藤代さんは、車では行かなかった」

「なぜ、わかりますの？」
「車というと、タクシーを頼むより仕方がないわけですが、ここでタクシーを拾い、上野まで走らせていたら、当然、運転手仲間の話のタネになっていて、さっきの二人の運転手が、話してくれていたはずです。それに、藤代さんは、タクシーで、鳥取駅に来ています。列車に乗ったんです」
「でも、間に合う列車がありますの？」
「この路線地図を見てください。鳥取から東京へ行く最短の道は、山陰本線で京都へ出て、京都からは、新幹線ひかりで東京へ。東京駅からは、国電で上野駅までという方法です」
「はい」
「山陰本線で、京都へ行く列車は、午前七時四九分鳥取発の普通列車が、一番早いが、これは、京都着が一五時一二分ですから、とうてい間に合わない。次は、午前八時二八分鳥取発の特急『あさしお2号』で、これは京都に、一二時二二分に着く。これで京都に着くと、一二時二九分京都発の『ひかり2号』に間に合いますが、東京へ着くのは、一五時二〇分です。『はつかり11号』の発車まで、一〇分の余裕しかありません。東京と上野間は、国電で七分ですが、これは、純粋に電車の走っている時間です。東京駅と上野駅の乗りかえや、待ち時間を入れると、まず、間に合いませんね」
「他に列車はありませんの？」
「京都行じゃなければあるんですよ」

と、十津川は、ニッコリして、
「午前六時二一分鳥取発の特急『はまかぜ2号』は、京都行じゃなくて、和田山から、播但線に入って、ぐるりと回って大阪へ行く。遠回りだが、これに乗れば、大阪に、午前一〇時四九分に着きます。大阪と新大阪の間は、電車で四分もあれば着く。ゆっくりみて、一一時には、新大阪着と考えていいでしょう。そうすると、新大阪一一時一〇分発の『ひかり22号』に乗れます。これだと、東京には、一四時二〇分、午後二時二〇分に着くんです。はつかり11号の発車まで、一時間一〇分ありますから、ゆうゆう間に合いますね。だから、藤代さんは、この『はまかぜ2号』に乗ったんだと思います」
と、十津川は、断定するようにいってから、腕時計を見て、
「あ、そろそろ、時間ですね」
十津川は、悠子を促して、喫茶店を出た。
改札口に向かって歩きながら、
「警部さんは、東京へお帰りにならないんですか？」
と、悠子がきいた。
「まだ、ここでしなければならない仕事があるんですよ」
「そうですの」
と、いってから、悠子は、ふと、改札口の手前で立ち止まった。
「私、わからないことがあるんです」

「何ですか？」

「警部さんの考えでは、藤代さんは、三月二十八日に、はまかぜ2号、ひかりと乗り継いで、東京に帰ったというわけですわね」

「そうです。午前六時二一分鳥取発の『はまかぜ2号』に乗る以外には、その日のうちに、上野発の『はつかり11号』に乗れないのですよ。それが、どうかしましたか？」

「それだと、東京で、一時間一〇分の余裕があるわけですわね」

「そのとおりです」

「それなら、彼はなぜ、私に電話してくれなかったんでしょうか？　東京に帰って来ているのに」

第七章　架線事故

1

出雲4号に乗る悠子を見送ったあと、十津川は、駅構内の黄色い公衆電話で、亀井に連絡をとった。
「小野寺哲也という男のことを調べてくれたかね？」
百円玉を投げ入れながらだから、自然に、早口になった。
「調べましたが、あの住所に、小野寺哲也という人物は、おりません」
「やはり、でたらめか」
「しかし、世田谷区世田谷という地名も、番地も実在しました。現在、この番地には、本屋が店を開いています。そこの主人は、小野寺という名前ではありません」
「鳥取県警から急送した宿帳の筆跡は届いたかね？」
「届きました。今、専門家に頼んで、例の爆破予告の文字と比較してもらっています。明日中には、結論が出ると思いますが」

「東京鉄道同好会というのがあるらしい。鉄道マニアの集まりだろう。一応、調べておいてくれないか」
「今度の事件に関係があるんですか？」
「それが、全くわからんのだ。しかし、ひょっとするとという気もする」
「わかりました。調べてみます」
「国鉄側からは、まだ、何の報告もなしかね？」
「爆発物が発見されたという報告はありません」
「そうか」
「警部は、どうされますか？」
「私は、出雲1号をマークしたいと思ってるんだ。この列車は、福知山駅を過ぎたところで、午前三時を迎えるはずだ」
「そうです。福知山着が、午前二時五二分で四分停車し、二時五六分に発車します」
「だから、これから福知山に行って、出雲1号に乗るつもりだ」
「しかし、警部。危険ですよ。もし、四月二日の午前三時に、犯人が、出雲1号を爆破しようと考えているとすると、みすみす、危険なところに、飛び込んで行くようなものです」
「カメさんらしくないことをいうじゃないか」
と、十津川は、眉をひそめた。
「出雲1号には、何百人という客が乗ってるんだ。私が危険なら、その人たちだって危険じゃ

ないか。警察官が、いちいち、危険だからといって、尻込みしていられるかね」
「わかりました。しかし、お気をつけて」
「ありがとう」
十津川は、電話を切ったあと、福知山までの切符と寝台券を買った。
山陰線は、京都まで単線なので、本数が少ない。
一九時五〇分の出雲4号が出てしまったあと、二三時三二分発の普通寝台「山陰」まで、福知山へ行く列車はなかった。
「山陰」は、食堂車がついていない。十津川は、駅の中の食堂で、夕食をとってから、「山陰」に乗った。
三段式のB寝台にもぐり込んだが、もちろん、眠れはしない。考えなければならないことが多いし、そのうえ、普通寝台のため、やたらに停車するからだった。
四月吉日の午前三時に、夜行列車を爆破するという予告状が、国鉄総裁宛に送りつけられた。
その一方、旅行好きのサラリーマンが、青森駅の構内で殺され、デジタル腕時計のアラームが、午前三時にセットされていた。
十津川は、この二つの事件を結びつけて考えてみた。
このサラリーマン藤代友彦は、夜行列車「出雲1号」に乗って山陰に行き、鳥取砂丘の写真を撮ったと思われるのに、死体が発見されたとき、そのフィルムはなく、カメラに入っていたのは、上野発青森行の特急「はつかり11号」に乗っていたという証拠写真だった。

藤代は、旅先で知り合ったと思われるサングラスの男と、鳥取で一緒だった。この男が、青森で、藤代を殺し、問題のフィルムを、抜き取ったのではないか。藤代が、「出雲1号」に乗ったことをかくすためにだ。もっと正確にいえば、藤代が、出雲1号の中で、午前三時という時刻を気にしたことをかくすために。

だが、わからないこともある。

藤代は、なぜ、「はつかり11号」に乗って、危険な男と一緒に、青森に行ったのだろうかということである。

「東京に戻ったのなら、なぜ、そのとき、私に電話してくれなかったのかしら?」

と、悠子はいった。

その疑問もある。

第一、まだ、二つの事件が関係があるという証拠もない。藤代友彦の腕時計が、午前三時に鳴るようにセットされていたのも、偶然かもしれなかった。

そうした疑問に対する答えが見つからぬうちに、列車は、福知山に着いた。

午前二時四八分。

列車をおりると、全くといっていいほど、人の気配のないホームは、電灯の明かりだけが、いたずらに、こうこうと輝いている。

十津川を、ここまで運んで来た「山陰」は、ひっそりと、ホームに横たわっている。

単線のため、二時五二分に、「出雲1号」が着くまで、発車できず、一〇分間、ここに停車

するのだ。

「出雲1号」は、定刻より一分おくれて、到着した。

十津川は、乗るとすぐ、車掌長に、鳥取まで行きたい旨を告げ、その料金を払ってから、警察手帳を見せた。

相手の顔が、緊張した。

「何かあったんですか？」

「いや。これから、あるかもしれないのです。車掌は、何人乗っているんですか？」

「私を入れて四人です」

「すぐ、手分けして、車内を調べてもらいたいのです」

「いったい、何があるんですか？」

「爆発物がかくされている情報があったんです。本当かどうかわかりませんが、一応、チェックしたい。それに協力してください」

「しかし、刑事さん。この時間では、乗客の皆さんは、もうお休みなっています。それを起こして、寝台の下まで調べるわけにはいきませんが。特に、この列車には、最前部に個室寝台車がついています。皆さん、カギをかけていらっしゃいますから――」

当惑した顔で、車掌長がいった。

「各車両のトイレや廊下、屑入れなどを調べてください。乗客を起こして、寝台の下まで調べている時間はありません」

「時間というと、何時に爆発することになってるんですか？」
車掌の声が、上ずってきている。こんなときに、午前三時といったら、かえって動揺してしまうかもしれない。
「とにかく、早く調べてください。私も手伝います。客車の数は？」
「十一両で、一両は食堂車です。食堂車は、閉まっていますが」
「じゃあ、食堂車はいいでしょう。他の客車をお願いします」
他の三人の車掌が呼ばれ、手分けしての捜索が始まった。
まだ、出雲1号は、ホームにとまっている。
十津川は、車掌長と、1号車と2号車を調べることにした。
1号車は、個室寝台車で、十四の個室は、すべて満席だった。乗客は眠っているらしく、通路側の小さな窓には、カーテンが下ろされている。
トイレは、洋風と和風が一つずつ、それに、毛布などをしまってある納戸（なんど）が、1号車の前部に設けられていた。
一つのトイレを念入りに調べ、納戸は、車掌長が開けてくれた。
爆弾らしきものは、見つからなかった。
二人は、2号車に向かって急いだ。
2号車から11号車までは、二段式のB寝台である。
各車両に、二つのトイレと、二つの洗面台が付属している。

ここでも、何も見つからなかった。

「ありませんね」

と、車掌長が、ほっとしたとき、ホームのベルが鳴り、出雲1号は、がくんと一ゆれして、動き出した。

十津川は、反射的に、腕時計を見た。午前二時五六分。あと四分。

他の車掌たちが、息をはずませて、集まってきた。

「どの車両にも、それらしいものは見当たりません」

と、三人がいった。

「そうですか」

「これで、大丈夫ですか？」

車掌長が、十津川にきいた。

「わかりません。寝台の下までは、見る時間がありませんでしたからね」

「何時に爆発するというんですか？」

「午前三時です」

「え？」

「あと三分、いや、あと二分しかありませんよ」

一番若い車掌が、悲鳴に近い声をあげた。

「単なるいたずら電話だったかもしれません。しかし、万一のときには、乗客の救出に全力を

つくしてください」

と、十津川は、いった。

三名の車掌は、蒼い顔のまま、各車両に走って行った。

十津川は、1号車の車掌室の傍に立っていた。

窓の外を、夜景が流れていく。

車掌長は、懐中時計を見つめている

十津川も、自分の腕時計に眼を走らせた。

デジタル時計の数字が、2：59を示している。

それが、3：00に変わった。

十津川は、思わず、身構え、両足を踏んばった。

しかし、何も起きない。

窓の外には、平板な夜景が流れ、単調な車輪の音が聞こえてくるだけだった。

だが、十津川は、緊張したままだった。

犯人の予告は、午前三時だが、正確に午前三時かどうかはわからなかったからである。二、三分、おくれるかもしれないのだ。

3：00が3：01になり3：02に変わっていく。

小さな駅が、あっという間に、後方に流れ去った。

一〇分が過ぎたが、何も起きなかった。

十津川は、初めて、ほっとして小さな溜息をついた。
「もう大丈夫ですか？」
と、車掌が、かすれた声できいた。
「大丈夫でしょう」
「やっぱり、いたずら電話だったんですね」
「恐らくね」
と、だけ、十津川はいった。
今日は、何事もなかった。しかし、犯人は、四月中に、爆破するといっているのだ。今日は、何事もなかったといっても、明日は、わからないのだ。
それどころか、出雲1号は大丈夫だったが、他の夜行列車が、爆破されたかもしれないのである。
「刑事さん。しばらく眠られたらどうですか」と、車掌長がいった。
「鳥取に着いたら、お起こししますよ」

2

出雲1号は、定刻どおり、午前五時三〇分に、鳥取に着いた。B寝台で、少し眠ったとはいえ、わずか二時間足らずである。
鳥取駅のホームにおりた十津川の眼は、まだ、赤い。

夜は、すでに明け、ホームに射し込む朝日が疲れた眼に眩しかった。
改札口を出る。朝刊をと思ったが、まだ、売店は開いていなかった。
十津川は、駅の構内から、東京の亀井刑事に電話をかけた。
疲れて、普段より低くなった亀井の声が聞こえた。
「出雲1号は、何事もなかったが、他の夜行列車はどうだね？」
と、十津川は、きいた。
「五時に、国鉄に問い合わせたんですが、どの列車も、無事だったということです」
「そうか。それを聞いて安心したよ」
「今、鳥取ですか？」
「ああ、今日中に東京に帰るつもりだ」
そこまでいったところで、百円玉がなくなり、電話が切れてしまった。
東京の捜査本部には、一刻も早く帰りたかったが、今日は木曜日で、鳥取と東京を結ぶ飛行機の午前の便がない。
考えた末、午前六時二一分発の「はまかぜ2号」に乗ったのは、三月二十八日に、藤代友彦が辿ったと思われるルートを、自分も、辿ってみたいと考えたからだった。
「はまかぜ2号」は、和田山で山陰本線と分かれ、遠回りして、一〇時四九分に大阪に着いた。
大阪から新大阪まで、電車で約四分。十津川が、考えたとおり、一一時一〇分新大阪発の「ひかり22号」に、ゆっくり間に合った。

新幹線の中から、電話をしておいたので、東京駅には、亀井が迎えに来てくれていた。
「わざわざ、来てもらって悪かったが、一刻も早く、その後の動きをカメさんから聞きたくてね」
と、十津川は、地下鉄のホームに向かって歩きながら、亀井にいった。
「例の筆跡鑑定の結果は、どうなったね？」
「これは、いい結果がでました。まず、同一人の筆跡とみていいだろうということです。しかし、筆跡鑑定というのは、裁判では、決定的な証拠とはなりませんが」
「わかってるよ。しかし、まあ、同一人の可能性が出て来ただけでも、助かるよ。今までは、全く、犯人像が浮かんでいなかったんだからね」
「すると、犯人が狙っているのは、やはり、出雲1号ということになりますか？」
亀井は、眼を輝かせて、十津川を見た。
二人は、霞ケ関（かすみがせき）までの切符を買って、地下鉄に乗った。
並んで、吊り皮にぶら下がった。
「それで、今日は、藤代友彦と、サングラスの男が乗ったと思われる『ひかり22号』で、帰って来たんだよ」
と、十津川はいった。
「それで、一四時二〇分着のひかりで、お帰りになったわけですか」
「これなら、ゆっくり、上野発一五時三〇分の『はつかり11号』に間に合うからね。あの列車

以外に、朝の六時に鳥取砂丘にいた人間が、その日の『はつかり11号』に乗ることはできないんだ」

「なるほど」

と、亀井は、笑って肯いたが、急に、首をかしげて、

「一四時二〇分着のひかり22号でしたね」

「それが、どうかしたのかね？」

「三月二十八日のひかり22号というのは、確か、新聞か何かで、見たような気がするんですが――」

「何だい？」

「それが、思い出せないんです。捜査本部に戻ったら、調べてみます」

と、亀井はいった。

捜査本部に戻ったのは、三時少し前である。

亀井は、すぐ、新聞の綴りを取り出して、眼を通していたが、

「ああ、ここに出ています」

と、十津川にいった。

三月二十九日、日曜日の朝刊の社会欄だった。

「ひかり22号のことじゃありませんが、あの日、上りの新幹線は、軒並みおくれています」

と、亀井がいう。

〈新幹線、架線事故で大幅な遅れ（但し、一時間五三分で特急料の払戻しはなし）〉

二十八日の午前九時一一分岡山発東京行の「ひかり90号」は、京都と米原の間で、架線事故にあい、東京には、二時間近くおくれて、一五時二九分に到着した。このため、後続の列車も、軒並み、一時間から二時間おくれ、完全に元のダイヤに戻ったのは、午後八時過ぎてからだった〉

3

十津川は、小さな唸り声をあげた。

時刻表を見ると、「ひかり90号」は、「ひかり22号」より、四台も前の列車なのだ。この列車が、架線事故を起こして、東京に、二時間も延着したという。

十津川は、藤代友彦が、サングラスの男と、鳥取から、「はまかぜ2号」で大阪に出て、「ひかり22号」で東京に着いたと考えた。これなら、「はつかり11号」に間に合うからである。

しかし、その「ひかり」が、大幅におくれたのでは、当日の「はつかり11号」には乗れなかったことになってしまうのだ。

「どうされたんですか？　警部」

と、亀井が、心配して声をかけてきた。

「参ったよ。カメさん。藤代友彦が、青森へ行けなくなってしまったんだ」

十津川は、首をすくめるようにした。
「しかし、警部。藤代は、青森で殺されていたんでしょう？」
「そうだよ」
「それなら、『はつかり11号』に間に合うように、東京に着いたはずです」
「しかし、駄目なんだよ。新幹線の事故がなければ、悠々、間に合うんだがね」
「鳥取からは、『はまかぜ2号』に、乗ったはずでしたね？」
「ああ。今日、それに乗って来たんだよ。もっとも、疲れ切っていたので、大阪まで、眠っちまったがね」
「播但線回りでしたね？」
「ああ」
「とすると、姫路を通るんじゃありませんか。もし、そうなら、大阪まで行かずに姫路でおりて、新幹線に乗れますよ。姫路なら、大阪と新大阪みたいなことがありませんから、架線事故を起こす前のひかりに乗れるんじゃありませんか？」
「そうだ。大いに、あり得るよ」
十津川は、あわてて、時刻表のページをくった。
彼は、「はまかぜ2号」に乗ってから、眠ってしまったが、時刻表によると、姫路到着は、午前九時三〇分である。ずいぶん早く着くのだ。
（これなら――）

と、思って、播但線のページから、新幹線のページに眼を移したが、

「駄目だよ」

と、舌打ちした。

「駄目ですか？」

「姫路着が、九時三〇分だから、九時四一分姫路発の新幹線に乗れる。だがね。この『ひかり90号』が、架線事故を起こして、一五時二九分に東京に着いた列車なんだ。一分間じゃあ、東京から上野へは行けないよ」

4

十津川は、当惑した。

「ひかり90号」が、二時間近くおくれたということは、午前六時に、鳥取の砂丘にいた藤代友彦は、「はつかり11号」に乗れなかったことを意味している。

しかし、藤代は、三月二十八日に、上野から「はつかり11号」に乗り、青森へ行き、そこで殺されているのである。

考えられることは、二つしかないと、十津川は思った。

第一は、藤代が砂丘にいた時刻が、午前六時より早く、六時二一分発の「はまかぜ2号」の前の列車に乗ったのではないかということである。

特急「はまかぜ2号」より早く鳥取を出る列車は、急行「但馬（たじま）2号」で、午前五時四五分鳥

取発で、「はまかぜ2号」と同じく、播但線回りで、姫路経由で大阪に、午前一〇時四五分着である。

姫路には、九時一四分に着く。「はまかぜ2号」より一六分早いのだが、時刻表を見ると、これでは、やはり、「ひかり90号」しか乗れないのである。「ひかり90号」より一台前の「ひかり134号」は、九時一二分姫路発だからだ。

第二は、架線事故で停まった「ひかり」からおりて、車で、東京に向かったという考え方である。

これが、一番可能性がありそうである。

架線事故があったのは、京都と米原の間とある。時刻は、恐らく、「ひかり90号」の京都着が、一〇時四一分だから、一〇時五〇分前後であろう。

一〇時五〇分とすると、一五時三〇分まで四時間四〇分の余裕がある。その間に、停車している「ひかり90号」からおりて、タクシーを拾い、東京まで飛ばして、上野駅に着けるかどうかである。

名古屋から東京まで、東名高速を無理して飛ばせば、三時間。東名出口から上野まで三〇分。そして、事故現場から名古屋まで、一時間一〇分。これで、四時間四〇分になる勘定だが、事故現場から名古屋までの一時間一〇分が少しきつい。現場付近で、すぐ車を拾えるかどうかわからないからだ。

第一、架線事故の直後に、乗客を降ろしたろうか？

「この事故の詳細を、国鉄に問い合わせてみてくれ」
と、十津川は、亀井に声をかけて、
「事故が起きた正確な時刻と、そのあと、乗客を降ろしたかどうかだ」
亀井は、すぐ、電話をかけ、メモをとっていたが、そのメモを持って、十津川の机に来ると、
「架線事故が起きたのは、三月二十八日の午前一〇時五二分ごろということです。場所は、関ケ原付近。一二、三分後に、復旧作業が始まりましたが、危険なので、ドアは閉めたままで、乗客は降ろさなかったそうです。およそ一時間後に、修理ができたので、徐行運転を始め、名古屋に、一時間三〇分おくれて到着したということです」
と、報告した。
「すると、名古屋着が、一二時五九分か。これでは無理だな。名古屋から、二時間三一分では上野までは車は走れないよ」
「残るのは飛行機ですね。おくれを取り戻すために、名古屋で降りて、小牧空港から東京へ飛んだというのはどうですか？」
「ちょっと待ってくれよ」
十津川は、時刻表のページを繰っていった。
大阪と東京の間は、飛行機の便が多いが、名古屋と東京の間は、意外に少ない。

名古屋　19・35　→　東京羽田　20・30

名古屋　16・35　→　成田　17・30

この二便しかない。

いずれの便も、一五時三〇分上野発のはつかり11号には間に合わない。

「藤代たちが、『ひかり90号』でなく、次の『ひかり１１０号』に乗っていたらどうでしょうか？」

と、いったのは、亀井だった。

「東京着一三時四四分か」

「そうです。これでもゆっくり間に合うわけですから、藤代友彦が、この列車に乗った可能性もあると思うんです。この『ひかり１１０号』は、うまいことに、架線事故のあった午前一〇時五二分には、京都駅にいるのです。ここで停まって動かないということになって、藤代は、新幹線以外で、東京の上野に行くことを考えたんじゃないでしょうか？」

「あり得るね。しかし、タクシーを拾ってというのは、無理じゃないかな。京都から、名神、東名のハイウエイを飛ばして、上野まで四時間三八分で行かなければならないんだからね。京都駅前でタクシーを拾って、京都インターチェンジから名神に入るだけでも、二〇分はかかってしまうはずだ」

「車は無理です。飛行機です。私は、いつだったか、京都から大阪の伊丹空港まで、タクシーで行ったことがありましたが、四〇分で着きました。大阪空港には、一二時前には着けますか

ら、何とか一二時三〇分発の日本航空112便に間に合います。この便に乗れば、羽田に、一三時三〇分に着きますから、一五時三〇分上野発の『はつかり11号』に、悠々間に合います。もし、この便に間に合わなくても、全日空の28便が、一三時四〇分発で、これでも、一四時四〇分に羽田に着きます。このほうは、『はつかり11号』に、五〇分の余裕しかありませんが、羽田から首都高速で、上野まで五〇分で行けたということは、十分に考えられます」

「よし、その二便の乗客の中に、藤代友彦がいたかどうか、調べてくれ」

「わかりました」

「だがね。カメさん」

「は？」

「なぜ、藤代友彦は、こんな苦労までして、三月二十八日に、『はつかり11号』で、青森に行ったんだろうか？　恋人の氷室悠子に内緒で」

第八章　午前三時の男

1

国鉄本社に設けられた「夜行列車爆破予告対策本部」は、何の具体的な対応策もとれないまま、四月二日の夜を迎えようとしている。

北野は、昨日から、家に帰っていなかった。午前三時に、夜行列車が爆破されるかもしれないのに、その時刻に、家で寝ているわけにはいかなかったからである。

妻の君子には、実家に電話し、爆破予告のことを話して、しばらくの間、国鉄本社に泊まり込むと告げた。

だが、君子が、その話を信じたかどうかわからなかった。「あなたのいうことを、だんだん、信じられなくなって来ているんです」と、彼女が、いったからである。

（この事件が終わったら、ゆっくり話し合わなければ）

と、北野は、思っている。

予告犯人は、四通目の手紙「四月吉日」以後、何も送って来なくなった。

四月吉日
午前三時
夜行列車
爆破決行

これだけである。四月何日に、どの列車を爆破しようとしているのか、見当もつかない。したがって、打つ手がなかった。

四月中、毎日、すべての夜行列車を止めるわけにはいかない。そんなことをしたら、日本は、半身不随になってしまうだろう。

目下、各夜行列車の車内のチェックに全力をあげるように指示してはいたが、それが、どれだけ有効か疑問だった。乗客の持ち物まではチェックできないからである。

「北野君。警察は、まだ、何もつかめていないのかね？」

と、対策本部長の小野田副総裁が、声をかけた。

北野は、警察との連絡係でもあった。

「十津川警部から、狙われているのは、東京と浜田間を走る山陰本線の『出雲1号』ではないかという連絡が入っています」

「それは、何か根拠があるのかね？」

「三月二十六日に東京駅から出雲1号に乗った藤代友彦という三十歳の男が、青森で殺されたのですが、この男の腕時計のアラームが、午前三時にセットされていたというのです」

「それだけかね？　偶然かもしれんじゃないか」
「もう一つ、この藤代友彦は、旅先で知り合ったと思われる三十歳前後の男に、殺されたらしいのですが、この男が、鳥取の旅館で、宿帳に書いた字が、総裁宛に届いた予告の字と比べて、同一人の可能性があるというのです」
「同一人？」
「可能性です」
「可能性か。それじゃあ、別人の可能性もあるわけじゃないか。どうも、あやふやだねえ。これだけで、出雲1号に、神経を集中していて、その隙に、他の夜行列車が狙われたら、眼も当てられないからね」
「警察は、この線を追っていくようです」
「警察は、それでいいが、うちは、乗客の生命の安全がかかっているんだからね。まだ、すべての夜行列車に眼を向けざるを得ないんじゃないかね」
「その件で、これから、東京車掌区に行って来たいんですが」
「何の用だね？」
「三月二十六日の出雲1号に乗車した車掌から、話を聞いてみたいんです」
「君も、警察の考えに同調するのかね？」
「そうではありませんが、今は、藁をもつかみたい気持ちですので」
と、北野はいった。

東京車掌区は、東京駅丸の内北口の二階にある。

あらかじめ連絡しておいたので、三月二十六日の出雲1号に乗車した四人の車掌の中の二人が、北野を待っていた。

二人とも、四十五、六歳の分別盛りである。名前は、浅野と、中村。お互いに、自己紹介している間も、列車に乗務する車掌たちが、助役の点呼を受けている。

二人一組で、大きな鞄をぶら下げて出て行くのだ。一列車、四人の車掌である。他の二人は、品川客車区へ、それぞれ、乗る列車を受け取りに行っているのだろう。

「三月二十六日の出雲1号で、何か事件がなかったか、それをききたいんですがね」

と、北野は、浅野と中村の二人の車掌に向かっていった。

二人は、顔を見合わせていたが、

「別に何もありませんでしたよ。定刻どおりに、終着浜田へ着いているし、乗客に怪我人も出ていませんしね」

と、浅野車掌がいった。

「細かいことをききますが、午前三時というと、福知山を出てすぐですね？」

「そうですね。福知山発が、午前二時五六分ですから」

「丁度三時に、車内で何かありませんでしたか？　どんなことでもいいんです。トイレが詰まって苦情が出たでもいいし、酔った乗客が暴れたでもいいですがね」

「午前三時にですか」

中村車掌は、考えるように、宙に視線を遊ばせながら、
「どんなことでもいいんですか？」
「そうです」
「乗客は、ほとんど寝てしまっていましたね。福知山から乗った人はいなかったし。それなのに、一人だけ、通路に立って、窓の外を眺めていた人がいました。それが、午前三時じゃなかったですかね」
「何号車ですか？」
「確か3号車の通路だったと思いますね」
「それで、声をかけたわけですか？」
「みなさん、お休みになっている時間ですからね。頭痛や、腹痛で、眠れないのだったらと思って、どうされたんですか？　と声をかけたんですよ」
「どんな返事が、かえってきました？」
「トイレに起きたんだといっていましたね」
「そう見えましたか？」
「いや」
と、中村車掌は、笑って、
「そうは見えませんでしたね」
「なぜですか？」

「そのあとも通路の折りたたみの椅子を引き出して、それに腰を下ろして、窓の外を見ていたからですよ」
「トイレがふさがっていたので、椅子に腰かけていたんじゃないのかな？」
「あの車両のトイレは、あいていましたよ。第一、車両の真ん中あたりに腰を下ろしていましたね」
「じゃあ、何をしていたんですか？」
「さあ、わかりませんね。夜景を見るのが好きな人だったのかもしれない」
「どんな人だったか、覚えていますか？　人相とか、年齢とか」
「三十歳ぐらいの男の乗客でした」
「サングラスをかけていませんでしたか？」
「かけていませんでしたが、手に持っていましたよ。私が、声をかけたとき、サングラスをかけてから、私を見ました」
「その他には？」
「背の高さは、あなたぐらいでしたね。白いトックリセーターに、背広姿だったから、どこから乗車された方かわかりませんが、ゆっくり寝ていなかったんじゃないでしょうか」
「その他に、気がついたことはありませんか？」
「これだけです。別に、危険なことをしていたわけじゃありませんからね。午前三時に、窓の外を見ていただけでは、注意するわけにもいきません」

中村車掌は、微笑した。

「午前三時に、目覚ましのベルが鳴るのを聞きませんでしたか？」

と、北野がきいた。

「目覚ましのベルですか？」

浅野車掌のほうが、変な顔をした。

「そうです。といっても、腕時計のアラームです。これと同じものですよ」

北野は、自分の腕時計を外し、アラームボタンを押して見せた。可愛らしい音を立てて、アラームが鳴った。

「あまり大きな音じゃありませんね」

「ええ」

「それじゃ、列車の音で聞こえませんよ。カーテンはおりていますしね」

と、浅野は、いった。

確かに、そのとおりかもしれないなと、北野は、思った。車輪が、レールの上を走る音は、かなり大きいし、乗客が寝台で寝ている場合は、カーテンをおろしている。車掌に聞こえなかったとしても不思議はない。

とにかく、午前三時ごろ、夜行列車の中で、通路に出て、窓の外を見つめていた乗客がいたことは、確認できたわけである。

もちろん、それが、直ちに、爆破予告の犯人と結びつくかどうかはわからなかった。その男

は、恋人と別れて「出雲1号」に乗り、ただ、物思いにふけっていただけなのかもしれないからである。寝台に入ったが、隣りの乗客のいびきがうるさくて、通路に出て、窓の外を見つめていたという場合も考えられるのだ。

「どうも、ありがとう」

と、北野は、礼をいって、立ちあがった。

二人の車掌は、拍子抜けした顔で、

「これでいいんですか？」

と、きいた。

爆破予告の話は、まだ、乗務員たちには、話をしていなかった。夜行列車のチェックの強化も、ただ、「最近、事件が多いので」といった、漠然とした説明がつけられているだけである。混乱をさけるためだった。

だから、二人の車掌が、拍子抜けした顔になっても、北野は、爆破予告の話をするわけにはいかないのである。

「これでいいんです。実は、利用者から、手紙が来ましてね。三月二十六日の『出雲1号』に乗ったが、午前三時ごろ、乗客の一人が、騒ぎ出して、やかましくて眠れなかった。車掌は、ああいうとき、すぐ、静かにさせてくれという内容だったんですよ」

と、北野がいうと、中村車掌が、大きく手を振って、

「そんなことはありませんでしたよ。さっきいった乗客にしても、ただ、通路に出て、窓の外

を見ていただけで、別に騒いでいたわけじゃありません。そう返事をしておいてくれませんか」

「わかりました」

2

北野が、国鉄本社に戻ると、それを待っていたように、電話が入った。

「新井だよ」

と、男の声がいった。

大学の同期生で、今、「チャレンジ二〇〇〇キロ事務局」で働いている新井だった。

今、国鉄が、乗客誘致の手段の一つとしてやっているのが、「いい旅チャレンジ二〇〇〇キロ」のキャンペーンである。

それを引き受けているのが、時刻表などを出版しているK出版社内に設けられた事務局だった。

「君に頼まれていた件だがね」

と、新井がいった。

「見つかったのか？」

「ああ。見つかった。ただし、相手のプライバシーは、守ってもらえるんだろうね？」

「もちろん。すぐ、話を聞きたいんだが」

「いいとも、新宿で会おう」
新宿のステーションビルの中にある喫茶店を指名して、新井は、電話を切った。
一時間半後に、北野は、ビルの八階にあるその店で、新井に会った。
窓の外に、新宿の盛り場の夜景が見える。
痩せっぽちの新井は、それが癖で、頭をひと掻きしてから、事務局名の入った茶封筒から、写真や、手紙を取り出した。
「今日の午後、送られて来た分の中に、君に頼まれていたものがあったんでね」
「若い女性だね」
「女子大生で、二十歳だ。ごらんのように、東京駅で撮った写真と、出雲市駅での写真を送って来ている。山陰線の東京、出雲市間を踏破したという証拠写真だよ。友だちと二人で行ったらしく、友だちのほうも、同じ写真を送って来ている」
「しかし、これじゃあ、三月二十六日の出雲1号で行ったかどうかわからんじゃないか」
北野がいうと、新井は、また、頭をかいて、
「写真をよく見てくれよ。日付入りのカメラで撮っているから、数字が入っているだろう。東京駅のものが、56.3.26で、出雲市のものが、56.3.27だ。二十六日に乗って、翌日に着いたのさ。東京から出雲市まで行く夜行列車は、『出雲』しかないよ」
「しかし、出雲1号と3号の二本のうち、どちらかわからん」
「しっかりしてくれよ。国鉄総裁秘書が、何をいってるんだ。東京駅の写真をしっかり見ろよ。

ホームに、ブルートレインが入っていて、そこに、『浜田』という特急表示がしてあるじゃないか。出雲1号は、出雲市経由で浜田まで行くが、出雲3号のほうは、出雲市止まりなんだ」

「なるほどね」

「国鉄でも、管理職は、実情にうといんだねえ」

と、新井が、からかった。

写真の主の名前は、折原伸子。K大英文科の三年生で、京王線の笹塚近くのマンションが住所になっていた。

会ってみるつもりで、北野が、彼女の住所を手帳に書き止めていると、新井が、

「いったい、何を調べているのか、教えてくれないか」

と、手元をのぞき込みながらいった。

「三月二十六日の出雲1号について、ちょっと苦情が来ているんでね」

「どんな苦情だい？」

「うるさくて眠れなかったという乗客の苦情だよ」

と、北野は、東京車掌区でいったのと同じことをいった。

「そんな苦情に、総裁秘書が飛び回るのかねえ？」

「秘書の仕事なんて、苦情処理係みたいなものさ」

3

甲州街道沿いのマンションの六階に、折原伸子の部屋はあった。

女子大生の生活も、優雅になったものだなと思いながら、北野は、ベルを押した。

ドアが細目に開いた。が、チェーンは、かけたままである。すでに、午後九時を回っているのだから、相手が用心深くなるのも当然だった。

写真に写っていた顔が、細目に開いたドアの向こうに、現われて、

「どなたですか？」

と、きいた。レコードがかかっていて、奥に、誰かいる気配だった。

北野は、身分証明書を見せ、肩書きつきの名刺を差し出した。

「国鉄総裁の秘書の方――？」

「そうです。あなたは、三月二十六日の出雲1号に乗られたと思うんですが？」

「ええ」

「実は、そのことで、ちょっとお話を伺いたいことがありまして。夜分、失礼とは思ったんですが」

「国鉄の人ですって」

と、折原伸子は、北野の身分証明書を何度も見直してから、チェーンロックを外して、北野を中に入れてくれた。

部屋には、同じぐらいの年齢の女性がいて、「今晩は」と、北野にいった。

北野は、何となく、眩しい感じで、若い二人の女性を眺めながら、居間のソファに腰をおろ

した。

二人とも、化粧気がなく、折原伸子は白いセーターを、もう一人は、チェックのシャツをラフに着ているのだが、若さが匂ってきて、北野を圧倒した。

(妻の君子も、結婚したときは、このくらいの年齢だったんだ)

と、思ったりした。

北野は、君子が、学校を出るとすぐ結婚した。確か、君子が、二十二歳のときである。あのころの君子は、初々しかったと思う。もっとも、今になって、君子は、早く結婚してしまったために、自由に遊べなかったと、文句をいっているが。

「こちらは、お友だちの戸谷尚子さん」

伸子が、紹介した。

「一緒に、出雲1号に乗った方ですね」

「ええ」

と、尚子は、微笑してから、

「あたしたちの共通の友だちが、松江にいるんです。春休みを利用して、彼女に会いに行って、昨日、帰って来たんです」

「コーヒーお飲みになるでしょう?」

横から、伸子がきいた。

「仕事で来たんですから、構わないでください」

「私たちも飲みたいんですよ」
と、伸子はいい、コーヒーポットを持って来た。
北野は、香ばしいコーヒーのかおりを嗅ぎながら、
「出雲1号で、出雲市まで行かれたんですね？」
「ええ。出雲大社に参拝してから、松江に回ったんです」
「松江は、素敵だったわ。訪ねたお友だちというのが、私たちと同じ年だけど、OLをしていて、もうすぐ、結婚するんです」
「実は、出雲1号のことですが」
と、北野は、二人を見比べるようにして、
「三月二十六日に乗った方から、苦情の投書がありましてね。午前三時ごろ、車内で、大声で騒ぐ乗客がいて、大いに迷惑したというのです。それで、車掌にきいたところ、そんなことはなかったというのですよ。本当はどうだったのか知りたくて、あなた方を訪ねて来たわけです」
「へえ」
と、尚子が、声をあげ、伸子のほうは、三人のコーヒーを注ぎながら、
「午前三時ですって？」
「そうです。福知山を出て、すぐのころです」
「私たち、そのころは、ぐっすり眠ってしまってたから、何もわからないわ」

伸子は、肩をすくめた。
「そうですか」
「ごめんなさい。お力になれなくて」
「実は、騒いだと思われる人が、わかったんです。ただ、誰も、騒いだところを見ていない。それで、もし、あなた方が、この乗客を見ていたらと思いましてね」
北野は、十津川から借りた藤代友彦の顔写真のコピーを、二人に見せた。
「名前は、藤代友彦というのですが、出雲1号の中か、あるいは、出雲市で、お会いになりませんでしたか？」
「よく見せて」
と、二人は、その写真を手にとって眺めていたが、伸子のほうが、
「この人、出雲大社で会ったんじゃなかったかしら？」
と、尚子を見た。
「そういえば――」
「シャッターを押してもらった人よ。この人」
「そうだったわ」
「じゃあ、会ったんですね」
北野は、膝を乗り出すようにしてきいた。
伸子は、奥から、アルバムを持ち出してくると、それを北野に見せた。

「出雲大社の前で、尚子と二人で写ってるのがあるでしょう。これ、その人にシャッターを押してもらったんです。間違いないわ」
「この人に間違いありませんか？」
「ほら。こっちに、私が撮った写真があるんです」
と、伸子は、次のページをめくった。
出雲大社の簡素で、壮大な社をバックにして、一人の男が、写っていた。サングラスをかけているので、別人のように見えたが、よく見ると、藤代友彦だった。その顔が、照れたように笑っている。多分、若い女性二人から、写真を撮られて、照れているのだろう。
「この人と一緒に、三十歳ぐらいの男の人がいませんでしたか？」
と、北野は、きいてみた。
「ええ。いたわ」
と、いったのは、尚子のほうだった。
「どんな男でした？　薄いサングラスをかけた三十歳前後の男じゃなかったですか？」
北野は、勢い込んできいた。
「ええ。サングラスはかけていたわ。写真の人のサングラスが、その人のものです」
「どういうことですか？」
「写真を撮るとき、すごく眩しかったんです。そしたら、写真の人が、連れの男の人に、サングラス貸してくれっていって、それで、写真を撮ったから」

と、伸子がいった。

「もう一人の男の人の写真は、なぜ、撮らなかったんですか？」

「撮ってあげるから、並んでっていったんです。そしたら、ボクはいいんだって、横向いちゃったの。ずいぶん、シャイな人だなって思ったんですけど」

「三十歳ぐらいの年齢でしたか？」

「ええ」

「写真の人、つまり藤代友彦さんと、その男とは、どんな様子でした？　仲良く話し合っているように見えましたか？」

「ええ。いいお友だちのように見えましたけど」

「あなた方とも、話をしたんですか？　男二人は」

「シャッターを押してくれませんかって、お願いしたあと、少しだけ話しましたわ。一緒の列車に乗っていたらしいということだとか、東京から来たとか。でも、それだけなんです。名前も聞きませんでしたわ。もう少し若い男性だったら、もっと積極的に話しかけたかもしれないけど」

と、いって、伸子は笑った。

「出雲大社に行ったのは、何時ごろですか？」

「ええと、出雲1号が、出雲市に着いたのが、二十七日の午前八時一六分だったでしょう。定刻に着いたんです。日本の国鉄って、正確なのね」

「どうも有難う」
「大社線に乗るのも、楽しみにしていたから、すぐ大社線に乗りかえました」
「接続がよかったわ」
と、横から、尚子がいい、
「出雲大社駅に着いたのは、八時四〇分ごろだったんじゃないかしら」
「時刻表によれば、出雲市発八時二三分で、出雲大社駅着は八時三六分です」
と、北野はいった。出がけに、時刻表で調べて来たのである。
「出雲大社駅からは、歩いて行きました。そしたら、あの二人は、もう来ていたんです。だから、出雲市駅から、タクシーで来たんじゃないかしら」
伸子が、考えながらいった。
「でも、帰りは、大社線に乗るって、いってたわ」
と、尚子が、続けた。
「すると、二人に出雲大社で会ったのは、午前九時ごろということになりますね？」
「ええ」
「彼らは、それから、どうしました？」
「大社線に乗ったんじゃないかしら。私たちは、バスで、日御碕（ひのみさき）へ行ったんだけど、あの人たちは、来ていなかったから。天気はよかったし、金曜日だったけど、新婚さんが一杯だったわ」

「日御碕というのは、景色のいいところらしいですね？」
「新婚さんのコースね。断崖からの海の景色が素晴らしいです。山陰の宮島といわれる朱色の日御碕神社があるし、ウミネコの繁殖地といわれる経島があるし――」
「そのあと、どうなさったんですか？」
「バスで友だちのいる松江へ行きました。彼女、今月中に、出雲大社で結婚式をあげるんです。私たち、また、行かなくちゃ」
と、伸子は、楽しそうに笑った。
「藤代さんの連れの男ですが、サングラスを外した顔も見たんですね？」
「ええ」
「どんな顔をしていました？　何か、特徴がありませんでしたか？」
「どんな顔だったかなあ」
と、伸子と、尚子は、また、顔を見合わせていたが、
「角張った、眉毛の濃い人だったわ。とにかく、美男子じゃなかったわね。あんまり、女性にもてないんじゃないかしら」
と、伸子は、笑いながら、残酷なことをいった。
「その他には、どうです？」
「痩せてるほうね。身長は一七二、三センチかな」
と、尚子がいった。

この若い二人の女性は、自分たちが関心を持たない異性については、あまり覚えていないのだろう。

しかし、少しは前進したなと思った。

藤代友彦と連れの男は、二十七日の朝、「出雲1号」を、出雲市で降り、出雲大社に参拝したのだ。

(だが、これが、果たして、夜行列車爆破予告と結びつくのだろうか?)

4

国鉄本社に戻ると、北野は、二人の女子大生のことを、十津川に連絡した。彼女たちの証言は、爆破予告問題よりも、殺人事件の解決に役立つだろうと思ったからである。

対策本部の空気も同じだった。

「君の報告は、警察を喜ばすだけじゃないかね」

と、いったのは、対策本部長の小野田副総裁だった。

「藤代友彦という男を殺したのは、そのサングラスの男かもしれない。しかし、だからといって、狙われている夜行列車が、出雲1号とは限定できんだろう?」

小野田は、何度も、同じ言葉を繰り返す。そのいい方にも、焦燥がにじみ出ていた。

「そのとおりです」と、北野はいった。

「警察に連絡したところ、十津川警部は、喜んでいました」

「そうだろう。しかしねえ。北野君。殺人事件が解決したからって、こっちの事件が解決するとは限らんのだよ」
「同じ犯人だとすれば、二つの事件は、同時に解決するわけですが」
「同一犯人だという確証はあるのかね？」
「このサングラスの男ですが、午前三時ごろ、出雲1号の車内で、眠らずに、外を眺めていたと、車掌が証言しています」
「だから、何だね？」
「ひょっとすると、何日か後に、出雲1号に爆発物を仕掛けるときのことを考えていたのかもしれません」
「そういい切れるのかね？」
小野田は、じっと、北野を見つめた。
北野は、眼を落としてしまった。事は、人命にかかわることなのだ。それも、一人や二人の命ではない。三百人以上の乗客の生命の安全がかかっているのだ。ひょっとするといった曖昧な前提で、計画を立てられないのは当たり前だった。
「断定はできません」
「それじゃあ、今までどおり、すべての夜行列車をチェックするより仕方がありませんね」
山本運転局長が、例の武骨な調子でいった。
「現在、夜行列車の運行状況は、どうだね？」

小野田が、腕時計を見ながらきいた。
「午後十時現在、すべて、正常に運行しています。私は、雪とか嵐とか、地震といった不可抗力な災害以外で、夜行列車は、絶対に止めさせないつもりです。それが、私の仕事ですから」
「君の仕事でもあり、同時に、国鉄全体の姿勢でもあるんだよ」
と、小野田は、いった。
「退職者や、踏切事故の調査は、どうなったんですか？」
後藤公安本部長が、大きな身体をゆするようにして、きいた。
北野は、メモを取り出して、
「どちらも、警察が調べてくれていますが、今のところ、夜行列車を予告爆破するような人物は浮かんで来ないということです」
「その警察の調査は、信用できるんですかね？」
と、後藤は、不満気な顔をした。
後藤だけではなかった。北野自身も、警察は、夜行列車の爆破予告問題より、青森で起きた殺人事件の解決のほうを重視しているのではないかという不満があった。
十津川警部は、青森の殺人事件が、どこかで、爆破予告につながっていると考えているらしいが、列車を守る立場からいえば、そう断定はできないのだ。
もし、狙われている夜行列車が、出雲1号でなかった場合でも、殺人事件を解決できれば、警察の面子は保てるかもしれない。しかし、国鉄は、対応を誤ったことで、何人、いや、何十

人、何百人もの犠牲者を出すことになるかもしれないのである。

「とにかく、警察は、退職者や、事故の関係者の中には、犯人と思われる者は見つからないといっているんです。今のところ、向こうの報告を信用せざるを得ないわけですが」

と、北野は、いった。

「じゃあ、いったい誰が、国鉄を恨んで、夜行列車に爆薬を仕掛けるような馬鹿な真似をするんですかね？」

後藤が、腕を組んで、溜息をついた。

「国鉄のような巨大な組織になると、いつでも、誰かに恨まれているものだよ」

と、いったのは、小野田だった。

小野田は、総裁の木本に代わって、何度か、騒音公害訴訟の席に出席したことがある。

その経験からいえば、国鉄のように大きな組織は、否応なしに、社会に影響を与え、それにつれて、社会や、個人の反撥も受けることになるのだ。

国鉄は、交通機関として、社会からスピードの向上を要求される。その要求に応えて、スピードアップを計り、新幹線を走らせると、今度は、騒音公害で、非難を受ける。騒音公害だけではない。新しく、耳に聞こえない低周波公害問題も出て来ている。低周波公害は、予想外のものだった。この例が示すように、どんなことで、国鉄が、世の恨みを買い、批判の的にされるかわからない。

大きな問題ばかりとは限らない。

国鉄職員一人一人の接客態度ということもある。特に、最近は、職員に対する批判が強くなった。

サービスの悪さを批判する投書は、後をたたない。

定期券を忘れたために、改札掛に、罪人扱いされたという苦情もある。たいていの乗客は、苦情をいうだけで我慢するが、なかには、かっとして、列車に爆弾を投げ込む者がいないとも限らないのだ。

そうしたケースを、警察は無視して、殺人事件の被害者の腕時計のアラームが、午前三時にセットされていたことに、しがみついているような気がして仕方がなかった。

「われわれは、警察にばかり頼っているべきではないと思います」

山本が、きっぱりとした口調でいった。

あまり、自己主張をしない山本の言葉だけに、その言葉には、重みがあった。

「独自の調査には、私も賛成だが、どんな方法をとったらいいと思うね？」

と、小野田が、きいた。

「夜行列車の出発前のチェックは、一層強化すべきだと思います。もちろん、それだけでは、不足です。それで一つ、提案があるんですが、国鉄には、さまざまな苦情や、要望が寄せられています。いい加減な投書もあるでしょうが、大真面目なものもあるに違いありません。それに対して、誠実に回答をしているのかどうかが問題だと思います」

「広報の話では、厖大な投書ですから、いちいち、回答はできないということでした」と、北

野がいった。

「皆さんのご意見を、業務に反映させていくということにして、いちいち返事を書くのは、勘弁させて頂いているわけです」

「私は、こう考えてみたのです。今度の爆破予告の犯人は、かなり冷静です。もし、激情的な人物なら、予告もなしに、爆弾を投げつけていると思うからです。冷静さは、予告の仕方にも現われています。われわれの注意を引くような仕方で、四回に分けて、予告状を送りつけて来ました」

「つまり君は、こういいたいんだろう。そんな犯人なら、前にも、国鉄に対する不満や、疑問を、たびたび、送りつけて来ていたんじゃないかと」

小野田がきくと、山本は、我が意を得たというように、大きく肯いた。

「そのとおりです。この犯人は、どこか偏執狂的なところを感じるんです。ひょっとすると投書魔かもしれません。以前に、何度も投書したのに、国鉄側からは、いっこうに返事がない。それが頭にきて、今度のような爆破予告にまで、突っ走ったのではあるまいかと考えたのです」

「しかし、投書マニアで、何度も、国鉄に対して非難の投書を繰り返していたら、広報部でもマークするんじゃないかね？」

「最初は、非難の投書ではなかったのかもしれません。午前三時という時刻を指定したことから、かなりの鉄道マニアだと考えられます。ですから、最初は、忠告の投書だったのじゃない

でしょうか。最近は、夜行列車、ブルートレインのファンというのは、かなりの数です。そうしたファンから、新婚用の個室寝台を作ったらどうかとか、新幹線にも夜行列車をといった注文の投書が、数多く来ていると聞いています。未来の夜行列車という青写真を書いて送って来たファンも知っています。犯人も、夜行列車のファンで、最初は、こうしたらどうかといった注文の投書だったのかもしれません。自分では、素晴らしい提案だと思っていた。国鉄総裁から感謝状を貰ってもいいぐらいに考えていたが、期待に反して、黙殺された。少なくとも、当人は、そう考えたんじゃないでしょうか。普通の人間なら、そこで諦めてしまうでしょうが、偏執狂的な犯人は、自分が侮辱されたと思い、今度は、自分が好きだった夜行列車を爆破してやろうと決意したんじゃないでしょうか？」

「さっそく、広報と協力して、ここ一年間の投書を調べてみます」

と、北野はいった。

第九章　退職者

1

「まず、大阪、羽田間の飛行機の件から報告します」
と、亀井刑事が、二日夜の捜査会議で、最初に発言した。
壁の大時計には、三時のところに、赤いテープが貼りつけてある。
現在、午後一〇時二〇分。あと四時間四〇分で、また、犯人の予告した午前三時がやってくる。
「三月二十八日の一二時三〇分大阪発の日航112便から、まず申し上げます。この便に使用されている飛行機は、DC10で、この日の乗客は三一七人でした。乗客名簿の中に、藤代友彦の名前はありません。ただし、三一七人の乗客のうち、五人が、架空の住所を書いていました。この中に、藤代友彦と、連れのサングラスの男がいるのではないかと考えて、調べてみましたが――」
「違っていたのかね？」

と、十津川が、きいた。
「残念ながら違いました。この五人は、全員が、揃いの紺のブレザーを着ていたということですから、藤代友彦とその連れとは無関係と思われます」
「すると、もう一つの便のほうに、藤代は乗っていたことになるね？」
「同じ日の一三時四〇分大阪発の全日空28便は、トライスターＬ１０２２Ｎ、このほうの当日の乗客は、三〇九人でした。この中にも藤代友彦の名前はありません。三〇九人中、架空の住所を書いたものは二人だけです。この二人は五十代の男と三十代の女のアベックで、恐らく、浮気の旅行か何かで、本名を書くのがはばかられたのだろうと思います」
「じゃあ、藤代友彦と、サングラスの男は、どちらの飛行機にも乗っていなかったということかね？」
十津川は、信じられないという顔で、亀井を見た。
「丁度、この二つの便のスチュアーデスが、東京に来ていたので、藤代友彦の写真を見てもらいましたが、どのスチュアーデスも、記憶にないという返事でした」
「参ったね。カメさん。これじゃあ、藤代もサングラスの男も、三月二十八日には、『はつかり11号』に乗れなくなってしまうじゃないか」
「そうです」
「しかし、乗っていたんだ」
「そのとおりです」

「この件は、再検討することにして、先に進もう。東京鉄道同好会を調べたのは？」
「私です」
と、西本刑事が、立ち上がった。
「現在、会員は一八九名で、その名簿のコピーを貰って来ました」
「その中に、藤代友彦の名前はあったかね？」
「ありました。この会には、特別な入会資格はなく、鉄道好きな者ならば、誰でも入会できます。上は七十六歳の老人から、下は、小学生まで入っています。会長は、旅行関係の本を出している出版社に勤めている小早川という四十歳の男で、会費は、月千円です」
「その会は、どんなことをやっているのかね？」
「毎月一回、第一日曜日に会合を持っているそうです。これには、全員が集まるわけではなく、だいたい三十人ぐらいだといっていました。それから、隔月で、会報を出しています。三枚ほど貰って来ましたので、ごらんになってください。次に、その会報にものっていますが、ときどき、行事もやっています。山口線でSL見学とか、京都の梅小路機関区の見学とか、ブルートレインに乗って、九州への三泊四日の旅とか、ときには、国鉄の機関士や、車掌に来てもらって、話を聞くといったこともするそうです」
「この会員の中に、サングラスの男がいればいいんだがねえ」
十津川は、会員名簿に眼を走らせながらいった。
名前と住所、それに電話番号は記入してあるが、年齢や、職業は書き込まれていない。

男性が全体の五分の四くらいで、五分の一が女性会員である。女性が、案外に多いのは、女性の間にも、鉄道ファンが増えたということだろうか。

「警部は、この中に、問題の男がいるとお考えですか？」

と、亀井が、きいた。

十津川は、「そうだねえ」と、考えながら、

「藤代は、最初から、サングラスの男と、山陰へ旅行するつもりだったとは思えない。恐らく、偶然、『出雲1号』の中で、顔を合わせたんだろう。そして、意気投合して、出雲大社に参拝し、鳥取砂丘を一緒に見物し、同じ旅館に泊まっている。しかし、会社の同僚とは考えられない。なぜなら、それなら、旅館の主人の証言や、砂丘の案内人、あるいはタクシーの運転手の証言を聞いているとき、氷室悠子が、その人物に何か思い当たることがあったはずだ。彼女も、同じ会社の人間だからね。だが、藤代は、あまり交友関係の多い男ではなかった。会社以外の世界というと、鉄道ぐらいのものだ。鉄道愛好家のグループだよ。そして、たまたま出会って、意気投合して、一緒に旅行したとなると、この東京鉄道同好会ぐらいしか考えられないんだよ」

「では、この男性会員を、片っ端から洗ってみますか」

と、亀井がいった。全部で、一六〇人である。

「やってみてくれ。運がよければ、サングラスの男にめぐりあえる。それから、さっき、国鉄の北野さんから電話があって、出雲大社で、藤代たちに会ったという女子大生二人が見つかっ

たといって来た。名前と住所、それに電話番号は、黒板に書いておいたから、メモしておいてくれ。彼女たちは、サングラスを外した問題の男の顔を見ていて、角ばった、眉の太い男だったといっている。これはと思う男が見つかったら、彼女たちに見てもらうのもいいね」

「藤代は、やはり、出雲大社へ行っているんですか」

と、亀井が、肯くようないい方をした。

「そうだよ。氷室悠子がいったとおり、彼は、出雲大社に参拝し、鳥取の砂丘へ行って写真を撮っているんだ」

「それなのに、なぜ、彼女に黙って、青森へなんか行ったんでしょうか？　サングラスの男に脅迫されて連れて行かれたという感じもしませんが」

亀井が、首をかしげた。

十津川は、ちらっと、壁時計に視線を走らせてから、

「だから、二人とも、東京鉄道同好会の会員ではないかと思っているんだよ。共通の話題を持っていたからこそ、藤代は、サングラスの男と、出雲大社に参拝し、鳥取砂丘に行き、鳥取で同じ旅館に泊まったんじゃないだろうか。共通の話題というのは、もちろん、鉄道だ。サングラスの男が、爆破予告の犯人として考えてみよう。これも、北野さんの話だが、三月二十六日の出雲1号の車掌二人の証言で、一つのことがわかった。翌二十七日の午前三時に、問題の男が3号車の通路に出て、窓から、外を見つめていたというんだよ。他の乗客が、寝静まっているときにだ。彼が犯人とすれば、午前三時に、爆破すべき列車が、どの辺りを走っているかを

確認していたことになる」

「藤代が、それを見たんでしょうか？」

「それはわからないが、藤代の腕時計のアラームが、午前三時にセットされていたことから、こんなケースが考えられる。藤代は、出雲1号に乗ってから、サングラスの男と出会った。二人は、共通の話題である鉄道のことを話し合う。そのとき、藤代は、相手が午前三時という時間を気にしていることを不審に思った。そこで、自分の腕時計のアラームを、午前三時にセットした。恐らく、彼は、その時刻に目を覚ましたろうと思う。そして、サングラスの男の不審な行動を眼に留めたのかもしれない。それはわからないが、問題は、サングラスの男が、藤代のそんな態度に気付いたのではないかということだよ」

「それで、殺したわけですか？」

「恐らくね。鳥取では同じ旅館に泊まっているし、そのとき、午前三時に、藤代の腕時計のアラームが鳴って、係の女性を驚かせたりしている。サングラスの男は、藤代を殺しておいたほうがいいと考えたとしても、不思議はない。しかし、山陰で殺したのでは、四月吉日午前三時に狙う夜行列車が、『出雲1号』であることを知られてしまう。それで、わざわざ、青森まで連れて行って、殺したんだ」

「どうやって、連れて行ったんでしょうか？　脅迫して、無理矢理、連れて行った気配はないようですが」

「これは、一つの推測だがね。藤代は、鉄道に興味を持ち、国鉄全線二万キロの完乗を目指し

ていた。だが、東北方面には、行っていなかったといわれている。犯人は、その点を、巧みにくすぐったんじゃないかな。鳥取砂丘に午前六時に行けば、その日のうちに、上野から、『はつかり11号』に乗って、青森に行ける。山陰本線、播但線、新幹線と乗り継いでいく手段でだ。時刻表を見ながらの話に、藤代は、もともと好きなことだから、面白がって、乗ってしまった。月曜日一日、会社を休まなければならないが、藤代はもともと、仕事熱心なサラリーマンではなかったようだからね。自分が殺されるとも知らずに、犯人と一緒に、青森へ向かったんだ」

「東京に着いたとき、なぜ、恋人の氷室悠子に電話しなかったんでしょうか？」

「いろいろ考えられるね。藤代という男は、いたずらっ気もあったというから、青森に着いてから、彼女に電話して、驚かそうと思ったのかもしれない。山陰に行ったはずの恋人が、突然方向違いの青森から連絡してくれば、びっくりするだろうからね。また、東京から連絡したら、彼女に止められると思って、やめたかもしれない。とにかく、一日、会社を休むことになるわけだからね」

「しかし警部。新幹線事故で、藤代たちは、物理的に、青森には行けなかったんじゃないですか？」

と、西本刑事がいった。

「ああ、わかっている」と、十津川が肯いた。

「はつかり11号は、青森へ行く昼間の特急列車としては、最終だからね。この列車に乗れなかったとすると、夜行の『ゆうづる』に乗るより仕方がない。ゆうづる1号は、午後七時五〇分

上野発で、青森に着くのは、翌日の午前五時〇三分だ。しかし、藤代の死体が、青森駅のトイレ付近で発見されたのは、午前一時三〇分ごろだから、これでは間に合わないんだ」
「しかし、警部。この謎が解けないと、犯人を逮捕しても、殺人容疑で起訴できないんじゃありませんか？」
「わかっているが、まず、犯人を見つけ出さないことにはね」

2

午前三時になると、刑事たちは、一斉に、壁の時計を見上げた。
短針がぴったりと、3の数字を指している。
その時計の下には、国鉄本社から貰って来た日本全国の線路図が貼りつけてある。
午前三時の時点で、夜行列車が、どこを走っているかを示す地図である。
十津川は、眼の前に置かれた電話機を見すえた。事故があり次第、国鉄本社から連絡が入ることになっていたからである。
捜査本部を、重苦しい沈黙が支配し、その沈黙に耐えかねたように、若い桜井刑事が、
「ここでじっとしてたって、どうしようもないんだ」
と、吐き捨てるようにいった。
そのとおりなのだが、だからといって、この真夜中に、何が出来るだろう。
一〇分が過ぎた。

十津川は、自分のほうから、国鉄の北野に電話をかけた。
電話口に出た北野は、「ちょっと待ってください」といった。
十津川の顔に、一瞬、不安の色が走った。
「爆破されたんですか？」
「いや。まだ、全国の管理局からの報告が入っていないんです。あっ、今、北海道からの報告が入りました。大丈夫です。夜行列車は正常に動いています」
「そうですか――」
「しかし、毎日、午前三時に、胃が痛くなる思いが続くのは、やり切れませんね」
北野は、そういって、電話口で溜息をついた。
警察も同じだった。
夜が明けると同時に、刑事たちは、そうした鬱積した気持ちを晴らすように、捜査本部を飛び出して行った。
東京鉄道同好会の会員の洗い出しである。
男子会員一六〇人を、五人の刑事が三十人くらいずつ分担しての調査である。
まず、小、中学生の会員が無条件で消されていった。
次は、五、六十歳の高年齢の会員である。
残った会員は、四十六人になった。刑事たちは、その一人一人を、住所に訪ね、職場にも会いに出かけた。

亀井たちにとって有難かったのは、偽名を使ったり、でたらめな住所を書いていた会員がいなかったことだった。

三月二十六日の夜から二十七日にかけてアリバイのある者も、除去していくと、最後に残った名前はたった一つになった。

中河英男　二十九歳
目黒区目黒五丁目　コーポ・メグロ三〇六号

だが、刑事たちは、この男に会えなかった。

三月十六日に、突然、このマンションから引っ越して、行方をくらましてしまったからである。

3

亀井は、マンションの管理人に会った。管理専門の会社から派遣されて来ているという中年の小柄な管理人は、

「中河さんが、突然、引っ越されたときは、びっくりしましたよ」

と、亀井に向かって、人の好さそうな笑みを見せた。

「角張った顔で、眉の太い、身長は一七三センチくらいの男でしたか？」

と、亀井がきくと、管理人は、
「そうですね。そういえば、眉が太かったですねえ。背もそのくらいありましたよ」
「どこの運送会社が、引っ越しをやったのか覚えていませんか？」
「ご自分でやられたようですよ」
「自分で？」
「ええ。ライトバンをお持ちでしてね。それで、何回にも分けて、運んで行かれたんです。私も、お手伝いしましたが」
「そのとき、どこへ越すといっていました？」
「私も、必要があるんで、おききしたんですよ。あとで、お手紙なんかが来たとき、どこへ送ったらいいかわかりませんからね。でも、中河さんは、ちょっとまずいからといって、とうとう、教えてくれませんでした。手紙類が来ても、燃やしてくれればいいということで」
「急に引っ越すことになった理由は、何といっていました？」
「それも、ただ、急に引っ越すことになったというだけで、くわしいことは、話してくださらないんですよ。もともと、口数の少ない方でしたが」
「どんな仕事をしていたんですか？」
「なんでも、新宿にある建設関係の会社で、経理の仕事をなさっていたようですけど、そこもお辞めになったようですよ」
「仕事を辞めたといったんですか？」

「ええ。引っ越しのとき、人に使われるのが嫌になったから、これからは、自分で商売するんだと、おっしゃってましたから」
「今、部屋はどうなっています？」
「昨日、新しい人が入りました。ここは、場所がいいんで、入居希望の方が多いんですよ。中河さんが、何かなさったんですか？」
「ただ、会って、お話を伺いたいと思っているんですがね」
「そうですか。残念ですが、その後、こっちにも、全く連絡がないんですよ」
管理人は、申しわけなさそうにいった。

4

十津川は、東京鉄道同好会の会長で、旅行雑誌の編集者でもある小早川進を、四谷三丁目にある出版社に訪ねた。
何となく、長髪で、痩せた男を想像していたのだが、実際の小早川は、太った大男で、髪も短く切り、陽焼けした逞しい顔をしていた。
ときどき、こんなことがある。
「四日ほど、フィリッピンのセブ島に取材に行ってたものですから」
小早川は、陽焼けした顔をなぜ、マニラで買って来たという細いシガーを、十津川にすすめてくれた。

「東京鉄道同好会の中河英男という会員を、ご存知ですか？」
と、十津川は、きいた。
小早川は、白い歯を見せた。
「もちろん、知っていますよ。何回か、会合で顔を合わせたことがありますから」
「写真をお持ちですか？」
十津川がきくと、小早川は、眉を寄せて、
「どうなさるんですか？　中河さんが、警察のご厄介になるとは、考えられませんが」
「そういうわけじゃありません。同じ会員の藤代友彦さんが、青森で亡くなったのを、ご存知ですか？」
「ええ。新聞で見てびっくりしました。何でも、物盗りに襲われたと書いてありましたが、本当なんですか？」
「それは、まだわかりませんが、藤代さんが、中河英男さんらしい人と一緒にいたという証言があるのです。もちろん、中河さんが犯人だと断定しているわけではありません。われわれとしては、もし、同行していたのが、中河さんだったら、いろいろと、青森へ行ったときの事情をお聞きしたいと思っているんですよ」
「探してみましょう」
小早川は、自分の机の引出しをあけた。「同好会関係」と書いた分厚い茶封筒を取り出すと、中身を、机の上にぶちまけた。

コピーした同好会の会報や、名簿などと一緒に、写真も何枚か入っていた。
「ああ、これに写っていますよ」
と、小早川の示した写真には、どこかの駅のホームで、五人の男が並んでいた。
「これは、山口線のＳＬを見に行ったとき、津和野で撮ったものです。右から二人目が、中河さんですよ」
小早川がいい、十津川は、じっと、その人物を見た。サングラスをかけていないから、顔は、よくわかる。確かに、角ばった、眉の濃い顔である。意志の強そうな男だ。
五人の中には、小早川と、藤代の顔もあった。
「この写真は、いつ撮ったんですか？」
「去年の十月です。確か十日から三日間の旅行だったはずですよ」
「中河さんは、どんな人ですか？」
と、十津川がきくと、小早川は、変な顔をして、
「僕にきくより、本人にお聞きになったらどうですか？　住所は、この会員名簿に書いてありますから」
「ところが、先月の十六日に引っ越して、行方がわからないのですよ」
「へえ。知りませんでしたね。そういえば、三月の例会のとき、顔を見せないなと思っていたんですが」
「建設会社に勤めていたと聞きましたが」

「新宿東口にある水上建設の本社会計課です。一度、訪ねて行ったことがあるんで、知っているんです」
「それで、さっきの質問ですが、同好会の会員になるくらいだから、中河さんも、鉄道好きでしょうね？」
「もちろん、そうです。よく、中河さんと、鉄道の話をしましたよ」
「夜行列車のこともですか？」
「夜行列車は、うちの会で一番人気があります。中河さんも、お好きでしたね。国鉄の中では、一番優雅で、夢のある車両だというのが、中河さんの口癖でしたね」
「夜行列車について、不満や、非難を口にしたことはありませんか？」
「そりゃあ、現在の夜行列車に百パーセント満足しているわけでもありませんからね。うちの会でも、夜行列車に望むことというテーマで、座談会をやったことがあります。中河さんをはじめ、皆さんから、たくさん、注文が出ましたね。個室寝台は、料金が高いわりに狭苦しくて、窒息しそうだとか、食堂車をつけていない夜行列車もあるが、こういうのは不便で仕方がない、新幹線にも夜行寝台を作ってほしいとかです」
「中河さんの不満というのは、どんなものだったか覚えていますか？」
「そうですねえ。中河さんは、去年の十一月に、九州へ行く用があったとき、ブルートレインの富士を利用したんですね。そのとき、思い切って、個室寝台の切符を買ったんだそうです。航空料金よりも、わずかだが高いんですよ。ところが、彼にいわせると、ベッドの幅はせまい

し、テーブルは使いにくい。そのうえ、部屋全体が、まるでマッチ箱みたいで、息苦しくなってくるというのです。おかげで、眠ろうとしても、ぜんぜん眠れなくて、ひどい目にあったといっていましたね。あれだけ高い料金を取るんだから、もっと、ゆったりした個室寝台にすべきだというんです。私も、一度、個室寝台を利用したことがありますが、全く同感ですねえ。閉所恐怖症の人間だったら、あの個室に一時間入っていたら、変になるんじゃありませんか」

小早川は、辛辣にいったが、その顔は、笑っていた。

十津川の顔に、迷いの色が浮かんだ。

個室寝台のついた夜行列車は、そう多くはない。

はやぶさ	東京↕西鹿児島
富士	東京↕宮崎
あさかぜ1号・4号	東京↕博多
出雲1号・4号	東京↕浜田

これだけである。

出雲1号にも、個室寝台がついているという点では、一致しているが、中河が腹を立てたのは、「富士」の個室寝台だという。もし、彼が、その仕返しに爆弾を仕掛けようとするのなら、当然、出雲1号の個室寝台ではなく、富士のそれを狙うだろう。

「それだけですか？」
と、十津川は、きいた。
「中河さんが、夜行列車について不満をいったのは、これだけですね。あとは、不満というより、希望ですよ」
「どんなことですか？」
「今、新幹線は、東京から博多まで、一番早いひかりを利用しても、約七時間かかります。グリーン車のリクライニングシートを使っても、七時間は、しんどいですよ」
「それは同感ですね。私も、年齢のせいか、七時間の座り詰めは、身体にこたえますよ」
「僕も中河さんと同じ意見なんですが、新幹線に夜行を作れというんです。そうしないと、ますます、飛行機に客をとられてしまうんじゃないですか。夜の一〇時ごろに東京を出る新幹線を作ったらいいじゃないかというのが、中河さんの意見です。線路の幅が広いから、ゆれも少ないから、よく眠れるはずです」
「しかし、夜の一〇時に東京を出ると、午前五時前に博多に着いてしまうでしょう？」
「夜行列車だけは、二百キロなんかで飛ばさずに、百二、三十キロで走らせればいいんです。それだって、今までの夜行列車より、ずっと早いんですから」
「彼は、投書好きでしたか？」
「え？」
「夜行列車の個室寝台に、強い不満を持っていたわけでしょう。それを、国鉄に対する投書の

形で示したかどうかということなんですがね」
「投書したかもしれませんね。中河さんは、新聞にも、何回か投書したことがあると話していたことがありますから」
「中河さんは、怒りっぽいほうですか？　たとえば、夜行列車に対する不満を、国鉄へ投書したとする。それを無視されたら、国鉄に対して、腹を立てて、何かしようとするか、それとも、仕方がないと諦めるか、どちらだと思いますか？」
十津川がきくと、小早川は、苦笑して、
「難しい質問ですね。何かしようというのはどういうことですか？」
「そうですね。腹を立てて、激しい調子の手紙を、国鉄総裁宛に出すとか、いやがらせに、夜行列車に爆弾を仕掛けたと電話するとかといったことですが」
「まさか、そんな電話はしないと思いますが、国鉄総裁宛に、何か出すかもしれませんね。さっきの個室寝台のことですが、国鉄総裁は、実際に乗ってみたことがないんじゃないか、だから、こんな窮屈な個室を、高い料金で走らせているんだろうといっていましたからね」
「中河さんは、独身でしたね？」
「ええ」
「恋人はいなかったんですか？」
「恋人ですか。あまり、プライバシーについては話したことがなかったんですが、恋人はいたんじゃないかな」

「なぜ、そういえますか？」
「いつだったか、独身主義ですかときいたことがあるんですよ。そのとき、とんでもないといってから、ニヤニヤ笑っていましたからね。結婚する相手が決まっているんだなと、思いましたね」
「どこの誰か知りませんか？」
「そこまでは知りません」
と、小早川は、あっさり否定した。
「さっきの個室寝台の話ですが、東京から宮崎へ行く、ブルートレイン『富士』だといいましたね？」
「ええ」
「山陰の『出雲1号』の間違いじゃありませんか？」
「いや、そんなことはありません。帰って来てから、九州の写真を見せてもらったし、『富士』の前で撮った写真も見ましたから」
小早川は、はっきりといった。
鉄道の知識の豊富な小早川が、「富士」と「出雲」を間違えるとは思えなかった。
（爆弾予告の夜行列車は、「出雲1号」ではないのだろうか？）

5

十津川は、小早川と別れると、その足で、中河が勤めていたという水上建設本社を訪ねてみた。

上司の鈴木という会計課長に会った。まだ三十七、八の若さで、いかにも頭の切れそうな、それだけに、どこか冷たい感じもする男だった。

「中河君なら、三月十三日付で辞めていますが」

と、鈴木は、事務的にいった。

「それは知っています」と、十津川は、いった。

「退職の理由は、何ですか？」

「退職願には、一身上の都合となっていましたね。お見せしましょうか？」

「いや。結構です。本当の退職理由を知りたいんです。上司として、なぜ、やめるのかきかれたんでしょう？」

「一応はききましたが、とにかく、個人的な理由というだけなので、それ以上は、ききませんでした。誰にも、プライバシーはありますからね」

「あなたの考えはどうです？」

「そうですねえ。今の仕事に不満があったんじゃありませんか」

「というと？」

「中河君は、一流の学校とはいえませんが、電気関係の専門学校を出ています。それが、会計の仕事では、つまらなかったんじゃないか。それに、二十九歳で、係長にもなれていませんで

したからね。不満はあったと思いますよ」
「やめた理由は、女性問題じゃありませんか？」
「女性問題ですか？」
「同じ課の女性と、トラブルを起こしてということはありませんか？」
「そんな話は、全く聞いていませんね」と、鈴木はいった。
「お疑いなら、矢野君におきになったらいいと思います。中河君と机を並べていた男です」
「そうしましょう。ところで、建設会社だとダイナマイトは扱っていますね？」
「そりゃあ、建設現場では扱っていますが、この本社にはありませんよ」
「ダイナマイトを扱っている建設現場というのは、どこですか？」
「いろいろとありますね。東北新幹線工事も請け負っていますから、トンネル工事ではダイナマイトを使いますし、山を崩して、埋立工事をするときにも、ダイナマイトは必要です」
「最近、そうした現場で、ダイナマイトが何本か盗まれたことはありませんか？」
「ここではわかりません。そうした問題は、施設課の問題です。しかし、わが社に限って、そんな事故は起きていないはずです。危険物の保管は厳重で、部外者は、保管場所には入れないことになっていますから」
鈴木は、自信満々にいった。
十津川は、相手の胸元に眼をやって、
「襟についているバッジは、会社のものですね？」

「水上建設のバッジです」
「そのバッジをつけた人間なら、怪しまれずに、保管場所に入れるんじゃありませんか？」
「あなたは、うちの社員が、ダイナマイトを盗み出したとおっしゃるんですか？」
「今すぐ、施設課に電話して、盗難事件が起きてないかきいて頂きたい。もし起きていたら、何月何日で、何本のダイナマイトが盗まれたか調べてください」
「では、のちほど調べて連絡しましょう」
「今すぐです。電話してください」
十津川は、この男にしては珍しく、厳しい眼で、相手を見すえた。鈴木の顔色が変わったところをみると、十津川が、よほど、怖い顔をしたのだろう。
鈴木は、あわてて、電話を取った。
小声で、連絡していたが、受話器の送話口を手で押えて、
「公表はしませんね？」
「秘密は守りますよ」
「実は、三月十日に、千葉県の造成作業場で、ダイナマイトが盗まれているのがわかったそうです」
「三月十日に盗まれたということですか？」
「いや、十日に点検したとき、五本足りないことがわかったというのです。毎月十日に点検するので、二月十日から三月十日までの間に盗まれたことになります」

「盗まれたのは、ダイナマイトだけですか？　信管は？」
「信管も、二本盗まれていたそうです」
「その作業場に本社の人間が訪れたことがないかどうかきいてください。はっきりいえば、中河英男さんがです」
「ちょっと待ってください」
鈴木は、また、電話で問い合わせていたが、「三月九日の月曜日に、本社の人間が、一人、視察に来たそうです。作業場の責任者は、本社のバッジをつけ、身分証明書も持っていたので、何の疑いも持たなかったといっています」
「それで、その人間は、何者だったんですか？」
「施設課のほうでは、職員を派遣した覚えはないといっています。向こうの話では、うすいサングラスをかけた、角張った顔の男だったということです」
「中河英男さんに似ていませんか？」
「そういわれれば、何となく似ていますが、もう、うちの社を辞めた人間ですから」
「三月九日の月曜日、彼は出勤していましたか？」
「今、出勤簿を見ているんですが、休んでいますね。中河君が、ダイナマイトを盗んだとしてもですね。今もいったように、すでに、わが社と関係のない人間です。それを承知して頂きたいと思います」
鈴木は、関係ないを繰り返した。

「中河さんのことで何かわかったら、すぐ、連絡してください」
と、十津川は、いった。

6

十津川は、最後に、中河と机を並べていたという矢野という社員を、同じビルの喫茶室に連れて行き、話を聞くことにした。
矢野は、二十五、六歳で、野球チームに入っているとかで、陽焼けした、背の高い男だった。
「警察の人がききに来るところをみると、中河さんが、何かやったんですか？」
「何かやるような人ですか？」
と、十津川は、逆にきき返した。
「感情の起伏の激しい人でしたからね。普段は、無口のほうだし、大人しいんですが、怒り出すと、何をするかわからないってところがありましたね。今度、突然、会社をやめたんだって、僕には、何の説明もなしですからね」
「家を引っ越したのは知っていますか？」
「いや。ぜんぜん。へえ。引っ越したんですか？　どこへ？」
「われわれも、それを知りたいんですがね。会社の中に、中河さんのつき合っていた女性はいませんか？」
「恋人ですか？」

「そうです」

「それはいないんじゃありませんか。会社の女性には、あまり興味のないようなことをいっていましたからね。外にいたんじゃないかな」

「中河さんが、鉄道を好きだったことは、知っていますか？」

「ええ。休憩時間に、よく鉄道関係の雑誌を見ていましたからね。僕も嫌いじゃないから、ときどき、旅行の話をしましたよ。ブルートレインとか、ローカル線の話も。どっちかというと、陰気な人なんですが、鉄道の話をするときだけは、生き生きとした眼になっていましたよ。あの人は、うちみたいな会社じゃなくて、国鉄に勤めたらよかったんじゃないですか」

「山陰本線を走る『出雲1号』の話はしませんでしたか？」

「山陰の話は、まだ聞いたことがありませんでしたね。『富士』の話なら聞きましたよ。個室寝台が、値段の高いわりに、狭苦しくて、使いにくいと、怒っていたのを覚えていますから」

また、「富士」の個室寝台のことかと、十津川は、唇を噛んだ。

十津川は、爆弾予告犯人が狙っているのは、「出雲1号」ではないかと考えている。この列車に乗った藤代友彦という男が、殺されていて、彼の腕時計のアラームが、午前三時にセットされていたからである。

藤代を青森で殺した犯人は、中河英男の可能性が強くなった。

中河は、突然、水上建設を辞め、行方をくらました。三月十六日である。そして、彼は、ダイナマイト五本と信管二本を盗み出したらしい。

また、中河と思われる男が、「出雲1号」に乗り、三月二十七日の午前三時ごろ、列車の通路に立って、じっと、車窓から夜の景色を見つめていたという。

「四月吉日」に、爆破するための下見に違いないと、十津川は考えた。

だが、中河が、「出雲1号」を恨んでいたという話は聞くことが出来なかった。

中河が腹を立てていたのは、「富士」の個室寝台の狭苦しさや、使いにくさだったという。

東京鉄道同好会の会長や、会社の同僚が証言しているから、間違いないのだろう。

それなら、中河が狙う夜行列車は、「富士」でなければならない。「出雲1号」が狙われる理由がないのだ。

7

十津川の摑んだ情報を基にして、二回目の合同会議が、国鉄本社で持たれた。

三上刑事部長が、別の会議に出ているので、十津川の他に、警察側からは、亀井刑事が出席した。

国鉄側の出席者は、前と同じである。

警察側からの要求で開いた会議なので、十津川が、まず、中河英男のことを説明した。

「われわれが、この人物を重視するのは、三月九日に、ダイナマイト五本と信管を盗み出して、十三日に会社を辞めて行方をくらましていることです。国鉄総裁宛の爆弾予告が、このあとに行なわれています。そして、二十六日夜の『出雲1号』に乗ったのは、最後の点検のためだっ

た可能性があります。しかし、同列車内で、同じ東京鉄道同好会の藤代に会ってしまった。そこで、藤代を青森まで連れて行って、殺したのです。青森まで連れて行ったのは、『出雲1号』のことがマークされるのを防ぐためだったに違いありません」

「問題の中河英男の行方は、つかめそうですか？」

小野田副総裁が、きいた。

「彼の写真が見つかりましたので、全国の警察に配布して、協力を頼みました。もちろん、青森における殺人事件の重要参考人としてで、夜行列車の爆弾予告のことは、伏せてあります」

「逮捕の見通しはどうなんです？」

「今は、全力をつくすとしか申しあげられません」

「中河英男の住所は、目黒区目黒のマンションじゃありませんか？」

北野がきいた。

「そうですが、その住所から引っ越して、行方不明です。しかし、どうかしましたか？」

「実は、われわれのほうでも、一つの調査をしていたのです。四通の爆弾予告を、次々に送りつけて来たところからみて、犯人は、投書マニアではないかと考えましてね。特に、夜行列車について、不満や希望を、たびたび、国鉄に投書していたのではないか、それに対して、こちらから回答を出さなかったことに腹を立てたのではないか。そんなことを考えて、ここ一年間の間に送られて来た投書を調べてみたのです。夜行列車について、かなり強い不満なり怒りの投書をして来た人が、五人いました。その中に、中河英男の名前もありました」

「本当ですか！」

「中河英男は、三通の手紙を、国鉄の窓口に送って来ています。すべて、ブルートレイン『富士』の個室寝台に乗ったときの不満です。語調は、次第に激しいものになっています。これが、その三通です」

北野は、封書を三通、十津川の前に置いた。十津川は、消印の早い順に、中身に眼を通していった。

○十一月十四日

私は、今、九州の旅行から疲れ切って、帰って、この手紙を書いています。本来、楽しかるべき旅行が、少しも楽しくなく、疲れ切って帰って来たのは、一にかかって、行きに乗った夜行列車「富士」の個室寝台のせいなのです。

私は、鉄道ファンで、日本の鉄道の優秀さを認めています。

今度の九州行に際して、私は、思い切ってブルートレインの個室寝台の切符を買ったのです。飛行機料金と同じぐらいでさぞかし素晴らしい寝心地と思い、喜んで、東京駅から、「富士」に乗り込んだのですが、個室に入ったとたんに、その楽しい期待は、無残に吹き飛んでしまいました。あまりにも人間性を無視した構造だからです。

私は、とっさに刑務所を連想しました。いや、刑務所の独房より、もっと狭苦しいのではないかと思います。まず、座席兼寝台ですが、座席としては堅過ぎるし、寝台にすると、座席

のときの背もたれが邪魔になり、そのうえ、幅がせまいので、床に落ちそうになる。私は、平均的な身長、体重ですが、どうしても、あと三十センチは幅が必要です。

次に、洗面台は小さすぎて使いにくく、すぐ、水が外にこぼれます。蓋をすると、テーブルになるのは結構ですが、足がつかえて使いにくいのです。

腰を下ろしていると、眼の前が壁です。そこに、鏡が貼りつけてありますが、あれでは自分の顔と睨めっこです。私は、ナルシストでないので、参りましたよ。おかげで、私は、一睡も出来ずに、朝を迎えてしまいました。

麗々しく、個室寝台を標榜し、高い料金をとる以上、快適な旅と、安眠を約束すべきでしょう。

国鉄の幹部は、果たして、個室寝台に寝たことがあるのだろうか？　もし、ないのなら一度乗って、その息苦しさを味わって頂きたい。

この件について、国鉄側のはっきりした回答を頂きたいと思います。その回答の中に改善の約束があれば、私の不快な旅も、救われるからです。

○十二月五日

夜行列車の個室寝台について、手紙を差し上げてから、すでに、三週間がたちました。私は、その間、国鉄側から、誠意ある回答があるものと思い、それを待ち続けていたのに、とうとう、それは、空しいものになってしまいました。

国鉄に問いたい。
乗客の不満など、何とも思っていないのか？
乗せてやっているのだから、有難く思えというのだろうか？
個室寝台に対する不満は、私だけではない。私の周囲にも、息苦しい、寝つかれない、高過ぎるといった不満の声が多いのだ。
そうした人たちに対しても、回答をよこすのが筋ではあるまいか。
国鉄側の猛省を促したい。

○一月七日
新しい年を迎えるに当たって、私は、かすかな期待を国鉄に対して抱いていた。
国鉄総裁が、新聞、あるいはテレビで、愛される国鉄として、個室寝台の改善でも発表してくれるかもしれないと思ったからだ。しかし、そんなものは、夢でしかなかった。私の前の二通の投書も、恐らく、屑かごの中に捨てられてしまっているのだろう。
私は、国鉄に失望した。
国鉄なんか、破産してしまえ。

8

「回答は、一回もしていないんですか？」

と、十津川は、北野にきいた。

「物理的に不可能なんですよ。全国から寄せられる手紙に、いちいち、返事は出せないのです。ですから、皆様のご意見は、実際の業務に反映させて頂くということで、勘弁して頂いているわけです」

「筆跡は、爆破予告の手紙によく似ていますね」

「そのとおりです。ただ、十津川さんにおききしたいんですが、その三通を見る限り、中河英男が腹を立てているのは、『富士』の個室寝台です。それでも、十津川さんは、『出雲1号』が狙われているとお考えですか？」

「私も、同じ疑問を持っているんだが――」

と、小野田も、北野に続いていった。

十津川の顔が赤くなった。

「その疑問が、当然、出てくると思っていました。正直にいうと、私にも、はっきりした答えは見つからないのです。富士と出雲1号の個室寝台は、型は同じですか？」

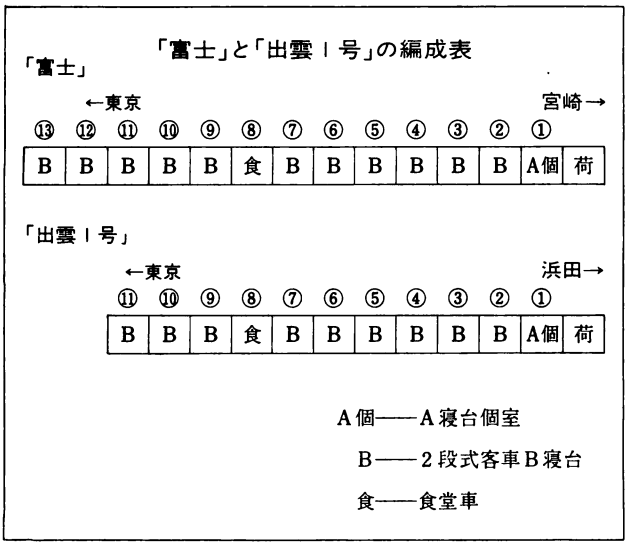
「全く同じ車両です。個室A寝台で、名称は、オロネ25です」

「列車全体はどうですか？」

「そうですね。全く同じではありませんが、似てはいます」

と、山本がいい、黒板に、二つの列車の編成図を書いた。

「このように、どちらも、最前部に荷物車、次に個室A寝台、次から七両目までが二段式のB



寝台、八両目が食堂車、そのあとに、また、B寝台になっています。出雲1号のほうは、二両少ないだけで、後は、全く同じ編成になっています」

「こういうことは考えられませんか」

と、北野が、十津川に向かって、

「その投書にあるように、中河英男は、富士の個室寝台について、腹を立て、また、国鉄側の回答のなかったことに腹を立てていた。それが嵩じて、富士を爆破してやろうとまで思いつめた。しかし、富士に乗って、下調べしたのでは、見つかったとき困る。そこで、車両編成の似ている出雲1号で、下調べしたんじゃないか」

「しかし、北野さん。編成が同じ夜行列車は他にもあるんじゃありませんか？」
と、十津川がきいた。
北野が考えているうちに、山本が、
「東京発西鹿児島行の『はやぶさ』と、同じく東京発で、博多行の『あさかぜ1号』が、『富士』と全く同じ編成です。個室A寝台一、B寝台十一、食堂車一の編成です」
「それなら、なぜ、はやぶさか、あさかぜ1号で、下調べしなかったんでしょうか？」
十津川が、きいた。
「この二つの列車は、富士と同じく、東海道、山陽と走ります。問題の午前三時には、山陽本線を走っています。下調べに、はやぶさや、あさかぜ1号を使っていたのでは、警察や、国鉄の注意が山陽本線に集まってしまう。それでは困るので、山陰を走る出雲1号を使ったのではないでしょうか？」
「そういう考えもありますが――」
「反対ですか？」
「中河は、自分が、出雲1号に乗ったのを知られまいとして、藤代友彦を、わざわざ、青森まで運んで殺しているのです。もし、本当の狙いが、富士だとしたら、なぜ、藤代を青森へ連れて行って殺したのか、わからなくなります」
「しかし、十津川さん」と、小野田が、眉を寄せた。
「中河が、出雲1号を狙う理由は何だと思われますか？　富士ならば、その三通の投書でわか

りますが、出雲1号では、全く、動機がわからないんじゃありませんか？」
「そのとおりです」
と、十津川は、正直に、肯いた。
「では、十津川さんは、動機がわからないのに、狙われるのが、出雲1号だと、予想されるわけですか？」
小野田の言葉には、軽い皮肉が感じられた。
合同会議の意見は、狙われる夜行列車について、完全に、意見が分かれてしまった。
国鉄側は、一八時〇〇分東京発の宮崎行の「富士」だと予想した。
それに対して警察は、いぜんとして、その一五分後、一八時一五分東京発の「出雲1号」を予想していたからである。

9

意見が分裂したまま、第二回の合同会議が終わり、十津川は、亀井と、国鉄本社を出た。
すでに、午後六時を回っていて、遠くのホームでは、夜行列車が、青い車体をくねらせるようにしながら出発して行く時間である。
「カメさんの意見を聞きたいんだが」
と、十津川は、地下鉄のホームに向かって歩きながら、亀井にいった。
「狙われているのが、出雲1号か、富士かということですか？」

「そうだ。カメさんは、どちらだと思うね？　正直なところをいってもらいたいんだ」
「警部も、自信が持てないんですか？」
「正直にいうと、そうなんだよ」と、十津川は、苦い笑い方をした。
「小野田さんがいったように、出雲1号が狙われる理由がわからないからね」
「そうですね。冷静に考えると、富士のほうに軍配をあげたくなりますね」
「カメさんも、そう思うかね」
「ただ、富士が狙われているとすると、いろいろと、疑問が出て来ます」
「どんな点だね？」
「富士の場合、動機は、中河の三通の手紙です。しかし、三通目の手紙は、一月七日になっています。それから、爆破予告までに、丸二カ月あります。その間、犯人は、何をしていたんでしょうか？　ダイナマイトを盗んだのも三月に入ってからだし、会社をやめて行方をくらましたのも三月です。出雲1号に乗って下調べをしたのもですよ。すると、犯人は、二カ月の間、何をしていたのかわからなくなります」
「他にも、疑問があるかね？」
「別の夜行列車で、下調べをするというのがよくわからないのです。ある列車内で、要人を誘拐しようという計画を立てているのならわかります。それなら、同じ編成の列車で実験してみるのも悪くはないでしょう。しかし、今度の事件は、違うと思うのです。犯人は、午前三時に、夜行列車を爆破すると予告して来ています。そのために盗み出したと思われるダイナマイトは

五本です」

「その量だがね。国鉄の技術部に問い合わせてみたんだが、車両一両分を破壊するのが、やっとだろうといっていた。もっとも、高速で走っている列車のうち、一両が破壊されたら、列車全体が脱線転覆するかもしれないが」

「私も、そう思います。そこで、三月二十七日の午前三時に、出雲1号の車内での中河の行動が気になるのです」

「車掌の証言では、中河は、通路に出て、じっと、窓の外を見つめていたそうだ」

「午前三時に、出雲1号が、どこを走っているかを知りたかったんじゃないでしょうか？　場所というよりも、駅に停まっているか、平地を走っているか、鉄橋上か、トンネルの中か、そうしたことを知りたかったんじゃないかと思います」

「私も、その点は、カメさんに賛成だよ。今日、会議の席で見せられた中河の三通の投書だがね。八ツ当たりめいたところもあるし、冷静さに欠けてもいるが、彼なりの正義を要求している面もある。夜行列車を爆破するのは、中河にとって、恐らく正義なのだろう。だから、国鉄に対しては腹を立て、列車は爆破するが、他には、被害を与えたくないと考えているのかもしれない。何百人という乗客を危険にさらすわけだから、へ理屈もいいところだが、人間の考えなんて、そんなものだろうと思うね」

「私も、それで、中河が、午前三時に、通路にいて、窓の外を見つめていたんだろうと思うのです。ところが、列車の編成は同じでも、富士や、あさかぜ1号では、出雲1号と、午前三時

に走っている場所が違います。周囲の状況が違う列車で、果たして、下調べが出来るものでしょうか？」

「だがね。国鉄さんのいうことも、もっともなんだよ。出雲1号が狙われているとしたら、その理由は、何なのか、それがわからない限り、向こうさんを説得するのは難しいね」

十津川は、小さな溜息をついた。

国鉄側と、警察の意見が分かれていては、犯人に対する対応力も、当然、弱まってくる。

一週間後とか、十日後に爆破されるというのなら、その間に、意見の調整も可能だろう。

だが、爆破が行なわれるのは、あと、数時間後の四月四日の午前三時かもしれないのだ。

「中河英男が、出雲1号を狙う理由を知りたいですね」

と、亀井がいった。

「それもだが、一刻も早く、中河を見つけ出したいよ」

と、十津川がいった。

第十章　大安吉日（たいあんきちじつ）

1

鳥取から帰ったあと、悠子は、しばらく、ぼんやりとしていた。

藤代が、自分との約束を守って、鳥取の砂丘へ行き、写真を撮ってくれていたのがわかったのは嬉（うれ）しかった。

青森で殺されたと聞いたとき、ひょっとして、藤代には、他に女がいて、その女に会いに行ったのではないかという疑いが、彼女の胸をかすめたのだ。

その疑いは、どうにか消えてくれた。出雲大社にも行ったと、警察が教えてくれた。

しかし、なぜ、自分に黙って青森へ行ったのだろうかというわだかまりは、まだ、悠子の胸に残っている。

会社に行く気にもなれないのは、そのためだった。

十津川警部の話では、東京鉄道同好会の中河英男という男が、出雲1号で一緒になり、青森まで連れて行って殺したらしい。しかし、悠子は、藤代と一緒に、同好会に出たことはなかっ

たし、中河英男という男にも会ったことはなかった。

もし、その男が捕まったら、まず、なぜ、青森へ行ったのか聞いてみたい。たとえ、相手が犯人だとしても、藤代が一緒に行ったということは、彼にも、青森へ行く用があったのだろう。その理由を知りたいと思う。

夕食もとらずに、ぼんやりと横になっていたが、一〇時近くなって、悠子は、やっと起きあがり、アパートの入口のところに並んでいる郵便受のところまで出てみた。

藤代が死んだとわかってから、郵便受を見ていなかった。彼からの手紙は、もう来ないと思うと、見る気になれなかったからである。

広告が、何枚も入っていた。が、それと一緒に、絵ハガキが二枚出てきた。

悠子の顔が、ぱっと輝いた。

藤代が、山陰から出した絵ハガキだったからである。

一枚は、出雲大社の絵ハガキだった。

〈無事、出雲市に着きました。

列車の中で、中河という友人に会いました。鉄道好きの友人です。

どうも、この友人の素振りがおかしいので気になります。

出雲大社に参拝したあと、ちょっと寄り道をして、鳥取へ行くつもりです。

出雲市にて　三月二十七日朝　藤代〉

もう一枚は、鳥取の絵ハガキで、通信欄には、次のように書いてあった。

〈今、鳥取の白砂荘という旅館でこれを書いています。明日朝早く、砂丘を見に行きます。そのあと、ちょっとした遊びをするつもりですが、それは、あとで教えます。
この次は、どうしても、君と一緒に来たいね。

鳥取にて　三月二十七日夜　藤代〉

なつかしい藤代の字である。もし、彼が生きていたら、一緒に、この絵ハガキを見たに違いないのだ。
中河の名前が書いてある。
警察は、この男に殺されたのだろうといった。
〈どうも、この友人の素振りがおかしいので気になります〉
と、藤代は、書いている。
中河のほうでも、藤代に、何か気付かれたと思ったのだろう。だから、藤代を消したのだ。
しかし、それが、何だったのかは、この手紙でもわからない。つまり、藤代が殺された本当の理由がわからないのだ。
あの十津川という警部は、鳥取まで一緒に行ってくれたし、藤代の泊まった白砂荘という旅

館も見つけ出し、彼と一緒にいた男のことも調べてくれた。

しかし、何か隠している。大事なことを、話してくれていない気がしていたのだが、それが、藤代が殺された本当の理由でもあるのではないのだろうか。

第一、藤代が殺されたのは、青森駅のトイレ近くである。だからこそ、青森県警が、捜査に乗り出したのだ。

警察のことには素人の悠子でも、殺人事件は、死体が見つかった地区の警察が捜査に当たるのだということぐらいはわかる。

それなのに、突然、東京警視庁の警部が、青森まで飛んで来た。それだけではない。悠子と一緒に、飛行機を乗り継いで、鳥取まで行ってくれたのだ。

単なる殺人事件なら、こんなことはしないだろう。

2

（いったい、何があるのだろう？）

藤代からの二枚の絵ハガキを見ている間に、悠子は、それを知りたくなった。

藤代が、ただ、物盗りのためか、喧嘩のあげくに殺されたのなら、警視庁の刑事が、青森県警の事件に、介入してくるはずがない。

藤代は、何か大きな事件に巻き込まれて殺されたのかもしれない。それなら、十津川が、飛び回って、藤代の足跡を追ったことも肯けるのだ。

（しかし――）

藤代は、悠子がそうであるように、平凡な男だった。多少の茶目っ気はあったが、小説や映画の中の主人公のように、危険なことに首を突っ込むような男ではなかった。

小説や映画なら、麻薬事件に巻き込まれてとでもなるのだろうが、日ごろの藤代のことを考えると、そんな話は信じられないのである。

ふと、悠子は、十津川が、藤代の腕時計に、しきりに拘っていたのを思い出した。正確にいえば、アラームが、午前三時にセットされていたことにである。

その腕時計は、返してもらっていた。

殺人事件の証拠品ではなかったし、藤代の形見になってしまったものなので、悠子に返してくれたのだろう。

悠子は、タンスの引出しを開け、藤代の腕時計を取り出して、自分の腕にはめてみた。

アラームは、そのままにしてあるから、今でも、午前三時になると、金属的な音を立てる。

悠子は、デジタル時計の数字が刻々変化していくのを見ながら、十津川との会話を思い出してみた。

十津川は、藤代が、いつも午前三時に、腕時計のアラームをセットしていたかときいた。

藤代は、午前七時にセットしていた。それが、一番出勤の役に立つからだと、彼はいっていた。東京駅を発った日も、午前七時にセットしてあったはずである。

十津川は、藤代が午前三時にセットし直したのは、「出雲1号」に乗ってからだろうと考えているようだ。

藤代は、あの日、五時まで、会社の仕事をやってから、東京駅へ行った。もちろん、悠子もである。

疲れているから、朝まで眠るつもりだと、藤代はいっていた。「眼が覚めたら、多分、日本海沿いを走っていると思うよ」と、藤代は、いっていたのだ。

それに、出雲市着は、翌日の午前八時一六分である。午前七時に眼を覚ませば十分に間に合うのだから、いつものように、七時にアラームをセットしてあれば、丁度いいのである。午前三時に、アラームを直す必要は、全くなかったはずである。

それなのに、藤代の腕時計は、午前三時にアラームが鳴った。

彼は、何か理由があって、午前三時に起きる必要が出来たに違いない。

警察が、藤代の死に執着しているのも、どうやら、この午前三時という時刻に関係があるらしいと、悠子は思う。

しかし、それから先がわからないのだ。

藤代が死んだあとで、悠子の許に届いた二枚の絵ハガキには、いくら読み返しても、その謎を解くカギはなさそうだ。

十津川にきいても、教えてはくれまい。教えてくれる気なら、今までに、話してくれているに違いなかったからである。

悠子は、鳥取の砂丘を、十津川と見に行ったときのことを思い出そうと努めた。
藤代が泊まった旅館の女性は、夜中の午前三時に、彼の腕時計のアラームが鳴ったといった。しかし、あの旅館で、何かが起きたという話は聞かなかった。藤代も、笑って、何でもないんだといったという。
ということは、鳥取の旅館に泊まる前に、藤代は、アラームをセットし直したということではあるまいか。
そうなると、「出雲1号」の車内で、セットし直したとみるのが、一番当たっているような気がしてならない。
出雲1号の中での午前三時といえば、京都府の福知山近くを走っているはずである。
藤代の乗った「出雲1号」で何かあったのだろうか？

3

翌四日になってから、悠子は、国鉄に電話をかけてみることにした。
あの日の「出雲1号」で、事故が起きたという報道はなかった。出雲市に着いてから、藤代が出した絵ハガキにも、事故の文字はない。
だが、何かあったのではないかという気がして仕方がなかった。少なくとも、藤代は、午前三時に、何か起きると思って、その時刻に腕時計のアラームを合わせておいたのではないか。
国鉄のどこに電話したらいいのかわからなかった。

電話帳で見ると、広報というところがある。多分、ここに問い合わせれば、答えてくれるのだろうと考えて、悠子は、ダイヤルを回した。

「広報ですが――」

という男の声が聞こえた。

「山陰本線を走る出雲1号のことで、おききしたいんですけど」

「出雲1号の何でしょうか？　切符の予約でしたら、最寄り駅の窓口でお願いしたいと思いますが」

「そうじゃないんです。三月二十六日の午後六時一五分東京駅発の出雲1号のことです」

「その列車に、忘れ物でもなさいましたか？」

「いえ。その出雲1号で、午前三時に、何か事件が起きなかったか、それを、お聞きしたいんです」

「午前三時に――ですか？」

「ええ。午前三時に」

「ちょっと待ってください」

急に、相手の語調が変わった。「もし、もし」と、悠子が、呼んでみたが、受話器を置いて、どこかへ行ってしまったとみえて、応答がなかった。

五、六分、待たされたろう。しびれを切らして、電話を切ろうとしたとき、やっと、相手が出た。さっきとは違う男の人の声で、

「失礼ですが、お名前は、何とおっしゃるんですか？」
と、きいてきた。緊張した声である。
（何かある）
と、悠子は、直感しながら、
「ただの国鉄利用者ですけど」
「こちらとしましては、業務改善の参考にしたいと思いますので、一応、お名前と、住所を伺うことになっているんです」
（嘘だ）
と、とっさに思った。
簡単な電話での問い合わせに、いちいち、こちらの住所や名前を聞くというのは、解せない。第一、こちらが、本当の名前をいうかどうかわからないではないか。それが、業務の参考になるというのも、わからなかった。
「――ですけど」
と、悠子は、でたらめな名前と住所をいってから、
「三月二十六日発の出雲1号で、午前三時に、何か事件が起きませんでした？」
と、改めてきいた。
「なぜ、出雲1号のことを、おききになるのか、理由を教えて頂けませんか？」
と、相手は、また、きき返してきた。

悠子は、ますます、疑惑を深めながら、
「理由をいわなければ、答えて頂けないんですか？」
「出来れば教えて頂きたいのです。皆さまの国鉄として、利用者の声を反映させたいと思いますので」
「どんな事件があったのか教えて頂ければ、こちらも、理由を申しあげますけど」
「三月二十六日発の出雲1号は、終着、浜田まで、何事もなく運行しています」
「午前三時にも、何も起きなかったんですか？」
「起きていません。失礼ですが、午前三時という時間を、なぜ、お聞きになったんですか？何か理由がありますか？」
「何もなかったのなら、それで、いいんです」
悠子は、それだけいって、電話を切ってしまった。

4

悠子は、念のために、管理人の奥さんに、同じ国鉄の広報に電話してもらい、東北本線の混み具合をきいてもらった
案の定、相手は、こちらの名前や住所を、きかなかった。
やはり、業務の参考にするという言葉は嘘だったのだ。
出雲1号について、それも、三月二十六日発の出雲1号の午前三時の時点について質問した

から、相手は、あわてて、電話を代わり、悠子の名前や、住所をきいてきたのだ。

藤代の乗った出雲1号で、午前三時に、何かあったに違いない。事故として、形になって現われなかった何かだ。

藤代が殺されたのも、そのためではなかったのだろうか？

しかも、その何かは、ずっと、尾を引いているに違いない。だからこそ、十津川という警部が、走り回っているのだ。

それを知りたかった。

それがわかれば、藤代が、なぜ、青森で殺されたのかわかるのではないのか。

悠子は、外出の支度をすると、まず、銀行に寄って、十万円おろしてから、東京駅に回った。山陰本線の窓口で、出雲1号の切符を買うことにした。

藤代が、そうしたように、出雲1号で、出雲市まで行ってみたくなったのである。そうしたからといって、疑問に対する答えが見つかるかどうかわからなかったが、何もせずに、アパートの部屋に籠っているよりは、ましだった。

藤代は、3号車に乗った。それを考えて、最初は、3号車のB寝台にしようと思ったが、藤代は、一緒に行くときは、個室寝台でといっていたのを考えた。

それに、ひとりで考えながらの旅なら、他人と顔を合わせるB寝台より、ひとりっきりになれるA寝台のほうが、いいのではあるまいか。

そう思い、明日の切符といったのだが、十三日のものしかないという返事だった。

山陰へ行く便が少ないうえ、午前八時一六分に出雲市に着くという都合の良さが受けて、春や秋のシーズンには、出雲1号はいつも満席に近いのだという。特に、十四しかない個室寝台は、なかなか、手に入らないらしい。

悠子は、十三日の個室寝台券を買った。

1号車の1号室である。一番端(はし)の部屋だった。

帰宅してから、悠子は、四月のカレンダーの、十三日（月曜日）のところに、赤丸をつけた。

そのとき、四月十三日が、暦の上で、大安吉日だと気がついた。

十三の数字の下に、大きく「大安」と書いてあるのを、悠子は、複雑な気持ちで、しばらく見つめていた。

第十一章　謎を追って

1

緊張した、重苦しい日が続いた。

しかし、五日、六日、七日と過ぎても、爆破事件は起きなかった。

富士と出雲1号の二列車だけでなく、すべての夜行列車は、何の事故もなく、定刻どおりに運行された。

その間、警察では、必死になって、中河英男の行方を追った。

容疑は、青森における殺人。中河の写真は、全国の警察に配られた。が、中河は、どこにもぐったのか、いぜんとして、見つからない。

十津川には、不安が二つあった。

一つは、もちろん、夜行列車に、いつ、爆弾が仕掛けられるかということである。

警察と国鉄とでは、いぜんとして、狙われる列車について、意見が対立していた。

十津川たちは、一貫して、「出雲1号」のマークを主張し、国鉄は「富士」にこだわったま

までである。

もう一つの不安は、中河英男を、見つけ出すことが出来ても、藤代友彦殺しの容疑で、勾留できるかどうかということだった。

藤代と中河が、鳥取まで一緒だったことは、何人かの証言がある。出雲大社で一緒になった二人の女子大生。鳥取の旅館の従業員。タクシー運転手などだ。

しかし、藤代は、鳥取で殺されたわけではない。

青森駅のトイレ近くで、三月二十九日の午前一時三〇分ごろに、死体で発見されたのである。そのことと、カメラの中にあったフィルムから、二十八日の午後三時三〇分上野発の「はつかり11号」に乗ったものと断定された。それ以後の列車は、夜行列車になって、翌二十九日の午前一時三〇分までに、青森へ行けないからである。

だが、十津川が調べた限りでは、二十八日の午前六時に、鳥取砂丘にいた藤代たちは、絶対に、「はつかり11号」に乗れないのだ。

だから、中河が、見つかっても、三月二十九日の午前一時三〇分までには、青森まで行けないはずだと主張されたら、果たして、今の状態で、勾留できるだろうかという不安があった。

その謎を解くためにも、十津川は、「はつかり11号」に乗ってみる必要を感じていた。

物理的に乗れなかったとすれば、なぜ、フィルムに、上野駅や、郡山のホーム、それに、車窓に舞う粉雪、終着青森のホームと、はつかり11号のヘッドマークなどが写っていたかという疑問が残る。

もう一つ、盛岡と仙台の駅弁の包み紙がある。あの包み紙には、ゴム印で、三月二十八日の日付が入っていた。

この謎をどう解くかである。

しかし、十津川たちは、爆破予告に備えなければならないという切迫した問題を抱えていた。すでに、四月八日になり、危険地帯に入っている。「はつかり11号」に、実際に乗って調べてみる余裕がなかった。

十津川は、その謎解きを、青森県警の江島警部たちに委せることにした。向こうのほうが、東北本線にも詳しく、殺人事件一本にしぼって、捜査していけるはずだからである。

十津川は、電話を江島警部にかけ、「頼みます」と、いった。

2

十津川は、電話を切ってから、壁にかかっているカレンダーに眼をやった。

四月の一日から七日までが、朱色で消してある。今日八日の午前三時は、もう過ぎてしまっているから、四月中には、あと二十二日ある。十津川は、手を伸ばして、八日も、赤いサインペンで消した。

「もう犯人は、やる気がないんじゃないでしょうか？」

と、若い西本刑事が、疲れた顔で、十津川を見た。連日の緊張で誰もが疲れている。

「なぜだね？」

十津川は、カレンダーに眼をやったまま、きき返した。
「四月に入って、もう八日です。予告どおりなら、もう事件が起きているはずだと思うんですが」
「まだ八日といういい方も出来るんじゃないかね」
「国鉄の関係者の中にも、爆破予告は、単なるいやがらせではなかったのかと考え始めた人間がいると聞きましたが」
「そうであってほしいと思っているだけだよ。犯人は、人殺しまでやっているんだ。それに、ダイナマイト五本を盗み出し、会社も辞めている。そのあと、四通の予告状を、次々に、国鉄総裁宛に、送りつけて来ているんだ。そこに感じられるのは、周到な用意と、強烈な意志だ。われわれは、殺人容疑で彼を追っているが、予告のほうはマスコミに発表されていない。つまり、犯人は、自分の計画に支障が出来たとは、少しも考えていないはずだよ。だから、計画どおりやるつもりだとみるべきだよ」
「いっそのこと、すべてを、発表してしまったらどうでしょうか？」
と、いったのは、桜井刑事だった。
十津川は、眉を寄せて、
「どういうことだね？」
「犯人の中河英男に向かって、何もかもわかっているぞということを示してやるわけです。青森で、藤代友彦を殺したこと、出雲1号を狙っていること、千葉の建設現場でダイナマイト五

本と信管二本を盗み出したこと。そういうことは、すべてわかっていると、マスコミが発表したら、中河は、おじけづいて、計画を放棄するんじゃありませんか？」

「そりゃあ、駄目だよ」

十津川が答えるより先に、亀井が、苦笑しながら、若い桜井にいった。

「駄目ですか？」

「こっちの思いどおりに、中河が、計画を放棄してくれたらいいが、放棄しなかったら、どうなるね？　それとも、出雲1号はガードされていると考えて、別の夜行列車を爆破するかもしれない。国鉄側の話では、一日一九〇本の夜行列車が走るというんだ。犯人が、どの夜行列車でもいいと考えたら、防ぎようがあるかね？」

「問題は、他にもある」と、十津川が桜井にいった。

「君のいうとおり、犯人が計画を中止したとしよう。しかし、中河が捕まらない限り、中止したかどうかわからないんだ。四月一杯、パニックは続くよ。少なくとも、出雲1号に乗る人はいなくなるだろうし、国鉄側は、狙われているのは、富士だと信じている。そうなれば、富士だって、乗客はいなくなるだろう。いや、犯人は、ただ夜行列車としか予告状に書いていない。あの予告状のことも公けになれば、すべての夜行列車に、パニックが起きる。そう思わないかね？」

「しかし、警部。今のままでも、いつ爆破されるかわからないのでは、手の打ちようがないんじゃありませんか？」

桜井が、不満そうに、きき返した。

十津川は、あっさりと、「そのとおりだよ」と、若い部下に向かって、肯いて見せた。

「だから、毎日、出雲1号は、出発前に厳密にチェックし、四月からは、特別に、鉄道公安官二人に同乗してもらうことにしている。今のところ、これ以上の措置は、無理なんだ」

「国鉄側は、富士にも、鉄道公安官二人を乗せることにしたそうですよ」と、亀井が、いった。

「富士は、上りと下りがあるので、その両方にです」

「国鉄さんも、頑固だな」

と、十津川は、苦笑してから、

「今は、これ以上のことは出来んな。二人の鉄道公安官に、中河英男の写真を持たせて、乗客をチェックするだけだ。といっても、夜行列車だから、寝ている乗客を、いちいち起こしたり、のぞき込んだりは出来ない。チェックにも、当然、限界がある」

「それでさえ、問題になりかけているようです」

と、亀井が、いった。

「新聞記者さんかね？」

「そうです。さっき、北野さんから電話がありまして、記者さんたちが、最近、夜行列車に、鉄道公安官が乗り込んで、通路を歩き回っているが、あれは、何のためなのかと、ききに来たそうです。何とか誤魔化しておいたといっていましたが、このまま、公安官の乗車を続ければ、確実に、新聞に書かれますね。出雲1号と、富士の上り下りに、鉄道公安官が乗り込んでいる

のですから」
「そうなったら、中河は、他の夜行列車を狙うかもしれない。お手あげだね。一九〇本の列車のすべてを監視は出来ないからね」
「鉄道公安官の同乗を中止してもらいますか？」
「いや。続けたほうがいい。目下、他に打つ手がないんだからね。ただし、鉄道公安官には、いざに備えて、車掌室にでも待機してもらうことにしよう。通路を歩き回ると、目立って、書き立てられるからね」
「われわれで、東京駅に張り込んだらどうでしょう？」
と、西本が提案した。
「それで？」
「出雲1号が出発するのは、十番線ホームです。そこに張り込んでいれば、中河英男を逮捕できるかもしれません」
「中河は、東京駅から乗るとは限らんよ。出雲1号は、午前三時までに、横浜、熱海、沼津、浜松、名古屋、福知山と停まるんだ。犯人は、そのどこからでも乗ることが出来る。全部の駅に、毎日張り込みを行なうことは不可能だよ。国鉄側は、富士についても同じことをしてくれと要求するだろうからね。そんなことをするくらいなら、出雲1号の車掌に、中河英男の写真を持たせ、検札のときに、乗客の顔を見てもらうほうが効果がある。だから、これは、北野さんに話してある。出雲1号と、富士について、実施しているはずだよ」

「しかし、それも、万全じゃありませんね」
と、亀井がいった。
「わかってる。検札のときに、トイレに入っていれば、車掌と顔を合わさずにすむし、ベッドに入ったあとは、検札は出来ないからね」
「せめて、何日とわかれば、打つ手もあると思うんですが」
亀井が、いまいましげにいった。
「それなんだが、こちらも、一つ、バクチを打ってみようじゃないか」

3

「バクチといいますと？」
亀井たちの眼が、十津川に集まった。
十津川は、また、壁のカレンダーに眼をやった。
「中河は、四月吉日の午前三時と書いている。この吉日というのを、暦の上の吉日と解釈するんだ。四月のカレンダーでいえば、次の大安吉日は、十三日だ。どうだね？　この十三日にかけてみる。もし、この日でなければ、次の大安吉日は、四月十九日と考える」
「そういえば、出雲1号の行く先である出雲大社は、縁結びの神さまでしたね。大安吉日と関係がありますよ」
と、亀井がいうと、桜井が、眼を輝かせて、

「もし、それが当たっているとすると、中河英男の犯行の動機も想像がつくんじゃないでしょうか？」

と、十津川を見つめた。

「どんな風にだね？」

「中河は、二十九歳ですが、まだ、独身です。女がいなかったとは考えられません。結婚を約束した女がいたとします。ところが、その女が、他の男と結婚することになってしまった。大安吉日を選んで、出雲大社で結婚式をあげることになった――いや、それでは出雲1号が出て来ませんね。大安吉日を選んで、東京なり、横浜なりで、結婚式をあげ、出雲1号で、山陰へ新婚旅行に行くことになった。嫉妬にかられた中河は、その日に、出雲1号を爆破し、彼女を殺すことを計画した。こう考えるのは、どうでしょうか？」

「実は、私も、同じことを考えたよ」

「本当ですか？」

「ああ。だから、中河の女性関係を調べてみた。彼が働いていた水上建設には、親しくしていた女はいなかったようだから、他にいる女だろう。しかしねえ。桜井君。君のいうとおりだとして、中河は、なぜ、出雲1号を爆破する気になったんだろう？　自分を裏切った女を憎むのはわかるが、出雲1号を憎む理由がわからないだろう？　だから、私は、いったん考えた推理を捨ててしまったんだが」

「それは、新婚旅行に、出雲1号を使うからじゃないでしょうか？」

と、桜井が、いった。
「つまり、坊主憎けりゃ、袈裟までというやつかね？」
「そうです。憎いのは、自分を裏切った女だが、その女が、新婚旅行に利用する夜行列車の出雲1号も癪にさわる。そこで、女が乗る出雲1号を爆破することを考えた。私は、そう思ったんですが」
「しかし、桜井君。犯人の予告状を見ると、出雲1号という夜行列車そのものを憎んでいるように思えるんだがね」
「私も同感ですね」
と、亀井が、横からいった。
桜井は、急に、元気をなくした顔になって、
「私の推理は駄目ですか？」
「いや。中河の女性関係は、調べるべきだと思っている。そこから、突破口がひらけるかもしれないからね。それは、君にやってもらおう」
十津川は、若い桜井の肩を軽く叩いた。
「女ということで、思い出したんですが」
と、亀井が、十津川を見て、
「国鉄の北野さんの話だと、広報のほうに、女の声で、三月二十六日東京発の出雲1号で、午前三時に、何かあったんじゃないかと問い合わせて来たということです」

「ほう」
「爆破予告のことがあるので、相手の名前と住所を聞いたんですが、これが、でたらめを答えてきたそうです」
「女だったというのは、確かかね？」
「若い女の声だったといっています」
「それは、多分、氷室悠子だと思うね」
「殺された藤代友彦の彼女ですね？」
「そうだ。結婚を約束した女だよ。彼女とは、藤代の足跡を追って、鳥取の砂丘まで一緒に行ったんだが、彼女は、藤代の死に何かあると感じたらしい。私が、藤代の腕時計のアラームに拘っていたからね。それで、出雲1号のことを聞いて来たんだと思うね」
「国鉄では、何もなかったと答えたそうです」
「だが、彼女は、そうは思わないだろうね。聡明な女性だから、何かあると考えるに決まっている」
「新聞に、喋られると困りますね」
「その点は大丈夫だと思うよ。軽はずみなことはしない女性だよ」
十津川は、悠子の顔を思い出しながらいった。
一見、平凡に見える女だが、内に激しいものを秘めている。疑問を持ったら、それを、はっきりさせなければ、気がすまない潔癖さも持ち合わせているようだ。

青森から、飛行機を乗り継いで、鳥取へ行ったのも、そうした彼女の激しさや、潔癖さを示していると、十津川は思う。

彼女は、殺された藤代の愛情を信じていた。鳥取の砂丘の写真を撮ってくるといった藤代の言葉を信じ、それを確かめるために、十津川と一緒に、鳥取まで飛んだのだ。

今度、午前三時に拘っているのも、やはり、自分の愛した男が、なぜ殺されなければならなかったか、その理由を知りたくなったのだろう。

夜行列車の爆破予告のことを話してやったら、彼女は、納得するだろう。しかし、今、それを話すことは出来ない。

(一刻も早く、事件を解決したいな)

と、十津川は、悠子のためにも、そう思わないわけにはいかなかった。

第十二章　郡山（こおりやま）駅

1

北国の青森でも、ようやく、遅い春が顔をのぞかせた。
江島警部は、窓の外に見える桜の木に眼をやった。つぼみが見える。あと十日もしたら、咲き始めるだろう。
「青森駅殺人事件捜査本部」の看板を掲げて、すでに、十日になる。
被害者の名前も、容疑者の名前もわかっているのに、容疑者、中河英男の行方は、いぜんとして不明のままである。
「東京の十津川警部から、『はつかり11号』の謎を解明してくれという電話があったよ」
と、江島は、視線を、三浦刑事に向けて、いった。
「藤代たちが、三月二十八日のはつかり11号に乗れたかどうかでしょう？」
と、三浦は、時刻表をめくりながら、
「確かに、三月二十八日には、新幹線の上りで事故があって、二時間近く遅れています。当日

の朝六時に、藤代と中河が、鳥取の砂丘にいたとすると、はつかり11号には、乗れなかったことになります」

「ということは、二十九日の午前一時三〇分に、青森駅構内に倒れていることは出来ないことになるね」

「そのとおりです」

「それじゃあ、中河を逮捕しても、勾留も出来ないんじゃないかと、十津川警部は、いってたよ」

「そうでしょうね」

「しかし、藤代と中河は、二十八日のはつかり11号に乗ったんだ。写真と、藤代が、青森駅のトイレ近くで死んでいたことが、それを示しているよ」

「その写真ですが――」

三浦は、黒板に貼りつけてある十一枚の写真に、改めて眼をやった。写真の横には、これも、藤代の所持品の中にあった、盛岡と仙台の駅弁の包み紙のコピーが、ピンでとめてある。

上野駅の写真

ホームに入っている「はつかり」と、藤代が一緒に写っている。

郡山駅ホームでの藤代。ホームの柱に、「こおりやま」というプレートが打ちつけてあり、その柱を抱くようにして笑っている藤代。左手を前に突き出し、そこに、デジタル時計が見える。

その部分だけ大きく引き伸ばした写真では、1809の数字とSATのアルファベットが、はっきりと読みとることが出来る。

食堂車の写真
藤代が食事をしている。
車窓の写真
暗い夜空に、粉雪が舞っている。
青森駅のホーム
「はつかり11号」が写っている。

「藤代が写っているのは、恐らく、一緒にいた中河が、撮ったものでしょうね」
「この写真に、何か細工はないかね？　物理的に乗れない『はつかり11号』に、乗ったことになっているわけだが」
「ないようです。例えば、食堂車の写真ですが、この食堂車は、サシ481型というものです。食堂車には、いろいろの型があって、ナシ20型、サシ581型、オシ14型、サハシ153型、サハシ165型などあるわけですが、『はつかり11号』の食堂車は、間違いなく、サシ481型なのです」
「しかし、物理的に、三月二十八日のはつかり11号には、乗れなかったはずだからね」

と、江島は、首をかしげてから、
「別の日に撮った写真ということは考えられないかね？　一週間なり、十日前に撮っておいたフィルムを、カメラに入れておくことも可能だろう」
「別の日ですか」
「最初の上野駅の写真は、別に、日付が入っているわけじゃないから、果たして、三月二十八日に撮ったものかどうかわからないだろう？」
「確かにそうですが、郡山の写真では、藤代の腕時計に、ＳＡＴと出ています。三月二十八日の土曜日を示しています」
「それだって、指でボタンを押して、表示を変えられるだろう？」
「しかし、盛岡と仙台の駅弁の包み紙はいかがですか？　今年の三月二十八日の日付が入っています。どちらも、前に印刷された数字を消して、押し直した形跡はありません」
「そうか」
「それに警部、写真に写っているのは、犯人の中河ではなく、被害者の藤代のほうです。なぜ、被害者が、作られた写真を撮る必要があるでしょう？」
「うむ」
江島は、腕を組んで、考え込んだ。
「もう一つ」
と、三浦は、言葉を続けて、

「青森駅のホームに入っている『はつかり』の写真があります。列車の横に、車掌が一人立っていますね」
「ああ」
「この車掌について調べてみました。横顔がはっきりわかるので、すぐ、沢村という車掌だということがわかり、電話したところ、三月二十八日のはつかり11号に乗っていたと話してくれました。つまり、この写真に写っている列車は、二十八日のはつかり11号だということです。さらに、もう一枚の写真には、その列車から降りてくる藤代が写っています」
「つまり、三月二十八日のはつかり11号で、藤代と中河は、青森に来たことになるわけだ」
「そうです」
「しかし、二人は、はつかり11号には乗れなかったはずなんだ」
「そこが問題です。本当に乗れなかったかどうか」
三浦は、東京警視庁から電送されてきた数字に眼をやった。
そこには、いくつもの数字が書き並べてある。三月二十八日の朝六時に、藤代と中河が鳥取砂丘にいた。そのあと、「はつかり11号」に乗るための予想旅行図だった。

鳥取（28日）6・21→（はまかぜ2号）→姫路9・30
姫路9・41→（ひかり90号）→東京13・32
上野15・30→（はつかり11号）→青森（29日）0・13

「その数字を確認してみたかね？」
と、江島がきいた。
「電話をかけ、時刻表でも確認しました。新幹線の事故も、このとおりです。あと、可能性があるとすれば、飛行機を利用することですが」
「警視庁では、可能性のあるすべての航空便について、二十八日の乗客をチェックしたが、藤代と中河は、見つからなかったといっている。だから、二人は、飛行機は利用しなかったと考えていいだろう」
「しかし、そうなると、はつかり11号には乗れませんよ」

2

「だが、乗ったんだ。だからこそ、藤代友彦は、翌日の午前一時三〇分に、青森駅で、死体で発見されたんだよ。どうも、頭が痛くなるな」
江島は、いらいらして、歩き回り、煙草に火をつけた。
これでは、堂々めぐりではないか。
江島は、煙草の煙を大きく吐き出してから、
「とにかく、どちらかしかないんだ。藤代たちは、やりくりして、三月二十八日のはつかり11

号に乗って、上野から青森にやって来たか、それとも、はつかり11号に乗れなかったのかだ。乗れなかったのなら、この十一枚の写真と、二枚の駅弁の包み紙は、インチキということになる」

「どう考えても、藤代たちが、二十八日のはつかり11号に乗れたとは思えませんね」

「それなら、写真と駅弁はインチキということになる」

「しかし、インチキには見えませんが――」

「だが、どちらかだよ。写真が真実を示しているのなら、藤代たちは、三月二十八日のはつかり11号に乗ったんだ。乗れなかったとすれば、この写真は、真実を伝えていないのさ。君と小野君で、もう一度、この写真と、駅弁の包み紙を調べてみてくれ。その包み紙だって、ひょっとすると、作り物かもしれないからね」

「調べてみます」

三浦は、同僚の小野刑事と、肩を並べて、捜査本部を出た。

陽が暖かい。

「春だね」

小野が、眩しそうに眼を細めてから、

「調べるって、どう調べるんだね？」

「青森から、逆に、上野まで辿ってみようじゃないか。写真の一枚一枚と、駅弁を確認していくんだ」

「全部、本物に見えるがねえ」
「まあね。ただ、少しおかしいところもある」
「どこがだい？」
「例えば、食堂車での写真さ」
「おれは、よく撮れていると思うがねえ」
「藤代にピントが合っているから、彼はよく写っている。ただ、その周囲が、ぼやけているように見えないか？」
「多少はね。それが、どうしたんだ？　この食堂車が、サシ４８１型とわかったんだろう？」
「ああ。それはわかるよ。ただ、今もいったように、藤代以外に、四人の乗客が写っているが、いずれも、顔がぼけている。恐らく、露出を開放にして、ピントを藤代に合わせたからだろう」
「おれなんか、主役まで、ぼけちまった写真を撮ったことがあるよ。それに比べれば、立派なものさ」
「そりゃあ、そうだが」
三浦は、苦笑した。
食堂車で、藤代を撮った人間は、フラッシュを使っていない。周囲の人たちに迷惑をかけると思ったからかもしれない。というのは、藤代の所持品には、カメラ二台の他に、フラッシュなども入っていたからである。夜、フラッシュを使わないから、絞りを開放にして、撮ったの

だろう。

青森駅では、調べることはなかった。写真にあった「はつかり」が、三月二十八日のはつかり11号であることは、確かだったからである。

二人の刑事は、一一時二〇分発の「はつかり8号」に乗った。

車内は、五、六〇パーセントの乗客だった。自由席に腰を下ろすと、彼らの近くで、幼い子を連れた家族が、賑やかに、はしゃいでいる。

そうした平和な光景に接すると、三浦は、いつも、奇妙な違和感と同様に、ほっとするものも感じるのだ。

一時近くなってから、三浦たちは、昼食をとりに食堂車へ足を運んだ。テーブルに腰を下ろしてから、例の写真を出して、比べてみた。同じ造りの車両と再確認した。

盛岡と、仙台は、ともに、二分間停車である。

停車すると、交代で飛びおりて、問題の駅弁を買った。

包み紙を広げて、持って来たものと比べてみた。

全く同じものだった。日付も、同じように入っている。

「同じものだな」

と、小野が、小さな溜息をついた。

「あとは、郡山と、上野だが、トリックがないとすると、やはり、三月二十八日に、藤代は、はつかり11号で、青森へ来たことになる。犯人の中河もだ」

「しかし、物理的に、来られないんだろう？」
「そこが、問題でね」
三浦も、小さな溜息をついた。
郡山が近づくと、三浦は、藤代の写っている写真を取り出し、小野は、カメラに、フラッシュを取りつけた。
郡山にも、二分間しか停車しない。その間に、問題の写真と同じ構図で写真を撮るためである。
郡山着は、午後五時二二分だった。
列車が停まると、二人は、ホームに飛びおりた。
写真と同じ場所を探した。ホームには、何本も柱が立っているから、その一つだろうと思ったのだが——。
三浦の顔に、急に、当惑の色が浮かんだ。
「あれッ」
と、声を出した。
小野のほうは、カメラを構えながら、
「どうしたんだい。早く柱の傍で、ポーズをとってくれよ。時間がないんだ」
「無いんだ」
「何が？」

「文字板だよ。文字板が無いんだ！」
三浦は、近くにある柱を叩いた。
それでも、小野のほうは、とっさに、三浦が何をいっているのかわからなくて、
「文字板？」
「柱に、『こおりやま』という文字板がついてないんだよ」
三浦が、じれったそうに、声を高くした。
「全部の柱にはついてないんだろう。文字板のついている柱を探せよ」
「どの柱にも、文字板は、ついてないんだ」
「え？」
ベルが鳴った。が、三浦は、小野を制して、ホームに残った。事態が変わってきたからである。それを確かめなければならない。

3

ホームに、助役がいるのを見つけて、三浦は、声をかけた。
警察手帳を見せてから、
「ホームの柱に、駅名を書いた文字板がありませんね」
「ひらがなで書いたやつですか？」
「そうです」

「ああ、あれは、ありませんよ」
「なぜです？　どの駅にもついているものと思っていたんですが」
「最近、あれは、取り払う方向で進んでいますから、当駅には、全くついていません」
「国鉄の駅は、全部、柱の文字板が、無くなったわけですか？」
「いや、まだ残っているところもあります。秋田駅なんかには、まだあるんじゃないですか。国鉄全体としては、今、申しあげたように、取り払う方向に進んでいて、駅名の表示は、横書きの大きなものになっています」
助役は、ホームの中央辺りに、吊り下がっている大きなプレートを指さした。
「では、この郡山駅で、柱の文字板が無くなったのは、四月に入ってからですか？」
「いや、ずっと前です」
と、助役は、微笑した。
「じゃあ、この写真を見てください」
三浦は、藤代が、「こおりやま」という文字板のついた柱を、抱くようにしてポーズをとっている写真を、助役に見せた。
「それは、三月二十八日に撮った写真なんですが、柱の文字板が、ちゃんと付いています」
「ああ、これは違いますよ」
助役は、あっさりと、首を振った。
「違うって、どう違うんですか？」

「当駅じゃありません」
「しかし、文字板に、『こおりやま』とありますが」
「これは、多分、関西本線の郡山でしょう。私は、行ったことがないので、断定は出来ませんが、当駅以外で、郡山というと、関西本線の郡山しかありませんから」
「関西本線の郡山？」
青森に生まれて、青森で育ち、せいぜい、東京までしか旅行したことのない三浦は、関西に、同じ「郡山」という駅のあることを知らなかった。
小野が、ポケット版の時刻表を、コートのポケットから出して、ページを繰っていたが、
「確かにあるよ」
と、三浦に、示した。
関西本線は、名古屋――奈良と、奈良――大阪の二つに分かれている。
その奈良――大阪のほうで、奈良の次の駅が、郡山だった。
助役の話では、国鉄に、郡山という駅は、東北本線の郡山と、関西本線の郡山の二つだけだという。
だから、東北本線の郡山でなければ、関西本線の郡山としか考えられないのだ。しかし、それを確認するためには、実際に、自分の眼で確かめなければならない。
三浦は、県警本部の江島に電話をかけた。
江島も、「ほう」と、驚きの声を出してから、

「しかし、藤代の写真が、関西本線の郡山で撮ったものだとして、なぜ、そんな面倒なことをしたのかね？」

「わかりませんが、とにかく、関西本線の郡山駅に行って確認して来ます」

と、三浦はいった。

4

小野は、郡山から青森に帰り、三浦だけが、次のはつかり10号で、東京に向かった。

上野に着いたのは、午後一〇時近くである。

もう、大阪へ行く新幹線はない。三浦は、東京警視庁に、十津川警部を訪ねて、あいさつすることにした。

三浦の話に、十津川も、驚かされたようだった。

「そいつは、面白いね」

十津川は、そんないい方をした。

亀井刑事が、コーヒーをいれてくれた。三浦は、それを飲みながら、

「まだ、関西本線の郡山に、実際に行ってみていないので、断定はできませんが、この写真が、東北本線の郡山でないことだけは確かです」

「ホームの柱に、駅名を書いた文字板がついてない駅が増えているとは、知らなかったな。どの駅にも、ついているものと思っていたんだがね」

と、十津川は、笑った。

「毎日、電車に乗っていますが、身を入れて見たことがありませんからね」と、亀井が、いった。

「新宿駅の柱に、駅名を書いたプレートがついていたかどうか、わからないんです。毎日、乗りおりしている駅なんですが」

「私も同じさ。東京駅のホームの柱に、駅名が書いてあったかどうかと、きかれても、答えられないよ。駅なんだから、ついているだろうと思うくらいでね」

と、十津川もいった。

「恐らく、藤代と中河も、東北本線の郡山駅でも、ホームの柱に、当然、『こおりやま』という文字板がついているものと思い込んでいて、関西本線の郡山の写真で、ごまかせると考えたんでしょう」

三浦がいった。

「そして、私たちは、まんまと、欺されたというわけだ。しかし、藤代や中河が、なぜ、こんな面倒くさいことをしたかがわからないね」

十津川が、首をひねった。

「郡山の写真が、違うとすると、藤代たちは、三月二十八日のはつかり11号には、乗らなかった可能性が出て来ますね」

と、亀井は、いってから、

「そうなると、最初の上野駅の写真は、二十八日に撮ったのではなく、前もって、撮っておいたことにもなりますね」

「そうなんですが、食堂車の写真や、駅弁の包み紙の問題があります。はつかりの食堂車ですし、間違いなく、盛岡と仙台の駅弁なんです」

三浦が、いった。

その日、三浦は、毛布を借り、捜査本部の隅の長椅子で、眠らせてもらうことにした。

十津川たちは、午前三時を過ぎるまで眠らなかった。とうてい、眠れないのだと、十津川がいう。三浦も、それが気になって、長椅子で横になったものの、なかなか、寝つかれなかった。

5

四月九日の午前三時も、無事に過ぎた。

三浦は、赤い眼をしている十津川たちに礼をいってから、東京駅に向かった。あのぶんでは、十津川たちの睡眠不足は、当分、続くだろう。

午前八時二四分発の「ひかり131号」に乗り、大阪に向かった。

座席に腰を下ろし、東京駅で買った駅弁を広げて、朝食をとった。お茶を飲みながら、藤代たちが、なぜ、あんな写真を撮ったのだろうかと考えた。

わからないのだ。それに、盛岡と仙台の駅弁は、どうなっているのか。

新大阪着が、一一時三四分。

大阪駅までは、電車で四、五分である。
環状線のホームにあがると、奈良行の快速電車が何本も出ているのがわかった。
二〇分間隔である。
ジュラルミン製の銀白色のスマートな車体に、奈良の春日大社の鳥居の色にあやかったという朱色の線が入っている六両連結の電車だった。
一一時五五分発に乗った。
王寺駅や、法隆寺駅を過ぎるころから、車窓に、なだらかな山なみや、仏寺の塔が見え始め、奈良に近づいたことを教えてくれた。
四五分で、問題の郡山駅に着いた。
三浦は、カメラを下げて、ホームにおりた。
東北本線の郡山に比べると、はるかに小さく、可愛らしい感じの駅だった。
大きな表示板には、「こおりやま」と書かれ、その下に、「大和」の文字が見える。正式には、大和郡山なのだろう。
三浦は、ホームをゆっくり歩いて行った。
時間が時間なせいか、ホームには、ほとんど人影がなく、改札口のところにいた職員が、変な顔をして、三浦を眺めていた。
(あった!)
と、思った。

何本目かの柱に、「こおりやま」と、青地に白く書かれた文字板が取りつけてあったからである。

藤代の写真と同じだった。

三浦は、同じ位置で、カメラを構えて、写真を撮った。

ファインダーをのぞきながら、三浦は、背景が、はっきり写っていれば、簡単に、東北本線の郡山と違うことがわかったろうと思った。

しかし、藤代の写真は、バックがぼやけていて、彼の顔と、柱の「こおりやま」の文字板だけが、大写しになっている。腕時計の数字を示すように、前に突き出された左腕も、考えてみれば、巧妙に、背景をかくしているのだ。

三浦は、いったん、改札口を出た。

駅前には、なぜか大きな日時計があり、公衆電話ボックスが二つ並んでいる。

三浦は、その片方に入り、百円玉を、何枚も投げ込みながら、江島警部に連絡した。

「問題は、藤代たちが、なぜ、そんな面倒くさいことをしたかだな」

と、江島がいった。

疑問は、やはり、それへ戻ってくる。

三浦は、電話を切ると、駅の待合室に腰を下ろして、考え込んだ。

簡単な問題から片付けていこうと思った。

藤代は、ここへ来て、写真を撮った。東北本線の郡山駅に見せかけてである。

いつ撮ったのだろう？

東京から、わざわざ、この写真一枚を撮るために、ここへやって来たとは思えなかった。

東京からなら、ここへ来るよりも、東北本線の郡山へ行くほうが、楽だからである。上野から郡山まで、わずかに、二時間四〇分で行ける。わざわざ、東京から四時間以上もかけて、ニセモノの郡山の写真を撮りに来る必要はないだろう。

と、すると、関西方面に来たのを利用してということになる。

藤代は、三月二十六日に、出雲1号で東京を発ち、山陰にやって来た。

二十七日の午前八時半ごろ、出雲大社にいたことはわかっている。

そのあと、ここへ来たのではあるまいか？

三浦は、小野に貰った時刻表を広げてみた。

まず、山陰本線のページを開く。

出雲市発一〇時二二分「やくも6号」というL特急がある。これには、楽に乗れるはずである。

この「やくも6号」は、岡山行で、松江、米子と通り、米子からは、伯備線に入って、新見、倉敷を経て、終着岡山には、一四時〇五分に着く。

岡山からは、新幹線を利用すればいい。

うまいことに、岡山発一四時〇九分の「ひかり6号」がある。これに乗れば、新大阪着が、一五時〇八分である。

ここ郡山には、一六時には着けるはずだ。
「こおりやま」の文字板のついた柱の前で、写真を撮る。腕時計の数字は、いくらでも直せるから、デジタル時計の一八時〇九分というのは、あてにはならない。
次は、鳥取までの旅である。
藤代と中河は、同日の午後九時半ごろ、鳥取の旅館に入っている。つまり二一時三〇分だ。
出雲市から、ここまでの旅を、逆にしたらどうなるだろうか。
ここで写真を撮ったあと、すぐ引き返したとする。
新大阪に、一七時一〇分には戻れるだろう。
そして、新大阪一七時一二分の下り「ひかり27号」に乗る。岡山着が、一八時一〇分。
うまいことに、岡山からは、鳥取行が出ている。
津山線、因美線急行「砂丘」である。
「砂丘6号」は、一八時二六分岡山発で、これに乗れば、鳥取には、二〇時五八分に到着する。
つまり、午後九時半には、駅に近い鳥取の旅館に入ることが出来るのだ。
綱渡りめいたところがないわけではない。
しかし、午前八時半ごろ、出雲大社にいた藤代たちが、関西本線の「郡山」へ来て、写真を撮り、同日の午後九時半に、鳥取市内の旅館にチェック・インすることが、可能だったことだけは、確かである。
(まるで、子供の遊びだな)

と、思った。

日ごろ、時刻表を愛読したり、二万キロチャレンジなどしたりすることには、全く無縁な三浦には、関西本線の郡山を使って、東北本線の郡山に見せかけたり、また、そのために、列車を乗り継いで、走り回ったりするのが、子供の遊びのように思えて仕方がないのだ。もっとも、ゴルフに興味のない人間から見れば、ゴルフに熱中する人間は、玉転がしに夢中になる子供に見えるかもしれない。

多分、藤代のそうした遊びの心を、中河が利用して、彼を青森まで連れて行って、殺したのだろう。

6

切符を買い、三浦は、大阪行の快速に乗った。

真新しい電車なので、車内は、きれいで気持ちがいい。

三浦は、座席に腰を下ろすと、今までにわかったことを、手帳にメモしていった。メモしてみると、新しい疑問と、推理が浮かんできた。

藤代のフィルムは、最初が、上野駅で始まっている。これは、次の郡山がニセモノだったのだから、三月二十八日に、上野駅へ行って撮ったのではない。

前もって、撮っておいたのだ。

恐らく、そのときから、上野駅→ホームのはつかり11号→郡山の文字板→食堂車内→車

窓の景色→青森駅のはつかり11号という写真を並べることによって、あたかも、「はつかり11号」に乗って、青森に行ったように見せかけようと考えたに違いない。

恋人の氷室悠子によれば、藤代という男は、平凡なサラリーマンだが、いたずら好きでもあったという。

山陰旅行が決まったとき、関西本線の郡山駅が、頭に閃いたのかもしれない。いかにも、鉄道ファンで、いたずら好きの青年の考えそうなことだ。

となると、食堂車の写真も、仙台、盛岡の駅弁も、でっちあげたのだろうか。

もう一つ、大きな疑問が起きた。

「はつかり11号」に乗らなかったが、藤代は、二十九日の午前一時三〇分には、青森駅で、死体で発見されているのである。

では、どうやって、青森へ行ったのだろうか？

実際にも、「はつかり11号」に乗ったのか？　しかし、新幹線の架線事故で、間に合わないことは、はっきりしている。

（奥羽本線を使ったのではないだろうか？）

青森へ来るには、上野方面から、東北本線を使うルートと、北陸本線→信越本線→羽越本線→奥羽本線と、日本海沿いに来るルートがある。

特急列車としては、大阪←→青森間を走るブルートレイン「日本海」が有名である。

下りの「日本海1号」は、大阪→青森間一〇二三・五キロを一五時間半余りで結んでいる。

しかし、この列車のはずはない。

「日本海1号」は、夜行列車で、大阪発一七時一五分、青森には、翌日の午前八時四一分に着くから、間に合わないからである。

「日本海1号」の他には、昼間の特急「白鳥」がある。

三浦は、「白鳥」の時刻表を調べてみた。

これも、上り、下り各一本だけである。

白鳥（下り）　大阪発一〇時一八分
　　青森着二三時五〇分

三浦は、二三時五〇分という青森到着の時刻に注目した。問題の「はつかり11号」より、わずか二三分だが、早く青森に着くからである。

「白鳥」で青森に着いていれば、ホームで待っていて、二三分後に着く「はつかり11号」の写真は撮れるし、誰かを迎えに来たふりをして車内に入れば、「はつかり11号」から降りてくる写真だって撮れる。

問題は、藤代たちが、この「白鳥」に乗れるかどうかである。

三浦は、また、細かい計算に取りかかった。

藤代たちは、姫路九時四一分発の上り「ひかり90号」に乗れたことははっきりしている。

この「ひかり」が、新大阪に着くのが、一〇時二〇分である。

一方、「白鳥」は、大阪の次に新大阪に停まるが、新大阪発が、一〇時二三分になっている。

その間、わずか三分しかない。

新大阪駅は、在来線と新幹線が交差した形になっている。乗りかえには、いくら急いでも、四、五分はかかる。わずか三分では、ぎりぎりである。

(藤代たちは、「白鳥」にも乗れなかったのか)

だが、彼らは、青森に行ったのだ。

三浦は、もう一度、「白鳥」の時刻表を見た。

「白鳥」は、大阪↓新大阪↓京都↓敦賀(つるが)↓福井と停車する。京都から(正確には、山科から)東海道線と分かれて、湖西線に入る。

(京都だ)

と、思った。

新幹線のほうが、在来線よりスピードがあるから、新大阪で三分なら、次の京都では、もっと、時間の余裕が生まれるはずである。

「ひかり90号」が、架線事故を起こしたのは、京都の先だから、京都までは、順調に走っていただろう。

「白鳥」——京都着一〇時五〇分(二分停車)

「ひかり90号」――京都発一〇時四一分

思ったとおり、京都では、九分の余裕が出来た。「白鳥」は二分停車だから、実際には、一一分の余裕である。

京都駅も、新幹線と在来線は、ホームが別だが、一一分あれば、ゆっくり、乗りかえられるだろう。

三月二十八日、藤代たちは、「白鳥」で、青森に行ったのだと、三浦は、確信した。

しかし、まだ、疑問は残っていた。

7

その残った疑問を解くために、大阪駅に着くと、三浦は、駅長室を訪ねて、「白鳥」と「はつかり11号」の列車編成表を見せてもらった。

問題は、食堂車である。

どちらも、同じ、サシ481型の食堂車だとわかった。これなら写真を撮っても、同じに見えるはずだった。

他の車両も、同じ型式のものを使っている。車窓からの写真も、同じに見えるだろう。それに、青森に近づいてからなら、車窓に粉雪が舞っているのは、当然なのだ。

列車編成表を見ているうちに、駅弁の謎も簡単に解けた。

「白鳥」と「はつかり11号」の編成表

「白鳥」

←大阪　　青森→

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
自	自	自	指	指	グリーン	食	指	指	指	指	指
クハ481	モハ484	モハ485	モハ484	モハ485	サロ481	サシ481	モハ484	モハ485	モハ484	モハ485	クハ481

「はつかり11号」

←上野　　青森→

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
指	指	指	指	指	グリーン	食	指	指	自	自	自
クハ481	モハ484	モハ485	モハ484	モハ485	サロ481	サシ481	モハ484	モハ485	モハ484	モハ485	クハ481

「白鳥」に乗っていては、仙台の「押しずしさんさ時雨（しぐれ）」や盛岡の「南部牛めし」といった駅弁は、買うことは出来ない。

しかし、「白鳥」は、「はつかり11号」より先に、青森に着く。ここがポイントだ。

到着ホームで、「はつかり11号」を待っていて、降りて来る乗客にまぎれて、車内に入れば、一つの車両を歩くだけで、乗客の捨てた空の駅弁の二つや三つは、拾えるはずである。問題の二つの駅弁の包み紙は、そうして集めたに違いない。当日の日付が入っているのが、当然なのだ。

これで、「はつかり11号」の

謎は、すべて解けたことになる。

三浦は、礼をいって、駅長室を出た。

8

藤代友彦は、山陰旅行を決めたとき、いたずら気を出して一つの計画を立てた。

出雲——鳥取と回ったあと、「白鳥」で、青森へ行くことである。しかも、それを、あたかも、上野から青森へ行ったように見せかけてである。

うまくいけば、東北本線、湖西線、北陸本線、信越本線、白新線、羽越線、奥羽本線を、いっぺんに乗ったことになる。いかにも、鉄道好きが考えそうないたずらである。そして、まず、上野駅へ行って、写真を撮っておいた。

ここまでは、犯罪の匂いは、全くない。

三月二十六日の夕方、藤代は、恋人の悠子に見送られて、「出雲1号」に乗った。

東京駅で写真を撮ったのは、もう一台のカメラである。「出雲1号」の車内で、藤代は、中河英男に会った。

二人は、鉄道同好会の人間である。藤代は、自分の考えた「いたずら」を、中河に話したのだろう。

この時点では、中河は、まだ、藤代を殺そうとは思っていなかったはずだ。

しかし、中河は、次第に、藤代に、夜行列車の爆破計画を気付かれたのではないかという疑

いを持ち始めた。藤代は、腕時計のアラームを、午前三時にセットし直したのだから、何か、あやしいと思っていたに違いない。

中河の持っていた時刻表に、午前三時と書いてでもあったのかもしれないし、中河が、うとうとしたとき、寝言をいったのかもしれない。

とにかく、中河は、今のうちに、藤代の口をふさいでおいたほうがいいと考えたのだ。

しかし、山陰で殺すと、「出雲1号」が、マークされてしまう。

そのとき、中河は、藤代の話した「いたずら」計画を思い出した。自分も、ヒマだから、片棒担がせてくれと、申し入れた。

まさか、自分が殺されると思わない藤代は、喜んで承知した。二人は、関西本線の郡山へ行き、翌日の三月二十八日に、「白鳥」で、青森に向かった。

藤代のカメラの一台には、架空の「はつかり11号」の旅が記録されていく。

もう一台のほうでは、もちろん、出雲大社や、鳥取砂丘や、「白鳥」の写真も、撮っていたに違いない。

青森に着いたあと、人の気配が少なくなったのを見まわして、中河は、駅のトイレ近くで、藤代を絞殺した。

「はつかり11号」に乗ったことの証明用フィルムは、残しておき、山陰旅行のフィルムは抜き取った。

さらに、現金を抜きとり、物盗りの犯行のように見せかける。

もし、東京駅に、氷室悠子が見送りに行っていなかったら、そして、上りの「ひかり90号」が、京都の先で架線事故を起こしていなかったら、中河の計画は、完全に成功していたろう。

青森県警でも、最初は、物盗りの犯行とみていたからである。

藤代は、出雲大社で、東京の女子大生二人に見られていた。鳥取の旅館では、従業員に見られている。しかし、遠い青森で起きた殺人事件には、彼らは、関心を持たなかったろう。

土、日の連休を利用して、「はつかり11号」で、東京から青森へ旅行して来て、不運にも、物盗りに殺されたとして、処理されたに違いないのである。

しかし、藤代には、恋人がいて、彼女は、藤代が「出雲1号」に乗るのを見送った。

さらに、新幹線の事故があって、藤代が、物理的に「はつかり11号」に乗れないことがわかってしまった。

中河にとって、もっとも不運だったのは、藤代の腕時計のアラームが、午前三時にセットされたままになっていたことである。

青森で藤代を殺したあと、中河は、どうしたろうか？

夜中である。タクシーを拾って、浅虫温泉にでもかくれたか、青森市内の深夜スナックにでも、もぐり込み、翌朝早く、東京へ戻ったか。

青森県警では、聞き込みを続けているが、まだ、中河の目撃者は、見つかっていなかった。

第十三章　女性会員

1

二十七歳の桜井刑事は、中河の女性関係を追っていた。

中河の勤めていた建設会社には、つき合っていた女性はいなかった。とすると、あとは、残るのは、

①親戚知人に紹介された女性
②住所の近くの女性
③東京鉄道同好会の女性
④中河のよく行くスナックのホステス

この四つぐらいだろう。

桜井は、その一つ一つを、洗って行った。

会社の同僚によると、中河は殆ど酒を飲まず、スナックや、バーには、あまり行ったことがなかったという。

となると、どこかの店のホステスに惚れたという線は、考えなくてよさそうである。

まず、④が、消えた。

次は、中河が住んでいたマンション周辺の聞き込みである。同じマンションに、独身の女性が三人住んでいたが、三人とも、中河の顔を見たことがあるといったが、名前さえ知らなかった。

中河のほうも、マンションでは、近所づき合いをしていなかったようである。

マンションの近くには、休日に、中河がよく行く喫茶店があった。この店には、なかなか美人のウエイトレスがいたが、調べてみるとマスターの奥さんだった。

中河が、ときどき行くパチンコ屋も、駅近くにあったが、ここには、彼が、結婚の対象に考えるような若い女性はいなかった。

次は、親戚、知人の線である。

中河の郷里は岩手の盛岡だが、両親はすでに死亡していた。二歳年下の妹は、商社員と結婚して、今、アメリカに住んでいる。

埼玉県の浦和に、叔母に当たる女性が住んでいるというので、桜井は、会いに出かけた。

年齢は四十二歳で、共稼ぎで小学校の教師をやっているというこの叔母は、姿を消してからの中河については、全く知らないといった。

「それまでだって、あまり、親しくしていたわけじゃありませんけどね」
「中河さんは、年ごろですが、見合いの世話なさったことはありませんか？」
若い桜井刑事は、ちょっと、ぎごちないきき方をした。桜井自身にも、最近、見合いの話が持ちあがっていたからである。
「一度、したことがありますよ」
「それで、どうなりました？」
「二年前でしたけどね。うまくいきませんでしたわ。それに、有難めいわくな顔をするんで、最近は、ぜんぜん。決まった女の人がいるんじゃないんですの？」
「中河さんは、そういっていましたか？」
「それらしいことを聞いた覚えがありますから」
と、その叔母は、いった。
この叔母以外に、親戚は、近くにいなかった。
残るのは、東京鉄道同好会である。
桜井は、東京鉄道同好会の会員名簿をもとに、女性会員の一人一人に当たってみた。
男性会員に比べて、二十九人と、人数は少なかったが、微妙な問題だけに、果たして、事実を話してもらえるかどうかという不安があった。
女性会員も、男性会員がそうであったように、年齢も職業も、さまざまだった。
中学生もいれば、ＯＬも、主婦もいる。会員名簿に年齢が記入してないので、会ってみるま

で、どんな女性か見当がつかなかった。

由美子という名前なので、何となく、二十二、三歳の若い女性を想像して会ってみると、五十歳近い主婦だったりした。

しかし、有難いことに、その荒木由美子という主婦は、会への出席がよく、そのうえ、噂好きだった。

一人娘が、すでに嫁いでしまい、夫と二人だけの自由な生活だけに、よく旅行に行くということだった。

「中河さんも、藤代さんも、よく知っていますよ」

と、荒木由美子は、お茶を入れ、和菓子を、桜井にすすめながら、嬉しそうにいった。

話し相手、それも、熱心な聞き手が現われたのを、喜んでいるのだ。

「藤代さんは、亡くなったんですってねえ。この間、会長さんにお会いしたとき、知らされて、びっくりしたんですよ」

別に、悲しんでいる気配はない。

「青森で、殺されたんです」

「そうなんですってねえ。まさか、中河さんが、殺したんじゃないんでしょうねえ？」

「まだ、犯人はわかりません」

と、桜井は、あいまいにいいながら、次の会合のときに、この女は、刑事がやって来たことを、他の会員に、しゃべりまくるだろうなと思った。いや、桜井が帰ったとたんに、近所の人

たちに、話したがるかもしれない。
「じゃあ、中河さんのことを、どうして、おききになりますの？」
「旅先で、藤代さんが、中河さんに会ったんじゃないかと思いましてね。中河さんを探しているんですが、行方がわからないんです」
「中河さんも殺されたんですか？」
由美子は、先走ったきき方をした。どうも、彼女の頭の中では、どんどん、都合のいいストーリーが出来ていくらしい。
桜井刑事は、それを、元に引き戻すように、
「いや、ただ行方がわからないだけです。それで、同好会の中に、中河さんの恋人がいると聞いたものですから、それが誰か知りたいわけです。荒木さんは、ご存知ありませんか？　荒木さんなら、会員のことは、何でも知っていると聞いたんですが」
桜井は、おだてるようにいった。
由美子は、くすぐったそうに、小鼻にしわを寄せていたが、
「そうですわねえ。たいがいのことは知っていますけどねえ」
「会員の中には、若い女性の方も多いんでしょう？」
桜井は、会員名簿を、テーブルの上に広げた。
由美子は、ぐいと、身を乗り出して、名簿を見ながら、
「この方なんか、若くて、美人で、男の会員の方には、人気がありますね。こちらの――さん

は、小学校の先生で、先生のわりに、お色気があって――」
と、一人一人、説明してくれた。
「この中に、中河さんとつき合っていた女性がいませんか？」
「そうですわねえ。中河さんという人は、あまり、私生活のことを、おっしゃらない人だから」
「じゃあ、一人一人、やっていきましょう。独身で、恋愛の対象になる女性だけです」
桜井は、ボールペンを取り出して、名簿に眼をやった。

2

「阿部君子さん。この方は、どうです？」
と、桜井は、アイウエオ順に、名前をあげていった。
「この方、どこかの区役所にお勤めで、二十四、五歳かしら。独身ですよ」
「中河さんとの間に、噂はありませんでしたか？」
「聞いたことはありませんねえ。地味な方で、あまり魅力のある人でもないし。でも、人のいい方なんですよ。ほんとに」
「飯島章子さんはどうです？」
「とても美人。でも、もう人の奥さんで、ご主人と一緒に、会に来られたことがありましたよ。二歳になるお子さんまであるんです」

「なるほど。次の岡裕子さんはどうです？　この方も、若い人だといわれましたね」
「岡さんは、昭和二十九年生まれというから、いくつかしら？」
「僕と同じ年ですから、二十七歳でしょう」
「刑事さん、二十七？」
「ええ」
「そうですの。でも、岡さんは、もうじき、ハイミスなんですねえ」
「中河さんとは、どうですか？」
「岡さんて、きれいで、頭がいい方なんだけど、結婚については、やたらに、理想が高くて。だから、二十七で、まだ、独身なんでしょうけどねえ」
「中河さんは、その理想に入らないわけですか？」
「そうらしいですわ。同好会の方は、みんないい方だけど、結婚の対象に考えてもいい人はいないって、岡さんが、私にいったことがありましたもの」
「小山ひろ子さんはどうです？　さっき、なかなか美人だとおっしゃっていましたが」
「その方は、駄目。もう、結婚相手が決まっていらっしゃるんですよ。同好会の会員じゃないらしいんですけどね」
「そうですか。次の真田功子さんは、いかがですか？」
「お年齢は、二十五歳だったかしら。明るくて、会でも、人気がある方ですよ。そう、いつだったか、中河さんと一緒に、新宿を歩いているのを見たことがありましてよ」

「二人だけでですか？」
「ええ。もちろん」
と、由美子は、肯いてから、急に、声をひそめて、
「とても、親しそうに見えましたわ」
「いつごろですか？」
「確か、去年の暮れで、十二月の五、六日ごろと覚えていますけど」
「恋人同士のようでしたか？」
「ええ」
「真田功子さん自身から、中河さんとの関係を聞いたことは、ありませんか？」
「実は、刑事さん。そのすぐあとの会のとき、きいてみようと思っていたら、真田さんが休んじゃったんですのよ。それで、聞けずじまいなんです」
由美子は、残念そうにいった。
桜井は、とにかく、この真田功子という女性に当たってみようと思った。ひょっとして、中河の行方を知っているかもしれない。
由美子に、独身で、結婚適齢期の女性会員に、印をつけてもらってから、桜井は、中央線の中野に回ることにした。

3

中野駅におりたときには、午後七時を過ぎて、周囲は、暗くなっていた。
歩きながら、桜井は、腕時計のバンドに付けたメタル製の小さなカレンダーを見た。
四月十一日。土曜日。午後七時四二分。
そんな数字が、いやでも、桜井の胸に苦く突き刺さってくる。
(いつ、犯人は、夜行列車の爆破をやるつもりなのだろうか?)
犯人にじらされていることが、腹立たしくて仕方がないのだ。
真田功子の家は、北口から歩いて一二、三分のところにあった。
大きくもなく、といって、小さくもない木造二階建ての家で、彼女は、そこに、両親と、姉、それに、高校生の弟と一緒に住んでいた。
桜井は、功子と、近くの喫茶店で、話をすることにした。男女問題なので、家族のいる前では、話しにくいだろうと思ったからである。
丸顔で、背の高い、平凡な感じの娘だった。功子は、新宿西口にある銀行で働いているといってから、
「中河さんとは、何でもないんですよ」
と、笑った。
「しかし、去年の十二月ごろ、あなたが、中河さんと、新宿を歩いているのを見たという人が

いるんですよ。とても親しそうに歩いていたと」
「十二月？」
功子は、上眼づかいになって、考えていたが、
「ああ、映画を見て、食事をおごってもらったときかな」
「それで？」
「それだけ。新宿の歌舞伎町で、偶然、会ったんです。私は、見たい映画があって、出かけたら、中河さんと、会っちゃって。映画は、割り勘で見て、そのあと、ステーキをご馳走してもらいました」
「それだけですか？」
「ええ。中河さんと、一緒に映画を見に行ったのは、そのときだけなんです。あの人、いい人だと思うんだけど、何となく、親しめないんです。なぜだか、わからないんですけど」
「じゃあ、そのとき、中河さんが、誰かを好きだというような話はしていませんでしたか？同好会の誰かを」
「中河さんて、あまり、自分のことをしゃべらないんです。ひとのことは、いろいろと、きくくせに」
功子は、冷たい口調でいった。冷たいというより、そっけないといったほうが正確かもしれない。昔、中河を好きだったとか、今も好きだという感じは、全くなかった。
桜井は、失望した。

「じゃあ、中河さんが、つき合っていた女性を知りませんか？」
あまり期待しないで、桜井は、きいた。
若い女性は、噂好きだが、自分が無関心な男については、何も知ろうとしないだろうと思ったからである。
「さあ」
と、功子は、熱のない表情で、考えていたが、急に、「あっ」と、声をあげて、
「そういえば、長沼洋子さんが、中河さんのことを、何かいっていたわ」
「長沼洋子？」
桜井は、あわてて、名簿を見直した。荒木由美子が、印をつけた会員の中に、その名前はなかった。
「この人」
と、功子は、無印の会員を指さした。
「しかし、この人は、独身じゃないんじゃないかな？」
「三十五歳だけど、独身だそうですよ。ご主人と別れて、明大前で、小さなスナックをやっているんですって」
功子は、急に、眼をきらりと光らせた。そんな話題が、楽しいらしい。
「中河さんとは、どんな関係なんですか？」
「男の会員の誰だか忘れたけど、中河さんと、長沼洋子さんが、ラブ・ホテルに入るのを見た

とか、話してるのを聞いたことがあるんです。あれ、誰だったかなあ――」
「本当ですか？」
「聞いたのは、本当です。――さんだったかしら？」
では、長沼洋子という三十五歳の女が、中河の恋人だったのだろうか？
収穫はないかもしれないが、とにかく、会ってみるより仕方がなさそうである。

4

桜井は、新宿に出て、京王線で、明大前に行った。
駅の近くに、「ピエロ」という小さなスナックがあった。
明大の学生らしい若者が三人ばかり店にいた。
ママの長沼洋子は、色白で、ちょっと、きつい感じの女だった。
「どうぞ」
と、桜井に、コーラをすすめてから、
「あたしね。旅行が好きで、あの会に入っているんですよ。特に、ごとごと、列車にゆられる旅が好きで」
「中河さんのことを、聞きたいんですが」
「中河さんが、どうかなさったの？」
「行方がわからなくて、探しているんです。ちょっと、聞きたいことがありましてね」

「あたしは、知らないわ。お酒のほうが、よかったかしら？」
「いや、これで結構です」
と、桜井は、あわてて、コーラを、口に運んでから、
「実は、あなたと中河さんが、関係があったという人がいましてね」
「へえ」
洋子は、クスッと笑った。
「本当ですか？　ラブ・ホテルに入るのを見たという人がいるんですがね」
「ああ、あのときね」
と、洋子は、また、クスッと肩をすくめるようにして笑った。
「いつごろのことですか？」
「今年の一月の末か、二月の初めだったわ。昔の友だちと、新宿で会って、飲んだのよ。女同士で。別れたのが、一〇時ごろだったかしら。別れて、歩いてたら、中河さんが、酔って、ふらふら歩いているのにぶつかったのよ。あの人、泣き上戸なのかしらね。ひどく悲しそうにしてるから、何だか、可哀そうになっちゃって」
ふふっと、洋子は、笑った。
「それで、ラブ・ホテルですか？」
「多情仏心（たじょうぶっしん）って、ご存知？」
「聞いたことはありますが――」

「まあ、それね。でも、中河さんとは、そのとき、一回きり。あたしってね、男性より、旅行のほうが好きだから」

若い桜井を、からかうように、洋子は、ニッと笑った。

「それだけですか？」

「ええ。それだけ。あたしも、酔って、何となくって気分だったし、向こうだって、そうでしょうからね」

「同好会の中に、中河さんの彼女がいたと思うんですが、知りませんか？」

「さあ、あたしは、知らないわねえ」

「そうですか」

やはり、空振りだったなと、桜井は、落胆した。こんな有様では、中河の女を見つけ出すのは、なかなか、難しい。

（中河には彼女なんていなかったのではあるまいか？）

そんな気さえしてきた。

もう一人、二十三歳のOLに当たってから、桜井は、捜査本部に帰った。そのOLも、中河には、全く関心がなく、同じ職場に、彼がいると、嬉しそうに話してくれた。

5

「残念ながら、いくら調べても、中河の彼女というのが、浮かんで来ません」

桜井は、疲れた顔で、十津川に報告した。
「ぜんぜんかね？」
「ラブ・ホテルに一緒に行ったという女性が一人見つかりましたが、酔って、一回だけというわけで、中河の彼女ではありませんでした」
「それは、どんな女なんだい？」
と、亀井が、きいた。
「年齢は三十五歳で、結婚歴のあるスナックのママです。旅行が好きで、同好会に入っているということでした」
「中河より年上か」
「そうです。六歳年上です」
「魅力的な女性だったかね？」
「気の強そうな女です。やたらに笑うんで、頭に来ましたよ。こっちが若いんで、馬鹿にされてるんじゃないかと思って」
桜井は、本気で、嫌な顔をした。
十津川が、笑って、
「それは、君を可愛らしいと思ったんだよ」
「よしてください」
「つまり、姐御肌の女ということじゃないかな」

と、亀井が、いった。
「そういえば、多情仏心とかいってました」
「なるほどね」
「とにかく、中河の行方を知らないようです」
「そうか」と、十津川は、肯いた。
「引き続いて、調査してくれ」
「しかし、警部。いくら調べても、中河の女は見つからないんですが」
「同好会の女性会員は、まだ残ってるんだろう？」
「独身女性が、あと二人残っています」
「じゃあ、その二人を調べてくれ。それに、三十五歳のスナックのママに、もう一度、会って来たまえ」
「しかし、警部。あの女は、中河の行方を知りませんよ」
「ああ、知らないみたいだな」
「それなのに、また、会うんですか？」
桜井は、不満げな顔をした。
十津川は、微笑した。
「とにかく、その女は、中河と寝たんだろう？」
「そうです。今年の一月末か、二月の初めに、新宿で会って、ラブ・ホテルに行ったといって

います。二人とも酔ってたそうです」
「中河という男は、これといった親友はいなかったし、近所づき合いもなかった。だから、摑みにくい男なんだ。そんな男でも、酔って、一緒に寝た女には、何か自分の秘密を打ち明けているかもしれない」
「しかし、女は、何も知らないといっていましたが――」
「だが、多情仏心といったんだろう？」
「はい」
「それなら、彼女は、いろんな男と仲良くしているさ。彼女にとっては、中河は、その中の一人にしか過ぎないから、あっさり知らないといったのかもしれんよ。もう一度、ゆっくりきけば、中河のことで、何か思い出してくれるかもしれない。もう一つ、中河は、酔っていたんだろう？」
「そうです。泣き上戸だといっていました」
「何か、理由があって、酔っていたのかもしれん。会社では、中河が、あまり酒好きだという話は聞かなかったからね」
「といいますと――？」
「女にふられて、酔っ払っていたんじゃないかということさ」と、亀井が、いった。
「そんなとき、男は、他の女に誘われると、ふらふらっと、抱いてしまうんじゃないかね」

6

四月十二日。日曜日。仏滅。午前三時。

今日も、捜査員たちは、眠らずに、午前三時を迎えた。

十津川は、時計を見るのをやめて、窓の外の暗い闇を見すえていた。

曇り空で、星も見えない。

十津川が見すえているのは、闇の向こうにいる爆破予告の犯人だった。

名前も、中河英男とわかっている。写真もある。身長も、体重も、血液型もわかっている。

しかし、今、この男は、何処にいるのだろうか？　それに、いつ、何のために、夜行列車を爆破しようというのか？

わからないことは、他にもある。四通もの手紙を、続けて送りつけて来た理由だ。なぜ、犯人は、予告などして来たのだろうか？　なぜ、無警告に、いきなり、爆破しようとしなかったのだろうか？

こちらも、少しずつは、追い詰めてはいるのだ。

青森県警の捜査で、藤代と中河が、どうやって、三月二十八日に、青森へ行ったかがわかった。これで、今、中河を逮捕すれば、殺人容疑者として勾留することも、起訴することも可能になった。

（逮捕できれば、列車爆破は未然に防げるのだが）

そこまで考えたとき、十津川の背後で、ふうッという亀井たちの吐息が聞こえた。
一五分たったのを知った。
午前三時一五分。一五分過ぎても、事故発生の連絡が、国鉄側から入らなければ、まず安心ということになっていた。少なくとも、「出雲1号」と「富士」は、午前三時現在、無事に走っていることは間違いない。
「もう寝たほうがいいな」
と、十津川は、みんなにいった。
今度の事件の特異性から、十津川たちは、家に帰らず、捜査本部に泊まり込んでいた。
刑事たちは、休憩室に寝に行ったが、亀井一人が寄って来て、
「警部。今日は、四月十二日です」
と、亀井は、いった。
「そうだねえ。十二日なんだ」
「前に、警部は、賭けをしてみようとおっしゃいましたが、その考えは、変わっていませんか？」
「もちろん、変わってはいないよ。毎日出発する夜行列車を、われわれで警備するわけにはいかないからね。狙われる列車は、『出雲1号』と決める。それに、犯人が、四月吉日と、書いていることから考えて、四月の大安吉日と決めて行動すべきだと思っているよ。外れる危険もあるが、そのくらいの冒険をしないと、毎日、一九〇本も出ている夜行列車を護ることは、物

理的に不可能だからね」
「次の大安吉日は、十三日の月曜日です」
「わかっている。この日に賭けてみようと思っているよ。もし、十三日に何事も起きなければ、次の大安吉日の日、十九日だね」
「その十三日ですが、問題は、午前三時という時刻のことがあります。出雲1号に限らず、夜行列車は、その前日の午後出発します」
「なるほどね」
と、十津川は、肯いて、
「犯人の考えているのが、大安吉日の十三日の午後出発する夜行列車のことなのか、それとも、十三日の午前三時に、どこかを走っている夜行列車のことなのかということだな」
「そうです。犯人が、十三日午前三時に、出雲1号を爆破すると考えているとすると、われわれは、前日の午後六時一五分に、東京駅から、出雲1号に乗り込まなければなりませんが」
「つまり、今日の午後六時一五分ということだな」
「そうです。ただ、一般常識でいうと、大安吉日の日の出雲1号というと、その日に、東京駅を出発する出雲1号と考えます。当然、午前三時には、翌日の十四日になってしまっています。犯人の中河英男が、どう考えたかで、日時が変わってしまいます」
「犯人の予告状は、どんな順序で来たかな？」
十津川は、あわてて、黒板に眼をやった。

《夜行列車》　三月十六日
《午前三時》　十七日
《爆破決行》　十八日
《四月吉日》　二十日

という順序になっていた。

「四月吉日午前三時というつながり方じゃないんだな」

と、十津川は、ひとりで肯いた。

〈夜行列車午前三時爆破決行〉と続いてから、一日おいて、〈四月吉日〉の四文字が送られて来たのである。

文章としては、四月吉日の午前三時に、夜行列車の爆破を決行するということだろう。

犯人が、その順序どおりに送りつけて来なかったのは、受け取る側に、強烈な印象を与えようとしたためだと解釈した。

それも、もちろん、あるだろう。最初に、「四月吉日」の手紙ではなく、「夜行列車」の文字があったから、一層不気味な感じだったことは、確かである。北野も、そういっていた。

だが、他にも、意味があるのかもしれないと、十津川は、思い返した。

〈夜行列車午前三時爆破決行〉

これが、犯人の頭の中で、一つのフレーズになっていたのではないだろうか。

「四月吉日」の手紙が、一日おくれた理由は、十津川にもわからない。犯人側に、何か事情があったのか、単なる郵便業務のおくれなのかもわからなかった。

しかし、「四月吉日」が、「午前三時」には、かぶさってはいないことだけは確かなのだ。

犯人の中河は、東京鉄道同好会に入っていたから、鉄道の知識が、豊富だった。

夜行列車の出雲1号を爆破してやろうと思い立ったとき、「午前三時」という、普通の人の考えないような時刻にしたのは、国鉄側のいうように、その時刻が、もっともよく、夜行列車を象徴しているからだろう。

だから、犯人は、午前三時に夜行列車を爆破してやろうと、まず、考えた。肯けないことではない。

「四月吉日」は、別に考えたのではあるまいか。

となると、その部分だけは、一般的な常識に従ったのではないだろうか？

つまり、四月一日の出雲1号といえば、四月一日に、東京駅を出発するという考え方である。

「四月十三日に、東京駅を出発する出雲1号にかけてみよう」

と、十津川は、いった。

「では、今日出発する出雲1号は、無視しますか？」

「いや、一応、マークはしておこう。西本君と、安井君に乗ってもらう。あの二人なら、万一、爆破事件が起きても、何とか対処してくれるだろうと思うからね」

「桜井君はどうしますか？」

「彼には、引き続いて、中河の女性関係を洗ってもらうよ。何か出て来るかもしれないからな」

「警部は、今度の事件に、女性問題が絡んでいると思われますか？」

「正直にいって、その点がわからなくてね。男が女を殺してやるとかいうのなら、想像がつくんだが、あの爆破予告を見る限り、中河は、国鉄そのものに恨みを抱いているようにも見えるんでね」

「それで、国鉄側は、あくまでも、狙われているのは、ブルートレイン『富士』だと考えているんじゃないですか。それも、富士の個室寝台車をです。中河が盗み出したダイナマイトは五本だけです。これでは、全部使っても、一両の車両を破壊するだけの力しかありません。もちろん、一両を破壊すれば、全車両が脱線し、ときには転覆するでしょうが。そんなわけで、国鉄側は、富士に一両だけ連結されている個室寝台車が、狙われていると踏んでいるようです」

「動機は、個室A寝台に対する不満が嵩じてということかね？」

「そのとおりです。中河は、何通も、不満について投書したのに、国鉄側が無視したので、彼が、怒って、問題の『富士』の爆破予告にまで、突っ走ったんじゃないかという考え方のようです」

「なるほどね」

「一つだけわからないことがあるんですが」

「何だい？　カメさん」
「犯人は、なぜ、爆破を予告して来たんでしょうか？」
「うーん」
と、十津川が、小さく唸ったのは、その根本的な問題について、答えがまだ見つかっていなかったからである。国鉄側では、単純に、それを挑戦と受け取っているようだったが。
亀井は、言葉を続けて、
「もし、あの予告がなかったとしたら、われわれも、国鉄側も、全く無防備の状態で、犯人と対決しなければならなかったわけです。恐らく、中河英男という男も、捜査線上に浮かんで来なかったでしょうし、したがって、犯人は、夜行列車の爆破に、完全に成功したと思うのです。それなのに、なぜ、危険をおかして、予告して来たんでしょうか？　自己顕示だけなら、爆破しておいてから、極左グループのように、声明文でも、新聞社に送りつければすむことだと思うんですが」
「確かに、君のいうとおりだよ。だから、予告して来たというのは、それだけ、自分のやることに、自信を持っているからだとも考えられるんだがね」
「国鉄側は、挑戦だと見ているようですね」
「そう見るのが、無難だろうが――」
十津川は、言葉を切って、考えていたが、
「それだけとは、ちょっと違うようだね」

「どこがですか？」
「中河が、『富士』の個室寝台について、苦情を書いて送りつけて来た三通の投書を読んだろう？」
「はい」
「感想はどうだね？」
「だんだん、激しい調子になっていますね。あの個室寝台については、ブルートレインのファンの中にも、不満があります。料金が高過ぎること、狭くて使いにくいこと、そのくせ、なかなか、切符が入手できないことなどのせいです。一列車に、わずか十四枚の切符しかないわけですからね。したがって、中河の不満にも、一理あると思いましたよ」
「そうだな。同感だ。それ以外に、私が感じたことをいおう。あの三通に共通している文章の調子なんだ。君のいうように、だんだん、激しくはなっているが、共通しているトーンは同じだよ。それは、自分は絶対に正しいという思い込みだ。非は、すべて、相手方にあると決めてしまう。一種の正義感なんだが、偏った正義感とでもいうのかな。自分には寛大だが、他人に対しては厳しい人間なんだ。つまり、彼自身にしか通用しない正義感というものがあるということだな」
「わかる気がしますね。それと、爆破予告と何か関係がありますか？」
「これは、私の勝手な想像なんだがね。中河は、自分が、夜行列車を爆破するのは、当然だと思い込んでいると思う。彼なりの正義を振りかざしているつもりだろう。ただ、今もいったよ

うに、彼自身にしか通用しない正義感がある。それは、中河自身も拘泥しているんじゃないかと思うんだ。やみくもに、黙って爆薬を仕掛けるのは、彼自身の正義感にも反するんだろう」

「それで、爆破予告ですか？」

「中河は、三度、不満の手紙を国鉄に出している。ところが、返事は来なかった。中河は三通もの手紙が無視されたと思った。そこで、爆破を決意したあと、彼は、手紙を、次々に送りつけた。それを、また無視して、予告に気付かなかったら、気付かない国鉄側が悪いのだという気持ちじゃないかね。中河らしい皮肉でもあるんじゃないかね」

「なるほど」

と、亀井は、肯いたが、

「そうすると、中河の動機は、『富士』の個室寝台に対する不満が嵩じてということになってしまうわけですが？」

「それだけなら、爆破までは行かないんじゃないかな。『富士』の窓ガラスに、石をぶつけるぐらいのいやがらせは、するだろうがね。それに、狙う相手を、『出雲1号』に変更したりはしまい。個室寝台のことと、投書のことで不満があったところに、何か新しい憎しみが重なったんだと思うね。それが、何かわかれば、もっと、対応の仕方も考えられるんだろうが」

と、十津川は、いらだたしげに舌打ちしてから、腕時計に眼をやって、

「われわれも、そろそろ、寝たほうがいいな」

7

十二日の朝は、小雨で明けた。

昼になっても、まだ、雨は続いていた。

その雨の中を、桜井刑事は、再び、長沼洋子に会いに出かけた。

明大前のスナックは、閑散としていた。考えてみれば、今日は日曜日で、明大の生徒が来ないからだろう。そのわりに、近くの雀荘からは、学生たちが牌をかきまぜる音が、賑やかに聞こえてくる。

女性週刊誌を読んでいた洋子が、顔をあげて、反射的に、

「いらっしゃい」

といい、腰をあげた。

「客じゃないんだ」

と、桜井が、いった。

「ああ、昨日の刑事さんね」

「もう少し聞きたいことがあってね」

桜井は、椅子に腰を下ろし、間を持たせるように、煙草をくわえた。

洋子は、素早く、火をつけてくれてから、

「また、中河さんのこと？」

「彼とあなたが、ラブ・ホテルへ行ったときのことなんですが」
しゃべりながら、桜井は、やたらに煙草をふかした。
「ええ。それで？」
洋子は、落ち着き払って、きき返した。
「中河さんは、酔っていたといいましたね？」
「ええ。相当、酔っ払っていたわねえ」
「他の人に聞いたところでは、中河さんは、あまり酔い潰れるという話はなかったんですが」
「そうね。どっちかといえば、理屈っぽくって、面白味のない人という感じね。だから、一度、酔っ払って、ホンネを出せばいいのにと思ったことが、何度かあったわ」
「じゃあ、あのときは、彼がホンネを口にしたんじゃありませんか？」
「さあ、どうだったかしらね」
「失恋して、やけ酒を飲んでいたんじゃありませんか？　あなたに、それらしいことを話しませんでしたか？」
「あのとき、どんな話をしたんだったかしら」
洋子は、外国煙草に火をつけてから、宙に視線を遊ばせた。思い出そうとしているのか、それとも、ただ、そんなポーズを楽しんでいるのか、若い桜井には、見当がつかない。
「どうでした？」
と、桜井が、重ねてきくと、洋子は、

「そういえば、女に裏切られたとか、彼女にふられたとかいったわね。あのとき、彼、泣いてたんじゃないかな。こちらも、それが可哀そうになって、つき合ったのかもしれないわ」
「中河さんが、失恋した相手の名前を、ご存知ありませんか？」
「名前？　そこまできくほど、あたしは、ヤボじゃないわよ」
と、洋子が、笑った。
ヤボかどうかは知らないが、桜井としては、それでは、捜査が進展しないのだ。
「何かいったんじゃありませんか？　その女性が誰かわかるようなことをです。見合いした相手だとか、同好会の女性だとか、あるいは、通勤の電車の中で知り合ったとか、何かいっていませんでしたか？」
「あのときは、あたしも酔ってたしねえ。見合いとか、通勤の何とかじゃないと思ったわ」
「じゃあ、同好会の女性ですか？」
「そうね。手近な人とやってたのねって、いった記憶があるから、同好会の人だったかもしれないわ」
「名前は、わかりませんか？」
「わからないわ。中河さんもいわなかったし、あたしも、きかなかったから」
「名前をいわなくても、どんな顔立ちだとか、年齢とか、どの辺に住んでるとか、どこに勤めているとか、その女性について、何かいいませんでしたか？　どんなことでもいいんですが――」

と、桜井は、食い下がった。

「それが、ぜんぜん覚えていないのよ。ごめんなさい」

「そうですか。もし、何か思い出したら、すぐ、私に連絡してください」

桜井は、紙片に、電話番号を書いて、洋子に渡してから、その店を出た。

8

午後五時になると、西本と安井の二人の刑事が、「出雲1号」に乗るために、捜査本部を出て行った。

国鉄側にも、十津川は、今日、明日が危険という自分の考えを伝えておいた。

国鉄側も、「四月吉日」という文句から、大安吉日の十三日をマークしていたらしいが、いぜんとして、「富士」の上り、下り二本が、爆破の対象になっているという考えは捨てなかった。

中河英男の行方は、相変わらずつかめない。

全国の警察が、彼の行方を追ってくれているのだが、どこの県警からも、中河らしい男を見かけたという報告は、入っていなかった。

恐らく、中河は、爆破決行の日まで、動き回らずに、どこかで、じっと息をひそませているのだろう。そのために、行方がつかめないのだ。

桜井刑事は、捜査本部に戻って来て、改めて、東京鉄道同好会の会員名簿を見直していた。

長沼洋子に別れたあと、残っていた最後の二人の女性会員に連絡をとったが会えないために、中河と親しくしていた女が誰なのか、わからないままである。

桜井は、名簿から、六人の女性の名前を、書き出してみた。

中河は二十九歳である。

その相手の女性とすれば、二十歳から三十歳ぐらいの年齢であろう。それに、独身ということになる。

その二条件に該当する女性だけを、書き抜いたのである。

亀井が、そのメモを、横からのぞき込んで、

「その六人の中に、中河と、関係のあった女がいるのかね？」

「それがわからないんです。例のスナックのママさんは、中河が、同好会の女性に失恋して、泥酔していたと証言しています。とすると、恐らく、この六人の中にいると思うんですが」

「それで、六人全部に会って来たのかね？」

「四人だけは会いました。四人とも、中河との関係を否定しているんです。中河を嫌いだという女性もいるし、関心がないという女もいますが、とにかく、中河との関係は全員否定です。それに、四人とも、他に、ちゃんと好きな男がいるといっています」

「この六人以外にも、女性会員はいるわけだろう？」

「ええ」

「全部に会ったかね？」

「名簿には、年齢が書いてないので、とにかく調べました。年齢は、書き込んであります」
「中、高生が多いんだね」
「そうです。主婦も入っています。彼女たちにも、念のために、中河のことをきいてみましたが、否定の返事しか戻って来ませんでした」
「しかし、同好会の女性の中に、中河が愛していた女がいたはずだよ」
「そうなんですが、もし、そんな女が見つかったとして、夜行列車の爆破予告と関係があるんでしょうか？」
「わからんよ。わからないが、今は、どんな手掛かりでも欲しいんだ。もう一度、この六人に当たってみてくれ。中河と関係のあった女が見つかれば、彼の行方がわかるかもしれないし、それ以上のもの、たとえば、彼が、夜行列車を爆破する本当の理由がわかるかもしれないからな」
「しかし、カメさん。失恋の腹いせに、夜行列車を爆破するでしょうか。現に、中河は、失恋の痛手を酒でまぎらわせ、スナックのママさんとラブ・ホテルにしけ込んでいるんです。失恋の痛手は、それでいやされたんじゃないですかね」
「桜井君」
「は？」
「文句をいわずに、もう一度、当たってみてくれないかね。ただ単に、個室寝台に対する腹立たしさからの爆破予告なら、国鉄側のいうように、ブルートレインの『富士』を狙うはずなん

だ。それが、『出雲1号』であるためには、別の理由がなければならない。それを知りたいんだよ。失恋は原因でないかもしれないが、とにかく、調べてくれ」

「わかりました」

と、桜井は、肯いて、立ち上がった。

「頼むよ」

と、亀井は、ポンと、若い桜井の肩を叩いた。

9

桜井を送り出したあと、亀井は、十津川と並んで、時計に眼をやった。

今日、明日が勝負だという気が、十津川にも、亀井にもあるせいか、時計を見る眼は、真剣だった。

午後六時が近くなると、東京駅に着いた西本、安井二人の刑事から、電話連絡が入り始めた。

五時五七分。

十番線に、出雲1号が入って来た。

「隣りの九番線には、一七分前に、富士が入っています。あと、三分で、富士が出発します」

と、ホームから、西本が電話で報告した。

「富士には、鉄道公安官が乗り込んだんだろう?」

「二人、乗り込みました」

「出雲1号の乗客は、多そうかね？」
「車掌長の話では、切符は、ほぼ売り切れだそうです。春の観光シーズンのうえに、今日は日曜日ですから」
「出発まで、あと一五、六分だろう？」
「そうです」
「まず、その間に、一度、車内を調べてくれ」
「今、安井刑事が、車掌と協力して、調べています」
「ホームで、中河英男を見なかったかね？」
「まだ、見ていません」
「途中で乗り込んで来るのかもしれんな」
「発車後は、無線電話を使って、東京の総合指令室に連絡します。あッ、今、ベルが鳴りました。間もなく、富士が発車します」
午後六時〇〇分。下り富士発車。
午後六時一五分。出雲1号発車。
その後、ほぼ、一時間おきに、西本、安井両刑事の報告が入って来た。
山陰に向かって、疾走する出雲1号の車両から、東京の総合指令室に、無線電話が入り、それをまた、捜査本部にいる十津川のほうに、連絡してくれるのである。
富士の車両からも、同じ形で、国鉄の対策本部に、連絡が入っているに違いなかった。

午後九時過ぎに、桜井刑事が、疲れ切って帰って来た。
「もう一度、四人の女性に当たって来ました」
と、桜井は、十津川に報告した。
「その顔色じゃあ、収穫はなしだな？」
「四人とも、中河英男との交際は強く否定しています。彼女たちの周辺の聞き込みでも、中河英男の名前は、出て来ませんでした」
「あとの二人は？」
「自宅に帰っていなくて、会えませんでした。二人ともひとりで住んでいるんですが」
「明日になったら、その二人に会ってくれ」
「しかし、警部。午前三時に、爆破があったら、何の意味もなくなると思いますが？」
「いや。たとえ、爆破が行なわれても、動機を知りたいからね」
と、十津川は、厳しい声でいった。
あと六時間後に、出雲1号で、予告どおりの爆破が行なわれ、何人かの死傷者が出たら、今より一層、中河英男の動機を知る必要が出るだろう。
午後一〇時。
午後一一時。
静寂というより、重苦しい沈黙が、捜査本部を支配している。
出雲1号には、西本、安井の二人が乗っているとはいえ、時間と共に、列車が遠ざかって行

く事実は、どうしようもなかった。十津川も、亀井も、無力なのだ。
ときどき、沈黙を破って、電話が、けたたましく鳴った。
午前一時。
午前二時。
何事も起きない。
部屋の中の緊張感だけが高まっていく。
「これじゃあ、出雲1号に乗っているほうが気楽だな」
と、十津川は、亀井に向かって、小声でいった。
午前三時を五分過ぎて、東京総合指令室から電話が入った。
「出雲1号からの連絡がありました。午前三時現在、何事も起きていないということです」
午前三時一〇分。
国鉄の北野から連絡。上り下り両方の「富士」に異常なし。
午前三時二〇分。
すべての夜行列車に、異常なしと判明。
「いよいよ、明日かな」
と、十津川が、自分にいい聞かせるように呟いた。

第十四章　四月十三日

1

遅い朝食をとってから、桜井は、残りの二人の女性に会うために、捜査本部を出た。
松原久仁枝　二十六歳
小山ひろ子　二十四歳
この二人である。どちらも、ＯＬのはずだった。
果たして、この二人のどちらかが、中河と関係があったのだろうか？
もし、あったとわかっても、それが、夜行列車の爆破予告と、どう結びついてくるのか？
まず、松原久仁枝が住んでいる三鷹駅近くのアパート「双美荘」に足を向けた。
中央線の三鷹駅でおりると、南へ、大通りを歩いて行った。
この辺りも、マンションが建ち、大手のスーパーが進出して来ているが、都心に比べると、まだ、ところどころに緑が見える。その緑が、昨夜の雨に濡れて、鮮やかだった。
「双美荘」は、大通りを右に折れたところにあった。

真新しい、プレハブのアパートである。
管理人は、昨夜のうちに電話をしているので、桜井の顔を見ると、
「やあ、刑事さんですか」
と、笑顔を向けてきた。
「松原久仁枝さんは、今日はいるかね？」
「この時間だと、会社じゃありませんか。会社は、確か、新宿の――」
「いや、会社のほうへは、電話して確かめたんだが、出社してなかったよ」
「じゃあ、まだ、寝ているんですかね」
「寝ている？」
「ええ。昨日は、真夜中近くに、だいぶ酔ってお帰りでしたからね。二日酔いかもしれません」
「二階の六号室だったね？」
「そうです」
管理人が答え、桜井は、階段をあがって行った。
二〇六号室の前まで来て、桜井は、顔をしかめた。
「ガスの匂いじゃないか」
「ガスですって？」
管理人も顔色を変えた。

ドアの隙間から、強いガスの匂いが洩れてくるのだ。
桜井は、ドアのノブに手をかけた。が、錠がおりていて、動かない。
「マスター・キーは？」
桜井が振り向くと、管理人は、あわてて、キーを取り出して、鍵穴に差し込んだ。
「ゆっくりあけるんだ。火花が出ると、爆発するぞ」
と、桜井が、小声でいった。その一言で、管理人は、びびってしまい、指先が、ふるえ出した。
桜井が、代わって、マスター・キーを手に取り、慎重に回した。
ドアを開ける。
とたんに、強いガスの匂いが、桜井に襲いかぶさって来た。
桜井は、ハンカチで、鼻を押え、部屋の中に突進した。
1DKの部屋である。
六畳の部屋に、若い女が、ネグリジェ姿で、俯伏せに横たわり、台所からは、シューッシューッという、ガスの吹き出す音が聞こえてくる。
桜井は、ガラス窓を大きく開けた。
新鮮な風が、勢いよく入ってきた。それを、大きく吸い込んでから、桜井は、
「救急車を呼んでくれ！」
と、管理人に向かって、怒鳴った。

2

午後二時。

青森県警では、やっと、事件の夜、中河英男と思われる男を乗せたタクシーを見つけ出した。なかなか、見つからなかったのは、青森駅前に集まるタクシーばかりを追っていたからである。

問題のタクシーは、あの夜、たまたま、青森駅まで客を乗せて来た弘前の車だったのだ。

県警では、青森市内か、浅虫温泉あたりの旅館かホテルに泊まったに違いないと踏んで、片っ端から当たっていたのだが、中河は、弘前のタクシーを拾って、弘前市内の旅館に、あの夜、泊まったのである。

三浦刑事は、すぐ、弘前市に飛んだ。

佐藤という三十七歳のタクシー運転手に会い、問題の旅館に案内してもらった。

「菊水館」という小さな旅館だった。

帳場で、中河英男の写真を見せると、番頭は、女中を呼んで、一緒に見ていたが、

「ああ、この方なら覚えていますよ。午前二時近くに、お見えになったお客さんですから。サングラスをかけていらっしゃいましたね」

「そのときの宿帳がありますか？」

「ええ。ここに」

と、番頭が出してくれた宿帳には、三月二十九日の宿泊人として、

〈山本悠一郎　札幌市西天神通り――〉

の名前が、書いてあった。

もちろん、偽名だろう。三浦は、札幌に友人がいるが、確か、西天神通りなどという地名は、ないはずである。

筆跡も、中河英男のものとよく似ている。

「この客は、いつ、出発したんですか？」

「翌朝の八時ごろですかね。朝食のあと、すぐ発たれました。札幌にお帰りになるとおっしゃって」

札幌へというのは、嘘に決まっている。

中河英男は、東京に帰ったのだ。

夜行列車の爆破を準備するために。

3

午後三時二〇分。

氷室悠子は、ゆっくりと、鏡の中の自分の顔を見つめた。

ここ一カ月近くの間に、五、六歳も年齢をとったような気がする。大人っぽくなったような気もする。

どちらかといえば、年齢よりは、幼い顔立ちだった。

「君は、美人じゃないが、可愛い顔をしているよ」

と、亡くなった藤代にいわれたことがある。そんないい方は、悠子自身は、あまり好きではなくて、もっと、大人っぽい顔になりたいと思ったのだが、今になると、そのころの表情がなつかしくなった。

藤代の死を知らされたときの驚愕。そのあと、夢中で、青森に行った。

藤代の足跡を追って、鳥取砂丘へ飛んだのは、藤代への愛もあるが、悠子自身の意地もあった。自分が愛されていたことを証明しようという意地である。

その結果、藤代が、山陰旅行で、彼女との約束を守っていたことがわかった。悠子は、ほっとし、藤代が、最後まで自分を愛して行動してくれたことを知って、涙があふれてきた。

藤代の埋葬はすみ、悠子の涙も、もう乾いている。

もちろん、藤代への愛情が消えたわけではないが、少しずつ、記憶という過去の思い出の中に入りつつある。

今は、「出雲1号」で、藤代の行った出雲大社、鳥取と足を伸ばしてみて、自分の気持ちが、どう変わるか、彼女自身にも、予想がつかなかった。

藤代を失った悲しみが強まるのか、彼を殺した犯人への怒りが強まるのか、それとも、ひょ

っとして、藤代のことが、過去の思い出になってしまうのか、そのどれになってもいい気が、悠子にはしていた。

藤代が、出雲と鳥取から出してくれた二枚の絵ハガキは、ハンドバッグの中に入れた。

コピーしたものを、十津川警部に渡してある。十津川によれば、犯人は、藤代が絵ハガキに書いた「ちょっとしたいたずら」を利用して、青森まで連れて行き、そこで殺したのだという。

藤代の持っていた二台のカメラの中の一台も、持って行くつもりだった。

藤代は、このカメラで、出雲大社を写し、鳥取砂丘にピントを合わせたに違いない。その写真は、恐らく、犯人が焼き捨ててしまったのだろう。

悠子は、藤代がしたと同じように、カメラで、山陰の写真を撮って来たいと思っていた。その写真を、どうしたいというのではない。ただ、撮って来たいと思うだけである。

鏡に向かって、化粧を始める。

(新婚旅行で、山陰に行きたいね)

といった藤代の言葉が、思い出された。

今日は、大安吉日である。藤代が生きていたら、ひょっとすると、今日、都内の小さな式場で、結婚式をあげ、午後六時一五分発の「出雲1号」で、旅立っていたかもしれない。

そのときには、ぜひ、個室寝台でとも、いっていた。ひとりで一室の個室寝台で、二室の切符を買わなければならないわけだが、新婚カップルの場合は、片方の個室に二人が入っていても、車掌さんは、黙認してくれると、藤代は、いっていた。

もし、そうなっていたら、今日の旅は、さぞ、楽しいものになっていただろう。
口紅を引いてから、腕時計に眼をやった。
藤代が、死んだときに腕につけていたデジタル時計である。
午後四時六分を示していた。

4

十津川は、亀井刑事を促して、捜査本部を出た。
空は、薄ぐもりで、どんよりとしている。いかにも、春らしい天候だった。
四時半少し前に、東京駅に着くと、あらかじめ、連絡してあったので、八重洲口に、北野が、待っていてくれた。
最初に会ったときに比べると、北野の顔は、痩せて見える。丸顔で、ふっくらした顔立ちだと思ったのに、頬がこけて見えるのだ。
神経をすり減らすような毎日が続いているせいだろう。
「最近、人相が悪くなったといわれます」
と、北野は、小さく笑った。
北野は、十津川たちを、丸の内中央口近くの駅長室に案内した。
昔の建物なので、天井が高い。制服姿の駅長と、首席助役が、十津川たちを迎えてくれた。
北野は、駅長と首席助役には、爆破予告のことを話してある。何といっても、問題の夜行列

車の出発駅だからである。

下田駅長は、十津川たちに、椅子をすすめてから、

「今日出発の夜行列車が危険だとお考えですか？」

と、きいた。大学時代に、柔道部のキャプテンだったというだけに、五十三歳のこの駅長は、百キロ近い巨軀をしていた。

「これは、一つの賭けだと思っています」と、十津川は、正直にいった。

「われわれが、出雲1号を予想しているのも賭けですし、国鉄さんが、富士を考えておられるのも、一つの賭けだと思いますね」

「しかし、一列車に三百人以上の乗客が乗っているんですよ。賭けで、そのかたがたの安全を考えられては困ると思いますが」

下田は、不快そうな顔をした。現場の人間としては、当然の気持ちだろう。

「こうした事件では、どうしても、主導権が犯人側にあります。相手は、いつ、夜行列車を爆破してもいい。午前三時も、あるいは、昼かもしれない。つまり、われわれは、応対に追われるというわけです。そこで、賭けに出るより仕方がないのです」

「その賭けに勝つ見込みがありますか？」

「勝たなければいけないと思っています」

と、十津川は、いった。

「今、出雲1号は、どこにいるんですか？」

と、亀井が、きいた。
「札の辻車両基地で、点検整備中です」
佐野首席助役が、緊張した声で答えた。
「札の辻というと品川ですね？」
「そうです」
「見てみたいのですが」
と、十津川が、いった。
自分たちが守る列車を、整備の段階から見たかったのだ。
「ご案内しましょう」と、北野がいった。
「私も、下り富士を見たいですからね」

5

品川と田町の間の広大な敷地に、東海道本線の列車基地がある。
四時前後には、東京駅から出発する寝台特急、「さくら」「はやぶさ」「あさかぜ」「富士」それに、「出雲」などが、勢揃いして、壮観である。
ブルートレインの人気が高まってから、車両基地に入り込む子供たちが多くなった。あこがれのブルートレインが、ずらり並んでいるのだから、忍び込みたい気持ちもわからないわけではない。

写真を撮るために入り込む者もいれば、なかには、トレインマークなどの部品を盗んでいく少年もいる。

しかし、何よりも、国鉄側が恐れるのは、事故だった。車両基地には、絶えず、機関車、客車が出入りする。時間が来て、突然、動き出すこともある。特に、小さな子供たちは、平気で、車両の下にもぐり込んだりするので、要注意だった。

自然に、基地の警戒も厳重になって、十津川と亀井も、認可証を貰って、基地内に入った。

品川客車区札の辻出発線に、出雲1号のブルーの車両が、静かに並んでいた。

個室A寝台車一両、B寝台車九両、食堂車一両、荷物・電源車一両の計十二両である。定員は、A寝台（個室）一四名、B寝台三百六名、合計三二〇名である。もし、満員で出発することになれば、三二〇名の乗客の安全が、十津川たちの肩にかかってくることになる。

すでに、出雲1号に乗務する車掌や、食堂従業員が、車内に入って、設備の点検をしていた。

放送テスト
エア・コンディションチェック
トイレ・洗面設備チェック
寝台備品チェック

などである。

十津川と亀井は、北野から、今日、乗務する四人の車掌を紹介された。

松木車掌長
堀専務車掌
井上専務車掌
川島荷扱専務車掌

この四人である。いずれも、経験十五年以上のベテランだった。

「話は、北野さんから聞きました」

と、松木車掌長は、A個室寝台車で、サービスのタオルを配りながら、十津川にいった。

個室寝台にだけ、「あさかぜ」「出雲」「はやぶさ」「富士」のヘッドマークをスタンプしたタオルをサービスすることになっているのだという。そのタオルを、一枚ずつ、各個室の毛布の上にのせて回りながら、

「この列車が、爆破魔に狙われているそうですね」

「容疑者の写真は、持っていますね？」

「北野さんから貰って、全員が持っています。もし、今日の乗客の中にいたら、すぐ、お知らせしますよ」

「そうしてください。相手は、午前三時に爆破するといっているので、その点も考えに入れて

おいてください」
「犯人は、なぜ、この出雲1号を狙うんでしょうか？」
「それが、わからないんですよ」
「北野さんは、狙われているのは、富士だといっていましたが」
「そうですか。われわれは、出雲1号だと考えています」
と、十津川は、頑固にいった。

6

午後五時三〇分。
出雲1号を牽引するEF65機関車が、連結された。
出雲1号は、ゆっくりと、東京駅に向かって動き出す。
車両基地から、東京駅まで、七、八分かかる。
その間に、亀井は、8号車の食堂車へ行き、テーブルのセットを終わった従業員たちにも協力を求めた。
食堂車は、日本食堂米子営業所の担当で、食堂長以下、男三名、女性三名が乗務している。
亀井は、爆破予告のことは話さず、中河の写真を渡して、この男が、食事にきたら、すぐ、知らせてくれるように頼んだ。
十津川は、1号車で、松木車掌長から、今日の乗車率をきいた。

「個室寝台は、一週間前に、全室、売り切れています」
と、松木は、メモを見ながらいった。
「個室寝台は、どんなお客が乗るんですか？」
「出雲1号の場合は、新婚さんが多いですね。特に、春と、秋の結婚シーズンに多いんです」
「B寝台のほうはどうです？」
「八〇パーセントから九〇パーセントの乗車率です」
松木は、誇らし気にいった。
東京駅の十番線ホームに入ったのは、五時五七分である。
隣りの九番線には、午後六時出発の「富士」が、すでに入っていた。
十津川と亀井の二人は、いったん、ホームに降りた。
以前ほどではないが、ブルートレインの写真を撮る少年たちの姿が見える。
電源車のディーゼルエンジンが、轟音を立てている。荷物車には、荷物や、新聞が積み込まれていく。
「ホームを歩いてみませんか」
と、亀井がいった。
二人は、ゆっくりと、ホームを歩き出した。
あと、二、三分で出発する九番線では、夜行列車特有の別れの光景が演じられていた。
車内に入った乗客と、送りに来た人たちが、窓ガラス越しに、手真似で話し合ったり、入口

のところに立って話したりしている。

ベルが鳴り、午後六時ジャストに、「富士」が、出発した。

ホームで見送る人たちの中に、北野の姿もあった。

北野は、「富士」のテールライトが、薄暮の中に消え去るのを見送ってから、

「自分が乗って行ったほうが、気楽ですね」

と、十津川に向かって、いった。

「富士に、中河は乗っていましたか？」

「私が、車内を歩いた限りでは、乗っていませんでしたが」

「まだ、狙われているのは、富士だとお考えですか？」

十津川が、きくと、北野は、

「もちろん」

と、頑固にいった。

十津川と亀井は、北野と別れて、後尾車両のほうに歩いて行った。

夜行列車、特に、寝台特急（ブルートレイン）の場合、乗客は、どっと乗り込んでは来ない。全席が指定で、ほとんどが、前もって、切符を手に入れているせいだろう。それに、全車両が寝台車のため、乗客数が少ないこともある。

長く延びたホームに、乗客は、まばらな感じだった。

中河の姿は見えなかった。当然かもしれない。東京駅から乗り込むとしても、すぐ、中河と

わかるような恰好では来ないだろうからである。
新婚旅行（ハネムーン）とすぐわかるカップルの姿も、何組か眼についた。
上気した若い二人を、見送りの人たちが取り囲んでいる。そんな小さな輪が、ところどころに出来ていた。
「今日は、大安吉日でしたね」
亀井が、再確認するようにいった。
「都内で式をあげて、出雲大社で祈願をしてから、山陰を回るんだろう」
「彼らのためにも、無事に、出雲まで行きたいですね」
そんな話をしながら、3号車のあたりまで来たとき、
「警部さん」
と、女の声で呼ばれた。
びっくりして振り向いた十津川の眼に、氷室悠子の笑っている顔が、飛び込んできた。
「何をしているんです？　こんなところで」
十津川は、悠子に向かってきいた。
「この列車に乗るんです」
「乗るって？」
「ええ、彼と同じことをしてみようと思ってですわ」
「しかし、鳥取砂丘には、行ってみたじゃありませんか」

「でも、出雲大社には、行っていませんでしたわ。ですから、この列車で、出雲大社に行ってみたいんです」

「そうですか」

十津川は、肯いたものの、気が重くなった。

この列車を、中河が爆破しようとしているかもしれないのに、よりによって、氷室悠子が、乗るという。だが、今の段階で、真相を話すわけにはいかないし、力ずくで、列車から降ろすことも出来ない。

「警部さんは、何のご用ですの？」

と、悠子が、きいてきた。

十津川は、亀井と顔を見合わせた。

「私たちも、出雲1号に乗るんです。出雲に用がありましてね」

「藤代さんが殺されたことと関係がありますの？」

「中河英男の写真は、見ましたね？」

「ええ。顔は、覚えていますわ」

「もし、車内で見かけたら、すぐ知らせてください。車掌に話せば、私たちに伝わるようになっていますから」

「中河英男が、この出雲1号に乗ることになっているんですか？」

悠子の顔色が、変わった。

「乗ってくるかもしれないので、われわれも、同乗することにしたわけです」

十津川が、そういったとき、1号車のほうで、万歳の声があがった。

新婚旅行のカップルを囲んでいた見送りの人々が、発車時刻が迫って来たので、万歳をしたのである。

それを見て、悠子が、ふっと、かげりのある表情になったのは、死んだ恋人のことを思い出したからだろう。

十津川と亀井は、それをしおに、彼女と別れて、1号車へ歩いて行き、新婚のカップルの横をすり抜けるようにして、列車に乗り込んだ。

「あと二分で発車します」

と、車掌長の松木が、教えてくれた。

1号車の個室寝台車の端に、車掌室がある。

「新婚さんが多いですね」

十津川がいうと、松木は、

「何しろ、行く先が出雲ですから、縁結びの出雲大社へ行くカップルが多いんです」

と、いった。

その言葉を裏書きするように、新婚らしいカップルが、乗って来て、じゅうたんを敷いた通路を、抱き合うようにして、奥へ消えて行った。

「しかし、個室寝台には、一人しか入れないわけでしょう。そうすると、明日の朝まで、別れ

別れで行かなければならないんじゃありませんか？」

「建前は、そうですが、新婚さんですからね。新郎が、新婦の部屋に出張しても、黙認することにしています」

松木が、笑ったとき、ホームで、いったん別れた悠子が、この1号車に乗って来た。

十津川が、あれッという顔をすると、悠子は、

「いい忘れましたけど、個室寝台に乗るんです。一番端の1号室ですわ」

と、いって、すれ違って行った。

発車を知らせるベルが鳴った。

（いよいよ、始まるぞ）

十津川は、自分にいい聞かせた。

7

一八時一五分。

定刻に、出雲1号は、東京駅の十番線ホームを発車した。

出雲市の先、浜田まで、九八八・五キロ、一五時間三九分の旅である。

もし、午前三時に、爆破があって、列車が動かなくなれば、そこまでの旅になってしまうのだ。

車内の検札が始まったのは、都心を離れて、夕闇が、出雲1号を包み込み始めてからである。

次の停車駅、横浜に着くまでに、検札は終わったが、中河英男は、見つからなかった。

しかし、乗客の中に、中河がいないと、断定することは危険だった。

夜行列車の場合、乗るとすぐ、寝台にもぐり込んでしまう客も多い。そんな客の中には、カーテンの隙間から、腕だけ突き出して、切符を見せる者もいる。そのとき、カーテンを引き開けて、乗客の顔をのぞき込むわけにもいかないからである。

個室寝台のほうは、松木が、新婚さんがほとんどのようですといったように、並んだ個室から、若い話し声や、笑い声が聞こえてくる。

横浜着一八時三八分

熱海着一九時四八分

それぞれ、一分停車である。

熱海では、釣り道具を担いだ数人の小さな団体客が乗り込んで来た。山陰の海に釣りに行くのだという。

「これで、ほとんど満席になりました」

と、松木車掌長が、十津川にいった。

車掌長には、東京駅で、切符の売れ行きの状態を記した発売通知報告（通称ハツホ）が渡されている。

十津川は、それを見せてもらった。

それによると、今日の出雲1号は、全車満席、売り切れになっていた。

「すると、定員一杯の三二〇人の乗客があるということですか？」
十津川が、きくと、松木は、
「いえ、車内販売用として、3号車の寝台が二つ空いています。飛び込み客があった場合の用心です」
その二枚の切符は、車掌長の決断で、車内販売が出来るのだという。
「乗客の行く先は、わかっていますか？」
と、十津川は、きいてみた。
出雲1号は、福知山を出てすぐ、午前三時を迎える。
犯人が、列車に爆薬を仕掛けるとすれば、自分の安全を考えて、福知山までの間で降りるのではないかと考えたからである。
「鳥取まで、お降りになる方は、ございません。鳥取着は、明日の午前五時三〇分です」
と、松木がいった。
十津川は、自分で質問しておきながら、途中で、愚問だったことに気がついて、苦笑した。
犯人は、終着浜田か、出雲市まで買っておいて、途中で降りればいいからである。わざわざ、行く先がわかるような切符の買い方はしないだろう。
「早目に、食事をすませておこうじゃないか」
と、十津川は、亀井を誘って、8号車の食堂車へ歩いて行った。
窓の外は、すでに、夜である。

暗い闇の中を、ネオンの輝きや、黄色い家の灯が、次々に流れ去って行く。

列車の揺れに、身体を預けるようにしながら、二人は、2号車、3号車と、細い通路を通って行った。

1号車は、個室寝台なので、静かだが、2号車以下は、開放的なB寝台なので、賑やかである。

二段ハネで、向かい合った形になっているもので、仲間の四人で一角を占領し、トランプ遊びに熱中している若者のグループもいれば、おしゃべりに余念のないお年寄りもいる。

ひとり旅らしい中年の男が、ポケットびんを、ちびちびやりながら、週刊誌を読んでいるかと思うと、早々と、カーテンを引いて、眠ってしまった乗客もいた。

閉じられたカーテンの中に、ひょっとすると、中河が、息をひそめているのかもしれないが、まさか、いちいち、カーテンを開けて、のぞき込むわけにもいかなかった。十津川たちには、そんな権限はないし、中河が、この列車に乗っているという確証もなかったからである。

食堂車は、テーブルの半分ほどが埋まっていた。

入口で、顔を合わせた食堂長が、十津川に向かって、首を小さく横に振った。中河は、まだ来ないという意味だろう。

十津川は、眼で肯いてから、空いているテーブルに、亀井と向かい合って腰を下ろした。

隣りのテーブルでは、若い母親が、幼い女の子に、少しずつ、ご飯を食べさせている。奥のテーブルでは、新婚らしい若いカップルが、楽しそうに喋っている。

亀井が、じっと、彼らを見つめていた。十津川には、亀井が、今、何を考えているのか、痛いほどわかった。

亀井には、妻があり、小学生の男の子と女の子がいる。他のテーブルの乗客たちを見て、それを思い出したのだろう。

もし、この列車に死傷者が出れば、今、楽しげに食事をしている母子や、若いカップルが、その中に入る可能性もある。

運ばれて来たステーキに、フォークとナイフを走らせながら、十津川は、それを考えていた。どうしても、爆破は、防がなければならないが。

「中河は、どうする気なんでしょうか？」

と、亀井が、小声できいた。

「わからんね。カメさんだったら、どうするね？」

「目的次第でしょう。とにかく、出雲1号を転覆させたいと思っているのか、個室寝台車を爆破したいのか、それとも、この列車に乗っている誰かに恨みを抱いていて、その人物を爆死させたいのかで、違うと思います。もし、やみくもに、この列車を転覆させたいのなら、客車でなしに、牽引する機関車にダイナマイトを仕掛けてもいいし、客車の前につないでいる荷物車でもいいわけです。うまく調整すれば、今日の荷物車の小荷物に、時限爆弾を入れておけるんじゃないかと思うんですが」

「機関車は無理だな。山陰本線は、電化されていないから、京都まで、この出雲1号を牽引し

てきた電気機関車は、ディーゼル機関車に代わるんだ。交代のときには、多くの従業員が見守っているし、第一、京都は、運転停車で、乗客は、ホームに降りられないよ。もう一つ、荷物車だが、さっき、川島荷扱専務車掌に聞いてみた。検札が始まるころ、荷物の整理をするんだが、その際、一つ一つ、荷物を調べてみたが、異常に重かったり、妙な音がしたりする物はなかったということだ」

「そうですか。すると、やはり、客車のどこかに、仕掛けるつもりでいるんでしょうか？　それとも、四月吉日というのは、今日じゃなくて――」

「今日と考えて、行動しようじゃないか。別の日と考えるのは、午前三時を過ぎてからでいいんだ。われわれの仕事は――」

十津川は、急に、言葉を切って、小さく、会釈をした。

食堂車に、氷室悠子が入って来たからだった。

8

桜井刑事は、やっと、三鷹駅前にある救急病院を出た。

松原久仁枝の自殺騒ぎに巻き込まれ、発見者ということで、病院まで付き添って行ったり、所轄署から、事情をきかれたりしていたからである。

久仁枝は、今までつき合っていた男と別れた寂しさから泥酔し、ガス自殺を図ったのだった。発見が早かったために、久仁枝は一命をとりとめ、桜井は、人命救助をしたわけだが、おか

げで、大きく、時間をロスしてしまった。

病院から、夜の街に出ると、最後の小山ひろ子に会うために、桜井は、五反田に急いだ。

山手線を五反田で降り、池上線に乗り換えて二つ目の戸越銀座から、歩いて五、六分のところにあるマンションだった。

桜井は、小山ひろ子に、ほとんど期待を持っていなかった。中河以外の男と、結婚することが決まっていると聞いていたからである。

「シャトウ戸越」と書かれた入口を入って、ずらりと並んだ郵便受に眼をやった。

会員名簿によると、このマンションの五〇三号に住んでいるはずだった。

503の郵便受には、確かに、「小山」の名前があった。それを見ていると、

「小山さんに、何かご用ですか？」

と、横から声をかけられた。

管理人が、こちらを見ている。

「会って、話を聞きたいことがあるんですがね」

「留守ですよ」

と、いってから、管理人は、なぜか、ニヤッと笑った。

「いつなら会えますか？」

「もう、小山さんは帰って来ないんじゃないですか。荷物ももう運んでしまったようだし――」

「引っ越したんですか？」

「ええ。まあね」
また、管理人が、笑った。
桜井は、その笑い方が気になった。
「私は、警察の人間なんだが」
と、桜井が、警察手帳を見せると、金歯を見せて笑っていた管理人が、びっくりした表情になって、
「どうも、これは――」
「小山さんは、どこへ引っ越したんですか？」
「品川のほうと聞きましたが、くわしいことは知らないんですよ」
「話しながら、ニヤニヤ笑っていましたね。私が、可笑しいことをききましたか？」
「とんでもない。ただ、あなたが、お若いので――」
「若いので、何ですか？」
「あなたがお若いんで、小山ひろ子さんに会いに来たのなら、お気の毒だと思いましてね。それでつい――」
「というと？」
「小山さんは、今日、結婚式をあげたんですよ。それで――」
「なるほど。式場は、どこですか？」
「新宿の青年会館と聞きました。しかし、刑事さん、小山さんが、警察の厄介になるような人

とは思えませんね。美人で、素直で、いい人でしたからね」
「別に、小山ひろ子さんを逮捕しに来たわけじゃありません。彼女に聞きたいことがあって来たんです」
「小山さんは、もう新婚旅行に出かけたんじゃありませんか。そうだとすると、四、五日は帰って来ないんじゃありませんか。帰って来たとしても、新居のほうへ、直接行ってしまうようだし――」
「小山さんから、中河英男という男のことを聞いたことはありませんか？」
「ナカガワですか？　いや、ありませんね。日下部さんなら知っていますが」
「日下部というのは、誰です？」
「今度、小山さんが結婚した相手ですよ。二、三度、ここにもお見えになったことがありましたね。感じのいい青年でね。小山さんが好きになったのもわかる気がしましたよ」
「本当に、中河英男という男を知りませんか？」
「ええ」
「この男なんですがね」
桜井は、中河の顔写真を、管理人に見せた。
「いや、違いますね」
と、管理人はいった。
「違うというのは、どういう意味ですか？」

「この写真と違う男の方が、ついさっき見えましてね。あなたと同じように小山さんの郵便受をのぞき込んでいたんですよ。それで、ああ、小山さんに振られたんだなと思ったので、小山さんなら、今日、結婚式ですよといったら、すごすごと帰って行きましたよ」
「どんな男ですか？」
「そうですねえ。太い角縁の眼鏡をかけて、ひげを生やした人でしたよ。色の黒い、三十歳ぐらいに見えましたがね」
（中河ではないらしい）
と、桜井は、思った。
「ついさっきというと？」
「六時半ごろでしたよ。確か」
と、管理人がいった。
時間的にも、違いそうだなと思った。すでに、一五分前に、「出雲1号」は、東京駅を出発してしまっているからである。

9

前日、出雲1号に乗った西本と安井の二人の刑事は、東京に帰っていた。
二人のいる捜査本部に、東京鉄道同好会の会長、小早川から電話が入ったのは、八時を少し過ぎたころだった。

「さっき、中河さんから電話があったんです」
と、小早川が、いきなりいった。
電話に出た安井刑事が、思わず、「えッ」と、大きな声を出した。
「中河って、中河英男ですか？」
「そうです。前に、亀井刑事さんに、中河さんに会ったら電話してくれと頼まれていたもんですからね。亀井さんですか？」
「いや、安井といいます。いつ、どこから、中河は、電話して来たんですか？」
「七時半ごろです。場所は、新宿の喫茶店からでした」
「何だといっていました？」
安井が、急きこんできいた。西本刑事も、耳を寄せてきた。
「郷里の盛岡へ帰るので、会長の私に、ちょっと挨拶したくなったといっていましたね。それで、僕は、出来れば、会いたいといったんです。会いたいから、今どこにいるんだときいたら、新宿ステーションビルにあるピストロという喫茶店だというんです。それで、会いに行くから、そこにいてくれといったんですが、列車の時間が迫っているからといって、電話を切ってしまいました」
「中河の声に間違いありませんか？」
「ええ。あれは、中河さんですよ」
「電話が切れたのは、何時ごろですか？」

「七時半ごろにかかって来て、五、六分話したあとだから、七時三五、六分だと思いますね」
「新宿ステーションビルのピストロですね」
「ええ。確か、八階にある店です」
「ありがとう」
礼をいって受話器を置くと、安井は、西本に後を頼んで、捜査本部を飛び出した。
地下鉄で新宿に出た。
ステーションビルの八階にあるピストロという喫茶店は、安井も、待ち合わせに使ったことがあった。
広い店で、窓際に座ると、新宿の盛り場が眼の下に広がって見える。
安井は、店に入ると、ウエイトレスの一人に、中河英男の顔写真を見せた。
「この男が、七時半ごろに、ここから電話したはずなんだが？」
「お客さんですか」
と、そのウエイトレスは中河の写真を見ていたが、ニコリとして、
「ええ、この方なら、確かに、あそこのピンク電話をお使いになりましたわ」
「間違いありませんか？」
と、安井が、念を押すと、ピンク電話があるレジのところの女の子も、
「電話かけるので、百円をくずしてくれとおっしゃったんで覚えてるんです。それに、今、何時かって、おききになりましたわ」

「その男は、腕時計を持っていなかったのかね？」
「いいえ。私が、七時二九分と申しあげたら、自分の腕時計を見て、二分おくれているなっておっしゃいましたわ」
「そのあと、電話をしたんだね？」
「ええ。電話を終わると、すぐ、お帰りになりました。何だか、急いでいらっしゃるようでしたけど」
「ここを出て行った時刻は？」
「七時四〇分ごろだと思いますけど、それより、二、三分は、早かったかもしれません」
「もう一度念を押すが、この男に間違いないんだね？」
安井は、二人の女性に、改めてきいてみたが、レジ係も、ウエイトレスも、中河に間違いないと証言した。
「では、その男の服装と、何を持っていたか教えてくれないかね？」
「グレーの背広で、真っ赤なネクタイをしていらっしゃいました。手には、小さなボストンバッグを持っていたと思うんですけど」
と、ウエイトレスがいい、レジ係も、だいたい、同じことをいった。違っていたのは、ボストンバッグの大きさぐらいである。
安井は、すぐ、国鉄の東京総合指令室に詰めている小川に、電話した。
小川が、国鉄の無線電話を使って、出雲1号の十津川に知らせてくれるはずだった。

第十五章　午前三時へ

1

十津川の声が、乗務員室の中で、厳しくなった。
「それは、事実なんだろうね？」
「安井刑事から、今、連絡があったとこです」
無線電話の向こうで、小川刑事の声がする。
「じゃあ、確認するが、新宿ステーションビルの八階にある喫茶店に、今日午後七時三〇分、中河英男が現われたというんだな？」
「そうです。レジ係に時刻をきき、七時二九分であることを確かめてから、東京鉄道同好会の小早川会長に、ピストロという店から電話したわけです。五、六分してから、電話を切って、店を出て行ったそうです。安井刑事が、その店へ行って、確認しました」
「同好会の会長へ、中河は、どんな電話をしたんだ？」
「会長の話では、郷里の盛岡に帰るので、お別れのあいさつと、中河はいっていたそうです。

会長が、そこへ会いに行くといったら、中河は、列車の時間があるのでといって、電話を切ったといいます。喫茶店を出て行ったのは、七時四〇分ごろと思われます。服装は、グレーの背広に、赤いネクタイ、ボストンバッグを下げていたそうです」
「桜井刑事からの報告は？」
「最後の二人の女性会員にも、会ったそうです。一人は、自殺未遂で救急病院に運ばれました」
「それは、私が、東京にいるときに、聞いたよ。確か、名前は、松原久仁枝だ。だから、もう一人のほうのことを知りたいんだ」
「最後の一人は、小山ひろ子二十四歳で、今日、都内の青年会館で結婚式をあげたといっています」
「結婚式をあげたって？」
「今日は、大安吉日でしたから、何組も、式をあげたと思います」
「どこへ新婚旅行に行くんだ？　その女性は」
「わかりません」
「桜井刑事は、調べなかったのか？」
「中河英男が関係している感じでありませんでしたし、結婚式は、すでに終わってしまっているので、調査が難しいということでした。明日になれば、わかるだろうと、いっていましたが――」

「何をいってるんだ！」
と、十津川は、珍しく、電話口で怒鳴った。
「ぐずぐずしないですぐに調べて報告しろと、桜井刑事に伝えたまえ」
電話を切って、乗務員室を出ると、外で聞いていた亀井が、
「中河が現われたんですか？」
と、きいた。
「今日の七時半に、新宿にいたそうだよ。ピストロという喫茶店だ。その店を出たのが、七時四〇分ごろだといっている。グレーの背広に、赤いネクタイをしていたらしい」
「七時半から七時四〇分ですか」
「例の同好会の会長に、郷里の盛岡に帰ると、その店から電話したというんだ」
「どうもわかりませんね」
亀井は、眉をひそめた。
「私にも、中河の行動は、不可解だよ。今日、この列車に爆弾を仕掛ける気なら、なぜ、そんな時間に、新宿で、まごまごしてるんだろう？」
「出雲1号は、七時四八分に熱海に着いていますから、七時三〇分から四〇分というと、小田原を通過して、真鶴あたりまで走っているころです。本当に、新宿に現われたのは、中河だったんでしょうか？」
「安井刑事は、その店に行って、中河だと確認したといっているんだ」

「すると、中河は、この列車に乗らないつもりなんでしょうか？　今日爆破を断念したということですかね？」
「どうも気になるな。一番、可能性のある日に、わざわざ、姿を現わしたというのがね。同好会の会長に、別れの挨拶をしたというのも、わざとらしいじゃないか」
「私も、それを感じますが、時間的に、中河は、この列車に乗れないんじゃありませんか。新宿に、七時四〇分までいたとすると、東京駅に着くのは、八時を過ぎてしまいます。出雲1号が、東京駅を出たのが、六時一五分ですから、二時間は、たっています」
「奴は、いったい何を考えているのかね。それがわかれば、対応の仕方もわかるんだが」
「東京で、中河を逮捕したいですね」
「中河は、殺人事件の容疑者だ。安井君は、新宿で、中河が来たことを確認してから、本多一課長にも連絡し、課長は、新宿周辺、東京駅、それに、上野駅に手配をしてくれたらしい」
「その網に、中河は引っかからなかったということですか？」
「手配をしたのが、八時半近かったからね。後手を踏んだんだ」
「警部は、中河が、郷里に帰ったとお考えですか？」
「郷里に帰る気なら、とっくに帰っているはずだよ。三月に会社を辞めてから、一カ月近くたっているんだからね」
「もう一つ、何かおっしゃっていたようですが？」
「ちょっと気になることがあってね。例の同好会の女性会員の一人が、今日、都内で結婚式を

あげたというんだ」
「ひょっとして、新婚旅行を山陰にして、この列車に乗っているかもしれませんね」
「それを調べてくれと、頼んでおいたんだがね」

2

桜井は、夜の新宿を、青年会館に向かって歩いて行った。
午後一〇時二〇分。
新宿の盛り場は、まだ宵の口の賑わいを見せているが、青年会館のあるあたりは、ひっそりと静かである。
近くに、新宿御苑の大きな森が見える。
大安吉日の今日は、何組もの結婚式で、てんやわんやだったろうに、この時間になると、入口の扉も閉まり、小さな職員出入口にだけ、淡い電灯が点いていた。
桜井は、そこから中に入った。静まり返った建物の中で、彼の靴音だけが、やけに大きく、甲高くひびいた。
細い廊下を歩いて行くと、制服姿の守衛が、
「どなたですか？」
と、とがめるような声をかけて来た。守衛の休憩室の前である。
桜井は、黙って、警察手帳を見せた。身体の疲れよりも、精神的な疲れのほうが大きかった。

桜井は、この線を追って行っても、事件解決の糸口はつかめそうもないという気がしていた。中河英男と関係のない女を追っても仕方がないと思う。それを、十津川が、徹底的に調査しろと命令してきたことに、軽い反撥を感じていたからである。

「刑事さんですか」

と、五十歳くらいの守衛は、びっくりした顔になり、休憩室にいた同僚を呼んで来た。

「今日、ここで式をあげたカップルのことを聞きたいんですがね」

と、桜井は、疲れた声でいった。若いだけに、犯人を追いかけたりすることには、精神的充実感を覚えるのだが、こんな地味な聞き込みは、どうしても、気力がわいて来ない。

「今日は、何しろ、大安吉日でしたから、朝早くから十八組の結婚式がありましてね」

「その中に、小山ひろ子という人がいたはずなんだが」

「ちょっと、待ってください」

二人の守衛は、奥から、日誌を持ってくると、そこに挟んであった今日の挙式一覧表を広げた。

「ああ、ありましたよ。日下部家と、小山家、これでしょう。午後三時半ということになっていますね」

「新婚旅行は、どこへ行ったかわかりますか？」

「そこまでは、わかりませんね。最近の人たちは、グアムやハワイに行かれるようですが」

「どこへ行けばわかりますか？」

「うちではわかりませんね。新婚旅行の行く先までは、ここで、お世話しませんから」
「じゃあ、日下部さんの住所を教えてくれませんか」
「私たちにはわかりません」
「しかし、ここに申し込むときには、住所や電話番号も書くわけでしょう？　その申込書はどこにあるんです？」
「館長室に保管されているはずですが、館長の許可がないと、入れません」
「部屋の鍵は、ここにあるんでしょう？」
「ありますが、許可がないと。それに、部屋に入れても、書類の入っているキャビネットの鍵は、館長が、お持ちですから」
「じゃあ、館長に、連絡してください」
「急ぐんですか？」
「もちろん」
「館長が、いてくれるといいんだが――」
守衛は、口の中で、ぶつぶついいながら、館長の自宅に電話をかけた。
館長の藤堂は、鎌倉の自宅にいてくれた。
「とにかく、一刻も早く、日下部という青年の住所と電話番号を知りたいんです」
と、桜井は、電話口でいった。
「しかし、もう、新婚旅行に出かけているはずですよ。まあ、今日一日、都内のホテルで過ご

すカップルもおられますが」
「本人がいなければ、家族に会いますよ。われわれとしては、どこへ新婚旅行に行ったかそれがわかればいいんですから」
「そうですか」
「すぐこちらへ来て、書類を見せて頂きたいのですがね」
「警察のご要望なら、急がなければならんでしょうが、今から車を飛ばしても、一時間半はかかりますよ。それでもよければ、すぐ、支度をして、出かけます」
「いいから、すぐ来てください」
と、桜井は、いった。

3

十時を過ぎると、車内が静かになった。
食堂車も、営業を中断し、明朝、また開くことになった。
通路を駈けていた子供の声も聞こえなくなり、車内の灯も消され、常夜灯の明かりだけになった。
個室寝台は、すべて、ドアが閉まり、カーテンも引かれている。
2号車以下のB寝台車の通路を歩くと、ときどき、寝息が聞こえてくる。
新婚のカップルは、楽しい夢を見ているだろうし、その逆に、十津川たちは、緊張と不安の

中で、眼を光らせている。

出雲1号は、そうした乗客たちのさまざまな感情を乗せて、夜の闇を切り裂くように、走り続けている。

平均時速約六十四キロ、遠くから見れば、ブルートレインという言葉そのままに、青い流星に見えるかもしれない。

十津川と、亀井は、自分たちの席になっている2号車の一番端の寝台に、並んで腰を下ろした。

二段ハネのB寝台車では、上下二段の席が向かい合った形で、一つのボックスになっている。つまり、四人の乗客が、一つのボックスに入るわけだが、一番端だけは、上下二段だけの狭いボックスになっている。

二人だけの空間である。十津川は、北野に頼んで、端の席を予約してもらっておいたのだった。

「中河の行方は、まだつかめないようですね？」

と、亀井が、小声でいった。

車内が、静まり返っていると、自然に、声を落とさざるを得なかった。

「どうも、後手、後手に回っているからね。午後七時四〇分に、新宿ステーションビルの喫茶店を出たということしかわかっていないんだ」

「中河は、そんな時間に、なぜ、新宿にいたんでしょうか？　郷里に帰ると、同好会の会長に

電話するためとは、警部は、考えておられないでしょう？」
「さっきもいったとおり、郷里に帰る気なら、とっくに帰っているはずだからね。問題は、新宿から、中河が、どこへ向かったかということだよ」
「桜井君は、どうしています？」
「相変わらず、同好会の女子会員を追っているよ。問題は、今日、結婚式をあげた女性が、どこへ新婚旅行に行ったかということだ」
「山陰へ行くために、この出雲1号に乗っているとしたら、マークする必要がありますね」
「中河が、その女に惚れていて、振られたとすれば、彼女を殺すために、この列車に、ダイナマイトを仕掛ける気持ちもわかりますね」
「しかしねえ。カメさん。君のいうとおりだとしても、なぜ、失恋が、夜行列車の爆破に短絡するんだろう？　中河は、社交性に乏しく、陰湿な性格だということだ。しかし、ある程度の常識は備えていたはずだよ。ともかく、二十九歳まで、何の犯罪も犯していないんだからね。そういう男が、女に振られたから、その女を殺したいというのはわかるが、彼女が乗る夜行列車まで爆破するだろうか？　振られた腹いせというのなら、彼女ひとりを、殺せばいいわけだからね。そのチャンスは、いくらでもあったはずだ」
「中河は、前に、ブルートレイン富士の個室寝台に文句をつけています。そのことと、彼女の新婚旅行（ハネムーン）とが、重なったんじゃないでしょうか？」
「まあ、考えられるのは、そのくらいだが、どうも弱い感じだねえ。第一、その女が、この列

車に乗ったかどうかさえわからんのだからね」
「桜井君は、いつ、それを確かめられるといっているんですか？」
「結婚式場が、もう閉まっているからね。十二時までには、わかるだろうといっている」
「それなら、午前三時に間に合いますね」
「間に合ってくれないと困るんだ」
と、十津川は、強い口調でいった。

4

総裁秘書の北野は、国鉄本社に戻らず、東京駅にいた。
いざ事件が起きたというとき、国鉄本社よりは、少しでも、夜行列車に近い場所にいたかったからである。
それに、国鉄本社の対策本部には、今日は、本部長の小野田副総裁が詰めていてくれるはずだった。
北野は、駅長室にいた。
駅長は、帰宅してしまったが、二人の助役が、北野と一緒に、徹夜してくれることになった。
小柄な小西助役が、「夜行列車といえば」と、北野に話しかけた。
「今朝、到着した出雲4号で、拾得物の届けがあってね」
小西助役にしてみれば、眠気ざましにと思って、話したのだろう。

（上りの出雲4号では、あまり意味がないな）

と、北野は、考えながら、

「列車内の落とし物ですか？」

「そうなんだ。男物の財布で、三万円ばかり入っている。届けたのは、出雲4号の乗客なんだ」

「なるほど」

「まあ、こんなのは、よくあることだが、この乗客の話してくれたことが、ちょっと面白くてね。といっても、私が直接、聞いたんじゃなくて、出雲4号の車掌長に聞いたんだが」

「どんな話なんですか？」

「この乗客は、始発駅の浜田駅から乗ったんだ。出雲4号の個室寝台でね。なんでも、真ん中あたりの部屋だったらしい。次の出雲市駅で乗って来た乗客が、彼に、切符の交換をしてくれないかと申し出たんだね」

「ほう」

「男の乗客で、彼がいうのには、病気で亡くなった奥さんと、一度だけ、東京に行ったことがある。そのとき、出雲4号の個室寝台の7号室と8号室に乗った。亡くなった妻のことを考えるとき、いつも、その寝台特急のことが懐かしく思い出されて仕方がない。今日、出来れば、思い出の個室で、東京まで行きたかったが、7号室と8号室の切符がなくて、10何号室かの切符になってしまった。それで、出来れば、あなたの8号室の切符と取りかえてもらえないかと

いったというんだ。それで、取りかえて、自分は、相手の個室に入ったんだが、東京駅で降りるときになって、ベッドの下に財布が落ちているのに気がついた。切符を取りかえた男のものだと思ったが、相手は、すでに、列車を降りてしまっていた。そこで、車掌長に届けたというんだよ」

「そういうことって、多いんですか？」

北野は、時間を気にしながら、きいた。

間もなく、一一時になる。もし、「富士」が、今日狙われるとすれば、そろそろ、犯人が、爆発物を仕掛けているころではあるまいか。

「そういうことというと？　忘れ物のことかね？」

と、小西助役が、きき返した。

「いや、座席を換えてくれということです」

「乗客同士が、交換するのは、こちらにはわからないが、意外に多いんじゃないかね。この場合のように、思い出の座席に座りたいとか、寝台で寝たいという気持ちは、誰にもあるからね。ま、この話は、今度の事件と、直接関係ないだろうがね」

「そうですね。われわれがマークしているのは、『富士』の上り、下り、警察は、下りの『出雲1号』を考えていますから、直接、関係はありませんが――」

小西助役は、多分、自分の緊張を解こうとして、こんな話をしてくれたのだろうと、北野は、考えて、微笑した。

「ところで、犯人の行方は、まだわからんのかね？」
もう一人の松村助役が、北野にきいた。
「警察は、まだ、新宿からあとの中河英男の足どりをつかんでいないようですね」
「警察も、だらしがないねえ」
松村は、無遠慮ないい方をした。
「その中河が犯人としてだが、なぜ、富士に乗らず、新宿なんかで、うろうろしていたんだろう？　七時四〇分には、新宿にいたわけだからね」
小西助役が、首をひねった。
北野も、同感だというように、肯いてから、
「私も、その点が不可解なのです。ひょっとすると、警察の予測とは違って、今日は、何もしないつもりかもしれません。あるいは、われわれの警戒が厳重なので、夜行列車の爆破を諦めたのかもしれないと、これは、希望的な観測ですが、考えたくなるんですが」
「われわれを、安心させるためのゼスチュアかもしれんよ」
と、松村助役がいった。
「新宿に現われたのがですか？」
「そうだ。今日は、何もしないと考えさせるためのね」
「しかし、松村さん。七時四〇分には、下りの富士は、沼津近くまで行ってしまっているんです。七時三〇分に熱海、七時四七分に沼津ですからね」

「だが、簡単に追いつけるじゃないか」
「そうだ。新幹線で追いつけるんだよ」
と、小西助役も、眼を光らせた。
北野は、あわてて、時刻表を調べた。
二人の助役のいうとおりだった。
二〇時一二分東京発の「ひかり185号」は、新大阪まで行く最終の電車だが、名古屋に、二二時一三分（一〇時一三分）に着く。
一方、「富士」の名古屋着は、二二時四九分、発車は二二時五四分になっている。
七時四〇分に、新宿ステーションビルの喫茶店を出た中河は、中央線に乗れば、二〇分で、東京駅に着ける。これは、各駅停車の電車で、新宿―四谷―御茶ノ水―神田―東京しか停まらない快速電車なら、一六分である。
新宿ステーションビルの喫茶店というのが、ミソなのだと、北野は思った。
前もって、切符を買っておけば、喫茶店を出てから、中央線に乗るまで、五、六分しかかかるまい。
快速でなく、普通電車でも、二〇時一二分発の「ひかり185号」に間に合うのだ。
「すぐ、富士に連絡を取りましょう」と、北野はいった。
「中河は、新宿に姿を現わして、われわれを油断させておき、新幹線で追いついて、名古屋か、あるいは、その先の大阪から、富士に乗り込むつもりかもしれませんから」

5

午後一〇時四五分。
「出雲1号」にも、北野からの連絡が入った。
北野の一言で、十津川たちは、緊張した。
出雲1号は、富士より一五分おくれて東京駅を出発している。
ということは、一層楽に、中河が「ひかり185号」で追いつけるということである。
ひかり185号の名古屋着　二二時一三分。
出雲1号の名古屋着　二三時〇九分。
五六分もの余裕があるのだ。
「中河英男が、追いかけて来て、この列車に乗るとしたら、名古屋だな」
と、十津川は、断定した。
車掌長の松木も、肯いて、
「次の京都は、運転停車で、乗客の乗り降りは出来ませんし、京都からは、山陰本線になりますから」
「名古屋では、何人、乗ってくるんですか？」
と、十津川は、きいた。
松木は、メモを見ながら、

「九人だけです。名古屋で降りる方は、ひとりもいません」
「その九人が、何号車に乗ってくるかわかりますか？」
「わかりますよ。9号車が六人。これは、団体客です。それから、あとの三人は、4号車一人、5号車二人です」
「では、名古屋に着いたら、この九人をマークしてください。その中に、中河英男が、いるかどうかをです。もし、中河がいたら、直ちに逮捕します。殺人容疑でね」
「他の車掌にも、伝えておきましょう」
と、松木はいった。
名古屋駅が近づくと、十津川たちは、九人が乗ってくる車両に分れて、待機することにした。
専務車掌二人は、4号車と5号車。
十津川と亀井は、六人の団体客が乗ってくる9号車である。
十津川と亀井は、営業を終わった食堂車を抜けて、9号車へ、歩いて行った。
「中河は、名古屋で乗ってくるつもりでしょうか？」
9号車の通路に立ち止まって、亀井が、十津川にきいた。
「今日、やる気ならね。わざと、七時半ごろ、新宿に現われて、われわれを油断させたんだ。七時四〇分に新宿なら、出雲1号に乗れないだろうと思わせるためにね。そうしておいてから、新幹線で追いかけて来て、名古屋で乗り込む。もし、そうなら、中河は、墓穴を掘ったわけだよ」

「しかし、六人の団体客の中には、中河はいないと思いますが。怪しいのは、4号車と5号車に乗ってくる三人じゃありませんか？」

「そうとばかりはいえないさ」

と、十津川は、いって、

「私は、途中で乗って来た釣りの団体客のことを考えたんだ。中河は、会社を辞め、行方をくらましてから一カ月近くたっている。その間に、名古屋に引っ越していたのかもしれないじゃないか。名古屋に住み、釣りのグループに入る。そのグループが、山陰に釣りに出かけるように持って行く。今日の出雲1号に乗ってさ。さっきの釣りグループの服装を見たが、まさに、重装備だよ。ひさしの深い帽子をかぶり、大きなアイスボックスを下げている。顔をかくしやすいし、ダイナマイトを持っていてもわからない。それに、グループなら、われわれが、マークしないだろうと考えたかもしれない」

「なるほど」

亀井が肯いたとき、出雲1号は、スピードを落とした。

二三時一〇分。定刻に一分おくれて、名古屋に着いた。

ドアが開くと、待っていたように、六人の乗客が、9号車に入って来た。

しかし、十津川が予想したような釣りのグループではなく、二十代から三十代のサラリーマンタイプの男たちだった。

揃いのブレザーを着ている。

その六人の中に、中河英男の顔はなかった。
「失礼ですが、リーダーは、どなたですか？」
と、十津川が、きいた。
一番年長に見える眼鏡をかけた男が、
「何ですか？」
と、顔をしかめた。
十津川は、警察手帳を示してから、
「ある事件の犯人が、この列車にもぐり込んでいるという情報で調べているのです。それで、皆さんは、どんなグループか、お聞きしたわけです」
「うちは、名古屋に本店のある外食産業のチェーン店でしてね。成績のいい支店長だけ、今度、山陰三泊四日の旅行に出ることになったんです。まあ、ごほうびですな。出雲大社にお参りしてから、ＳＬの山口線に乗って、新幹線で帰ってくるルートです」
リーダーの男は、身分証明書まで見せてくれた。
四分停車で、出雲1号は、名古屋を離れた。
十津川たちは、1号車に戻った。
「4号車と、5号車に乗って来た乗客も、中河英男ではありませんでした」
と、松木車掌は、いった。
「本当ですか？」

「4号車に乗って来たのは、女子大生で、5号車の二人は、米子へ行く母親と、十三歳の男の子だったといっています」
「その他には、乗客はなかったわけですね？」
「ありません」
「中河は、今日は、諦めたんでしょうか？」
亀井が、首を振るようにしていった。
「次の京都駅では、乗れないんでしたね？」
と、十津川は、確認するように、松木にきいた。
「運転停車ですから、乗客の乗り降りはありません」
「午前三時までとなると、あとの停車駅は、福知山だけですね」
「ええ。福知山着は、二時五二分。発車が二時五六分ですが、ここから乗車する客は、ないことになっています」
「すると、中河英男は、今日は、何もしないつもりなのだろうか？」
十津川が、ひとり言をいい、窓の外を流れる夜の闇を見つめた。

6

一一時三七分。
やっと、藤堂館長が、青年会館に到着した。

「車を飛ばして来たんですが」
と、藤堂は、太った身体をゆするようにして、桜井刑事にいった。顔に、汗をかいている。
桜井は、いらいらしながら、
「とにかく、申込書を見せてください」
「わかりました」
藤堂は、館長室に入ってから、持って来たキーで、キャビネットを開けた。
月日別に整理してある申込書の中から、日下部家と、小山家のものを取り出して、桜井に渡した。
二カ月も前に、日下部淳の名前で申し込んであった。
日下部の住所と、電話番号も、記入してあったが、住所は、「ハイム・神泉」となっていた。
日下部が、ひとりでマンション暮らしをしていたとすれば、この住所を訪ねて、果たして、新婚旅行先がわかるかどうか不安だった。
試しに、電話をかけてみたが、果たして、何の返事もなかった。
しかし、このままでは、どうしようもない。
桜井は、とにかく、ハイム・神泉に行ってみることにした。
タクシーを拾って、渋谷から井の頭線で一つ目の神泉に行った。
ハイム・神泉は、駅の近くにあった。
桜井は、管理人に会った。

「日下部さんなら、今ごろ、新婚旅行の途中ですよ」
と、管理人は、ニコニコ笑いながらいった。
「それは、わかっているんです。新婚旅行に、どこへ行ったか知りたいんですがね。わかりませんか？」
「私は、そこまでは知りませんよ」
「じゃあ、日下部さんの部屋を開けてください」
「いいんですか？　そんなことをして」
「私が責任を持ちます。人間の命が、かかっているんです」
「刑事さんが、そうおっしゃるなら――」
と、管理人は、マスター・キーを持ち出したが、その顔は、笑っていた。のぞきが好きなのかもしれない。
日下部の部屋は、五階にあり、２ＤＫの大きさだった。
ドアを開けて、中に入ると、女物のタンスや、三面鏡も居間に置いてあった。
今日、結婚式をあげた小山ひろ子のものだろう。
管理人に立ち会ってもらって、桜井は、調度品で狭くなっている部屋を見て回った。
壁にかかったカレンダーには、今日四月十三日から十七日までが、赤インクで、消してある。
四泊五日の新婚旅行に出かけたのだろう。
しかし、行く先の記入はない。

机の引出しを開けると、旅行案内のパンフレットが、一杯入っていた。
北海道、沖縄、九州、山陰、日本のありとあらゆる地方の旅行案内である。これでは、どこへ行ったかわからない。
恐らく、二人で、あれこれ考えてから、行く先を決めたのだろうが、それがどこかわからないのでは、どうしようもなかった。
手紙の類にも、眼を通してみた。が、二人の結婚を祝う文章はあっても、新婚旅行の場所を書いた手紙は見つからなかった。
住所録でもあれば、友人なり、親戚なりに問い合わせるのだが、それらしいものは、机の引出しにも、タンスの引出しにも見つからなかった。
桜井は、失望し、立ち上がると、改めて、部屋の中を見回した。
ふと、本棚が気になった。
小さな本棚だが、そこに並んでいる本が、桜井の注意を引いたのだ。
鉄道関係の本、それも、専門書が多い。
「鉄道関係の本が多いけど、友の会なんかに入っているんですか？」
と、桜井は、入口の所にいる管理人にきいた。
管理人は、首を突き出すようにして、
「日下部さんは、国鉄にお勤めですよ」
「え？」

「ご存知なかったんですか？」
「国鉄職員？」
「ええ。国鉄の職員って、列車は、ただで乗れるし、いい席も、優先的にとれるんだそうですねえ。私もね。仙台へ行ったとき、切符を買ってもらったことがありますよ」
「国鉄の人間だったのか――」
「今日、結婚した女の方も、鉄道に趣味を持っているんだそうですよ。何でも、東京鉄道同好会のゲストに呼ばれて出席して、知り合ったそうですから」
「なるほどね」
桜井は、肯いた。
これで、不可解だった部分に、明かりが射した気がした。
一番不可解だったのは、夜行列車を爆破しようとする犯人の動機だった。
それが、わかりかけて来たと思った。
中河英男が、同じ同好会で知り合った小山ひろ子に惚れたとする。
ある日、その会に、ゲストとして、国鉄職員の日下部淳が出席した。ところが、小山ひろ子と、日下部が、仲良くなって、結婚することになってしまった。
中河にしたら、国鉄職員に、好きな女をとられてしまった感じだったろう。
もし、二人の新婚旅行（ハネムーン）が、出雲1号に乗っての山陰四泊五日の旅だったらどうなるか。
自分を捨てた小山ひろ子への憎しみに、夜行列車への憎しみが重なったろう。

だが、日下部淳と小山ひろ子が、新婚旅行をどこにしたか、どうやって調べたらいいだろうか？

7

氷室悠子は、寝台に横になったものの、なかなか眠れなかった。

眠れないままに、寝台をおりると、コートを羽織って、通路に出た。

腕時計を見ると、午前一時に近い。

出雲1号は、いぜんとして、夜の闇の中を走り続けている。

「氷室さん」

と、声をかけられた。十津川だった。

「どうしても眠れないもんですから」

と、悠子は、いった。

十津川は、煙草に火をつけてから、

「次は、あと四、五分で、京都ですね」

と、自分にいい聞かせる調子でいった。

「時刻表には、出ていないから、京都は、運転停車ですわね？」

「よく知っていますね」

「亡くなった藤代さんに教えてもらったんですわ。彼は、鉄道のことに詳しい人でしたから」

「そうでしたね」

二人が、そんな話をしているうちに、列車は、東山トンネルを抜け、京都駅に近づいて行った。

出雲1号の着いた二番線ホームに、乗客の姿はなく、蛍光灯の青白い光だけが、空しく、がらんとしたホームを照らしていた。

もちろん、ドアは開かない。

すぐ、機関車の交換が始まった。

ホームの前方だけが、喧(やかま)しい音を立てている。

京都までは、東海道本線で、電化されているが、ここから先の山陰本線は、まだ電化されていない。それで、ここまで十二両の車両を引っ張って来た電気機関車を、ディーゼル機関車に交換するのである。

DD51と呼ばれるディーゼル機関車である。

青白い蛍光灯の明かりの下で、機関車の交換が、慎重に行なわれる。

ホームに降りない十津川には、その作業を見ることは出来ない。ただ、それらしい音と、切離しと、接続のときの軽いショックで、それとわかるだけだった。

乗客たちは、寝入っていると見えて、誰も起き出しては来ない。

悠子は、ドアの窓ガラスに顔を押しつけるようにして、ホームを眺めていた。

三月二十六日に、同じ出雲1号で東京を出発した藤代も、京都で、こうして、ホームを見て

いたのだろうか？

悠子は、そんなことを考えながら、コートのポケットから煙草を取り出して、火をつけた。

十津川が、へえという顔で、

「煙草を吸うんですか？」

「このごろ、吸うようになったんです」

と、悠子は、いった。

藤代を失った寂しさからとは、自分では、思っていない。何か、新しいことをやってみたい。それだけの気持ちから始めたことだった。

京都には、七分間停車した。

大型で、馬力の強い、DD51は、ゆっくりと、十二両の車両を引っ張って動き出した。

そのとき、ホームを見つめていた悠子の眼の隅に、ちらりと、人の姿が映った。

8

出雲1号は、スピードをあげて、北に向かって走り始めた。

「どうしたんです？　妙な顔をして」

と、十津川が、悠子にきいた。

悠子が、首をかしげて、考え込んでいたからである。

「京都は、運転停車だから、乗客の乗り降りはないはずでしょう？」

悠子が、きき返してきた。
「そうですよ。だから、客車のドアは開かなかったでしょう?」
「でも、ホームに、人がいましたわ」
「それは、機関車の交換をしていた作業員でしょう」
「いいえ、ホームの真ん中あたりに、一人いたんです」
「どんな人間ですか?」
「うす茶のコートを着た男の人です。コートの襟を立てていましたわ。それに、サングラスをかけて」
「駅員では、なさそうですね」
と、いってから、十津川は、車掌長の松木に、
「京都では、機関車の交換の他に、どんなことが、行なわれたわけですか?」
と、きいた。
「荷物の積みおろしと、給水ですね」
「荷物の積みおろしは、先頭の荷物車ですね?」
「ええ」
「給水というのは?」
「客車のタンクに給水するわけです」
「どうやって?」

「駅構内の線路に沿って、給水用のパイプが走っているので、それを使って、タンクに給水するわけです」
「そうだとすると、作業員は、ホームにいることはありませんね？」
「ええ。ありません」
「すると、ホームの中ほどに男がいたとすると、それは、何をしていたんでしょう？」
「国鉄の職員じゃ、ありませんね」
と、松木は、いってから、
「見送りに来た人じゃありませんか」
「しかし、京都は、乗客の乗り降りはないはずですよ」
「そうなんですが、何年も会ってない友人なんかが、京都に運転停車するのを知って、ホームに来ていることが、ときたま、あるんです。窓ガラス越しですから、顔を見るだけですがね」
「じゃあ、あなたの見たのは、そんな人でしょう」
十津川が、悠子に向かって、そういうと、彼女は、
「そうかもしれませんけど――」
と、語尾を濁した。
「納得できませんか？」
「そうじゃありませんけど、警部さんに見せられた中河英男という人に似ていたような気がしたものですから」

「え？」

と、今度は、十津川が、声をあげ、亀井と顔を見合わせた。

「本当に、中河だったんですか？」

「あの顔写真と同じ人に見えたんですけど、一瞬でしたから、自信はありませんわ」

「くわしく話してください。その男に気がついたのは、いつですか？　京都駅に着いてすぐですか？」

「いえ。機関車の交換がすんで、動き出したとき、何気なく、ホームのうしろのほうに眼をやったんです。といっても、この窓からだと、いくら顔を押しつけても、ホームの端なんかとうてい見えませんけど。ホームの真ん中あたりに、男の人が、ちらりと見えたんです」

「それじゃあ、よく見ていないわけですね？」

「ええ」

「それでも、中河らしかったと？」

「そんな気がしたんです。それに、その人の表情が、何となく気になって」

「どんな表情をしていたんです？」

「こっちを見て、ニヤッと、笑ったような気がしたんです」

「本当ですか？」

「そう見えたんですけど」

「ちょっと――」

と、松木車掌長が、割って入って、
「その人が、見送りに来ていたとしても、辻褄が合うと思いますよ。5、6号車あたりに乗っていた乗客が、通路に出ていたとします。男は、その乗客にあいさつしたのかもしれない。それでも、辻褄が合うわけでしょう？」
「ええ。そうですわね」
「車内で、手を振ったのに対して、ニッコリしたんでしょう」
「ええ。私、自分の席に戻りますわ」
悠子は、自分の個室のほうに、戻って行った。
亀井はじっと、その後ろ姿を見送ってから、十津川に向かって、
「今の彼女の言葉をどう思いますか？」
「中河らしい男が、京都駅のホームにいたということかね？」
「そうです」
「わからんね。彼女自身、見たのは、一瞬だったといっているんだ。中河だという確証はないし、万一、中河だったとしても、彼は、この列車に乗らなかったことだけは確かだよ」
「中河は、京都で乗れると思って、新幹線で追いかけて来たんじゃないでしょうか。京都で待っていたところ、ここでは、ドアが開かなかった。それで、乗り込むのに失敗した」
「そうは思えないね」と、十津川は、言下に否定した。
「中河は、東京鉄道同好会の会員だよ。運転停車では、列車に乗り込めないことぐらいわかっ

ているはずだ」
「じゃあ、どうお考えですか？」
「だから、わからんといったんだ。中河だとしたら、何のために、京都駅にいたのか、見当もつかないよ。多分、中河じゃなくて、車掌長のいったような見送りの人間だろう」
「そうですね。中河だったとしても、この列車に乗れなかったことは、確かなんですから」
「京都で乗れなければ、もう、この出雲1号には、乗れないさ。ここから先は、単線で、追い抜ける列車はないし、車では、まず、無理だろうからね」
と、十津川がいったとき、松木車掌長が、
「東京総合指令室から、警部に電話です」
と、いった。

9

「小川です」
と、無線電話の声がいった。
「桜井刑事から、連絡があったのか？」
「例の小山ひろ子のことがわかりました。今日、日下部淳と、新宿の青年会館で挙式し、新婚旅行に向かっています。行く先はわかりませんが、この日下部淳は、国鉄の職員です」
「国鉄の職員？」

「北野さんに連絡して調べてもらったところ、日下部淳という職員がいることがわかりました。運転局の人間で、年齢は二十八歳です」
「新婚旅行先がどこか、本当にわからないのか？」
「いくら調べても、わからないと、桜井刑事はいっていました。この時間では、仕方がないと思います。それから、日下部淳は、東京鉄道同好会に、ゲストで呼ばれていって、小山ひろ子と知り合い、結婚したそうです」
「わかった」
十津川は、電話を切った。
通路に出ると、十津川は、今の話を、亀井に伝えた。
「問題は、この二人が、この出雲1号に乗っているかどうかということだよ」
と、十津川は、いった。
「それに、小山ひろ子と、中河英男と関係があったかどうかですね。もし、関係があって、彼女が、中河を裏切った形になっているとすれば、中河が、この出雲1号にダイナマイトを仕掛けたくなる気持ちもわかりますね」
「あと、一時間半で、午前三時だ。それまでに、桜井刑事が、解答を見つけられるかどうかわからんな。関係者を訪ねて、聞き込みをやれる時間じゃないからね」
「どうしますか？　警部」
「車掌長に頼んでみよう」

「と、いいますと？」
「車内アナウンスをしてもらうんだ」
十津川は、通路にいた松木をつかまえると、
「車内アナウンスで、日下部淳と、小山ひろ子のカップルを、呼び出してもらえませんか」
と、いった。
松木は、当惑した表情になって、
「今、午前一時三〇分です。皆さん、すでにお休みになっています。こんな時間に、車内アナウンスをやるというのは――」
「しかし、非常時ですよ」
「それはわかりますが、その二人は、間違いなくこの列車に乗っているんですか？」
「それを知りたくて、お願いするんです。爆破されたときのことを考えてください」
「わかりました」
と、松木は、いった。
彼は、乗務員室に入ると、マイクのスイッチを入れた。
「お休みのところをお騒がせして、申しわけありません。お客さまの中に、日下部淳さま、小山ひろ子さまがいらっしゃいましたら、急用が出来ましたので、1号車の乗務員室までおいでください」
松木は、そのアナウンスを、二回くり返した。

静まり返った車内に、アナウンスは、よく聞こえたはずだった。
十津川と亀井は、腕時計を見ながら、反応を待った。
五分、一〇分。
しかし、誰も現われない。
「この列車に、乗っていないんじゃありませんか？」
と、松木が、十津川を見た。
「それとも、眠ってしまっていて、今のアナウンスが聞こえなかったのか」
「どちらかわかりませんね」
「もう一度、アナウンスしてください。もし、それでも、出て来なければ、乗っていないものと考えて、あきらめます」
「うるさくて眠れないと、他の乗客が怒鳴り込んでくるかもしれませんよ」
と、松木は、肩をすくめたが、それでも、もう一度、マイクに向かってくれた。

10

最初にやって来たのは、酔っ払った大男だった。
一杯やって、そのまま、ご機嫌で寝込んだところを起こされて、その男は、怒鳴り込んで来たのだ。
亀井が、男を押し返した。

そのあとへ、若いカップルが、やって来た。
男は、国鉄の用意した寝巻姿、女のほうは、ネグリジェの上に、コートを羽織っていた。
「日下部ですが」
と、男がいった。
十津川は、女に眼をやって、
「じゃあ、そちらが、小山ひろ子さんですね？」
「そうですけど、こんな夜おそく、何の用ですの？」
女は、不機嫌だった。
無理もないと思いながら、十津川は、二人に、警察手帳を見せた。
日下部と、ひろ子は、びっくりしたように眼を大きくし、顔を見合わせた。
「警察が、僕たちに何の用なんです？」
日下部が、きいた。
「1号車にお乗りですか？」
「ええ。個室寝台の7号室と8号室ですが」
「小山さんは、東京鉄道同好会の会員でしたね？」
と、十津川は、ひろ子を見た。
「ええ」
「じゃあ、中河英男を、ご存知ですね？」

「知っていますわ。中河さんも、同じ会に入っていらっしゃいますから」
「正直にいって頂きたいんですが、中河英男は、あなたを好きだったんじゃありませんか？」
十津川がきくと、ひろ子は、当惑した顔になって、ちらりと、日下部を見た。
「どうですか？」と、十津川は、重ねて、きいた。
「大変な事件になるかもしれないので、ぜひ、正直に話して頂きたいのですがね」
「僕がいいましょう」
と、日下部が、十津川の質問を引き取って、
「彼女から、中河さんに、結婚を申し込まれたことがあると聞きました」
「そうなんですか？」
十津川は、ひろ子に、確認を求めた。
「ええ」
「だが、断わった？」
「ええ。中河さんに対して、そんな感情は、持っていませんでしたし、それに――」
「それに、何です？」
「中河さんて、いい人なんでしょうけど、ちょっと、気味の悪いところがあるんですわ」
「どんなところがですか？」
「小さなことを、じっと、思いつめていたりするんです」
「もう少し、具体的にいってくれませんか」

「うまくいえないんですけど、中河さんが、いつか映画に行かないかって、いったとしますわね。日時も、見る映画も決まっていないわけだから、こちらは何となく忘れてしまうんです。それからしばらくして、突然、なぜ、映画に誘ってくれないんだというんです。こっちは、びっくりしてしまうんですけど、中河さんは、こっちが、忘れてしまったことに、腹を立てるんです。まるで、こっちが裏切ったみたいに考えて」

「なるほどね。勝手に、ああだ、こうだと考えて、そのとおりにならないと、裏切られたと思い込む」

「ええ」

「日下部さんは、東京鉄道同好会に、ゲストで出席したことがあるそうですね？」

「会長さんと知り合いなので、頼まれて、出たことがあります。まあ、それで、彼女と知り合えたわけですが」

日下部は、白い歯を見せて、ニッコリした。

「個室寝台の切符は、いつ買われたんですか？」

「一カ月前です」

「今ごろの個室寝台の切符は、なかなか、手に入らないんでしょう？　特に、二枚続きの切符は？」

「そうですが、僕が、国鉄に勤めているので何とか――。もちろん、ちゃんと、料金は払っていますよ」

「その切符を、誰かに見せましたか？」

十津川がきくと、二人は、顔を見合わせたが、ひろ子のほうが、

「お友だちに見せましたけど。ええ、同好会のお友だちにも」

と、いった。

これで、中河が、「出雲1号」を爆破しようとする動機がわかったと、十津川は思った。

中河は、恋人を、日下部に奪われた。少なくとも、中河は、そう考えたに違いない。

中河は、鉄道が好きだった。

そして、彼から小山ひろ子を奪った日下部淳は、鉄道の人間だった。

鉄道に対する愛着が、逆転して、強い憎しみに変わったのだ。

しかも、中河は、「富士」の個室寝台について、不満の投書を出している。その投書の中に、「個室寝台の切符は、なかなか手に入りにくいのに」と、書いている。

日下部たちは、その個室寝台で、山陰への新婚旅行に出かけることになった。

中河は、日下部が、国鉄職員であることを利用して、「入手しにくい」個室寝台の切符を手に入れたと勘ぐったのだ。

だから、「出雲1号」を爆破しようと考えた。

それなら、四月十三日に東京駅を発った、日下部と小山ひろ子の乗った、この「出雲1号」以外には考えられない。

（しかし、中河は、この列車に乗っていないのだ）

どうやって、爆破するつもりなのだろうか？

11

「お二人にききますが、新婚旅行に持って行ってくれといって、何か、プレゼントされませんでしたか？」

と、十津川は、二人を見た。

「それは、中河さんからということですの？」

ひろ子がきいた。

「いや、中河とは限りません。中河が、他の人に頼むことも考えられますからね。どんなものでも、プレゼントされたものがあったら、いってください」

「お友だちから、花束を貰っただけですわ」

と、ひろ子がいった。

「それだけですか？」

「ええ」

「手回り品は？」

「スーツケースを一つずつ持っています」

と、日下部が、代わって答えた。

「あなた方は、式場から、直接、東京駅へ行ったんですね？」

「そうです」
「式の最中、二つのスーツケースは、どこへ置いてあったんですか？」
「控室に置いてありましたが――」
「控室には、誰でも入れましたか？」
「入ろうと思えば、入れたかもしれませんが、それが、何か問題なんですか？」
「二つのスーツケースを見せてください」
「どうしてです？」
日下部が、難しい顔で、十津川を見つめた。
「正直にいいましょう。中河英男は、この列車を爆破すると予告して来たんです」
と、十津川は、いった。
「本当なんですか？」
「まさか――」
日下部とひろ子が、顔を見合わせている。
「ひょっとすると、あなた方のスーツケースに、時限爆弾を仕掛けたかもしれません。そうすれば、爆弾を、この列車に持ち込めるわけですからね」
十津川と亀井は、日下部たちの個室寝台に出かけた。
7号室が日下部、8号室がひろ子になっていたが、新婚のカップルだから、適当に、行き来しているのだろう。

7号室のほうに、二つのスーツケースを持って来てもらった。

二人で、夢を語り合いながら、デパートにでも買いに行ったのか、どちらも、真新しいスーツケースである。

十津川は、ふと、ピカピカの一年生という言葉を思い浮かべながら、

「開けてみてください」

と、二人にいった。

「しかし、警部さん。スーツケースの鍵は、ずっと、僕たちが持っていましたから、他の人間に開けられるとは思えませんが」

日下部が、首をかしげた。

「スーツケースの鍵ぐらい、私にも、ピン一本で開けられますよ」

と、十津川は、切り返した。

まず、日下部の大きな青色のスーツケースが、開けられた。

着がえ、洗面道具、時刻表、山陰地方の旅行案内、カメラ、それに、胃薬などが詰まっていたが、物騒な爆発物は見当たらなかった。

次は、小山ひろ子の赤いスーツケースである。

こちらは、さすがに、中身が華やかだった。カラフルな下着が入っている。母親が入れたのか、お守りも三つばかりあった。

だが、ダイナマイトはおろか、マッチ一本見当たらなかった。

二人が、友だちに貰ったという花束は、窓際のテーブルの上に、置いてあった。もちろん、花束の中に、ダイナマイトをかくせはしない。

それだけで、十津川は、納得はしなかった。

小山ひろ子と、日下部が、この列車に乗っている以上、中河が、爆破予告したのは、この出雲1号以外には考えられないからである。

「二つの部屋を調べてみよう」

と、十津川は、亀井にいった。

「しかし警部、この列車は、品川車両基地で一応、車内の点検をすませていますし、中河が乗り込んだ形跡もありませんが」

亀井が、いった。

「わかっているが、念のためだよ」

二人は、7号室から調べていった。

個室寝台は、細長く、狭い部屋である。

そのため、機能的に作られている。ということは、必要最小限度のものしかついていないということでもある。

したがって、ダイナマイトを仕掛ける場所も限られてくる。

まず、棚がある。だが、そこには、何もなかった。次は、部屋の大部分を占めるベッドである。長さ一九〇センチくらい、幅は六、七十センチしかない。十津川は、手で叩いてみたが、

ダイナマイトが、その中にかくされている様子はなかった。
8号室も同様だった。
十津川は、通路に出てから、首をかしげてしまった。
「中河が狙うとすれば、この列車以外には考えられないんだがね」
「同感ですね」
と、亀井も、肯く。
「桜井刑事によると、戸越銀座にある小山ひろ子のマンションの管理人は、昨日の夕方、六時半ごろ、男が訪ねて来たといっている。ひげ面なので、桜井刑事は、中河じゃないと考えたらしいが、私は中河だと思っているんだ」
「付けひげですか？」
「だろうね。七時半に、中河が、新宿に現われている。時間的に符合するんだ。恐らく、中河は、ひょっとして、小山ひろ子が、新婚旅行を取り止めるかと思って、アパートへ見に行ったんだろう。あるいは、郵便受をのぞき込んでいたともいうから、彼女に、結婚するなとでもいう脅しの手紙を書いたのかもしれない。それを取り返しに来たということも考えられる」
「間もなく、二時半になります」
と、亀井が、腕時計を見た。
「中河は、いったい、どこにダイナマイトを仕掛けたんだ？　それとも、爆破を諦めたのか？」

十津川は、いらだたしげに、舌打ちした。
「私は、中河が諦めたほうに賭けますね。彼は、この列車に乗らなかった。乗らなければ、車内にダイナマイトは、仕掛けられませんよ。日下部と、小山ひろ子のスーツケースにも入っていなかったんですから」
と、亀井がいったが、十津川は、強く、かぶりを振って、
「いや、中河という男は、そんなに簡単に諦める男には思えないね」
と、いった。
十津川は、まだ、直接、中河英男という男に会ってはいない。
だが、彼を知っている人たちの証言や、彼の行動を見ると、内向的だが、粘液質な性格に思える。気弱に見えて、冷酷なのだ。こういう男は、やたらに勇ましい人間より、何倍も危険だろう。
「中河は、どこかにダイナマイトを仕掛けたと、私は思う」と、十津川は、いった。
「それも、午前三時に爆破するようにしてあるはずだ」
「しかし、どうします？　この列車の端から端まで探しますか？」
「三時まで、あと三〇分しかないんだ。無理だよ。それに、簡単に見つかるようにはなっていないだろう」
「どうしたらいいでしょうか？」
「車掌長に相談してみよう」

十津川は、亀井と、1号車の乗務員室で、松木車掌長をつかまえた。
「ダイナマイトは、見つかりませんでしたが、私は、中河英男が、この出雲1号に、時限爆弾を仕掛けたと考えます。午前三時に爆発するようにです」
と、十津川は、松木にいった。
「どこへですか？」
松木が、蒼い顔できいた。
「わかりませんが、そう考えて行動すべきです」
「しかし、どうしたらいいんでしょうか？」
「次の停車駅は、福知山でしたね？」
「そうです。午前二時五二分着で、四分間停車です」
「福知山で乗ってくる客はいなかったですね？」
「はい。降りるお客もいませんが」
「では、福知山で、全部の乗客を降ろしましょう」
と、十津川は、いった。
「全員をですか？」
松木は、眼をむいた。
「そうです。この列車に、時限爆弾が仕掛けられている恐れがある以上、危険はおかせませんからね。全員を福知山で降ろして、いったん、避難させる。午前三時を過ぎても、何事もなけ

れば、中河は、諦めたと見ていいでしょう。また、乗客を乗せて、出発してください」

12

「しかし、警部さん。二時五二分着ですから、午前三時までに、八分間しかありません。三百人の乗客を、避難させるのは大変ですよ」

「しかし、やってください。そのために、二つのことをお願いしたいのです。第一は機関士に連絡して、スピードをあげてもらうことです。今、二時半、いや、もう二時三七分ですから、福知山に着く時間は、少ししか早くならんでしょうが、一分でも、二分でも、時間を稼ぎたいのです」

「わかりました」

「もう一つ。福知山には何人の駅員がいるんですか？」

「五十人ですが、この時間では、十人足らずでしょう」

「では、駅員に、この列車の到着ホームに出ているように連絡してください。それから、福知山署に連絡がとれたら、そちらにもです。午前三時に、爆発が起きる可能性がありますからね」

十津川がいい、松木は、すぐ、無線電話に飛びついた。

東京総合指令室を通じての連絡になるから、時間はかかるだろうが、この列車が、福知山に着くまでには、駅員や、福知山署の警官が、ホームに集まっているだろう。

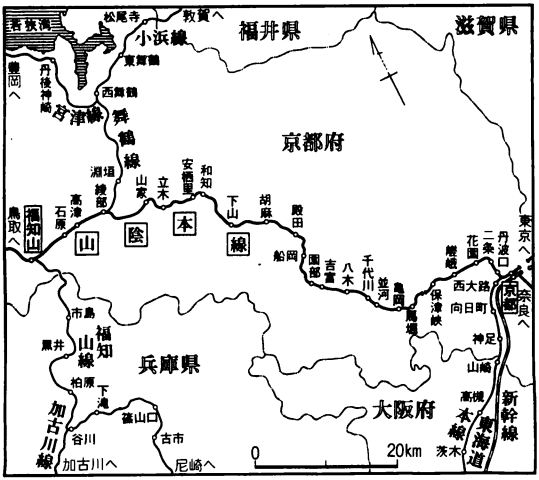
機関士へは、列車内の電話で連絡できる。
出雲1号は、スピードをあげた。揺れが、大きくなった。
機関士が、夜の闇に向かって、鋭く、汽笛を鳴らした。
小さな駅が、あっという間に、後方に流れ去った。
高津駅。
無人駅である。
「連絡しました」
と、松木が、乗務員室から出て来て、十津川にいった。
「福知山は、どちら側が開くんですか？」
亀井が、松木にきいた。
「京都と同じで、進行方行に向かって、左側です」
松木が、答える。
十津川が、腕時計を見た。
「そろそろ、車内放送をしてくれませんか」
と、十津川は、松木にいった。
「時限爆弾のことをいってもいいんですか？」
「その予告があったといってください。いたずらかもしれないが、福知山に着き次第、列車から降りて、避難するようにとです。駅に着いたら、われわれが、ホームの駅員と協力して、乗

客を降ろすんです」
「わかりました」
と、松木はいい、乗務員室に入って、ドアを開けたまま、車内放送用のマイクを手に取った。
そのとき、無線電話が鳴った。
十津川が、受話器を取った。
松木は、一瞬、マイクを持ったまま、十津川を見守った。
――こちら、東京総合指令室です。
と、切迫した声がいった。
「何の用ですか？」
――今、男の声で、電話がありました、すぐ出雲1号に連絡しろというのです。人命にかかわることだと。
「それで？」
――間もなく、福知山に着くが乗客を降ろそうとしてはいかん。すべてのドア、すべての窓を開けようとしたら、ダイナマイトが爆発するというのです。すべてという言葉を何度もくりかえして強調しました。
「何だと！」

第十六章　脱出へ

1

受話器を持ったまま、十津川は、色を失った。
――その男は、こんなこともいっていました。福知山で乗客を降ろし、何とかしようとしても無駄だ。そんなことをすれば、怪我人が増えるだけだとです。
「畜生！」
と、叫んで、十津川は、電話を切った。
名前はいわなかったというが、この時間に、出雲1号を爆破するぞと電話してくる人間は、中河英男しか考えられない。
松木車掌長が、マイクを持ったまま、
「放送はどうしますか？」
「事態が変わりました。放送は中止してください。列車の外に出られないんじゃ、パニック状態になってしまう」



「すべてのドアと窓は、開けると、ダイナマイトが爆発するというんですか？」
「そうです」
「しかし、警部さん。東京からここまで、ドアは、何度も開けています。一度も、爆発は起きていませんよ。中河のハッタリじゃないんですか？」
「京都だ！　京都ですよ！」
と、亀井が、突然、叫んだ。
「そうだ。京都だ」
十津川も、蒼ざめた顔でいった。
「氷室悠子さんが、京都駅で見た男というのは、やっぱり、中河だったんですよ」
「京都は、運転停車で、客車のドアが開かない。乗客は、寝ている。少ない駅員も、列車の前のほうに来ている。機関車の交換と、荷物の積みおろしをやっているからね。寝静まった客車のほうには、誰も注意を払わない。

それに乗じて、客車に、ダイナマイトを仕掛けたんだ。七分間も、停車していたから、セットは出来たはずだ」

「ドアも窓も駄目だというんですか？」

松木が、声をふるわせてきいた。

「そうです。すべてのドア、すべての窓を開けると、爆発するといっています」

「窓は、もともと開きませんが――」

「窓が安全なら、叩き割って、外に出られますが、それも駄目となると、この列車から、誰も出られません。中河は、こっちの考えを見すかして、そんな真似をしたんです」

「しかし、ドアや、窓を開けたら、爆発するような細工が出来るものでしょうか？」

「中河は、電気関係の専門学校を出ています。窓を叩き割ったら、その震動で爆発するように作って、車体に取りつけたのかもしれません」

「どうすればいいんです？」

「中河が、京都駅で取りつけたダイナマイトを、取り外す以外に方法はありません」

「でも、彼は、外側から取りつけたんでしょう？　そうなると、車内にいては、どうしようもないわけですが？」

「そうです。われわれは、福知山に着いても、列車の外に出られないんです。ホームにいる人たちが、ダイナマイトを取り外してくれるまでは」

「取り外せなかったら、どうなります？」

「もし、そのダイナマイトに、時限装置がついていて、午前三時にセットされていたら、その時刻に爆発します」

「――――」

「中河の盗んだダイナマイトは五本です。それに、列車は、福知山に停まっています。列車全体が爆発することはないでしょう。この列車の二カ所か三カ所で、爆発が起きるだけと思いますが、それがどこかわからないと、乗客の避難のさせようがありません」

十津川がいったとき、また、小さな駅が、窓の外を流れ去った。

石原駅。

これも無人駅である。

そして、次は福知山駅。四、五分で着く。

また、汽笛が鳴った。それは、十津川には、まるで、瀕死の巨象の悲鳴に聞こえた。

「荷物車から出られませんか？」

と、松木車掌長が、十津川を見た。

「荷物車？」

「1号車から、ドアを開けて、荷物車に出られます。このドアも、荷物車のドアも、手動式で、客車のドアとはつながっていません」

「しかし、中河は、すべてのドアと、何度も強調しているんです。万一を考えると、簡単には開けられませんよ」

「荷物車のドアは、京都に運転停車したとき、開けて、荷物を積みおろしていたんです」
「しかし、荷物の積みおろしが済んで、列車が発車するまで、作業員も誰もいない時間が何分間かあったかもしれないでしょう？　なにか細工をされていると考えたほうが無難です」
「じゃあ、出口が無いんですか？」
松木が、甲高い声でいったとき、「警部さん」と、誰かが呼んだ。
いつの間にか、1号車の氷室悠子が、通路に出て、こちらを見ていた。
緊迫しているときだけに、十津川は、自然に、
「何です？」
と、怒鳴るようないい方になった。
悠子は、じっと、十津川を見つめて、
「私、お話を聞いてしまったんです」
「それで？」
相変わらず、叱りつけるようないい方だった。
「この窓から外へ出られますわ」
と、悠子は、デッキの後ろの小さな窓を指さした。
寝台特急（ブルートレイン）は、列車全体が、エアコンディショニングされているので、客車の窓は、固定されて開けられない。
ただ、個室寝台の1号車のデッキの近く、乗務員室の前にある八十センチ四方ぐらいの小さ

な窓だけが、唯一つ、手で開けられる。
「この窓は、手で開けられるんです」
と、悠子がいった。
「それは知っていますが、中河は、すべてのドアと窓といっているんです。もし、開けたとたんに爆発したら、どうなるんです？」
「でも――」
「でも、何です？」
「私、京都を出たあと、この窓を開けたんです」
「何ですって？」
「京都を出てしばらくして、ちょっと気分が悪くなったもんですから、外の空気を吸いたくなって。そのとき、亡くなった藤代さんが、ブルートレインに唯一つだけ、手で開く窓があるといっていたのを思い出して、開けてみたんです。すぐ閉めましたけど、何ともありませんでした」
「京都を出てから開けたことに間違いありませんね？」
「はい」
「下まで、開けましたか？」
「はい、一番下まで開けました」
「カメさん。いや、私が開けよう」

十津川は、問題の窓に近づくと、両手で、いっきに窓ガラスを引き下げた。
何ともなかった。
夜半の冷たい外気が、車内に流れ込んできただけである。
「カメさん。福知山に着いたら、ここから外へ出るぞ」
と、十津川は、亀井にいった。小さい窓だが、ひとりずつなら、出られそうだ。
「私は、どうしたらいいですか？」
松木車掌長がきいた。
「車内で、万一に備えてください。他の車掌さんと」
「万一にといわれても――」
「このままで行くと、何時に、福知山に着きますか？」
「二分は早く着きます。二時五〇分です」
「それでは、福知山に着いてから、五分間待ってください。われわれは、その間に、仕掛けられたダイナマイトを見つけ出し、取りのぞきます。もし、五分間で、取りのぞけない場合は、その位置がわかり次第、乗客を、列車内の遠い位置へ誘導してください。五分間で」
「やってみます。でも、もしダイナマイトが見つからなかったら、どうしますか？」
「うーん――。いや、かならず見つけるよ。見つけなければならんのだ！」
十津川は言葉を次いで、
「東京総合指令室に電話して、こういってください。そこにうちの刑事がいますから。中河は

午前一時一〇分に京都駅にいた。すぐ手配するように、京都府警に頼めと」
「わかりました。間もなく、福知山に着きます」
松木がいい、十津川は、開けた窓から、前方を見つめた。
夜の闇の中に、福知山駅の明かりが、急速に近づいて来るのが見えた。
それは、救いの灯のように見える。だが、あるいは、それは、墓標かもしれなかった。

2

福知山からは、大阪へ行く福知山線が出ている。したがって、ここには、山陰本線と、福知山線のホームがある。
左右に、片側だけ使うホームが一つずつ、そして、中央のホーム。
下り山陰本線は、中央ホームに横付けされる。
連絡を受けた福知山駅では、当直の駅員十二名を総動員して、中央ホームに待機させた。
その他、福知山署からも、二十人の警察官が、駈けつけていた。爆発物処理班を、京都府警本部や、自衛隊駐屯地から呼ぶ時間がないので、それに対処するために、福知山署から来たのは、鑑識課員たちだった。
幸いなことに、出雲1号に、ここから乗る客はいないので、ホームに乗客の姿はなかった。
出雲1号が、見えて来た。
到着次第、すべてのドアを開け、乗客を避難させるという連絡を受けていた駅員たちは、そ

れぞれの停車位置に分かれて立ち、降りてくる乗客の誘導に備えていた。が、小柄な細見助役が、中央ホームに飛び込んで来て、大声で叫んだ。

「事態が変わった！　犯人が、出雲1号の車体にダイナマイトを仕掛けて、ドアや窓を開けると爆発する。だから、停車しても、乗客は降りられない。すぐ、ダイナマイトが、どこに仕掛けてあるか見つけるんだ！」

「え？」

という声が、駅員たちの間に起きた。

彼らの間に、動揺が生まれた。乗客の誘導の代わりに、ダイナマイトの発見という危険な仕事が、飛び込んで来たからだった。

動揺がおさまらないうちに、出雲1号の長い車両が、中央ホームに滑り込んで来た。

定刻より二分早い、二時五〇分だった。

列車が停止すると同時に、十津川は、狭い窓から、線路の上に飛び降りた。

続いて、亀井刑事が、頭から突っ込むような勢いで、線路に飛び降りた。一瞬、右足を痛めた感じだが、亀井は、すぐ忘れた。

二人は、荷物車と1号車の間をすり抜けて、中央ホームに飛び上がった。

十津川は、大声で叫んだ。

「すぐ、ダイナマイトを見つけてください！」

その声に励まされるように、十二人の駅員と、二十人の警察官が、一斉に、出雲1号の車体

を調べ始めた。

亀井も、それに加わった。

車内では、松木車掌長たちが、十一両の客車に分散して、窓ガラス越しに、じっと、ホームの動きを見守っている。その中に、悠子の蒼白い顔も混じっている。が、他の乗客たちは、眠りについたままだった。

十津川は、細見助役をつかまえた。

「五分たったら、ホームのベルを鳴らしてください」

「どうするんですか？」

「五分間で、ダイナマイトを見つけて、取り外したい。しかし、うまくいかなかった場合は、あとの五分間で、車内の乗客を、少しでも安全なように、移動させなければならないからです」

「わかりました」

助役は、懐中時計を取り出して、じっと、見つめた。その手が、小刻みにふるえている。

二分たった。

食堂車の近くで、「わッ」という歓声があがった。

十津川は、駈け寄った。

食堂車のドアに取りつけたダイナマイトが見つかったのだ。

続いて、一車両おいた6号車でも、見つかった。

どちらも、細いピアノ線が、ドアに取りつけられ、ドアが開くと、ピアノ線が引っ張られて、

引き金が動く仕掛けのようだった。

「時限装置がついているか、まず、調べてくれ！」

と、十津川が、大声でいった。

駅員は、さすがに尻込みをした。

福知山署の鑑識の技官が、前に出た。

食堂車の場合は、二本のダイナマイト、6号車の場合は、三本のダイナマイトが、それぞれ、束ねて、磁石で、車体の下に取りつけてあった。

鑑識の技官が、懐中電灯を持って、ホームに腹這いになり、床下をのぞき込んだ。

「時限装置がついている。まず、ドアに取りつけてあるピアノ線を切断してください」

腹這いのまま、技官がいった。

カッターが持ち出され、ピアノ線が切断された。

三分過ぎた。

時間との戦いだった。

亀井が、手帳に、「ダイナマイトは、6号車と食堂車」と書いて、窓ガラス越しに、車内にいる松木車掌長に見せた。

五分で、取り外せない場合は、乗客を、危険な車両から、なるべく遠くへ移してもらいたかったからである。

あとは、車体の下に取りつけられたダイナマイトの処理だった。

万一に備えて、駅員をさがらせた。取り外そうとすると、爆発するようになっているかもしれないからだった。

電気関係にもくわしいという鑑識の技官が、仔細に調べてから、

「電池式で、ピンが抜けると、爆発する仕掛けです。ドアに取りつけたピアノ線が引っ張られると、ピンが抜けて、爆発するわけです。ピンが差し込まれたままなら、動かしても大丈夫です」

「時限装置は？」

「クオーツの目覚まし時計が付いていますね。こちらも電池発火式で、時間がきたら、電流が流れるんです。三時にセットされているから、あと6分ありますね。まず、取り外します」

四十二、三歳の技官は、落ち着いていった。

「本当に大丈夫かね？」

「大丈夫ですよ。手で触れただけで爆発するような複雑な装置なら、犯人も、取りつけられなかったでしょう」

と、技官は、笑って、無造作に、食堂車のダイナマイトを引き剝がした。

6号車のダイナマイトも外され、中央ホームの反対側の線路上に移された。

「時限装置は、どうやって解体するんだ？」

と、十津川が、きいた。

3

「シェービングクリームはありませんか？」
と、線路上におりた技官が、陽焼けした顔を、十津川に向けてきいた。
「そんなものを、どうするんだね？」
「目覚まし時計の針を止めなければならないんだが、ガラスを割ったりすると、そのショックで、電流が流れるかもしれません。だから、隙間から、シェービングクリームを押し込んで、止めるんです。犯人が細工したときに、隙間が出来ていますからね」
「シェービングクリームだ！」
十津川が、叫んだ。
「私は、そんなものを、持って――」
と、亀井が、首を振る。その声を、途中でさえぎって、
「日下部だ。さっき、彼のスーツケースを調べたとき、入っていたよ」
「そうだ。見ました！」
亀井は、車内の松木車掌長に合図して、ドアを開けさせると、物もいわず、車内に飛び込んだ。
1号車に着くと、7号室のドアを、激しくノックした。
ドアが開いて、寝ぼけ眼の日下部が顔を出した。

「スーツケースを開けてください！」
亀井が、怒鳴る。
「またですか？」
日下部が、文句をいった。
亀井が、黙って、室内に入ると、棚から、スーツケースを引きずりおろして、開けていた。
「何をするんです！　いくら刑事だって――」
「説明はあとです」
亀井は、洗面用具の入った袋をつかむと、また、ホームに飛び出した。
走りながら、シェービングクリームのチューブを取り出すと、十津川に投げた。
十津川が、さらに、それを、線路下の技官に渡した。
技官は、慎重に、シェービングクリームを流し込んでいった。
片方の目覚まし時計が止まり、同じ方法で、もう一つの時計も止まった。
技官は、大きく息をついて立ち上がると、オーケイのサインを出した。
息を呑んで、遠くから見守っていた人々の間から、自然に、万歳の声があがった。

4

「回収したダイナマイトの数を確認してくれ」
と、十津川は、亀井にいった。

「何度、数えても、五本あります」
亀井は、一本二本と、丁寧に数えてから、十津川にいった。
「五本というと、中河が盗み出した本数と同じだな」
「これで、この事件も解決しましたね。まあ、中河が逮捕されるまでは、完全な解決とはいえませんが」
亀井が、ニッコリした。が、十津川は、かえって、難しい顔になった。
「どうも、すっきりしないな」
「この五本以外にも、中河が、ダイナマイトを手に入れているんじゃないかというご心配ですか？」
「いや、それはないね。中河の事件のあと、全国の県警に調べてもらったんだが、あの五本以外に、ダイナマイトの盗難は出ていないんだ」
「それなら、何を心配されておられるんですか？」
「うまく説明できないんだが――」
「中河が、わざわざ、福知山で、ドアを開けるなと警告してきたからですか？　すべてのドアと窓などと、ハッタリをかけましたが、本当に危険だったのは、ドアだけでした」
「いや、警告のことじゃない。あの警告は、自分が、警察の考えの上を行ってることを誇示したかったのさ。それに、福知山に着く寸前に電話すれば、ダイナマイトを取り外す余裕はないと考えたんだろう」

「それなら、問題はないでしょう？」
「中河が狙ってたのは、個室寝台にいる日下部淳と、小山ひろ子のカップルのはずだよ。それなのに、1号車には、ダイナマイトは、仕掛けられていなかった――」
「それは、警部。京都に運転停車したとき、1号車の近くでは、機関車の交換や、荷物の積みおろしが行なわれていたんです。それで、1号車には近づけない。止むを得ず、食堂車や6号車にダイナマイトをセットしたんでしょう」
「中河は、鉄道にはくわしいんだ。京都駅では、1号車に近づけないことぐらいわかっていたはずだよ。それなのに、出雲1号に乗り込むことをせずに、京都駅に先回りしていた理由がわからんね。それにだ。カメさん。もし、中河が電話して来なくて、福知山駅に着いてドアが開いて、爆発が起きたとしよう。列車は停まっているんだから、食堂車と6号車は、ぶっこわれるだろうが、脱線はしないし、1号車の二人は無事だよ。おかしいじゃないか」
「しかし、現実に、列車内には、何も仕掛けられていないんですから」
と、亀井がいったとき、松木車掌長が、近づいて来て、
「助かりました」
と、十津川に頭を下げた。
「乗客の大部分は、何も知らずに寝ていらっしゃいます。もし、三百人の乗客を起こして、避難させなければならなかったなら、大混乱になっていたと思います。助かりました。もう、発車してよろしいですか？」

「今、二時五六分ですね？」
「そうです。今、発車すれば、定刻どおりの発車になります」
松木は満足そうにいった。
「何事もなかったみたいにですか。1号車の7号室と8号室が、何事もないというのが、どうしても合点がいかないな。中河という奴は、こんな単純な男だったのか」
「警部さんは、無事にすんだことが、ご不満みたいですね」
と、松木は、笑った。何事も起きなかったからこそ、彼も、笑えるのだ。
「いや、そうじゃありませんが、どうも納得できなくてね。警察の人間は、最悪の事態を予想して行動する癖があるからかもしれません」
「わかりますよ」と、松木は、いった。
「警部さんは、どこまで行かれますか？　この際、出雲大社へ行かれたらどうですか？」
「さあ、どうしたらいいか。中河が捕まったかどうかも気になるし――」
「警部さん」
「何です？」
「今になると、楽しい笑い話なんですが、昨日の朝、面白いことがありましてね」
松木は、1号車に乗り込みながら、十津川にいった。
「昨日の朝ですか――」
十津川は熱のない声を出した。昨日の朝では、今度の事件に関係ないと思ったからである。

「私は、四月十二日に、米子から出雲4号に乗車して上京したんですが、1号車の8号室にどうしても乗りたいというお客さんがいましてね。お客さん同士で、勝手に、個室を交換したらしいんですが、その人が、財布を忘れて、降りてしまったんですよ。今ごろ、交換したりせずにいたらと、思っていらっしゃるんじゃありませんか」

「松木さん！」

十津川が、ふいに、噛みつくような声を出した。

松木はびっくりして、

「どうなさったんです？」

「出雲4号は、朝、東京に着いてから、出雲1号になって、山陰に向かうんでしょう？」

「そうです。東京に、午前七時に着いたあと、品川の車両基地で一休みしてから、列車は、出雲1号になって、出雲、浜田に向かいます」

「8号室の個室を欲しがった乗客は、どこから乗ったんです？」

「出雲市駅からと聞きましたが」

「カメさん！　1号車の乗客を避難させろ！　爆発するぞ！」

5

十津川は、1号車の通路を走って行き、7号室と8号室のドアを蹴飛ばした。

「起きろ！　ダイナマイトが爆発するぞ！」

大声で怒鳴った。

7、8号室の日下部たちだけでなく、他の個室のドアが、何事だというように開いて、寝ぼけ眼の乗客が、通路に出て来た。

「早く避難させてくれ！」

と、十津川は、亀井や、松木車掌長に向かって、叫んだ。

二人は、まだ、事態が完全に呑み込めぬままに、うろたえている乗客たちを、ホームにおろし、1号車から離れた場所に誘導した。

だが、寝込んでしまって、なかなか起きて来ない客もあった。

（あと一分三〇秒）

十津川は、血走った眼で、起きて来ない乗客のドアを手で叩き、足で蹴飛ばしながら、

（あいつは、出雲市から東京まで、一四時間も誰にも邪魔されずに、8号室の中にいたんだ。密室の中にだ。それだけあれば、部屋の模様替えだって出来るじゃないか）

と、考えていた。

「3号室の乗客が、どうしても起きてくれません！」

と、松木が、悲鳴に近い声をあげた。

「マスター・キーがあるんだろう！」

十津川は、怒鳴るようにいった。

松木は、はっとして、ズボンのポケットから、マスター・キーを取り出して、3号室のドア

を開けた。

「もう時間がない。あんたは、逃げろ！」

と、十津川は、松木を突き飛ばしておいて、3号室に飛び込んだ。

五十五、六歳の男が、正体なく眠っていた。アルコールの匂いがするところをみると、ウイスキーでも飲んで、寝てしまったのだろう。

十津川は、その男を、担ぎあげた。小柄な男なのに、眠っているせいか、やたらに重い。

通路に出る。

乗降口のデッキまで歩いて行き、ホームに出る時間は、もうなかった。

十津川は、反対側に逃げた。

すぐ、通路が折れて、そこに、トイレがある。その先は、荷物車だが、時間切れだ。

十津川は、その場に男をおろし、自分も、床に伏せて、耳を抑えた。

一瞬の間があって、爆発が起きた。

轟音と共に、床が、列車が揺れた。何かがばらばらと頭上から落ちて来た。

耳が、じーんと鳴っている。

十津川は、閉じていた眼を開けた。車内の明かりが消えてしまっていた。

自分が生きていることを確かめるように、十津川は、口の中で、「イチ、ニイ、サン」と呟いてから、立ち上がった。

通路に出た。

通路一杯に、煙がたちこめている。ホームの明かりが、その煙にさえぎられて、前方がよく見えない。

通路側の窓ガラスが、粉みじんになっている。

7号室と8号室のドアがひん曲がって、通路に飛び出している。

「警部！　大丈夫ですか！」

と、叫ぶ亀井の声が、煙の向こうから聞こえた。

「大丈夫だ！」

十津川は、怒鳴った。が、耳がまだ鳴っているので、自分の声も、遠く聞こえてしまう。

十津川は、元のところに戻り、男を担いで、ゆっくり、煙の中を歩いて行った。

6

現場検証の間、十津川は、駅長室で休ませてもらった。

ホームに出てから気がついたのだが、爆発のとき、蛍光灯のカバーの破片が落ちてきて、顔を切っていたのだ。亀井にいわれるまで、血が流れ出ていることもわからずにいた。

若い駅員が、武骨な手つきで、十津川の顔に包帯を巻いてくれた。

「救急車を呼びましょうか？」

その駅員が、きいた。

「いや、大丈夫だ。ありがとう」

十津川が、礼をいったとき、亀井が入って来た。
「いかがですか？」
と、亀井が、心配そうにきいた。
「何ともないさ。それより、一服やりたいんだ」
「どうぞ」
と、亀井は、ポケットから、マイルドセブンを取り出して、十津川にすすめてから、
「ダイナマイトは、8号室の7号室寄りの天井に仕掛けられていたようです。ネジを外して、天井板を引きはがし、時限装置つきのダイナマイトを仕掛け、元どおりに、天井板を取りつけておいたんです。あれでは、ちょっと見つかりませんね。8号室はもちろん、7号室も、見るも無残な状態になっていました。天井に大穴が開き、こわれた天井板が、落下しています。寝台に寝ていたら、間違いなく、死亡していますね」
「一四時間あれば、そのくらいのことは出来るはずだ」
「爆発の威力は、ダイナマイト三本分ぐらいだろうと――」
「そうすると、ドアに取りつけてあった五本のダイナマイトの中の三本は、ニセモノだったわけかい？」
十津川がきくと、亀井は、大きく肯いて、
「そうなんです。形といい、重さといい、実に精巧にできたものが、三本ありました。見事に、誤魔化されましたよ」

と、苦笑した。

「中河は、最初から、日下部と小山ひろ子の二人だけに狙いをつけていたんだろう。二人は、一カ月前に、個室寝台の切符を買っている。中河は、それを、どうかして知ったんだろうね。二人が、7号室、8号室の切符を周囲の人に見せ、それが、中河の耳に届いたのかもしれない。一カ月前なら、まだ、中河は、追われていなかったから、直接、小山ひろ子からだって、聞けたと思うね。中河は、鉄道マニアだから、出雲4号が、翌日、出雲1号になって引き返すことを知っていた。そこで、十二日の夕方五時に、出雲市から出雲4号に乗り込んだ。だが、肝心の7号室、8号室の切符は買えなかった」

「それで、8号室の乗客と切符を交換したわけですね」

「うまいことといって、換わってもらったんだろうな。個室に入って、ドアをロックしてしまえば、東京までの一四時間、中で何をしようと自由だし、わからない。天井を引きはがして、時限爆弾を仕掛けるぐらい楽なものさ」

「では、京都駅で、客席のドアに、残り二本と、ダミーのダイナマイトを仕掛けたのは、何のためだったんでしょうか？」

「それだがね。中河は、午前三時に爆破すると予告し、そのとおり、午前三時には爆破するように、天井にセットした。だが、山陰本線を走る出雲1号は、午前二時五二分に、福知山に着くんだ。八分前だよ。われわれが考えたように、福知山で、乗客全員を降ろしてしまったらどうなるのか。全員を降ろして、避難させておき、午前三時の過ぎるのを、じっと待つんだ。そ

して、何事もなかったら、また、乗客をのせて出発する。中河が、一番困るのは、こういう方法をとられることだ。そこで、福知山で、乗客を降ろさせないようにする、少なくとも降りにくくさせるために、京都で、あんなことをしたのさ。ドアにセットしたダイナマイトは、たとえ発見されても、構わなかったんだと思うね。それによって、われわれが、ほっとして、警戒を解くだろうし、午前三時までの時間が短くなるからだ」

「なるほど」

「ところで、時限装置を止めてくれた福知山署の鑑識だが――」

「島村という名前だそうです。大した男です」

と、亀井が、微笑した。

「シェービングクリームなんか使ったところをみると、経験があったんだろうね？」

「それをきいてみたら、時限装置を止めたのは、生まれて初めてだといっていました。成功してから、どっと、冷や汗が出てきたと」

「じゃあ、シェービングクリームは？」

「アメリカの映画で、そんな場面があったのを思い出したんだそうですよ」

「え？」

と、十津川は、呆れて、

「もし、その映画が、でたらめだったら、どうする気だったんだ？」

「それも、きいてみましたが、そのときでも、死ぬのは、おれ一人ですむからと思っていたそ

うです」
「福知山にも、豪傑がいるんだねえ」

7

細見助役が来て、その後の状況を教えてくれた。
「1号車は、ぼろぼろで、使用不能です。切り離すより仕方がありませんね」
「それでは、1号車の乗客が困るでしょう？　B寝台に移すといっても、B寝台のほうも満席だったし――」
「今、向日町車両基地から、個室寝台車を、回送してもらうように手配しています」
「向日町というと、京都ですね？」
「そうです。到着までには、どうしても、あと一時間半は、かかってしまうでしょう。到着したら、出発です」
細見が、また、あわただしく、駅長室を出て行ったあと、十津川も、亀井と一緒に、中央ホームへ戻ってみた。
出雲1号は、傷ついたけものが、傷をいやすように、ブルーの長い車体を横たえている。
傷口である1号車は、無残だった。
7号室と8号室のあたりは、深い亀裂が走り、窓ガラスが割れて、破片が、ホームに散乱している。天井には、大きな穴が開いてしまった。

福知山署による現場検証は、まだ、続いていた。
寝巻やネグリジェ姿で、1号車から逃げ出した十四人の乗客には、駅員が毛布を配り、それにくるまって、現場検証を眺めている。
現場検証がすむまで、所持品や衣服は、個室から出さないようにいわれているからである。
他の乗客たちも、この騒ぎで目覚めてしまったとみえ、寝巻の上から、コートを羽織った恰好で、ホームに出て来て、写真を撮ったりしている。
向日町車両基地から、すでに、代わりの個室寝台車が回送されつつあり、到着次第、発車するというアナウンスがあったので、乗客たちは、落ち着いていた。
氷室悠子が、十津川を見つけて、近づいて来た。
「誰が、こんなことをやったんですの？　中河英男ですか？」
「そうです。犯人は、中河英男です」
「午前三時というのは、このことでしたのね？」
「そうです」
「誰か、亡くなった方が、いらっしゃるんですか？」
「幸い、犠牲者は、一人も出ていません」
「亡くなった藤代さんが、少しは役に立ちましたの？」
「そのとおりです。藤代さんのおかげで、この事態が予測できたんです。彼が、腕時計のアラームを、午前三時にセットしておいてくれたので、中河が狙っているのは、出雲1号だと予測

できたわけです。もし、この予測がついていなかったら、一九〇本もの夜行列車を守ることは不可能ですから、恐らく、何人もの、いや、何十人もの死傷者を出していたに違いありません」

「中河は、捕まりましたの？」

「まだですが、間もなく捕まると思います。これも、あなたのおかげですよ。京都駅で、あなたが見たのは、やはり、中河だったんです。すぐ、京都府警に連絡して、手配してもらいました。事件が完全に解決したら、あなたと、亡くなった藤代さんに、警視総監賞を申請しますよ。これから、どうされるんですか？　やはり、この列車で、出雲大社へ行きますか？」

「もちろん」

と、悠子はいった。

午前五時。

向日町車両基地から、個室寝台車オロネ25型が到着した。

破壊された車両はどけられ、新しい車両が接続された。

このころになると、事件を知った新聞記者やカメラマン、それに、テレビ報道の車まで押しかけて来た。

出雲1号は、五時三二分に、出発した。

十津川と、亀井は、あとに残った。午前三時を過ぎた今、十津川たちには、出雲1号に乗車している理由がなかったからでもある。

午前六時に予定される記者会見に、福知山署の署長と同席して、これまでの事情を説明しなければならなかったからである。

六時近くなって、福知山署に足を運ぶと、一つのニュースが待っていた。

京都市内で、中河英男が逮捕されたというニュースだった。

中河は、京都駅から姿を消したあと、近くの深夜スナックにもぐり込んでいたのだが、夜が明けて、店を出て来たところを、職務質問され、逮捕されたという。

そのニュースを聞いたあとの記者会見だったから、十津川は、記者たちに向かって、

「この爆破予告事件は、完全に解決しました」

と、胸を張っていうことが出来た。

8

中河は、まず、東京に護送された。その途中、中河は、藤代殺しを自供し、出雲1号の中で、午前三時に、起きていたのを、藤代に見られたからだといった。そのあと、起きて外を見ていた理由をいろいろとしつこくきかれたらしい。つまり、藤代の好奇心が、彼の死を招いたのかもしれなかった。

東京で夜行列車の爆破事件について取り調べを受けたあと、青森県警に送られることになるだろう。

そして、二つの捜査本部は、解散される。

国鉄本社内に設けられていた「夜行列車爆破予告対策本部」も、解散された。

総裁秘書の北野は、三日間の特別休暇を貰った。

北野は、その三日間を利用して、冷えてしまった妻の君子との仲を、修復しようと思った。自信はないが、やってみる価値はあるだろう。何といっても、愛し合って結婚したのだ。

夜明けの街に出ると、北野は、最初に眼に入った公衆電話ボックスに入り、妻の実家のダイヤルを回した。

〈参考文献〉

「月刊鉄道ジャーナル」(鉄道ジャーナル)
『国鉄ざっくばらん』(高木文雄著　東洋経済)

なお、時刻表は昭和56年3月号を使用しました。

著　者

カッパ・ノベルス(光文社)一九八一年四月刊

解説

武蔵野次郎（評論家）

現在のミステリーブームを支えている人気作家の創作ぶりを見ると、さすがに人気作家にふさわしい独自の道を開拓していることに感服させられると同時に、それだけの努力研鑽があって初めて人気作家の位置を確かなものにしているということも分かるのである。

本篇『夜行列車殺人事件』の著者西村京太郎の場合は、「トラベル・ミステリー」というユニークな現代ミステリーの創作分野を開拓し、圧倒的な人気を得ていることは今や世間周知のところである。

書下ろし形式による長篇『寝台特急殺人事件』（カッパ・ノベルス既刊）を第一作として、西村作品のこの分野における創作活動は始まり、次々にヒット作品になっていったのである。そして昭和五十六年（一九八一）の第三十四回日本推理作家協会賞・長篇部門において、西村作品のトラベル・ミステリーの秀作『終着駅殺人事件』（カッパ・ノベルス既刊）が見事受賞の栄に輝いたのである。

この受賞によって、西村作品のトラベル・ミステリーは、現代ミステリーの分野においても一つの確固たる位置を構築するに成功したということができるだろう。つまりこの創作分野での第一人者として広く衆目の認めるところとなったということができる。

その後、現在にいたるまで各中間誌、週刊誌誌上に連載される西村作品のミステリーは、い

ずれもトラベル・ミステリーの分野に属する新作群であり、その旺盛な小説作りには、まさに瞠目すべきものがあるといわねばならない。

冒頭にのべておいたように、人気作家にふさわしい独自の道（創作手法）を、西村京太郎という現代作家は持っているということができるのではあるまいか。そのことがまた、多数の西村ミステリーのファン読者の信用（西村作品のトラベル・ミステリーはいつ読んでも興趣満点のものがあるという信用）につながっているのである。

トラベル・ミステリーの良さ・醍醐味といったものは、日本人の誰もがよく知っている国鉄を始めとする鉄道を舞台に、ミステリーの物語が展開してゆくというリアルで、動きの多い（場面が次々に変わってゆくこともあって読者を飽かせない）ところなどは、いかにも現代の物語としての長所を内包している。しかも、舞台にとられている国鉄の長距離列車ほかの日本の鉄道に関わる種々の事象が、読者のすべての人々にとっても親しみ深いものとして、日ごろからおなじみの乗り物になっていることが、それを題材に利用して展開するミステリーの興味をいっそう盛り上げるに効果があるということができるだろうし、そこに着目して新分野（現代ミステリーとして）を拓いた著者の作家的視点の卓抜さに感服させられるのである。

本篇について語っている「著者のことば」の中で、

〈人びとが眠っているときも、鉄道は眠ることなく動き続けている。〝夜汽車〟〝夜行列車〟と呼び方は違っても、その独特の雰囲気に変わりはない。なぜか私たちは夜行列車に郷愁に似たものを感じる。……〉（初刊本所収「著者のことば」より）

云々という文章を書いている著者の所感のとおりに、夜行列車という対象には一種特別の〝郷愁に似たもの〟を誰しもが感じるものなのである。そんな夜行列車をテーマにくりひろげられるミステリーだけに、そして、前記協会賞受賞後の第一作としての書下ろし長篇であることも、本篇に対する興味をいっそう深甚なものにしているに違いない。

推理小説、昔の名称では探偵小説とよばれた小説形式の持っている大きな魅力の一つに、名探偵の登場がある。有名なものに、江戸川乱歩作品における明智小五郎とか、横溝正史作品における金田一耕助といった名探偵が創作されており、作者によって創り出された架空人物でありながらも、実際に生きている人物と全く同様な存在感と親愛感とを読者に与えてくれる人物像なのである。

そのような名探偵像を創作することに成功した場合、作者にとってはこのうえない幸せなことということができるだろう。西村作品におけるそういう名探偵役に設定されているのが、警視庁捜査一課の十津川警部である。十津川警部とその部下の亀井刑事の名コンビは、西村作品のシリーズで大活躍する主人公の名探偵であり、今やその名は読者の脳裏に鮮明なイメージとしてきざみこまれている。

〈北野と同じ四十歳くらいの中肉中背の男だった。

捜査一課の刑事というので、何となく、眼光鋭く、筋骨たくましい男を想像していたのだが、十津川は、どちらかといえば、物静かな、平凡な男に見えた。〉（第一章「夜行列車」の章の3）

と描写されているような十津川警部の人物像である。取り立てて云々するような英雄像的人物に設定されてはおらず、ごく平凡な世間一般によく見かける体の平凡な人物像であることも、この名探偵役に対する親しみを読者に与えるに成功しているといえる。

さて、本篇の物語では、国鉄総裁宛てに出された四通の投書の中に、〈夜行列車　午前三時爆破決行　四月吉日〉とあったことから、この不気味な投書の謎を追って、夜行列車にまつわる爆破という、恐るべき目的を抱く殺人魔を追及してゆくという、興味津々たる物語が展開してゆくことになる。

西村作品の特徴の一つに、物語発端部のすべり出しの巧みさが挙げられる（読者を開巻部から一気に作中にひきこむというテクニック）のだが、本篇の四通の投書の謎の提出にも、そういう特徴を見ることができる。まことに秀逸なプロローグに仕上がっているといってよかろう。

夜行列車爆破をねらう不敵な犯人が、どの夜行列車を目的にしているのかというプロセスが徐々に解明されてゆく面白さに併せて、もう一つの興味ある謎として提出されているのが、サラリーマンの藤代友彦という青年が、恋人の氷室悠子の見送りを受け、夜行列車の「出雲1号」に乗車して東京を出発、山陰地方を旅行しているはずなのに、青森駅構内で死体となっているのを発見されるという奇々怪々な殺人事件にまつわる謎も加わってくることである。

そのような重層的なプロット構成になっていることも、ともすれば単純なものに終わりがちな日本のミステリーとはまたひと味違う本篇の良さになっているのだが、そうした点も見のがせない面白さになっているようである。

十津川警部を始めとする捜査側の懸命の努力によって、東京鉄道同好会の会員である中河英男という二十九歳の男が犯人像として浮かび上ってくる。

〈中河は、突然、水上建設を辞め、行方をくらました。三月十六日である。そして、彼は、ダイナマイト五本と信管二本を盗み出したらしい。

また、中河と思われる男が、「出雲1号」に乗り、三月二十七日の午前三時ごろ、列車の通路に立って、じっと、車窓から夜の景色を見つめていたという。〉（第九章「退職者」の章の6）

と描き出されていることでも理解されることだが、犯人像としての中河英男という男は、早くも読者の前に提出されていることになる。そういう中河の行方を追ってゆくことから生まれてくるサスペンス醸成（じょうせい）が、本篇の主題になっている。つまり「倒叙手法」によるミステリーという作り（つくり）に設定されている。

この手法の何よりの面白さは、どのようにして犯人が追い詰められてゆくことになるかという、その過程が綿密に描写されていることにあるだろう。そして、中河がいかなる手段を駆使して「出雲1号」の爆破を成功させることになるのかという、まさに読者の端倪（たんげい）すべからざる興味とサスペンスとが、作者によって用意されているのである。

〈私は夜行列車（ミッドナイト・トレイン）を舞台に、その攻防を、時刻表トリックを駆使して描いてみた。〉（「著者のことば」より）

という本篇の創作意図も著者はのべているわけだが、本篇のように面白い小説を読んでみる

ことによって、著者も言っているような〈時刻表トリックを駆使して……〉云々という、いわゆる、「時刻表」に精通（毎月刊行されている国鉄時刻表を精読してみるという楽しみ）することも、このうえない楽しさを与えてくれるものであるということを本篇は教示してくれている。

その一つとして、たとえば「東京から西下する夜行列車」の表がある（第三章「合同会議」の章の2）が、そこに出ている「さくら」「はやぶさ」ほかの西下列車の各々が、午前三時の真夜中には、どの辺りを走っているかということを知る「表」として、実に興味津々たるものがあるのだが、このような面白い「表」を、時刻表に精通することによって、読者それぞれの手で作り出してみることも、また楽しいことと思われる。

余談ながら、昭和五十九年（一九八四）十一月に、九州へ所用で出かけたが、そのときに、早朝の博多駅のホームで、東京からやってくる夜行列車「さくら」を迎え、これに博多から乗車して佐賀まで行ったのだが、腰かけることができた寝台車の中の空気に、いかにも東京を前日の十六時三〇分に出発して長丁場を走ってきたという夜行列車独特のムードが感じられたのも、ひじょうに面白かった。そういう夜行列車主題の小説である本篇は、西村京太郎作品のトラベル・ミステリーとしては初期の長篇であるが、これを読むことで、著者の着想（つまりサスペンスフルな現代ミステリー創作のための）の秀逸さを改めて再認識させられるのである。



光文社文庫

長編推理小説

ミッドナイト・トレイン
夜行列車殺人事件

著者　西村京太郎（にしむらきょうたろう）

昭和60年3月20日　初版1刷発行
昭和61年1月30日　8刷発行

発行者　大坪昌夫
印刷　凸版印刷
製本　榎本製本

発行所　株式会社 光文社
〒112 東京都文京区音羽2-12-13
電話　東京 03(942) 2241(代表)
振替　東京 6-115347

© Kyōtarō Nishimura 1985
落丁本・乱丁本はお取替えいたします。
ISBN4-334-70117-5　Printed in Japan

お願い　光文社文庫をお読みになって、どんな感想をもたれましたか。「読後の感想」を編集部あてにお送りください。

また、このほか光文社文庫では、どんな本を読まれましたか。今後、どんな本をお読みになりたいですか。どの本も、誤植がないようつとめていますが、もしお気づきの点がございましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえいただければ幸いです。

光文社文庫編集部

KOBUNSHA BUNKO

光文社文庫 最新刊

ベストセラー小説群

《時代小説文庫》

濫觴の宴 ●長編警鐘小説 西村寿行

国際捜査官 ●長編推理小説 島田一男

貨客船殺人事件 ●犯人当て推理傑作集 鮎川哲也

日本傑作推理12選(Ⅱ) ●JAPANESE GOLDEN DOZEN E・クイーン編

人妻だから ●長編小説 梶山季之

一緒にアクシア ●書下ろし長編青春サスペンス 若桜木虔

伊達政宗(一) ●長編歴史小説(全六巻 毎月発売) 山岡荘八

加賀騒動 ●長編歴史小説 村上元三

網（あみ） 上・下 松本清張
殺人はそよ風のように 赤川次郎
ひまつぶしの殺人 赤川次郎
顔のない十字架 赤川次郎
三毛猫ホームズの推理 赤川次郎
三毛猫ホームズの追跡 赤川次郎
三毛猫ホームズの狂死曲 赤川次郎
三毛猫ホームズの怪談 赤川次郎
三毛猫ホームズの恐怖館 赤川次郎
三毛猫ホームズの駈落ち 赤川次郎
遅れてきた客 赤川次郎
京都感情旅行殺人事件 西村京太郎
寝台特急殺人事件 西村京太郎
終着駅殺人事件 西村京太郎
夜間飛行殺人事件 西村京太郎
夜行列車殺人事件 西村京太郎
蜜月列車殺人事件 西村京太郎
伊豆七島殺人事件 西村京太郎
北帰行殺人事件 西村京太郎
消えたタンカー 西村京太郎
第二の標的 西村京太郎
消えた乗組員 西村京太郎
愛の海峡殺人事件 山村美紗
百人一首殺人事件 山村美紗
エジプト女王の棺 山村美紗
燃えた花嫁 山村美紗
消えた相続人 山村美紗
有耶無耶岬の殺人 島田一男
流しびな殺人事件 島田一男
卑弥呼塚殺人事件 島田一男
科学捜査官 島田一男
迷宮捜査官 島田一男
継続捜査官 島田一男
愛人関係 笹沢左保
求婚の密室 笹沢左保
悪魔の部屋 笹沢左保
悪魔の湖畔 笹沢左保
他殺岬 笹沢左保
不倫岬 笹沢左保
公開株殺人事件 清水一行
頭取室 清水一行
大物（第一部・第二部） 清水一行
埋められた手紙 佐野洋
尾行（びこう） 佐野洋
盗難車 佐野洋
最後の夜 佐野洋
女高生俳句殺人事件 斎藤栄
謎の人命電話 斎藤栄
嫌煙権殺人事件 斎藤栄
北陸トンネル殺人事件 斎藤栄
金糸雀の唄殺人事件 斎藤栄
鎌倉薪能殺人事件 斎藤栄
飛鳥十字殺人事件 斎藤栄
鬼畜の宴 勝目梓
処刑のライセンス 勝目梓
暗黒の狩人 勝目梓
闇の亀裂 勝目梓
もう一人の乗客 草野唯雄
解明旅行 草野唯雄
喝（かっさい） 栄 草野唯雄

死霊鉱山　草野唯雄
火刑の女　草野唯雄
戦場の狩人　大藪春彦
謀略の滑走路　大藪春彦
処刑軍団　大藪春彦
処刑戦士　大藪春彦
真説忠臣蔵　森村誠一
青春の神話　森村誠一
密室航路　夏樹静子
Wの悲劇　夏樹静子
その子は目撃者　夏樹静子
確率½の死　島田荘司
妖魔陣　菊地秀行
CF愚連隊　喜多嶋隆
CFガール　喜多嶋隆
多摩湖畔殺人事件　内田康夫
天城峠殺人事件　内田康夫
アマゾン・チェイス　田中光二
わが名はヘリック　田中光二
魔海のヘリック　田中光二

怒りのヘリック　田中光二
白い密室　門田泰明
癌病棟のメス　門田泰明
帝王コブラ　門田泰明
妖獣の村　西村寿行
ふたたび渚に　西村寿行
蘭菊の狐　西村寿行
顕（あきこ）子　加堂秀三
大韓航空007便　福本和也
成田空港殺人事件　福本和也
「鋼鉄の鮫」作戦　檜山良昭
円卓の七人　檜山良昭
コンピュータの身代金　三好徹
モナ・リザの身代金　三好徹
それぞれの門　三好徹
大撃墜　三好徹
会社喰い　邦光史郎
武器商社　邦光史郎
俺は秘密諜報員　胡桃沢耕史
犬幕島（建武シルバン）　辻真先

はるひワンダー愛　辻真先
背後の殺人者　菊村到
誰が引金をひいた　菊村到
洞窟の生存者　菊村到
ベンチャービジネスの神話　広瀬仁紀
悪の決算　広瀬仁紀
女の牙　川上宗薫
六人目の女　川上宗薫
ダブル・フェイス　大谷羊太郎
殺人変奏曲　大谷羊太郎
殺人契約（殺し屋・貴志）　山田正紀
逃げ出した死体　山村正夫
盲目の鴉　土屋隆夫
九十九点の犯罪　土屋隆夫
贅沢な被葬者　黒岩重吾
石に咲く花　黒岩重吾
それゆけ孔雀警視　志茂田景樹
ツッパレ孔雀警視　志茂田景樹
007を追え孔雀警視　志茂田景樹
鉄の魔界　志茂田景樹

KOBUNSHA BUNKO

光文社文庫 最新刊

話題のノンフィクション

世界のジョーク集[2]

バージンと色魔のジョーク集

ラリー・ワイルド
浅倉久志 訳

処女は清純で男は狼などと、だれが決めた!? 機知あふれる性（セックス）ジョーダン集。

文庫オリジナル・エッセイ

はみだし家族の事情

井上好子

抱腹絶倒、かつ、哀（かな）しくて優（やさ）しい、著者初めてのオリジナル・エッセイ集！

「愛される」より「愛する」人に

女の子の育て方

樋口恵子

昔ながらの〝待つ女〟でなく、社会を支え、人を愛す、自立した女に育てる。

グラフィティ〈日本の旅⑥〉

地酒と肴（さかな）の旅

メディアユニオン編

日本全国の名物郷土料理と名地酒を徹底紹介。グルメ旅行者待望の案内書！

南海幻想 石沢英太郎
21人の視点 石沢英太郎
明日を殺せ 生島治郎
王国の崩壊 高杉良
半ダースもの情事 山口洋子
私がふたりいる 戸川昌子
華やかなる氷河 戸川昌子
男は夢の中で死ね 小泉喜美子
不思議の国の猫たち 仁木悦子編
眠れぬ夜の悪魔 青柳友子
白い華燭 嵯峨島昭
沈黙の函 鮎川哲也
標的野郎 藤本義一
てやんでェ(上・下) 梶山季之
折鶴が知った… 日下圭介
劇画殺人事件 生田直親
凝った死顔(マンハッタン・オプ1) 矢作俊彦
笑う銃口(マンハッタン・オプ2) 矢作俊彦
はやらない殺意(マンハッタン・オプ3) 矢作俊彦
幸福の終列車 佐藤愛子

躁病のバイキン 佐藤愛子
蜜の罪 三好京三
消えた日曜日 多岐川恭
幕場への持参金 多岐川恭
鎖された夏 大西赤人
目撃者なし 樹下太郎
辺にこそ死なめ 松山善三
日殺人事件 清水義範
太陽の汗 神林長平
あっちゃんの推理ポケット 田中雅美
ロンドン警視庁特派捜査官 高見・メルヴィル浩訳
日本傑作推理12選(1) E・クイーン編
戦争と人間 1〜9 五味川純平

●光文社時代小説文庫

半七捕物帳(一) 岡本綺堂
銭形平次捕物控 野村胡堂
人形佐七捕物帳 横溝正史
お耳役檜十三郎捕物帖 島田一男
(首なし地蔵は語らず) 地獄の辰・無残捕物控 笹沢左保
(縄っ引きが十手を捨てた) 地獄の辰・無残捕物控 笹沢左保
月影兵庫上段霞切り 南條範夫
武蔵を斬る 早乙女貢

KOBUNSHA BUNKO

光文社文庫 最新刊

話題のノンフィクション

スチュワーデスが教える

世界ショッピング情報

世界中のいいもの欲しいものを探すノウハウが満載。海外旅行の必携書！

JAL監修
柿崎裕美子

ミリタリー・イラストレイテッド16

核兵器図鑑

戦後40年の核兵器開発史と、最新核兵器を、イラスト、写真で大公開！

ワールドフォトプレス編

F-4Jファントムラインバッカー作戦

最新ジェット戦闘機を操るエースパイロットへの険しい道にチャレンジ！

ワールドフォトプレス

ゲームブック 新シリーズ誕生！

一緒にアクシア

大遺産を探せ！

キミは美少女・優貴と手に手を取って、大遺産を獲得することができるか!?

若桜木虔